

はじめに

岡山県立大学

学長 辻英明

今日、わが国では、少子・超高齢社会を迎えています。一方、世界ではグローバル化が進展し、人工知能を中心にした第4次産業革命が進行していると言われていています。大学は、このような社会状況の中で果敢に生き抜く人材を育成しなければなりません。

私が学長に就任しました2013年4月は、2007年の独立行政法人化後6年を経て第2期中期計画がスタートした年です。その推進に当たり、時代の要請に応える人材を育成する目的で、「体系的な教養教育の導入」、「グローバル教育の推進」、「戦略的な地域貢献の取組」という3つの基本方針を策定し、その実現に向けて大学の組織改革を行い、大学教育開発センター、国際交流センターならびに地域連携推進センターを設置してきました。

また、昨年9月には文部科学省の補助金事業である「地（知）の拠点大学による地方創生推進事業(COC+)」に、本学が代表校となって岡山県下の大学、自治体、企業等と連携し、「地域で学び地域で未来を拓く‘生き生きおかやま’人材育成事業」を申請し、厳しい審査を受け採択されました。本事業は教育改革、域学連携、産学連携の3つの取り組みで構成されています。学生を地域社会に送り出し、本学教員、地域住民、自治体、企業やNPOと協働(域学連携、産学連携)して地域課題に取り組み、その解決を図る過程を通して学生が社会人になるための基本的素養を身につける新しい人材育成システム(地域連携教育)です。今後、本学は教養教育及び専門教育とともにフィールドで学ぶ地域連携教育を展開し、深い教養、高い専門性と豊かな人間性を身につけた人材育成を行って参ります。

本学の教育研究活動は毎年発行される教育年報にまとめられますが、教育年報2015は、大学の機構改革を反映して、3部構成になりました。第1部は昨年度の構成をほぼ踏襲し、学部及び大学院の教育研究活動と成果をまとめたものです。第2部は教育研究開発機構の3センター(大学教育開発センター、国際交流センターならびに学術研究推進センター)の活動をまとめたもので、国際交流センター、学術研究推進センターが新たに加えられました。さらに平成28年度入学生から実施されるCOC+事業による「岡山創生学」の準備状況についても同項の「大学教育開発センターの活動と成果」に記載されています。第3部には1部から移動した附属図書館の活動及び成果をまとめています。

本学の教職員一同は、教育年報2015に示されます本学の教育改革をご理解いただき、本学が目標とする深い教養を身につけ、国際的な視野をもち、地域で活躍しうる人材の育成に向けた取組に引き続きご支援・ご協力を御願い申し上げます。

2016年3月

目次

はじめに	
第1部 学部及び大学院における教育活動	1
第1章 学部と大学院の入学受入状況	1
1-1 概要	1
1-2 選抜方法	1
1-3 入学前教育	5
1-3-1 保健福祉学部	5
1-3-2 情報工学部	7
1-3-3 デザイン学部	8
1-4 留学・転学受入等	9
1-5 高大連携と高大接続	10
1-6 まとめと課題	11
第2章 共通教育部の教育活動と成果	12
2-1 概要	12
2-2 共通教育部	14
2-2-1 教養教育推進室	15
2-2-2 語学教育推進室	17
2-2-3 情報教育推進室	23
2-2-4 健康・スポーツ教育推進室	24
2-2-5 社会連携教育推進室	25
2-3 留学生・転学生	26
2-4 大学コンソーシアム岡山	26
2-5 まとめと課題	30
第3章 専門教育における教育活動と成果	31
3-1 概要	31
3-2 保健福祉学部	31
3-2-1 看護学科	31
3-2-2 栄養学科	32
3-2-3 保健福祉学科	33
3-3 情報工学部	35
3-3-1 情報通信工学科	35
3-3-2 情報システム工学科	36
3-3-3 スポーツシステム工学科・人間情報工学科	37
3-4 デザイン学部	40
3-4-1 デザイン工学科	40
3-4-2 造形デザイン学科	41
3-4-3 文部科学省補助事業	42
3-5 まとめと課題	48
3-5-1 保健福祉学部	48
3-5-2 情報工学部	48
3-5-3 デザイン学部	49
第4章 大学院における教育・研究活動と成果	50
4-1 大学院における教育活動	50

4-1-1	概要	50
4-1-2	保健福祉学研究科	50
4-1-3	情報系工学研究科	52
4-1-4	デザイン学研究科	54
4-1-5	まとめと課題	54
4-2	大学院における研究活動	55
4-2-1	概要	55
4-2-2	保健福祉学研究科	55
4-2-3	情報系工学研究科	62
4-2-4	デザイン学研究科	63
4-2-5	まとめと課題	63
4-3	大学院における国際交流	63
4-3-1	概要	63
4-3-2	保健福祉学研究科	64
4-3-3	情報系工学研究科	64
4-3-4	デザイン学研究科	65
4-3-5	まとめと課題	65
第2部 教育研究開発機構		67
概要		67
第1章 大学教育開発センターの活動と成果		67
1-1	概要	67
1-2	大学教育開発センターの各組織の活動	69
1-2-1	概要	69
1-2-2	教育企画室	70
1-2-3	アドミッション部会	74
1-2-4	共通教育部会	89
1-2-5	FD部会	94
1-2-6	教育評価部会	110
1-2-7	キャリア形成支援部会	119
1-2-8	学生支援部会	130
1-2-9	教育改革ワーキンググループ（教育改革WG、COC+事業）	140
1-2-10	まとめと課題	141
1-3	地域連携教育（COC+）	141
1-3-1	概要	141
1-3-2	教育のしくみ	142
1-3-3	授業の概要	144
1-3-4	実施状況	145
1-3-5	育成する人材像と修得すべき能力	146
1-3-6	教育プログラムの内容	146
1-3-7	まとめと課題	148
1-4	教育力向上支援事業	149
1-4-1	目的	149
1-4-2	本年度実施事業及び来年度実施予定事業	149
1-4-3	まとめと課題	170

第2章 国際交流センターの活動と成果	171
2-1 概要	171
2-2 国際交流における活動	172
2-2-1 国際交流協定校	172
2-2-2 語学文化研修等	172
2-2-3 教育交流	174
2-2-4 国際交流センター（建物）内での様々な活動	174
2-2-5 共通教育との連携	175
2-2-6 まとめと課題	175
2-3 国際交流における教育・研究支援活動	175
2-3-1 国際交流協定校	175
2-3-2 国際研究協力	176
2-3-3 基盤整備	177
2-3-4 まとめと課題	177
第3章 学術研究推進センターの活動と成果	178
3-1 概要	178
3-2 学術研究推進と教育活動	178
3-2-1 概要	178
3-2-2 コンプライアンス及び研究倫理研修会	179
3-2-3 まとめと課題	180
第3部 附属図書館の活動と成果	181
概要	181
1-1 図書館活用の推進	181
1-1-1 図書館の利用状況	181
1-1-2 図書館ギャラリーの利用状況	182
1-1-3 学生を対象とした図書館利用教育	184
1-1-4 選書ツアー学生参加状況及び学生希望図書の状態	185
1-2 サイエンスダイレクト利用講習	186
1-3 電子ジャーナルの利用	187
1-4 リポジトリ公開登録及び利用状況	188
1-5 まとめと課題	188
付録1	
A 入試統計	189
B 学生アンケート（学部・大学院）	191
C 卒業時アンケートの詳細	199
D 卒業生アンケート	201
E 就職先アンケートの回答結果	202
F 全学的就職支援の実施状況	204
G 国際交流	206
H 高大連携協定に基づく高等学校への講師派遣及び生徒の受入	208
I 高等学校への講師派遣及び生徒の受入（高大連携協定以外）	209
J 学修成果1（学生・クラブの表彰）	210
K 学修成果2（博士後期課程の学位授与者）	213
L 委員会等の審議事項	214

付録2

A 学部ディプロマ・ポリシー, カリキュラム・ポリシー, アドミッション・ポリシー	219
B 大学院ディプロマ・ポリシー, カリキュラム・ポリシー, アドミッション・ポリシー	233

編集後記

第1部 学部及び大学院における教育活動

過去数年、本学の教育年報の目次改訂と内容の改善が継続して行われている。その理由は本学の教育の実態を従来よりもさらに明確に示してゆくこと、また教育改革のための大学組織とその業務の改革が、現在継続的に行われている最中であるためである。目次は「部」を置き、その下に「章」を配置するという構成であり、これは今回初めて行ったものであるが、このようにすることによって、年報作成者もより系統的に記述でき、また年報閲覧者にとってもより理解しやすくなることを狙いとしている。第1部では、従来国際交流センターや附属図書館も含めていたが、それらは他の部に移動して、内容を共通教育における教育活動と成果、専門教育における教育活動と成果及び大学院の教育活動と成果の三つに収斂させ、従来よりも一層本学の学士課程教育や大学院の教育活動を明確に表してゆくこととした。そのことによって、一部国際交流センターや附属図書館の記述と学部・大学院の記述が重複することも考えられるが、それはそれぞれの組織の記述の中の流れに沿って行われることなので特に問題とはしていない。

第1部は本学の教育、すなわち学部と大学院の教育活動や成果といった本学の実際の教育活動の状況をダイナミックに示す場所であり、教育年報の中でも最重要の位置づけとするところである。今後も更なる充実を記してゆきたい。

第1章 学部と大学院の入学受入状況

1-1 概要

平成28年度入学受入は、本学アドミッション・ポリシーに基づく平成27年度一般入試における大学入試センター試験利用科目等改訂の内容を引き継ぐ形で実施されている。

平成27年度の入学受入に関する活動は、学士課程に関しては、大学教育開発センター・アドミッション部会を中心とした、大学入試センター試験利用科目等改訂後の入学受入における入試成績と履修状況の相関分析結果の蓄積や高大接続のための大学授業開放企画の実施、ならびに平成32年度に予定される新テストに向けた情報の蓄積等が、学科においては入学前教育の内容改善が挙げられる。大学院課程に関しては、募集対策に関する各研究科の工夫が挙げられる。

1-2 選抜方法

(1) 平成28年度入学受入の概要

平成28年度入学受入における志願者数等は、付録1-Aのとおりである。

なお、平成28年度入学受入では、付録2に掲げるアドミッション・ポリシーに基づき、次のとおり試験を実施した。

ア 学部

(ア) 募集人員

(人)

学 部	学科・専攻	入学 定員	一般入試			推薦 入試	帰国生 入 試	私費外国人 留学生入試	
			前期日程	中期日程	後期日程				
保健福祉 学 部	看護学科	40	20	-	8	12	若干名	若干名	
	栄養学科	40	25	-	3	12	若干名	若干名	
	保健福 祉学科	社会福祉学専攻	40	20	-	8	12	若干名	若干名
		子ども学専攻	20	10	-	4	6	若干名	若干名
情報工 学 部	情報通信工学科	50	14	23	-	13	若干名	若干名	
	情報システム工学科	50	14	23	-	13	若干名	若干名	
	人間情報工学科	40	12	15	-	13	若干名	若干名	
デザイン 学 部	デザイン工学科	40	30	-	-	10	若干名	若干名	
	造形デザイン学科	50	38	-	-	12	若干名	若干名	
	計	370	183	61	23	103	-	-	

募集年次	学 部	学科 (領域)	人 員
3年次	保健福祉学部	栄養学科	若干名
	デザイン学部	デザイン工学科 (建築・都市デザイン領域)	若干名

(イ) 選抜方法

① 一般入試

大学入試センター試験、個別学力検査等及び調査書の内容を総合して行う。

(大学入試センター試験の利用教科・科目)

学科・専攻	日 程	教 科	科 目			
看護学科	前期日程 後期日程	国語	国		必須	
		地理歴史	世A, 世B, 日A, 日B, 地A, 地B		から1	
		公民	現社, 倫, 政経, 倫・政経			
		数学	数I・A		必須	
		理科	物, 化, 生, 地		から1:①	①又は ②
			物基, 化基, 生基, 地基		から2:②	
外国語	英(リスニング), 独, 仏, 中, 韓		から1			
栄養学科	前期日程 後期日程	国語	国		必須	
		地理歴史	世B, 日B, 地B		から1	
		公民	現社, 倫, 政経, 倫・政経			
		数学	数I・A		必須	
			数II・B		必須	
		理科	物, 化, 生		から2:①	①又は ②
			物, 化, 生		から1	
物基, 化基, 生基		から2	から3:②			
外国語	英(リスニング)		必須			
保健福祉学科 社会福祉学専攻 子ども学専攻	前期日程 後期日程	国語	国		必須	
		地理歴史	世B, 日B, 地B		から1又は2 (理科の 「基礎を付した科目」 から2)	
		公民	現社, 倫, 政経, 倫・政経			
		数学	数I・A, 数II・B, 工業, 簿記, 情報			
		理科	物, 化, 生, 地			から2
			物基, 化基, 生基, 地基			
外国語	英(リスニング), 独, 仏, 中, 韓		から1			
情報通信工学科 情報システム工学 科 人間情報工学科	前期日程 中期日程	国語	国		必須	
		数学	数I・A		必須	
			数II・B, 工業, 簿記, 情報		から1	
		理科	物		必須	
			化, 生, 地		から1	
外国語	英(リスニング)		必須			
デザイン工学科	前期日程	国語	国(近代以降の文章)		から2又は3 (理科の	

		地理歴史	世A, 世B, 日A, 日B, 地A, 地B	から1	「基礎を付した科目」から2及び理科以外の教科の科目から1)
		公民	現社, 倫, 政経, 倫・政経		
		数学	数Ⅰ・A		
			数Ⅱ・B		
		理科	物, 化, 生, 地	から1:①	
物基, 化基, 生基, 地基	から2:②				
外国語	英(リスニング)			必須	
造形デザイン学科	前期日程	国語	国	必須	
		地理歴史	世A, 世B, 日A, 日B, 地A, 地B	から1	
		公民	現社, 倫, 政経, 倫・政経		
		数学	数Ⅰ, 数Ⅰ・A, 簿記, 情報		
		理科	物, 化, 生, 地		
		外国語	英(リスニング)		

※ 国語→国, 世界史A→世A, 世界史B→世B, 日本史A→日A, 日本史B→日B, 地理A→地A, 地理B→地B, 現代社会→現社, 倫理→倫, 政治・経済→政経, 「倫理, 政治・経済」→倫・政経, 数学Ⅰ→数Ⅰ, 数学Ⅰ・数学A→数Ⅰ・A, 数学Ⅱ・数学B→数Ⅱ・B, 工業数理基礎→工業, 簿記・会計→簿記, 情報関係基礎→情報, 物理→物, 化学→化, 生物→生, 地学→地, 物理基礎→物基, 化学基礎→化基, 生物基礎→生基, 地学基礎→地基, 英語→英, ドイツ語→独, フランス語→仏, 中国語→中, 韓国語→韓

(個別学力検査等の教科等)

学部・学科・専攻		日程	教科等
保健福祉学部	看護学科 保健福祉学科 社会福祉学専攻 子ども学専攻	前期日程	小論文, 面接
		後期日程	
	栄養学科	前期日程	理科(化学基礎・化学, 生物基礎・生物から1)
		後期日程	個別学力検査等を課さない。
情報工学部		前期日程	数学(数学Ⅰ, 数学Ⅱ, 数学Ⅲ, 数学A, 数学B(数列, ベクトル))
		中期日程	
デザイン学部		前期日程	実技(鉛筆デッサン)

② 推薦入試

学部	教科等
保健福祉学部	書類審査, 小論文, 面接(栄養学科の面接では, 理科に関する試問も行う。)
情報工学部	書類審査, 面接(数学, 英語及び理科に関する試問も行う)
デザイン学部	書類審査, 実技(鉛筆デッサン), 面接

③ 帰国生入試

学部	教科等
保健福祉学部	書類審査, 小論文, 面接(一般教科に関する試問も行う)
情報工学部	書類審査, 面接(一般教科に関する試問も行う)
デザイン学部	書類審査, 実技(鉛筆デッサン), 面接

④ 私費外国人留学生入試

書類審査及び実技検査等により実施する。

学部・学科	書類審査		実技検査等
	日本語	TOEFL (iBT)	
保健福祉学部	日本語, 理科(2科目), 数学(コース1)	課す	小論文 面接
情報工学部	日本語, 理科(2科目・物理必須) 数学(コース2)	課す	面接
デザイン学部	デザイン 工学科	日本語, 理科(2科目), 数学(コース1)	実技 (鉛筆デッサン) 面接
	造形デザイン 学科	日本語, 総合科目, 数学(コース1)	

※ 保健福祉学部と情報工学部の面接では、一般教科に関する試問も行う。

⑤ 第3年次編入学

学科(領域)	教科等
栄養学科	書類審査, 英語, 総合問題, 面接
デザイン工学科(建築・都市デザイン領域)	書類審査, 面接, ポートフォリオ

イ 大学院

(人)

研究科	課程	専攻	募集人員	選抜方法
保健福祉学 研究科	博士前期課程	看護学専攻	7	一般入試：外国語(英語), 専門(口述試験), 面接, 書類審査 特別入試※1：同上
		栄養学専攻	6	一般入試：外国語(英語), 専門(口述試験), 面接, 書類審査 特別入試※1：外国語(英語)※2：面接, 書類審査
	保健福祉学 専攻	7		
	博士後期課程	保健福祉科 学専攻	5	専門(筆記), 面接
情報系工学 研究科	博士前期課程	システム工 学専攻	52	夏季募集：外国語(英語), 数学, 面接, 書類審査 秋季募集：面接(英語, 数学, 専門の口頭試問 も行う。書類審査を含む)
	博士後期課程	システム工 学専攻	6	夏季募集：外国語(英語), 専門, 面接, 書類審査 冬季募集：同上
デザイン学 研究科	修士課程	デザイン工 学専攻	7	語学(一般入試は英語, 特別入試※1は日本語), 作品・ポートフォリオ, 面接, 書類審査
		造形デザイン 学専攻	9	
計			99	

※1 保健福祉学研究科(博士前期課程)の特別入試：社会人, 外国人留学生

デザイン学研究科(修士課程)の特別入試：外国人留学生

※2 保健福祉学専攻の特別入試(社会人)は, 外国語(英語)に代えて, 専門(口述試験)により実施します。

(2) 入学者選抜の変更

学部の入学者選抜において課す教科・科目の変更等が入学者の受験準備に大きな影響を及ぼす場合は, 2年半前にはその内容を予告することとしている。その他の変更についても, 入学者保護の観点から可能な限り早期の予告に努めている。

ア 学部入試

保健福祉学専攻における募集人員の変更(平成26年9月26日予告)

保健福祉学科社会福祉学専攻では、入学者の入試成績を踏まえ、平成 29 年度入学者選抜試験（一般入試）の募集人員を次のとおり変更することとした。

区分	前期日程	後期日程
平成 27, 28 年度	20 人	8 人
平成 29 年度	24 人	4 人

イ 大学院入試

平成 29 年度以降の大学院入学者選抜試験（情報系工学研究科・博士前期課程・夏季期募集）における TOEIC テストのスコア利用（平成 26 年 9 月 26 日公表）

情報系工学研究科（博士前期課程）では、アドミッション・ポリシーに掲げるグローバル人材の育成を一層推進するため、次のとおり、夏季募集において、平成 29 年度入学者選抜試験（平成 28 年 8 月実施予定）から、英語能力の評価を学力検査（外国語・英語）に代えて、TOEIC テストのスコアに基づき行うこととした。

（現行）

科目名等	配点
学力検査（数学）	150
学力検査（外国語・英語）	100
面接及び書類審査	100
配点合計	350

（変更後）

科目名等	配点
学力検査（数学）	150
TOEIC テストのスコア	100
面接及び書類審査	100
計	350

（3）入試業務の改善

前年度の試験実施において整理した課題に対しては、学生募集要項や業務マニュアルの内容を充実する、試験室案内看板を工夫する、面接室への受験者の誘導方法を点検するなどの対策を行った。

1-3 入学前教育

1-3-1 保健福祉学部

保健福祉学部では学科ごとの専門性に依じて、推薦入試の入学手続者を対象に入学前教育を実施した。

1-3-1-1 看護学科

看護学科では高校から大学における学習への移行を円滑に図るために、①大学生になる際に必要とされる基礎学力（英語）の充実と思考力の深化を図る、②専門基礎科目、専門科目への橋渡しをするという構成で入学前教育を実施した。

日程及び内容は以下のとおりである。

【第 1 回】

平成 28 年 1 月 27 日（水） 10 時～16 時 6511 教室

担当教員：二宮一枝特任教授、佐々木純子准教授、井上幸子准教授、川村友紀助教、石田実知子助教

看護をこれから学ぶ上で、その基礎となる「人の生活」をテーマに入学前教育を実施した。生活という大きな概念について考える中で、自分の日常生活を振り返り、自己を客観視すること、また、生活するということはどういうことかについて、具体的に他者に伝えることができることをねらいとした。まず、「私たちの生活と健康について考えよう」を

テーマに二宮特任教授による講義を行い、「生活するとはどういうことか？」について、3人ずつ4グループに分かれてディスカッションを行った。図書館を利用するなど書籍を活用する方法を紹介し、研修1回目の課題として各自「自分の生活について考える」のレポート作成に取り組んだ。

【第2回】

平成28年2月3日(水) 10時～12時 6511教室

担当教員：佐々木純子准教授, 井上幸子准教授, 川村友紀助教

研修第1回目のグループディスカッションと一週間の自宅での個人ワークを統合してグループごとに模造紙にまとめ発表した。チームワークの大切さや楽しさに気づく機会となった。また、自分で調べて根拠をもって人に伝えるという経験ができ、大学教育への連続性のある研修になったと考えられる。

【第3回】

平成28年2月9日(火) 10時～12時 6511教室

担当教員 荻野哲也教授, 高橋徹教授

体表から見た人体の構造について解説し、実際に各人の身体を用いて、体表から触知できる骨格、筋肉、動脈を確認することで解剖学に対する関心を高めた。また、大学では講義に加え自宅学習も重要であること、自らの身体の観察など体験的な学習で理解を深めることができること、解剖生理の知識が臨床活動に密接に関連していることを解説した。

【第4回】

平成28年2月16日(火) 10時～12時 6615教室

担当教員：高橋幸子教授

これからの日本の高等教育修了者(4年制大学卒業生)は、どのような専門領域を選んで異なる言語や文化の話者のメッセージを理解し、自分のメッセージを伝えることができる能力を持つことが要求される。本講義では、大学における英語教育の意義を説明し、来年度4月から始まる新英語カリキュラムにつながる実践的な英語学習の導入を行った。

1-3-1-2 栄養学科

栄養学科では栄養学を学習するために、高等学校で化学並びに生物学を習得しておくことが重要となるため、推薦入試においては、理科の基礎知識を尋ねる口頭試問を実施している。しかしながら、センター試験並びに個別試験での理科の学力検査に対応するために、高校でこれらの科目を勉強している学生と比較すると、理科の知識が不足しているのが現状である。このような背景から、本学科では推薦入学者への事前教育として、化学と生物学について、大学で必要となる知識を補充する講義を実施している。生物学については、課題を与えて期限までに担当教員に送らせ、添削を行ったものを学生に返送している。また、化学の演習については、本年度も引き続き実施した。

本年は推薦入学者12名に対して以下の実施要項に基づいて入学前指導を行った。

【第1回及び第2回】

平成28年3月15日(火) 10時～11時30分(第1回) 6117講義室

13時～14時30分(第2回) 6117講義室

講義内容：化学(担当教員：伊東秀之教授)

物質の成り立ちの講義(第1回)及びその演習(第2回)を行った。

「新・化学入門」(関藤祐司・三國均共著)駿台文庫を参考書として使用し、演習では練習問題(15, 47, 65, 77, 88-89, 115, 130ページ)を一緒に考え解答した。

【第3回及び第4回】

平成28年3月16日(水) 10時～11時30分(第3回) 6117講義室

13時～14時30分(第4回) 6117講義室

講義内容：化学(担当教員：伊東秀之教授)

有機化合物の性質について講義した。
生物学（担当教員：高橋吉孝教授）
細胞の構造と機能、並びにそれを支える物質について講義した。

本年度も演習や課題学習を取り入れることにより、講義のみの入学前教育と比べると学習効果を高めることができた。また、化学のみならず生物学の講義も取り入れることで、入学後の栄養学の修得に必要な理科の基礎知識をより広範囲にカバーすることができた。今後は、より速やかな栄養学教育への導入を目指して、教育内容と授業時間数についてさらに吟味する必要がある。

1-3-1-3 保健福祉学科

保健福祉学科では、入学後の社会福祉学及び子ども学に関する専門知識習得のモチベーションを高め、また国際化に対応する英語教育を推進することを目的に入学前教育を実施した。具体的には英文和訳等の課題を課し、その内容に関して講義を行った。更に、福祉専門職や保育・幼児教育専門職に必要な情報収集、問題分析、コミュニケーション、伝達力を高めるためにグループディスカッションを実施した。

日程及び内容は、以下のとおりである。

【第1回】平成28年2月13日（土）13時～15時 8902教室

①英文課題の自己添削

入学前教育では、英文の課題を4つ用意し、2回に分けて、英文の和訳、内容に基づく議論を行った。4つの英文課題のうち、前半の2つを第1回目で、後半の2つを第2回目で、実施した。なお、英文はすべて訳書が刊行されたものを使用している。

②大学教育の準備としてのミニ講義

社会福祉学専攻（井村圭壯教授）、子ども学専攻（池田英隆准教授）

③次回課題の説明

【第2回】平成28年3月10日（木）13時～15時 8902教室

①課題の自己添削

②グループディスカッション

英文課題の内容と入学後の学びについて

③入学生自己紹介及びグループディスカッションの内容発表

④教員自己紹介及び発表についてのコメント

1-3-2 情報工学部

情報工学部では、入学者の主な選抜は、推薦入試（11月下旬）、前期日程（2月下旬）、中期日程（3月上旬）の3回に分けて実施される。このうち、推薦入試による合格者は、12月上旬の合格発表から4月の入学までの期間、高等学校での学習内容を維持することにより、入学後の授業に無理なく移行することが可能となる。これをサポートするために、以下の3項目を主眼とし、3学科合同で入学前教育を実施している。

- ・高校卒業までの3ヶ月間の時間の使い方へ示唆を与える。
- ・大学入学までの心と体の健康維持と教養の深め方を示唆する。
- ・身の回りの現象を支配している物理や数学から理工系の勉強に興味を持たせる。

日程と内容は以下のとおりである。

【第1回】

日時：平成27年12月25日（金）13:30～ 約2時間

場所：情報工学部棟2202室

内容：まず、学部長による挨拶が行われ、その後、学科別(情報通信工学科は 2203 室, 情報システム工学科は 2202 室, 人間情報工学科は 2906 室)に分かれ、各学科長による講話及び数学の小テストを実施した。また、英語、数学及び物理等の課題を配付し、第 2 回目に提出することとした。参加生徒数は、情報通信工学科 13 名, 情報システム工学科 13 名, 人間情報工学科 14 名であった。

【第 2 回】

日時：平成 28 年 2 月 17 日（水） 13:30～約 2 時間

場所：情報通信工学科(2203 室)

情報システム工学科(2202 室)

人間情報工学科(2906 室)

内容：第 1 回目に配布した課題を回収した。その後、数学の課題に関する小テストを実施し、各学科の数名の教員で採点を行いながら個別指導を行った。さらに 4 月までの追加課題を課したり、学科長の講話を実施した学科もあった。参加生徒数は、情報通信工学科 13 名, 情報システム工学科 11 名, 人間情報工学科 13 名であった。

1-3-3 デザイン学部

1-3-3-1 デザイン工学科

開催日：平成 28 年 3 月 4 日（金） 9:00～17:30 図書館及び 7202 室

参加者数：10 名

参加教員：小野英志教授, 岩本弘光教授, 中西勝彦准教授

実施概要：模擬講義ならびにワークショップ形式による入学前オリエンテーション実施
目的：1)90 分の模擬講義を通じて、大学教育へのスムーズな導入と意識転換を図る。

2)ワークショップ形式での制作体験を通じて、大学教育へのスムーズな導入を図る。

3)教員や在学生との交流を通じて、大学への親近感を向上させる。

実施詳細：

事前課題「卒業・修了制作展」の参観及び感想（レポート）提出。

9:00～10:30 オリエンテーションならびに図書館体験。

10:30～12:00 模擬講義「レオナルド・ダ・ヴィンチ」を巡って。

13:00～17:30 ワークショップ（6m キューブ）ならびに講評。

1-3-3-2 造形デザイン学科

造形デザイン学科では、推薦入試による入学予定者に対して、入学までの期間においてデザインの勉学に対するモチベーションと意欲を継続させる目的で以下のように入学前教育を実施した。

◆事前課題

(1)「身の周りの○を見つけよう！」

身の周りにある「まる」「まわる」に関するモノ・コトを見つけ出し、目標は 100 個として自分で画像撮影したデータを USB メモリに入れて当日提出。

(2)「デザイン学部卒業・修了制作展レポート」

造形デザイン学科の展示から、気になった作品を 2 つ（各々違うコースの研究とする）取り上げ、それぞれスケッチと 400 字程度のコメントによるレポートを当日提出。

◆開催日：平成28年3月7日（月） 9:30～16:30

参加教員：難波久美子教授， 関崎哲准教授， 南川茂樹准教授，
山下万吉講師， 作元朋子講師

参加学生：12名

授業概要：アクティブラーニングの手法を導入したワークショップを実施し入学
前教育をおこなった。

- ・プレゼンテーション力, コミュニケーション力を意識させる.
- ・デザインへの関心と勉学への意欲を高める.

スケジュール

9:30 事前課題提出

教員紹介/ 当日スケジュール確認

9:45 他者紹介トークセッションを経て, 事前課題(2)「卒業・修了制作展レ
ポート」発表

11:00 事前課題(1)発表により, 午後のワークショップの導入

休憩 11:30~12:30

12:30 ワークショップ「絵本の制作」

15:30 成果プレゼンテーション/ 講評

16:30 解散

1-4 留学・転学受入等

(1) 外国人留学生の受入状況

本学では, 国際社会に開かれた大学として外国人留学生の受け入れを進めており, 主としてアジア諸国を中心に留学生の受け入れを行うとともに, 国際交流協定を締結している韓国又松(ウソン) 大学校からは学部への転学生や短期の交換留学生の受け入れを行っている。

平成 27 年度は, 韓国又松(ウソン) 大学校から 2 人の留学生(保健福祉学部 to 交換留学生 2 人) を新たに受け入れ, 学部と大学院で合わせて現在 10 人の留学生が在籍している。

〔留学生の在籍状況〕

単位：人

年度	人数	学部・院別	所属学部等別	国籍別人数
22	14 (2)	学部 6 (2)	保健福祉学部 2 (1) 情報工学部 1 デザイン学部 3 (1)	韓国 5 (1) 中国 1 (1)
		大学院 8	保健福祉学研究科 4 情報系工学研究科 1 デザイン学研究科 3	韓国 4 中国 3 カンボジア 1
23	7 (0)	大学院 7	保健福祉学研究科 5 情報系工学研究科 1 デザイン学研究科 1	韓国 5 中国 2
24	10 (0)	学部 4	保健福祉学部 2 情報工学部 2	韓国 4
		大学院 6	保健福祉学研究科 4 情報系工学研究科 1 デザイン学研究科 1	韓国 4 中国 1 ネパール 1
25	12 (2)	学部 6 (2)	保健福祉学部 3 (1) 情報工学部 2 デザイン学部 1 (1)	韓国 4 中国 1 (1) ベトナム 1 (1)
		大学院 6	保健福祉学研究科 5 デザイン学研究科 1	韓国 3 中国 2 ネパール 1
26	10 (2)	学部 5 (2)	保健福祉学部 3 (1) 情報工学部 1 デザイン学部 1 (1)	韓国 3 ベトナム 2 (2)
		大学院 5	保健福祉学研究科 2 情報系工学研究科 1 デザイン学研究科 2	韓国 2 中国 2 ネパール 1
27	10 (2)	学部 6 (2)	保健福祉学部 5 (1) 情報工学部 1 (1)	韓国 4 中国 2 (2)
		大学院 4	保健福祉学研究科 1 情報系工学研究科 1 デザイン学研究科 2	韓国 2 中国 2

※ () 内は留学生のうち研究生の数

(2) 外国人留学生の受入体制の整備

留学生の受入れは、留学生にとっては、専門知識や技術の修得、本学学生にとっては留学生からの異文化の新鮮なインパクトや国際交流の機会が得られるなど、双方の学生に大変有意義なことであり、グローバル人材の育成を進めていく上でも重要である。

大学院では、留学生の受入れを積極的に進めるために、平成 28 年度入学者から適用することを想定して、試験日程、選抜方法、修了要件などの受入体制を検討した。また、平成 27 年度入学者の学生募集要項の英語版を、全ての研究科で作成し、日本語版と一緒に本学ホームページに掲載した。

1-5 高大連携と高大接続

本学と岡山県高等学校長協会との懇談会及び本学と県内の高等学校等進路指導担当教

員との意見交換会を、次のとおり実施した。

また、平成 27 年度から、高校生向けにアレンジした本学の授業を提供することによって、高校生に大学で学ぶ意義と楽しさを理解させ、大学で学ぶために必要な基礎学力の修得に取り組むきっかけとさせることを目的とした「高校生のための大学授業開放」を実施した。

(1) 本学と岡山県高等学校長協会との懇談会

日 時：平成 27 年 7 月 30 日（木）14:30～16:00

場 所：本部棟 2 階大会議室

出席者：高等学校側 13 人, 本学 10 人

内 容：本学の概要（ビデオ上映）、本学の改革、平成 28 年度入学者選抜、議題協議、意見交換等

(2) 本学と県内の高等学校等進路指導担当教員との意見交換会

日 時：平成 27 年 6 月 25 日（木）13:30～16:30

場 所：学部共通棟（東）講義室

出席者：高等学校側 49 人, 本学 19 人

内 容：本学の概要（ビデオ上映）、本学の改革、平成 28 年度入学者選抜、高等学校等からの事前質問・要望に対する本学の解答と質疑応答、学科ごとの個別相談

(3) 高校生のための大学授業開放

日 時：平成 27 年 6 月 27 日（土）13:30～16:00（デザイン学部）

平成 27 年 8 月 29 日（土）10:00～16:00（保健福祉学部・情報工学部）

場 所：各学部棟他

出席者：308 人

内 容：各学部、学科毎に講義、演習、実験及び実技を交え高校生向けにアレンジした授業

高大連携協定に基づく高等学校への講師派遣及び生徒の受入に関するデータは付録 1-H を、高等学校への講師派遣及び生徒の受入（高大連携協定以外）に関するデータは付録 1-I を参照されたい。

1-6 まとめと課題

平成 25 年度に抜本的な改正が行われたディプロマ・ポリシー、カリキュラム・ポリシー、アドミッション・ポリシーのうち、学長の掲げる教育改革の一環として行われている教養教育の充実に向け全学教育を見直し、平成 26 年度に平成 27 年度共通教育カリキュラムを策定したことに伴うカリキュラム・ポリシーの改正を行った。これに伴うディプロマ・ポリシー及びアドミッション・ポリシーの見直しは比較的軽微なものに留まった。平成 27 年度は新たな教養教育の実施やグローバル教育や地域連携教育の強化を図る再スタートの年であるため、各ポリシーの実質化を図ることとした。特に大学教育へのスムーズな移行を促すための推薦入学予定者への入学前教育の内容の見直しや大学教育開発センター・アドミッション部会企画による高校生のための大学授業開放（第 2 部第 1 章 1-2-3 参照）など、高大接続に関する取組が行われた。高大接続に関しては、平成 32 年度に予定される全国的な入試改革の視点から、岡山県高等学校長協会との懇談会等でも主要な議題となった。

学士課程の入試については、平成 24 年度～平成 25 年度から新しい高等学校学習指導要領（平成 21 年 3 月告示）が適用されたことから、平成 27 年度入学者における、大学入試センター試験の利用教科・科目の一部変更に伴い、これに基づいた一般入試を実施し、本年度はその 2 年目にあたるため、変更点は平成 29 年度入学者一般入試における、保健福祉学部社会福祉学専攻の入試日程別定員の修正を計画、周知したに留まる。同学科は平成 28 年度一般入試において志願者の倍率減をみており、今後修正の効果について見極める必要がある。全学

的には、当面は受入れた入学者におけるディプロマ・ポリシーへの適合性について、これを押し量るための履修状況と入試成績との相関分析結果等を蓄積し、来たるべき平成 32 年度の入試改革に備える必要がある。

大学院課程の入試に関しては、保健福祉学研究科において募集対策の工夫改善により、入学定員を充足することができたが（付録 1-A 参照）、デザイン学研究科では大学院オープンキャンパスの実施など工夫したものの、定員充足の結果を見ていないためさらなる工夫改善が求められる。平成 29 年度情報系工学研究科（博士前期課程）の募集では、アドミッション・ポリシーに掲げるグローバル人材の育成を一層推進するため、従来の学力検査（外国語・英語）を TOEIC テストのスコアに変えるべく周知している。

最後に、本学では、主に国際交流締結校からの転学生を受入れているが、それを継続するとともに、主に国際交流協定校から本学大学院への留学生を受入れるための準備を進めたものの、その成果は小規模のものに留まった。そのため平成 28 年度入試における大学院博士後期課程募集において、国際交流センターの活動と連携して留学生の受入れ促進のため、学費等免除のほか奨学金を給付するなどの工夫を行い、一部課程で受入れることができた。

第 2 章 共通教育部の教育活動と成果

2-1 概要

本学の建学理念である「人間尊重と福祉の増進」を念頭においた教養教育科目群を編成するとともに、教育研究理念である「人間・社会・自然の関係性を重視した実学の創造による地域貢献人材の育成」を実施するために、平成 27 年度から全学教育研究機構を廃止し共通教育部を新設した。本学の共通教育は、(1) 基礎的な知識を体系的に理解する姿勢の形成、(2) 生涯にわたる知的活動あるいは社会生活において必要とされる論理的思考力・問題発見力・批判力・汎用的な技能の習得と形成、(3) 地域連携等を通じた社会人基礎力や課題解決力の習得、(4) 自己の肉体的成長あるいは将来に継続する学習意欲の喚起を、専門分野にとらわれることなく涵養することを目指している。この目標を達成するために、共通教育部内に教養教育推進室、語学教育推進室、情報教育推進室、健康・スポーツ教育推進室、社会連携教育推進室の 5 つの推進室を設置し、次のような特徴的な科目群を設け、平成 27 年度入学生から教育を実施している。

- (1) 建学理念「人間尊重と福祉の増進」を体現させるためのカテゴリーを含み、教育方針の一つである「豊かな教養と高い人間性」を身につけるための科目を配置した教養科目群
- (2) 単なる外国語教育のみではなく、修得した外国語コミュニケーション能力を実践するための海外研修など、グローバル化教育に関連する科目を配置した語学国際群
- (3) 社会における自己の役割を理解し、地域社会との協働意識を培うとともに、少子高齢化などの地域社会の課題に対応しうる知識や技能を養う社会連携群

「共通教育の充実及び共通教育と専門教育との連携に関する」業務を実施するために、大学教育開発センター内に共通教育部が設置されている。共通教育科目に対するカリキュラム等の企画・立案などをこの部会が担当し、共通教育部ならびに各推進室で実施するように役割分担ができています。共通教育科目の系統図を次ページに示す。共通教育科目の実施に当たっては、共通教育部を兼務する教員のみではなく、平成 26 年度以前入学生を対象とする全学教育科目と同様に学部専任教員の協力を仰いでいる。

共通教育における平成 27 年度における重要な成果は、

- 教養教育科目群に人文・社会科学入門(必修)、自然科学入門(同)、健康科学入門(一部必修)のコア科目をおき、各科学分野の基礎を学べるようにした、

- 英語教育の充実に関し、新カリキュラム English Language Program を作成し、平成 28 年度から実施することとした、
 - TOEIC IP テスト (2 年次生全員受検) において、前年度比 25 ポイント向上の成果を得た、
 - 文部科学省「地(知)の拠点大学による地方創生推進事業 (COC+)」の採択に伴う学部教育と連携した副専攻化において、社会連携科目群の再編成を行った、
- に集約される。なお、各推進室における取り込みについては 2-2 節で述べられる。

【骨子】

- 1) 国が示す学士力の参考指針 *H20 に基づき、アドミッション・ポリシーへの対応 =【修学基礎群】
→ 基礎的な知識・理解、汎用的技能涵養の場の提供
- 2) 同上、質的転換の指針 *H24 に基づき、主体的学修を促す双方向授業・学外学修プログラム【大学教育開発センター】
- 3) 本学建学理念「人間尊重と福祉の増進」→ 独自科目群 =【教養科目群】健康科学系 (健康・福祉・社会) の設定
- 4) 教養教育改革【教養科目群】・グローバル化対応【語学国際群】・地域貢献人材育成【社会連携群】を目指した3群の編成
- 5) 評価委員会等の (Check)・戦略策定 (Action)、センター等の企画立案 (Plan)・委員会及び学部等の実施 (Do) の機能強化

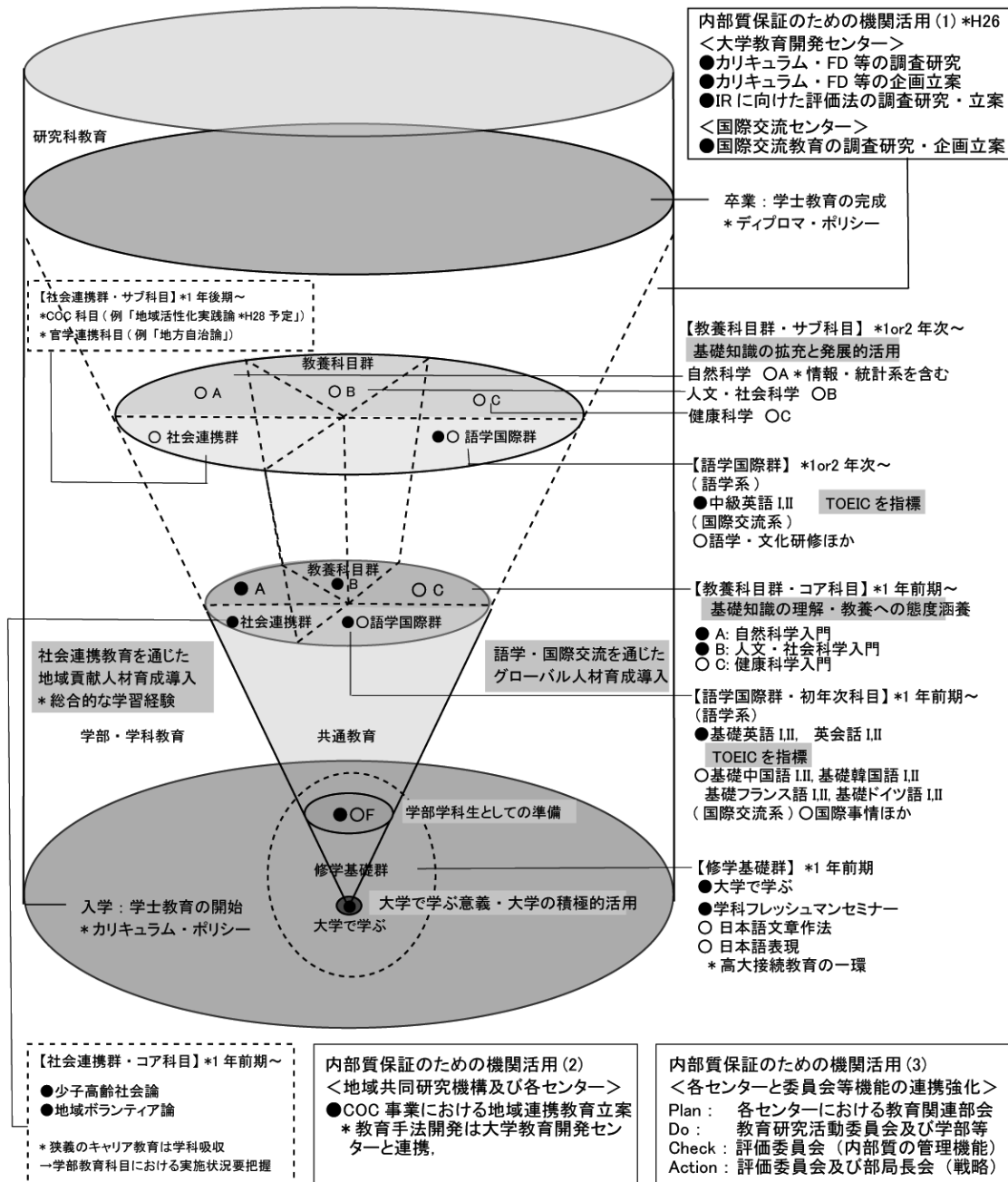


図. 平成 27 年度入学生から実施している共通教育科目の系統図

2-2 共通教育部

学長の掲げる3つの基本方針(1) 全学教育への教養教育の導入, (2) 国際交流の促進を通じたグローバル教育の推進, (3) 地域貢献に関する戦略的な取組に基づき, 従来の全学教育を共通教育と名称変更し, カテゴリーの見直し, 授業科目の統廃合等を行い, 平成27年度入学生より新たな共通教育科目としてのカリキュラムを行っている。また, 平成27年度から共通教育を実施する組織として共通教育部を新設し, 部内に教養教育推進室, 語学教育推進室, 情報教育推進室, 健康・スポーツ教育推進室, 社会連携教育推進室の5つの推進室を設置して教育を行っている。

共通教育では, 本学の建学理念「人間尊重と福祉の増進」及び教育目的「人間・社会・自然の関係性」の理解を体現するために,

- (1) 基礎的な知識を体系的に理解する姿勢の形成,
- (2) 生涯にわたる知的活動あるいは社会生活において必要とされる論理的思考力・問題発見力・批判力・汎用的な技能の習得と形成,
- (3) 地域連携等を通じた社会人基礎力や課題解決力の習得,
- (4) 自己の人間の成長あるいは将来に継続する学習意欲の喚起, 専門分野にとらわれることのない涵養,

を柱として, 知的自律性を培うための教養と技能を涵養する教育を, 所属学部に係わることなく全学生に実施することとした。また, これらを通して,

- ・ 現代社会の複雑化する多様性を理解し, 時代の変化に対応することができる豊かな教養を身に付けた「人間力」の育成
- ・ 地域社会あるいは国際社会との連携等を通して, 実社会における課題を自ら発見し解決する能力を持った「社会力」の涵養
- ・ 異文化理解あるいはチームワーク活動に不可欠な実践的な「コミュニケーション力」及び科学技術の進展に支えられた「情報処理・活用力」の修得

を軸とした上で, 文部科学省が提唱する「学士力」あるいは経済産業省が提唱する「社会人基礎力」を見据えた教育を目指すこととした。具体的には, 次の指針に沿った共通教育科目を平成27年度入学生より実施している。

- (1) 学長の掲げる基本方針(教養教育, 国際交流, 社会貢献)に合わせ, 授業科目を教養教育, 語学国際, 社会連携に分類し, さらに, 建学の理念である「人間尊重と福祉の増進」に合致する6カテゴリーを設けている。
 - ・ 高校教育から大学教育への円滑な移行を促す「修学基礎」
 - ・ 教養教育としての「人文・社会科学」及び「自然科学」
 - ・ 建学の理念に基づく「健康科学」
 - ・ 国際交流に対する意識付けを涵養する「語学国際」
 - ・ 地域社会との結びつきを育成し, 社会の一員である自覚を喚起する「社会連携」

- (2) 各カテゴリーにおいて基礎知識の修得を図るための授業科目としてコア科目(導入科目)を設定するとともに, その多くを全学科で必修科目としている。これらの授業科目を通して, カテゴリー内に配置された他の発展的な授業科目(サブ科目)履修への動機付けを行い, 所属学部にとらわれることのない汎用的な知識や技能の涵養を目指している。

平成28年度入学生の共通教育科目の概要をまとめると, 下の表のようになる。

平成 28 年度入学生（共通教育科目）

カテゴリー	授業科目数	全学的な必修科目
修学基礎	6	大学で学ぶ,フレッシュマンセミナーまたはフレッシュマン就業力セミナー
人文・社会科学	19	人文・社会科学入門
自然科学	18	自然科学入門
健康科学	11	
語学国際	23	ELP I・II・III・IV,中級英語 I・II
社会連携	9	おかやまボランティア論,おかやまを学ぶ
合計	86	

2-2-1 教養教育推進室

教養教育推進室は,前節で述べた 6 カテゴリーのうち「修学基礎」,「人文・社会科学」及び「自然科学」の教育を推進する目的で平成 27 年度に新たに設置した組織である. 11 名のメンバーで構成され,その全員が共通教育部兼務教員である. 「修学基礎」カテゴリーにおいては,専門教育を修得する上で重要な共通教育科目の履修指導を行うとともに,新入生対象のフレッシュマンセミナーにおいて,各学部・学科に求められる資質や基礎知識を身に付ける教育を行っている. また,「人文・社会科学」と「自然科学」カテゴリーにおいては,いずれも入門コア科目を導入して基礎知識の修得を図るとともに,サブ科目(発展的科目)において応用能力の修得を図ることで,大学生に求められる教養を身に付けた人材の育成を目指している.

入門コア科目である「人文・社会科学入門」及び「自然科学入門」は全学必修であり,1 年次生前期に開講している. 「人文・社会科学入門」(保健福祉学部),「自然科学入門」(情報工学部)の平成 27 年度シラバスの一部を下に示すが,いずれの講義も 3 名の専任教員で構成するオムニバス形式をとっている. また,平成 27 年度の「人文・社会科学入門」では「哲学」,「社会科学」,「日本文学」の 3 分野を,「自然科学入門」では「物理学」,「生物学」,「化学」の 3 分野を 5 コマずつ講義し,学生の所属学部依存することなく,各科学分野の基礎を学べるようにしている点に特長がある. 平成 27 年度に実施したこれらの講義について,課題を共有する目的で担当教員による意見交換も行っているが,これは第 2 部 1-2-4 共通教育部会において述べている.

【授業科目名】 人文・社会科学入門 (Introduction to Humanities and Social Science)

【概 略】

本講義は,社会,思想,文化,の種々相を概観し,人間と社会を読み解く基本的な視座の確立を目指す. 古代から現代までの西洋の主要な思想家に,人間と世界の基本的関係・基本的価値を学ぶ. 古来,日本人に愛されてきた俳諧や俳句の歴史と歳時記について教授し,有名な俳句作品や俳人を取り上げて,日本的な文化や精神,美意識などを紹介する. 近代以降の社会変動の過程に注目して,社会現象の特徴,背景,影響を分析する方法を概説する.

【授業科目の到達目標】

1. 西洋で長い伝統を有する哲学(フィロソフィー)の概要を理解する
2. 近代以降の社会現象の読み解き方の概要を理解する
3. 俳諧・俳句の歴史と俳句鑑賞方法を理解する

【授業内容とスケジュール】

1. 哲学の基本的特徴
2. 哲学の問い 1-人は何を知りうるか

3. 哲学の問い 2—社会はどのように形作られるか
4. 現代の哲学 1—19 世紀後半から 20 世紀前半
5. 現代の哲学 2—20 世紀後半から 21 世紀
6. 近代国家の理念と課題
7. 政治と経済の役割と機能
8. 教育と福祉の役割と機能
9. 宗教・哲学・科学の役割と機能
10. 文化という様式の継承と生成
11. 俳諧の歴史と歳時記
12. 俳句の歴史
13. 正岡子規 その作品と人生
14. 高浜虚子と河東碧梧桐 その作品と人生
15. 自由律俳句・HAIKU について

【授業科目名】 自然科学入門 (Introduction to Natural Science)

【概 略】

「自然科学」とは、自然界における普遍的な法則性を確立し、それに基づいて自然界の様々な現象を解明する学問の総称である。本講義はオムニバス形式で、「物理学」、「生物学」、「化学」の 3 分野における生活と自然界の関わりを中心に自然科学に親しむことを通して、自然科学の基礎教養として科学的なものの見方及び視点を持つことの重要性について学ぶ。

【授業科目の到達目標】

1. 自然科学に親しみ、人類の叡智を学ぶこと。
2. 科学に関係する社会問題について関心を持ち、自ら意志決定できるようになること。

【授業内容とスケジュール】

1. 物理学の世界 —物理学と生活・自然界の関わり—
2. 物理現象のモデル化と解法
3. 力学における諸問題
4. 電磁気学における諸問題
5. 新しい物理学
6. 生物学の世界 —生命体の基本的属性—
7. 細胞はどうやって増えるのか
8. 個体はどうやって増えるのか
9. 生物はどのようにしてエネルギーを手に入れるのか
10. 生産者・消費者・分解者の役割
11. 化学の世界 —身の回りの化学物質・化学現象—
12. 金属の化学
13. 電池の化学
14. 電気製品の化学
15. プラスチックの化学

教養教育推進室の今後の課題として(1) 教養科目系の体系化, (2) 各サブ科目の必要性検討, (3) コア科目とサブ科目の連携強化, (4) アクティブ・ラーニングの積極的導入, が挙げられる。これらの課題について共通教育部会と連携をとり, 早期の達成を目指していく。

2-2-2 語学教育推進室

国際社会で活躍できる次世代の人材を育成するために、昨今、英語を主とする語学力の向上と、幅広い教養の涵養が求められている。語学教育推進室においても、このような必要性に応えるため、現在行われている初級英語・中級英語・英会話という大きな3つの枠組みから、新しい英語カリキュラム English Language Program (ELP) へ移行する。以下では、語学教育推進室の役目と利用状況、TOEIC の実施状況とスピーカーズコーナーなどについて述べ、最後に平成28年度から開始する English Language Program (ELP) について説明する。

(1) CALL 教室(8122 教室)の利用

CALL 教室(以下8122 教室)は、授業での利用は勿論のこと、学生の語学学習支援事業の一環として、授業での使用がない平常時ならびに夏季・春季の長期休暇中に開放し、学生に自主学習の機会を提供している。ここでは、学生は、コンピュータにインストールされている発音検定の自主練習やインターネットを利用した学習サイトにアクセスし、発話練習をすることができる。また、8122 教室を利用して、e-ラーニング教材 ALC NetAcademy2 (学外からも使用可) を利用することができる。

(2) 多読用書籍利用

語学教育推進室を利用する多くの学生の目的は、多読用書籍を利用することである。多読用書籍は、Graded Readers と呼ばれているが、使用する主要な単語が制限され、全体の量や文法事項も調整され、英語学習者が辞書なしで楽しめるように工夫された多読用の英語教材のことを指している。各英語必修クラスにおける多読用書籍頁数調査によると、2015 年度前期(4月～9月)のうちに、1400 頁を読破した学習者も出てきた。これらの多読用書籍は、学生の関心を惹きつけるものを常備するように、計画的に数を増やし、常に学生の需要に応えるものとなっている。

語学教育推進室が所有する多読用書籍は、現時点では1000冊を超えている。必修の英語科目を履修しているすべての学生が持つ学習ログ(ポートフォリオ)には、学生が読んだ多読本の記録を残していく工夫がなされているが、語学教育推進室の常勤スタッフは、学生からの多読本の選書の相談にも応じ、学生の英語における総合的な学びを支えている。以下に月ごとの多読用書籍の貸出状況表を示す。

表. 多読書籍の貸し出し状況

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	前期計
保健福祉	507	633	666	613	10	45	2474
情報工	372	438	495	416	9	32	1762
デザイン	177	258	175	264	29	25	928
計	1056	1329	1336	1293	48	102	5164

	10月	11月	12月	1月	2月	3月	後期計	合計
保健福祉	307	237	166	328	186	2	1226	3700
情報工	136	180	115	282	79	0	792	2554
デザイン	125	130	49	89	43	0	436	1364
計	568	547	330	699	308	2	2454	7618

(3) 語学教育推進室の利用状況

語学教育推進室では、ティーチング・アシスタントを月曜日から木曜日まで週に4日間配置し、個人あるいはグループに対して、学習方法について助言を与えたり、スピーキングの機会を与えたりしている。これらの学習支援事業に関する利用者総数は、下表に示すとおりである。なお、表中の「自主学習」の項目には、ティーチング・アシスタントによるスピーキング指導受講者、ALC NetAcademy2 の利用者、語学教育推進室所蔵の書籍を利用して TOEIC 受験のために自主学習する者が含まれ、多読用書籍の貸出や学習相談など各種問い合わせは「その他」に含まれる。

表. 語学教育推進室の利用状況

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	前期計
自主学習	49	25	25	25	4	22	150
その他	1297	1555	1468	1413	124	306	6,163
計	1346	1580	1493	1438	128	328	6,313

	10月	11月	12月	1月	2月	3月	後期計	合計
自主学習	33	28	14	5	4	1	85	235
その他	762	666	451	786	698	23	3386	9549
計	795	694	465	791	702	24	3471	9784

このうち自主学習者の学部別人数は以下のとおりである。

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	前期計
保健福祉	18	13	12	19	3	5	70
情報工	19	7	9	6	1	15	57
デザイン	12	5	4	0	0	2	23
計	49	25	25	25	4	22	150

	10月	11月	12月	1月	2月	3月	後期計	合計
保健福祉	16	16	5	1	3	1	42	112
情報工	17	11	9	4	1	0	42	99
デザイン	0	1	0	0	0	0	1	24
計	33	28	14	5	4	1	85	235

8122 教室以外の、情報教育推進室と共用する 8120 教室と 8211 教室も含めた、オンライン自主学習システム ALC NetAcademy2 の利用者数は以下のとおりである。今年度からは、学外から本システムへのアクセスが可能となり、自宅からアクセスして学習できるようになったので、学内からのアクセスは少ない。また、必修科目の基礎英語と中級英語において、ALC NetAcademy2 を夏季休暇ならび春季休暇の課題としているため、学期中の利用者は少ない。しかしながら、基礎英語において、前期最後の週と後期最初の週にレベル診断テストをしているため、7月～10月の利用は多い。

表. ALC NetAcademy2 の利用

	4月			5月		
	スタンダード	TOEIC 演習	計	スタンダード	TOEIC 演習	計
保健福祉	1	9	10	0	7	7
情報工	8	4	12	6	13	19
デザイン	4	1	5	0	0	0
計	13	14	27	6	20	26

	6月			7月		
	スタンダード	TOEIC 演習	計	スタンダード	TOEIC 演習	計
保健福祉	0	14	14	292	9	301
情報工	0	1	1	273	2	275
デザイン	1	4	5	164	1	165
計	1	19	20	729	12	741

コース名	8月			9月		
	スタンダード	TOEIC 演習	計	スタンダード	TOEIC 演習	計
保健福祉	348	195	543	1012	787	1799
情報工	103	84	187	638	746	1384
デザイン	181	72	253	526	345	871
計	632	351	983	2176	1878	4054

コース名	10月			11月		
	スタンダード	TOEIC 演習	計	スタンダード	TOEIC 演習	計
保健福祉	71	380	451	0	52	52
情報工	204	149	353	13	52	65
デザイン	44	159	203	0	2	2
計	319	688	1007	13	106	119

コース名	12月			1月		
	スタンダード	TOEIC 演習	計	スタンダード	TOEIC 演習	計
保健福祉	0	0	0	2	22	24
情報工	0	5	5	4	28	32
デザイン	0	0	0	2	0	2
計	0	5	5	8	50	58

コース名	2月			3月		
	スタンダード	TOEIC 演習	計	スタンダード	TOEIC 演習	計
保健福祉	154	46	200	471	7	478
情報工	22	26	48	163	41	204
デザイン	71	5	76	192	4	196
計	247	77	324	826	52	878

コース名	前期合計			後期合計		
	スタンダード	TOEIC 演習	計	スタンダード	TOEIC 演習	計
保健福祉	1653	1021	2674	698	507	1205
情報工	1028	850	1878	406	301	707
デザイン	876	423	1299	309	170	479
計	3557	2294	5851	1413	978	2391

コース名	平成 27 年度合計		
	スタンダード	TOEIC 演習	計
保健福祉	2351	1528	3879
情報工	1434	1151	2585
デザイン	1185	593	1778
計	4970	3272	8242

スタンダード=ALC NetAcademy2 スタンダードコース

TOEIC 演習=ALC NetAcademy2 TOEIC®テスト演習 2000 コース

就職活動や進学上の必要性から TOEIC の受験を希望する学生がいるため、TOEIC IP を学内で 2 回実施した。その実施状況は以下のとおりである。平均点はほぼ前年並みであった。

表. TOEIC IP 任意受験者の概要

通算回数	実施年月日	受験者数(人)	最高(点)	最低(点)	平均(点)
32	平成 27 年 5 月 21 日	14	625	305	492.9
33	平成 28 年 2 月 17 日	15	750	255	459.0

(4) TOEIC の全員受験の実施

平成 24 年度以前入学生までは選択科目であった「中級英語 I・II」が,平成 25 年度入学生から必修科目化されたことに伴い,2 年次履修の「中級英語 II」履修者 380 名を対象として,平成 27 年 10 月 31 日(11 月 4 日追試実施)に TOEIC IP を実施した.受験者 362 名(受験率 95%),受験者平均点は 375.1 点,最高得点は 815 点であり,500 点以上取得者は全学部合わせて 42 名であった(990 点満点)。「中級英語 II」の履修クラスごとの平均点等は次の表のとおりである.なお表中の()内の数値は平成 26 年度の結果である.

表.「中級英語 II」履修クラス別の結果

学部	学科	受験者数	平均点	最高点	500 点以上
保健福祉	看護	40	378 (348)	675 (540)	2 (2)
	栄養	43	443 (367)	815 (590)	8 (4)
	保健福祉*	64	A 407 (355)	570 (510)	9 (1)
			B 362 (375)	565 (585)	3 (2)
情報工	情報通信*	52	A 404 (391)	775 (605)	6 (4)
			B 393 (350)	625 (535)	4 (3)
	情報システム*	44	A 412 (363)	650 (585)	2 (3)
			B 365 (342)	540 (625)	3 (1)
	スポーツシステム	37	334 (330)	550 (610)	2 (3)
デザイン	デザイン工学	37	339 (331)	530 (500)	2 (1)
	造形デザイン*	45	A 329 (323)	525 (470)	1 (0)
			B 301 (325)	455 (575)	0 (1)
全学科		362	375.1 (349.9)		42 (25)

*保健福祉学科,情報通信工学科,情報システム工学科,造形デザイン学科は 2 クラスに分けて実施.

() 内の数値は平成 26 年度の結果.

平成 27 年度計画では,「平均スコア 370 点以上と 500 点以上取得者数 30 名」を目標として掲げていたが,表からわかるように,いずれの目標も達成できた.本学で行ってきた英語教育改革の試みが,成果につながり始めたと考える.平成 28 年度の秋に 2 年生対象で実施する TOEIC については,「平均スコア 390 点以上と 500 点以上取得者数 50 名」を目標とする.

なお,平成 28 年度から開始する English Language Program の教育効果を定量的に測るため,平成 28 年度から入学時と 2 年生秋の 2 回,TOEIC の全員受験を課すこととした.

(5) スピーカーズコーナー

毎年大学祭第1日目(本年度は11月7日に開催),本学の学生が外国語(日本人学生は英語,留学生は日本語)を用い,自身の経験に基づくスピーチを披露している.このコーナーは,本学の学生が一人5分の持ち時間で外国語によるスピーチを行う場であり,今年度は本学の学生10名が参加した.「イギリスと岡山の類似点」,「ロボット研究サークルでの活動」,「夢」,「大好きなミュージカルと親友」,「奈良の紹介」,『ソクラテスの弁明』を読んで」,「日本の餡子」,「フライングディスク」,「日本の風習」についてなど,多岐にわたったテーマでスピーチが行われた.

(6) 定期発行物 Newsletter WeLL+

2011年10月より,Newsletter WeLL+を,毎年4月と10月の年2回発行している.語学学習の方法や語学研修の体験記事,語学教育推進室主催の行事や資格検定試験実施の案内などを掲載している.このNewsletterは,各学部の学部生と大学院生及び語学教育推進室のスタッフが教員や学生からの投稿記事を基に編集作業を行っている.2015年度は,第8号と第9号が発行され,全学部1・2年生と教職員に配布された.

(7) 平成28年度から開始する English Language Program (ELP) の概要

平成27年度までの科目構成と教育効果を反省し,本学の英語教育を English Language Program (ELP)へと刷新することとした.まず,本学における英語科目について,「グローバル化した世界における英語の特権的な地位を鑑み,「適切で分かりやすい」英語運用能力の獲得を最優先とする」ことを目的とする.すなわち,4億人しかいない英語母語話者の地域言語としてではなく,16億人いるとされる非英語母語話者とのコミュニケーションを目的とした「国際共通語としての英語」を学ぶことに主眼を置くことになる.

コミュニケーションの解釈とその位置づけは多岐にわたるが,本学では,日本学術会議の英語教育に関する参照基準に則り,本学で教育する英語コミュニケーション能力を以下の4つの下位能力から構成されるものとする.

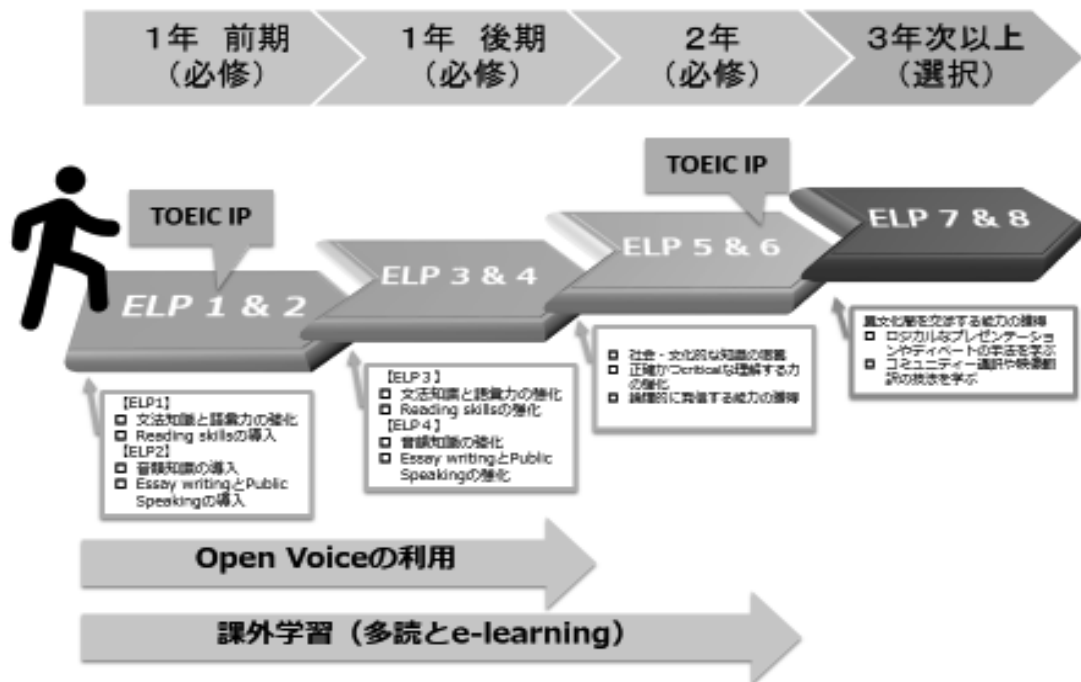
- (a) 文法能力(文法・音韻・語彙などの言語運用能力)
- (b) 談話能力(センテンスを超える文章単位を口頭や文章で組み立てる能力)
- (c) 社会言語能力(社会文化的に適切な言語を使用できる能力)
- (d) 方略能力(コミュニケーションが円滑に進まない状況を切り抜ける能力)

以下では,旧科目との対応関係と ELP の目的,各 ELP の内容を順に述べる.

①旧科目との対応関係と ELP の目的

平成27年度までは基礎英語と中級英語を連動させてきたが,英会話と基礎英語や中級英語との互換性がなかった.さらに,上級英語の位置付けが学生にとって明確ではないという問題点があった.そこで,下表に示すように科目名称を変更し,さらにナンバリングを行った.

旧科目名称	新名称	区分
基礎英語 I	ELP 1 (平成28年度~)	必修
英会話 I	ELP 2 (平成28年度~)	必修
基礎英語 II	ELP 3 (平成28年度~)	必修
英会話 II	ELP 4 (平成28年度~)	必修
中級英語 I	ELP 5 (平成29年度~)	必修
中級英語 II	ELP 6 (平成29年度~)	必修
英会話 III	ELP 7 (平成29年度~)	選択
英会話 IV	ELP 8 (平成29年度~)	選択
上級英語 I・II	廃止 (平成30年度~)	選択



この目的は英語科目を体系化して、かつ、受講生に英語の習得段階を自ら確認できるようにすることにある。各 ELP 科目の内容は後述するが、必修科目はコミュニケーション能力の涵養を目指し、選択科目はより少人数でより高度なコミュニケーション能力と異文化間の交渉能力の獲得を目指す構成となっている。また、平成 28 年度から新たに ELP1 にて TOIC IP を受験させ、教育効果を定量観測することにした。必修科目の ELP1・3 は理解力の涵養に焦点を当て、英語基本 4 技能のうち reading と listening をあわせた技能複合型、ELP2・4 は発信力の涵養に焦点を当て、英語基本 4 技能のうち writing と speaking をあわせた技能複合型にすることで、受講生にも科目の性格が明確となるようにした。特に ELP2・4 は本学の学生が苦手とする音韻知識と文章構成能力をきめ細かく指導し、学習効果の質が一定程度確保できるように、平成 27 年度に本学が独自に開発した on-line の speaking 訓練ソフト「Open Voice」を、writing も訓練できるよう改良する。また、課外学習として多読と e-ラーニングは ELP1～5 にて引き続き実施する。

②各 ELP の内容

科目名称	授業の概要	到達目標
ELP 1	文法知識・語彙力の強化 reading skills の導入	文法知識・語彙力を基盤に、英語の文章を正確に理解できる能力を涵養する (TOEIC の Reading Section 対策にも対応)。
ELP 2	音韻知識の導入 essay writing と public speaking の導入	音韻 (正確な発音方法と音声変化) の知識を身につける。さらに、パラグラフの基本構造について学び、所与のテーマについて、論理的な一貫性のある、100～200 words の英文が書けるようになる (TOEIC の Listening Section 対策にも対応)。
ELP 3	文法知識・語彙力の強化 reading skills の強化	ELP 1・2 の成果をもとに、英語ネイティブの平均的な音読速度で文章を正確に理解できる能力を涵養する (TOEIC の Reading Section 対策にも対応)。

ELP 4	音韻知識の強化 Essay Writing と public speaking の強化	引き続き音韻の知識を身につける。さらに、プレゼンテーションの基本を習得し、所与のテーマに従って論理的な一貫性のあるスクリプトを書き、それを基に短いプレゼンテーションができるようになる（TOEIC の Listening Section 対策にも対応）。
ELP 5	コミュニケーション能力の獲得	社会・文化問題やアカデミックな内容に関する多読・多聴を通して、正確かつ critical な理解を目指す（TOEIC の各セッション対策に対応）。
ELP 6	コミュニケーション能力の獲得	社会・文化問題やアカデミックな内容に関する理解を元に発信できる包括的な能力を涵養する（TOEIC / TOEFL の各セッション対策に対応）。
ELP 7	コミュニケーション能力の涵養 異文化間交渉能力の獲得	(a) ロジカルなプレゼンテーションとディベートの手法を学ぶ。 (b) コミュニティ通訳や映像翻訳の技法を学ぶ。
ELP 8	コミュニケーション能力の涵養 異文化間交渉能力の涵養	(a) ロジカルなプレゼンテーションとディベートの手法を学ぶ。 (b) コミュニティ通訳や映像翻訳の技法を学ぶ。

2-2-3 情報教育推進室

情報社会の進展に伴い、情報通信機器及びデータの活用があらゆる分野で求められている。そのような中、情報技術に関する知識を学ぶことによって情報社会に適応できる能力を養うことを目的として情報教育推進室が開設された。構成メンバーは室長、副室長の他、室員が3名であり、そのうち情報工学部の教員が4名、デザイン学部の教員が1名である。本年度のカリキュラムの改編に伴い、「自然科学」のカテゴリーの中のサブカテゴリー「情報・統計」において関連する科目数が増加した。新規に開講した科目としては「統計学の基礎 A」（1単位の科目）がある。ビッグデータ時代の到来と言われている昨今、統計的な考え方を身につけることは以前にも増して重要であり、この科目においてはその基本的な見方及び考え方を短期間ではあるが修得することを目標としている（デザイン工学科の学生は必修）。できるだけ多くの学生が統計学を学べる機会を増やし、学生全体のデータの活用能力の向上を図る。

その他の「情報・統計」に関連する担当科目は次の通りである。

- ・「情報リテラシー基礎」
- ・「統計学の基礎 B」
- ・「コンピュータ演習」
- ・「情報技術の進展」
- ・「ヒューマンコミュニケーション」

また、これらの科目の担当教員は本推進室の構成メンバー（ただし、室長を除く）の他、非常勤講師で構成されている。

本年度の中期計画において本推進室は図書館と連携し、新設科目の「情報リテラシー基礎」などの充実により、情報技術教育の向上を目標としている。具体的な教育の工夫及び、その効果は以下の通りである。

- ・ 普段コンピュータに接する機会が少ない学生を対象に、コンピュータのハードウェアとソフトウェアの基礎について分かりやすく解説し、コンピュータリテラシーの向上を図る

た。

- ・インターネットの利用について、具体的なサービスを数多く取り上げ、詳しく解説した（保健福祉学部対象）。
- ・メディアリテラシーについて学ぶとともに、近年、デザイン教育において必須の著作権について、授業の中で集中的に取り扱うことができた（デザイン学部対象）。
- ・授業評価のアンケート及び自由記述の授業の感想の結果より、個々の情報リテラシー意識の向上が窺えた。

また、本推進室のウェブページを開設し、概要等の情報発信を行った。来年度においては、「情報リテラシー基礎」を発展的に廃止し、「コンピュータ演習 II」を新たに開設する（「コンピュータ演習」は「コンピュータ演習 I」に変更）など演習科目を充実させることで、更なる情報教育の推進を図る予定である。

情報基盤活用推進センターの利用

学生の情報活用能力の向上を図り、情報教育演習や自主学習利用の目的のため、語学教育推進室との協力の下、インターネットに接続された PC を備えた情報処理演習室を年間 158 日開放した。各月の延べ利用者数及び開放日数は下表のとおりである。平成 27 年度の延べ人数は 13,613 名（前年度比約 16%の利用者減）であった。これは、インターネットへのアクセスだけであれば演習室に行かなくても個人の所有するスマートフォン等から学内の無線 LAN や携帯キャリアの回線を通してインターネットへのアクセスが可能になってきたことが影響していると考えられる。実際、岡山モバイルスポット（岡山県の公衆無線 LAN）の本学アクセスポイントの利用者数は同じ期間で延べ 10,309 名（前年度比約 7%増）となっている。

情報処理演習室の利用者数を学部別でみると、保健福祉学部（保健福祉学研究所を含む）が全体の約 77%、情報工学部（情報系工学研究所を含む）が約 2%、デザイン学部（デザイン学研究所を含む）が約 21%であった。保健福祉学部が突出している原因は、情報工学部及びデザイン学部はそれぞれ学部教育用の計算機演習室を整備しているが、保健福祉学部にはそれらに相当する演習室がないためと考えられる。

(ア) 延べ利用者数

月	4月	5月	6月	7・8月	9・10月	11月	12月	1月	2月	合計
H26	1,693	2,049	2,183	3,147	2,223	1,409	1,532	1,700	485	16,421
H27	1,835	1,368	1,713	2,550	2,264	1,126	1,145	1,144	468	13,613

※授業がない日は演習室開放をしていないため、2月は利用者数も少なくなり、3月は0となる。

(イ) 開放日数

月	4月	5月	6月	7・8月	9・10月	11月	12月	1月	2月	合計
H26	14	19	21	27	26	18	15	15	7	162
H27	14	14	22	27	26	17	15	15	8	158

2-2-4 健康・スポーツ教育推進室

健康・スポーツ教育推進室は平成 27 年に新設され、構成メンバーは 5 名で、そのうち 3 名は共通教育部兼務教員、2 名は健康科学カテゴリー科目を担当する学部教員である。健康・スポーツ教育推進室の役割は、健全な社会生活を送る上で習得すべき知識及び技能を共通教育の健康科学カテゴリー科目により、こころと身体、環境に関する講義、実技を通して習得できるようにカリキュラムを作成することである。その他にも、授業科目に係る予算案の作成及び施設、機器等の整備、学生の課外活動に使用する施設、機器等の維持管理、全学における学生及び教職員の健康の維持・推進のための施設利用に関する事項、全学のスポーツ施設の地域社会への提供に関する事項、地域における健康・スポーツ教育活動に関する事項など所掌事項は多岐にわたる。

今年度は、コア科目として新規に「健康科学入門」を設置したのに加え、「生命倫理」「心理学入門」「スポーツ I」「スポーツ II」「脳と身体の科学」「食と健康」「健康と心理」「スポーツの科学」「運動と健康」「健康の管理」「住環境と健康」の 11 科目を開講した。講義科目はいずれも准教授以上の専任教員が主担当となっている。実技科目については、より多くの学生の特性に対応可能な種目を取り入れること、他学科の授業が同一時間帯に開講されることなどから非常勤講師も含め開講している。実技科目では、前期 8 種目（テニス・サッカー・ソフトボール・バレーボール・ゴルフ・陸上競技・アルティメット・ペタンク）の中から受講生に応じた種目を適宜選択し、7 月期にはプールを活用したアクアスポーツを実施した。後期には全履修生を対象に文部科学省の新体力テストを実施し、その後、8 種目（バレーボール・グラウンドゴルフ・サッカー・卓球・バドミントン・ノルディックウォーキング・アルティメット・タグラグビー）の中から、前期の受講種目とも関連させ、発展的な内容を取り入れたり、新規の種目を選択したりするなどして実施した。また、スポーツ I 及び II において活用している TA に協力してもらい、体育・スポーツ施設の点検、整備を行った。

スポーツの授業はこれまで 2~5 学科が同一時間帯に受講するよう時間割が組まれており、多くの学科が集中する時間では本学のスポーツ施設で効果的にスポーツ教育を実施する最適な収容数を超えていたため、屋外施設が使用できない雨天等の荒天時には屋内施設も満杯の状態、十分な身体活動を伴う教育内容が保証できていなかった。そのため、平成 29 年度に予定されているクォーター制の導入に合わせて、スポーツの授業に関しては学科別に開講する予定で、これにより同一時間帯の受講者数と施設の受け入れ可能数とで均衡が保たれ、限られた施設を有効に活用し、より一層の教育効果が期待される。

健康科学カテゴリーに配置されている科目について、履修者が科目内容の順次性、科目間の関連性を俯瞰できるようにカテゴリー内のカリキュラムマップを検討した。コア科目である「健康科学入門」をはじめ、準コア科目に「生命倫理」、「心理学入門」、「スポーツ I」を配置し、サブ科目として「脳と身体の科学」、「食と健康」、「健康と心理」、「スポーツの科学」、「運動と健康」、「スポーツ II」、学部へつなぐ科目として「住環境と健康」を配置した。今後は更に学部教育との関連、カリキュラムの偏りの有無等を点検し、体系的な教育内容となるよう改善を進める必要がある。

教育効果を上げるために実施している教育上の工夫について、挙げられた代表的なものを以下に示す。今年度は特にアクティブラーニングの実施状況について、健康科学カテゴリー内で情報を共有した。

- ・ミニットペーパー、リフレクションペーパーなどを用いて、学習内容の定着を図るとともに、学生からの意見、質問等を受け付け、次回の授業で共有している。
- ・授業内容によってはロールプレイングを行っている。
- ・視聴覚教材を活用している。
- ・授業始めに、授業で学ぶ内容のキーワードを板書する。
- ・単元終了ごとに小テストをおこなう。
- ・反転学習の効果を狙い、中間課題で今後学習する予定の内容について事前にレポートさせる。

2-2-5 社会連携教育推進室

社会連携教育推進室は、本学がCOC+事業の採択を目指すなかで、平成 27 年度に新たに設置した組織である。5 名のメンバーで構成され、そのうち 3 名が共通教育部兼務教員である。社会連携教育推進室の役割は、共通教育科目の社会連携教育カテゴリー科目により、学生に対し社会あるいは地域の諸課題について考える機会を設け、さらに実践論や演習科目に結びつけることにより、学生の活きた学びを支援することにある。

平成 27 年度入学生から必修科目として「地域ボランティア論」及び「少子高齢社会論」を新規に開講し、今年度はこれと併せて、従来より開講していた選択科目「企業の組織と活

動」及び「起業の条件」を開講した。いずれの科目についても、准教授以上の専任教員が主担当となっている。また、「地域ボランティア論」と「少子高齢社会論」は1年生全員に同時開講するため、より教育効果を挙げる目的でTA補助者を雇用している。

次年度からは、文部科学省「地(知)の拠点大学による地方創生推進事業(COC+)」の採択を受けたことから、この目的を具現化するために、さらに各社会連携科目間の連携を強め、「社会連携科目群」から「岡山創生学科目群」へと名称を変え、さらに「地域ボランティア論」を「おかやまボランティア論」に、「少子高齢社会論」を「おかやまを学ぶ」に名称を変えるなかで、内容についてもリニューアルしていく必要がある。そして、新たに演習科目「おかやまボランティア演習」を立ち上げることにより、社会や地域にある諸課題に対し、学生や教員が行政機関やNPO法人、地域住民等と協働できるよう支援していくことが求められる。なお、「岡山創生学科目群」のシラバス作成と推進については、大学教育開発センター・教育改革ワーキンググループと連携を取りながら進めている。

2-3 留学生・転学生

本学では、日本の生活に不慣れな留学生（韓国又松（ウソン））大学校からの転学生、短期留学生を含むが、いち早く日本の生活・文化に慣れ、学習・研究活動に励むことができるようにするため、本学学生の中から学業や生活の相談相手を選定し、留学生のサポートを行うチューター制度を設けるなど学業・生活面の両面において支援を行っている。平成27年度は、留学生に対して、各学科における学習支援のほか、授業料減免制度や奨学金募集等の情報提供及び活用の支援などを行った。

なお、平成27年度の留学生数は、学部生6人、大学院生4人の計10人で、3人の留学生に対しチューターを配置した。最近5年間における留学生数及びチューターを利用した留学生数は次のとおりである。

年 度	H23	H24	H25	H26	H27	合計
留学生数（学部生）	0	4	6	5	6	21
留学生数（大学院生）	7	6	6	5	4	28
合 計	7	10	12	10	10	49
（うちチューター利用）	(0)	(4)	(2)	(2)	(3)	(11)

2-4 大学コンソーシアム岡山

県内の16大学が参加する大学コンソーシアム岡山では、平成21年度に文部科学省「大学教育充実のための戦略的大学連携支援プログラム」事業の選定を受けた「岡山オルガノンの構築」（代表校：岡山理科大学）の3年間にわたる事業に対し、平成23年度に補助金交付が終了したことを受けて、その事業を平成24年度から継承してきた。平成27年度は、事業経費を縮小した上で、平成26年度に実施された各事業を継続して実施した。さらに平成27年度には将来構想委員会が新たに設置され、事業運営の方針に関する検討を行っていくことが決定された。

はじめに、平成27年度に実施された事業（単位互換、インターンシップ、吉備創生カレッジ、日ようび子ども大学、エコナイト、東日本大震災復興支援活動、SD研修会）に対する本学の参加状況を説明し、その後、平成28年度以降に対する対応を述べる。

〔本学の参加状況〕

(1) 単位互換

(他大学→本学)

年 度		H22	H23	H24	H25	H26	H27	合計
対 面	履修学生数	0	0	1	0	1	1	3
	履修科目数	0	0	1	0	1	2	4
	本学提供科目数	6	6	6	10	10	8	46
双 方 向 ラ イ ブ	履修学生数	0	3	2	2	3	1	11
	履修科目数	0	1	1	1	1	1	5
	本学提供科目数	1	1	1	1	1	1	6
VOD	履修学生数	0	7	3	4	0	7	21
	履修科目数	0	1	1	1	0	1	4
	本学提供科目数	1	1	1	1	1	1	6
合 計	履修学生数	0	10	6	6	4	9	35
	履修科目数	0	2	3	2	2	4	13
	本学提供科目数	8	8	8	12	12	10	58

(本学→他大学)

年 度		H22	H23	H24	H25	H26	H27	合計
対 面	履修学生数	5	1	3	3	2	3	17
	履修科目数	5	2	8	3	2	2	22
双 方 向 ラ イ ブ	履修学生数	0	0	1	0	1	0	2
	履修科目数	0	0	1	0	1	0	2
VOD	履修学生数	11	4	3	1	1	1	21
	履修科目数	11	3	1	1	1	2	19
合 計	履修学生数	16	5	6 (※)	4	4	4	39
	履修科目数	16	5	10	4	4	4	43

(※) 双方向ライブとVODを履修した同一学生の数を除く

(2) インターンシップ参加 (NPO 法人 WIL)

年 度	H22	H23	H24	H25	H26	H27	合計
参加学生数	25	25	18	51	38	16	173

(3) 吉備創生カレッジ

No.	年度	開講期	科 目 名	講 師
1	H22	前期	俳句を楽しむ	柴田奈美 (デザイン学部教授)
2			くらしと微生物	中島伸佳 (保健福祉学部准教授)
3		後期	懐かしの洋食器世界	久保田厚子 (デザイン学部教授)
4			赤毛のアンの姉妹たち	桂宥子 (情報工学部教授) 星野裕子 (保健福祉学部教授) 杉村寛子 (保健福祉学部准教授)
5	H23	前期	景観デザインを考える	熊澤貴之 (デザイン学部講師)
6		後期	英米文学カフェ	杉村寛子 (保健福祉学部准教授)
7	H24	前期	地産地消と食文化	岸本妙子 (保健福祉学部教授)
8		後期	再生エネルギー発電	徳永義孝 (情報工学部准教授)
9	H25	前期	近代期の禁酒運動	二宮一枝 (保健福祉学部教授)
10			日本のデザイン文化	吉原直彦 (デザイン学部教授)
11			高齢者の健康維持と運動	犬飼義秀 (情報工学部教授)
12		後期	人とロボットの眼の不思議	滝本裕則 (情報工学部助教)
13			いま, 子どもの育ちを考える	池田隆英 (保健福祉学部准教授)

14			続・日本のデザイン文化	吉原直彦（デザイン学部教授）
15	H26	前期	広がるワイヤレスの世界	大久保賢祐（情報工学部教授）
16			日本人の糖尿病	福島光夫（保健福祉学部教授）
17		後期	韓国の身近な文化を知ろう	朴貞淑（デザイン学部講師）
18			「嵐が丘」入門	杉村寛子（保健福祉学部教授）
19			情報とデザイン	尾崎洋（デザイン学部講師）
20			考えるコンピュータの考え方	但馬康宏（情報工学部准教授）
21	H27	前期	脳から解る認知症	澤田陽一（保健福祉学部助教）
22			人間のダイナミクス	迫明仁（情報工学部教授） 齋藤誠二（情報工学部准教授） 大山剛史（情報工学部助教）
23			メソアメリカデザイン	真世土マウ（デザイン学部准教授）
24		後期	生活習慣病予防のための食事	平松智子（保健福祉学部准教授）
25			インターネットの仕組み	國島丈生（情報工学部准教授）
26			映画の表現技法	山下万吉（デザイン学部講師）

（４）日ようび子ども大学

岡山県生涯学習センターと協力し、「日ようび子ども大学in京山祭」を平成23年より開催している。県内の16大学、4短期大学、1高専の大学生が集まって子どもが体験できるブースを設置するなど、親子で楽しむ催しを開催している。平成27年度の実施状況及び本学の展示内容は次の通りである。

- ・開催日時：平成27年6月7日（日） 10:00～15:00
- ・会場：岡山県生涯学習センター
- ・参加者：2,428名（対象：一般、学生、大学教職員）
〔内訳：大人964名、子ども1,199名、学生213名、大学教職員52名〕
- ・展示内容：「まっくらわーどを探検しよう」

非日常的な空間で、興味を持たせながら視覚の大切さや視覚以外の感覚の持つ能力に気づかせることを目的としている。光を遮断した空間を作り、視覚がほとんど使えない状況で手足の触覚や聴覚を活用した日常生活動作の疑似体験を行った。参加者は受付で提示された数種類の「コップ」「キャラクター人形」「多角形や数字がレリーフ表示されたカード」「布製積み木」「果物野菜おもちゃ」の写真から好きなもの一つを選び、暗い部屋から該当するものを持ち帰るという課題に、ひとりもしくは家族と一緒に取り組んだ。参加者は入り口から、ブラックライトで浮かび上がる壁の蛍光飾りを横に見ながら、点字ブロックをたどり目的の場所へ移動し、暗闇の中、手探りで目当てのものを見つけて外にでる。実物と写真を照合した後、受付で写真とターゲットを返却し、参加賞として用意した触図カードを受け取った。参加者は一連の課題を通して、視覚から得られた情報と視覚を代行する手足の触覚から得られる質的に異なる情報を相互に確認するという普段あまり行わない作業に取り組み、視覚が十分に使えない状況下における対処法を体験した。

- ・担当者：中村孝文教授（保健福祉学部）ほか教員2名及び学生12名

年度	開催日	会場	参加大学数	参加者数
H23	6月26日	岡山商科大学	8大学	508名
H24	6月24日	岡山県生涯学習センター	11大学	1,188名
H25	6月2日	岡山県生涯学習センター	13大学・短大	1,500名
H26	6月1日	岡山県生涯学習センター	14大学・短大	1,854名
H27	6月7日	岡山県生涯学習センター	16大学・短大	2,428名

(5) エコナイト

県内の 16 大学, 4 短期大学, 1 高専が連携し, 地域貢献活動の一環として, 環境問題への啓発を目的として平成 23 年度より実施している. 具体的には, 岡山県, 岡山市等行政機関や企業と連携して, 学生間の交流活動推進と地域との連携強化を図りつつ, 学内消灯や自動車通勤の自粛, エコキャンドルの点灯, 一斉ライトダウンの呼びかけ, その他, 参加大学ごとに独自のエコに関する環境教育の実践的活動を実施している. 平成 27 年度は, 統一活動として「岡山の大学からエコの輪を広げよう!」を合言葉に, エコロジーを考える活動を, 加盟校の 9 大学, 1 短期大学が岡山奉還町商店街で実施し, 本学からも学生が参加した. また, 本学独自の平成 27 年度の実施状況は次の通りである.

- ・テーマ: 七夕フェスティバル 2015
- ・開催日: 平成 27 年 7 月 7 日 (火)
- ・会場: 学生会館周辺
- ・参加者: 約 250 名
- ・開催内容: 希望する学生による浴衣や甚平での授業出席. 昼の部では浴衣, 甚平で参加した学生に無料にかき氷を提供し, くじ付きうちわの配布を行った. 夜の部では学友会が食べ物や飲み物の模擬店を出し, 部・サークルがライブを行った. エコを意識する企画としてエコアンケートに答えてもらい, お礼としてエコキャンドルを進呈した.
- ・成果と課題: 今年初めて行ったエコアンケートだが, 多くの人が回答してくれてエコについて少しでも考えてもらえたと思う. 今後もエコイベントとしての面での多彩な企画を考えていきたい.

年度	開催日	会場	参加大学数	参加者数
H23	7 月 7 日	各大学及び NHK ひかりの広場	16 大学	約 1,500 名
H24	7 月 7 日	各大学及び岡山駅東口広場	16 大学	約 3,000 名
H25	7 月 7 日	各大学及び岡山駅東口広場	16 大学	約 4,600 名
H26	7 月 6 日	各大学及び岡山駅東口広場	16 大学/4 短大/1 高専	約 3,300 名
H27	7 月 5 日 他	各大学及び岡山市奉還町商店街	16 大学/3 短大	約 2,900 名

(6) 東日本大震災復興支援活動

岡山経済同友会が毎年企画し, 平成 27 年で 5 回目となる.

- ・実施日: 平成 27 年 8 月 21 日 (金) ~ 25 日 (火)
- ・場所: 岩手県上閉伊郡大槌町
- ・参加者: 学生 39 名, 教職員 4 名 (本学参加者: 学生 2 名)

なお, 本学からは学生 3 名の応募があったが, 全体の人数調整のため 2 名の参加となった.

(7) SD 研修会

平成 28 年 4 月の障害者差別解消法施行を念頭に, 障がい学生の就労及び就労に向けた修学上の支援について理解を深めることを目的とする研修会に本学職員が参加した. 平成 27 年度の実施状況は次の通りである.

- ・開催日時: 平成 27 年 9 月 28 日 (月) 13:00~16:30
- ・会場: 岡山大学津島キャンパス
- ・研修内容: 基調講演 1 「企業が障がい学生に求める力」
講師 細川孝志氏

(青山商事株式会社井原商品センター 副センター長)
 基調講演 2 「発達障がい学生のサバイバルスキルトレーニング」

講師 村山光子氏

(学校法人明星学苑 法人本部企画部企画課 課長)

ワークショップ

テーマ：就労支援, 就労準備支援, それらに伴う機関連携等について

年度	開催日	内 容	会 場
H22	8月24日	大学職員のための実践メンタルヘルズ講座	山陽新聞社 (本社ビル)
H23	8月29日	クレイマー対策	岡山大学 (津島キャンパス)
H24	8月31日	大学における運動部活動	山陽新聞社 (本社ビル)
H25	8月26日	障がい学生支援研修会	岡山大学 (津島キャンパス)
H26	8月28日	障がい学生支援研修会	岡山大学 (津島キャンパス)
H27	9月28日	障がい学生支援研修会	岡山大学 (津島キャンパス)

[平成 28 年度以降]

アンケート調査結果をもとに, 平成 27 年度をもって VOD 型遠隔教育を全面的に終了することになった. その他の事業運営に関しては, 新たに設定された将来構想委員会が方針を決定していくこととなる. 本学としては, 大学コンソーシアム岡山の事業を平成 27 年度に採択された「地(知)の拠点大学による地方創生推進事業 (COC+)」のために活用することを視野に入れ, これまで以上の貢献をすべきと考える.

2-5 まとめと課題

平成 27 年度から開始した本学の新しい共通教育科目の特徴は以下の二つに集約される.

- (1) 文部科学省あるいは経済産業省が提唱する「学士力」あるいは「社会人基礎力」を見据えた上で, 建学の理念及び大学の教育方針に基づくカテゴリーの再編
- (2) 各カテゴリーにおいて, 本学卒業生として全学生が身に付けておくべき教養を育成し, あるいは技能を習得させるコア科目 (導入科目) の設定

しかしながら, 各学科が卒業要件としている共通教育科目単位数は, 表に示す通り 25~38 単位である. 共通教育科目の各カテゴリーにおけるコア科目の必修化により, このうち選択科目に割り当てられたのは 3~18 単位のみに残っている. このように限定された中で, 本学の学生としての「学士力」あるいは「社会人基礎力」を習得させるために, 共通教育科目としての履修モデルを提示することは, まだできていない. 各カテゴリーにおける授業科目の集中と選択をいかにして行うかを含めて, 平成 29 年度からのクォーター制導入を念頭に, 教養教育推進室, 情報教育推進室, 健康・スポーツ教育推進室を中心に, 共通教育部会と連携を取りながら早急に検討すべき課題である.

表. 平成 28 年度入学生の卒業要件単位数 (共通教育科目)

学 部	学 科 (専攻)	卒業要件 (共通教育科目)		
		必修科目	選択科目	合計
保健福祉学部	看護学科	20	5	25
	栄養学科	14	14	28
	保健福祉学科 (社会福祉学専攻) (子ども学専攻)	16 25	12 3	28 28
情報工学部	情報通信工学科	20	18	38
	情報システム工学科	22	16	38
	人間情報工学科	22	16	38
デザイン学部	デザイン工学科	18	16	34
	造形デザイン学科	18	16	34

英語教育においては、平成 28 年度から新カリキュラム English Language Program(ELP)を開始する。現在のカリキュラムから大幅に変更されるため、語学教育推進室において、非常勤講師を含めた教育体制のコーディネート、授業進度や学生の理解などの情報共有が必要である。なお、ELP の教育効果を経年的に測るため、平成 28 年度から入学時と 2 年生秋の 2 回、TOEIC の全員受験を課すことにしている。

加えて、大学コンソーシアム岡山の事業を平成 27 年度に採択された「地(知)の拠点大学による地方創生推進事業 (COC+)」のために活用することを視野に入れ、社会連携教育推進室を中心に、これまで以上の貢献をすることも課題である。

第 3 章 専門教育における教育活動と成果

3-1 概要

本学の学士課程教育では、各学部・学科の何れも、実学を標榜する本学の教育理念及び学部・学科の教育目的に沿って策定されたカリキュラム・ポリシー（付録 2 参照）に基づいた学部教育が展開されている。保健福祉学部では、各学科で設定する国家資格取得のためのカリキュラムと併せてグローバル化や地域連携教育を加味した教育プログラムや授業方法を工夫している。情報工学部では、多数の学生が博士前期課程進学をめざすこともあり、情報工学の基礎を修得させるほか、学士として社会進出する学生における実学教育も工夫している。なお、平成 27 年度入学生よりスポーツシステム工学科が人間情報工学科に名称変更され、授業内容の工夫改善に取り組んでいる。デザイン学部では、文部科学省 GP 事業等を活かしながら、産学連携教育等により企画提案力とマネジメント力を併せ持つ学生を育成するための教育を工夫している。

以上の実学教育により、各専門分野の知識とスキルを授けるべく工夫改善を継続しているが、もう 1 つの共通する特色は、少人数教育によるきめ細かな学習支援にある。

3-2 保健福祉学部

3-2-1 看護学科

3-2-1-1 カリキュラム改正とその評価

看護学科では改正カリキュラムの評価を行うため、看護学科全教員による学生の看護実践能力向上に向けたシステムづくりの準備として、経年的に卒業時看護技術到達度調査を行い、その結果を教員にフィードバックして教育改善に努めている。またインターネットを活用した学習状況に関するアンケート調査に基づき、e-ラーニング導入の検討を行った。フレッシュマンセミナーについてはキャリアパスを提示し、学生の関心に基づくグループワークを行い、最終レポートはルーブリックによって評価した。さらに、倫理的看護実践能力を培うために、改正カリキュラムにおいて新規科目として増設した看護倫理学及び看護アセスメント学が開講され、授業・演習が実施されたため教育評価を行い、教員間で評価を共有した。

3-2-1-2 グローバル人材育成

グローバル人材育成に向けて、1 年次生の「国際保健看護論」でインドネシア・ハサヌディン大学との遠隔による双方向の講義を 2 回（10 月及び 12 月）行った。さらに、ハサヌディ

ン大学看護学科長及びネパール AMDA 病院看護部長が来学（平成 28 年 1 月）し、直接英語による講義を受けた。香港理工大学の老年看護学担当教員が来学（平成 28 年 1 月）し、3 年次生有志が直接英語による講義を受けた。また、国外で実施する大学院の演習科目を看護学科 2 年生の有志が参加し、ネパールでの地域看護を体験した。香港理工大学との学術交流協定の締結に向けて、学生間交流の前段階として相互の教員交流を 4 月から開始し、平成 28 年 2 月に学術交流協定を学部間で締結した。交換留学生制度を活用した又松（ウソン）大学からの学部留学生の受け入れは 3 度目になるが、前期に 2 名を受け入れ、本学科の学生との国際的・文化的交流を深めた。

3-2-1-3 地域連携教育

グローバル・ラーニングシステムとしては、備中県民局「わが町で保健医療福祉の『人づくり、地域づくり応援隊』事業（NPO かさおか島づくり海社受託）」の協働により、3、4 年次生と大学院学生が北木島で宿泊研修を行い、離島の保健医療・看護の現状と課題について住民とともに地域の健康課題を明らかにし、課題解決に向けた提案を行った。また、岡山県立大学生による消防応援隊が結成され、「災害看護学」の履修を活かして、総社市防災訓練で住民への教育を実施した。また、4 年生による「統合実習」において、中学生を対象に性感染症の出前授業を実施した。

3-2-1-4 国家試験対策

国家試験対策として、学生の自主的な運営による国家試験模試を毎年行っているが、その運営の支援を行うとともに、学生からの要望の多い病態学に関する講義を行った。模試結果は教員も共有し個別指導等に活用した。

3-2-2 栄養学科

3-2-2-1 カリキュラム改正とその評価

管理栄養士教育のさらなる充実と国家試験の合格率向上を目指し、平成 27 年度入学生から管理栄養士教育を統合する 4 年次開講科目として「総合演習Ⅲ」の必修化を行った。本年度はこの総合演習Ⅲにおいて、学生の実践力育成と職業意識の向上のために、岡山県栄養士会会長による特別講義を開催した。

3-2-2-2 グローバル教育

保健福祉学部では、平成 26 年度より外国語の習得や専門分野に関連した施設見学、研修体験を通じて異文化への理解や多文化共存の重要性について学ぶとともに、修了後の自国での専門職教育における学びのモチベーションの向上につなげることを目的として、南オーストラリア州アデレードで専門的かつ実践的な保健福祉スタディーツアーを実施している。参加学生は、平成 26 年度 10 名（うち栄養学科 8 名）、平成 27 年度 8 名（うち栄養学科 2 名）であった。研修プログラムでは、TAFE SA での語学研修と専門研修、及び関連施設である高齢者福祉施設での研修、専門領域に関連のある市内マーケット等の視察や教育機関（小学校・高等学校）での授業実践を含む交流活動を実施した。また、アデレード滞在中ホームステイを体験することにより、語学修得と異文化交流・異文化理解の機会とした。なお、研修学生は渡航前の事前研修において、本学の国際交流センターにおける英語村やスカイプ英語を引率教員とともに活用し、外国語コミュニケーション能力の向上に努めた。

本プログラムでは、共通教育と専門教育の連携によるグローバル社会に対応できる食文化及び栄養学教育の推進の一環として、食育に関する交流活動における外国語での授業実践を導入した。これにより引率教員や現地担当者との連絡並びに英語村を活用した情報収集や事前準備を通して自主的な学びが行えた。また、研修終了後は、次年度参加学生等とともに、岡山市内の小学校において外国語での食育活動に挑戦し、研修の成果の活用と地域貢

献活動を行った。

3-2-2-3 地域連携教育

NPO 法人、農業後継者等他団体との協働事業において食育講座を企画運営することを通じて、栄養教諭の地域における食育コーディネーターとしての資質向上を目指し、栄養教諭課程履修者（4年次生と1年次生）を中心とした総社市における食農体験教室での食育講座を例年実施している。

平成26年度に栄養学科では、備前市で食の人財プロジェクト事業を実施し、地元の人財を紹介する冊子を作成した。その活動を継続発展させ、平成27年度は備前市食育推進会議に参加し、より深く地域の食育に関する課題を学ぶとともに、取材で知り合った人財と協働して小学生対象の魚料理教室や糖尿病予防の野菜料理教室を企画運営した。

3-2-2-4 キャリア支援

福祉施設や病院の管理栄養士としての就職希望者は4月時点では9名であったが12月末現在で15名となった。病院実習を経験し、実際の現場を体験したことにより、病院管理栄養士業務の理解と専門職に就きたいとの意識が高まり、結果として医療業への就職につながったと考えられる。

3-2-2-5 学生支援

平成27年度は全1～3年次生を対象として、4月及び10月に年2回以上のアドバイザー教員との面談を行い、さらに1～2年次生は6月の研修旅行時にもアドバイザーミーティングを行う等、オフィスアワー以外でも教員と学生とのコミュニケーションの機会を持った。また、授業習熟度の低い学生に対しては、学科長・教務担当教員・アドバイザー教員の3人体制で丁寧な個人指導を行った。その成果として、平成27年度は退学者、休学者ともにいなかったことが挙げられる。

栄養教諭養成課程履修者については履修カルテを作成し、各人の履修状況の把握とキャリア支援に役立てている。

3-2-2-6 国家試験対策

管理栄養士国家試験対策として、4年次生全員参加の校内・業者模試を4月初めから開始し、計5回実施した。また、その都度、受験生の自主学習の成果を分かりやすくするために模試成績の推移を本人に示し、また成績のクラス順位を貼り出す等、学生の学習意欲を高揚させ、早期から試験対策に取り組ませることができた。本年度は、11月、1月、及び2月の校内・業者模試の成績が一定基準に達しない学生を対象に、勉強会方式による学習支援も行った。

3-2-3 保健福祉学科

3-2-3-1 カリキュラム改正とその成果

保健福祉学科では、平成25年度より社会福祉学専攻（定員40名）と子ども学専攻（定員20名）の2専攻体制となり、3年目として改正されたカリキュラムを予定通り実施した。

社会福祉学専攻科目については、西洋と日本との2科目に分けていた「社会福祉発達史」を1科目にまとめた結果、両者の関係性の理解と学生の集中力の点で向上がみられた。また、「ソーシャルワーク実習指導Ⅲ」を新設することにより、学生が余裕をもって学習と実習準備に取り組めるようになった。介護福祉士関連の科目では、「住環境科学演習」等の科目新設や「身体障害領域実習」の充実により、生活をより多面的に捉えることができ、身体障がい者支援についての理解が深まった。また、在宅複合実習により、学生が地域の魅力に気づくことができようになってきた。課題としては、社会福祉士と介護福祉士とのダブルライセンス

ンスを目指す学生は、選択科目がほとんど履修できないという点が挙げられた。そのため、今後、入学段階で、将来の進路別の履修モデルを提示することにした。

子ども学専攻においては、新カリキュラムの実施状況は順調である。課題としては、教職課程の完成年次に向けた履修カルテの整備が挙げられた。また今後、科目の改廃や時間割の見直しについての検討を始めることとした。実習関連では、9月に教育実習を15園（履修学生数21名）で実施し、その成果と課題を10月の専攻会議で点検した。成果としては、幼稚園教諭の職務内容の理解が進み、幼児への具体的な対応技術等の修得ができた。課題としては、実習配当園の調整等、各教育委員会とのより綿密な打合せが挙げられた。また、学生も参加する学内の親子交流広場事業であるチュッピーひろばを活用した科目を通して地域貢献及び保育実践力の醸成を継続的に目指すこととした。なお、特例科目として「カリキュラム論（幼免特例）」「保育内容総論・保育内容Ⅰ（幼免特例）」「幼児理解の理論と方法（幼免特例）」の3科目、及び通常科目の「幼児教育方法論」を集中講義で開講し、他の通常科目とあわせ38名、のべ163科目（214単位分）の受講があった。

3-2-3-2 グローバル教育

国際学術交流協定校である韓国又松（ウソン）大学校から社会福祉学専攻へ1名の転学希望者があったため、書類審査とスカイプ面接を実施し、平成28年度からの受け入れを決定した。

グローバル教育を推進するため、27年10月に韓国保健産業振興院の鄭恩英（ジョン・ウニョン）氏による講演会を開催した。続いて、学科教員による国際研究報告会を実施した。対象は、保健福祉学科2年生、大学院生、保健福祉学科教員である。参加学生数は79名であった。講演題目は、「韓国における地域保健医療福祉の現状と課題について」である。内容は、①韓国の健康保険制度と長期療養保険制度の概要（健康保険制度、長期療養保険制度、医療給付）、②韓国の地域保健医療福祉提供体制（地方医療院：公立病院、保健所、保健支所、社会福祉館、敬老堂、社会福祉士の役割と機能）、③韓国の地域保健医療福祉の政策の方向性と課題、であった。まとめは本学科の井上助教が行った。また、本学科からは、中村孝文教授及び坂野准教授が、それぞれの国際研究について発表した。

3-2-3-3 アクティブラーニング

3学科横断型授業科目である「チームガバナビリティ演習」を実施した。医療・福祉の多専門職の連携について学ぶ同授業では、ほとんどのプログラムは小グループ（学科横断の学生5～6名、ファシリテーターとしての教員1～2名）での活動で構成される。グループごとに、糖尿病性腎症・脳血管疾患などの患者の臨床シナリオの検討、倫理題材の検討、現場実践者（認知症ケアチーム）との交流、透析患者との交流、病院の見学などを通じて、多職種連携の有効性とその実現のための知識・技術・態度について体験的・能動的に学習した。履修学生の満足度も極めて高かった（授業評価4.7点）。

また、新規重点事業予算で、e-ラーニングによる学習システムを構築し、「介護福祉実習Ⅲ-2」で実施した。そして、介護福祉コースの在籍者全員がe-ラーニングシステムに登録し、自己学習に活用した。

3-2-3-4 国家試験対策

去年と同様に、4年生の学生主体の対策委員会組織を編成し、学生自らが問題を作成した。そして、前期に週1回、問題を解く会を教員の支援のもと開催した。また、国家試験の過去問を解く会も学生が自主的に開催し、その際、国家試験に合格した院生が、勉強方法等のアドバイスをを行った。国家試験対策として、模擬試験を8月（受験者数49名）、10月（受験者数55名）、12月（受験者数88名）に計3回行った。また、介護福祉コースでは、12月に学内模擬試験を1回開催した（受験者数35名）。

3-3 情報工学部

3-3-1 情報通信工学科

3-3-1-1 導入教育

情報通信工学科の導入教育は、推薦入試合格者に対して、12月と2月に情報システム工学科及び人間情報工学科と合同で開催する懇談会から始まる。一般入試合格者を含む新入生に対しては、4月に1泊2日で実施する学外オリエンテーション及び1年次前期に開講する「フレッシュマンセミナー」を利用して導入教育を行っている。

推薦入試合格者懇談会では、学部で統一された数学の試験を2回実施し、入学までの学力維持を促進した。また、学科独自に合格者と個人面談を行い、数学及び物理で苦手な分野などを聴取することで入学後のリメディアル教育へのデータとした。

学外オリエンテーションでは、新入生7～8名のアドバイザーグループ対抗でパスタブリッジを作製する競技会をイベントとして開催し、新入生同士の親睦を深めるとともに、パスタブリッジ作製における物理原理の解説を行った。また、学外より講師を招き、グループワークを通じて仲間とのふれあい方や学生生活の過ごし方を学ぶ講演会を催した。

「フレッシュマンセミナー」では、コミュニケーション能力の開発、プレゼンテーション指導などを目的として、平成27年度は、ビブリオバトル、地元の観光大使をテーマとするコンテストを、アドバイザーグループ対抗でクリッカーを利用して実施した。成績評価ではルーブリックを活用し、アドバイザー教員間での公平性を担保するとともに、学生への可視化に努めた。また、学生とアドバイザー教員が毎週顔を合わせることで、入学直後の不安感、孤独感を和らげることにした。また、全学で実施されている授業評価アンケートとは別に、独自にアンケートを実施し、同級生との親睦に役立った90%以上、積極的な取り組み80%以上の結果を得た。次年度以降も継続して実施する予定である。

さらに、平成25年度より学科独自で実施してきた新入生アンケートを学部展開した。入試での学科選択理由では、情報システム工学科、人間情報工学科と比べ、偏差値あるいは倍率と回答した割合が一般入試で高く、今後の広報活動への課題が浮き彫りとなった。

3-3-1-2 カリキュラム及び授業方法の改善

学科のカリキュラムあるいは学科全教員が担当する科目の実施・評価方法などは、学科教務委員会を組織し、定期的に検討している。また、半期ごとに実験演習検討委員会を開催し、実験演習に関する問題点、反省点、主な改善点とその効果を実験演習担当者で議論している。特に、講義科目が大半を占める学部教育科目の中で、1年次から4年次まで演習科目、実験科目を必修として配置している。実験演習検討委員会では、実験・演習科目のPDCAサイクルを担当教員が科目横断的に議論している。

今年度は、ハードウェア系実験のレポート作成手引書を作成、配布し、学生の利便性を高めた。レポート作成手引書には、チェックリストも含まれており、卒業研究論文に向けた技術文書作成技術のポイントを修得できるよう配慮した。学生へのアンケートを実施した結果、概ね良好な結果であったが、ハードウェア実験に対する懐疑的な意見も一部にはあり、学科の教育プログラムとしては、ソフトウェアとハードウェアの両方が重要であることを伝える必要がある。

また、実験演習検討委員会では、平成29年度からのクォーター制導入に向けた対策を検討し、2年次第2クォーター及び3年次第4クォーターに必修科目を配置しないよう、演習、実験内容の見直し案を策定した。この変更に関しては、今後、追跡調査を断続的に行い、学科教育目標の達成度への影響を見守らなければならない。

3-3-1-3 学生支援

入学時のアドバイザーグループは、4年次において「卒業研究」のための研究室配属が決

定されるまで継続され、学生は「フレッシュマンセミナー」活動でのアドバイザー教員に対して、学生生活上の相談をすることができる。また、オフィスアワーあるいは授業の空き時間を利用して、全ての学科教員に自由に相談できるようにしている。

各学生の成績は、学科教務専門委員が管理している。図 1 は学生が修得した単位を半期毎に積算した修得単位数と在籍学生数に対する割合の関係を示す。大部分の学生は学期毎に順調に単位を修得している。成績不振者に対しては、教務専門委員あるいはアドバイザー教員との面談等を通して、注意・指導を行っている。しかしながら、毎年、一定数の成績不振者があり、今後、どのように改善していくかを検討しなければならない。なお、「卒業研究」を行う研究室配属は、卒業研究有資格者に対し、希望をもとに成績を考慮して行う。なお、平成 25 年入学生については、在籍者に対する卒業研究有資格者の割合は 93%であった。

また、10 年程前より、特異な行動が見られた学生の情報を、一定のフォーマットで学生相談室に報告している。学科長、教務専門委員、教育開発推進委員（学生支援）は、学生相談室のアドバイスの下、学生の行動に注意できる体制をとっている。

3-3-2 情報システム工学科

3-3-2-1 導入教育

情報システム工学科の導入教育は、推薦入試合格者に対して、12 月と 2 月に情報通信工学科及び人間情報工学科と合同で開催する懇談会から始まる。一般入試合格者を含む新入生に対しては、4 月に 1 泊 2 日で実施する学外オリエンテーション及び 1 年次前期に開講する「フレッシュマンセミナー」を利用して導入教育を行っている。

推薦入試合格者懇談会では、自主学習を促すため数学、物理、英語の課題を与えると共に、学部で統一された数学の試験を 2 回実施し、入学までの学力維持を促進した。

学外オリエンテーションでは、学科全体ミーティングで学生生活の過ごし方を学ぶと共に、アドバイザーグループ毎の班別ミーティングにおいてアドバイザー教員との顔合わせを通じて相談しやすい環境を整え、さらに学生同士の親睦を深めた。

「フレッシュマンセミナー」では、高校での数学及び物理についてリメディアル教育を実施した。各回の授業で学生に課題を与え、2～3 名の教員（学科全教員が分担）とティーチングアシスタント 3 名が採点と個別指導にあたった。リメディアル教育前の 4 月と教育後の 7 月にほぼ同難度のテストを行った結果、受講者 50 人中 45 人の得点が向上しており、リメディアル教育の効果が確認された。

3-3-2-2 カリキュラム及び授業方法の改善

学科のカリキュラムは教育プログラム検討委員会を組織し、実験・演習科目は実験・演習検討委員会を組織し、点検と改善を行っている。

講義科目と演習科目の連携強化の新たな試みとして、本学教育力向上支援事業の補助により、「ものづくり関連授業の総合的理解度の向上に向けた教育方法の検討」を実施した。3 つの講義科目と 2 つの演習科目で共通の機械部品を教材に取り上げることで、強度計算、加工法、CAD による設計、CAE 解析の「ものづくり」に関する一連の過程を総合的に理解させることができた。

本年度も従来通り、大部分の実験演習科目において、授業の円滑な実施と学生の理解向上のため大学院生を TA として雇った。TA を雇った授業科目は、フレッシュマンセミナー、機械物理学実験 A・B、ソフトウェア演習 I・II、CAD 演習、機械デザイン演習、回路デザイン演習、システム創造プロジェクト I・II、技術英語演習の合計 11 科目である。TA の人選に際しては、授業内容に関連のある分野の研究に携わっていることを重視した。

平成 29 年度からのクォーター制導入に向けた対策を検討し、2 年次第 2 クォーター及び 3 年次第 4 クォーターに必修科目を配置しないよう、カリキュラムの一部変更を行った。クォーター制やカリキュラム変更が学習効果に及ぼす影響については、今後、継続的な調査が必

要である。

3-3-2-3 学生支援

入学時のアドバイザーグループは、4年次において「卒業研究」のための研究室配属が決定されるまで継続され、学生はアドバイザー教員に対して、学生生活上の相談や履修指導を受けることができる。また、オフィスアワーや授業の空き時間を利用して、全ての学科教員に自由に相談できるようにしている。

各学生の成績は、学科教務専門委員が管理している。図2は学生が修得した単位を半期毎に積算した修得単位数と在籍学生数に対する割合の関係を示す。大部分の学生は学期毎に順調に単位を修得している。成績不振者に対しては、各学期のはじめに教務専門委員あるいはアドバイザー教員が面談し、成績不振の理由を聞き取ると共に履修指導を行っている。そして面談でメンタルな問題が懸念された学生には、学生相談室への相談を勧めている。なお、平成25年度入学生については、在籍者に対する卒業研究有資格者の割合は94%と比較的高い値であったが、残りの6%はいわゆる留年となった。毎年、一定数の留年者があり、成績不振者への効果的な対応法についてさらなる検討が必要である。

3-3-3 スポーツシステム工学科・人間情報工学科

3-3-3-1 導入教育

スポーツシステム工学科・人間情報工学科では、推薦入試合格者を対象とした懇談会（12月と2月に情報システム工学科及び人間情報工学科と合同で開催）、全新入生を対象とした学外オリエンテーション（4月に1泊2日で実施）及び1年次前期に開講する「フレッシュマンセミナー」を導入教育として位置付けている。

第1回の推薦入試合格者懇談会では、学部で統一された数学の試験を実施し、同懇談会終了時に採点結果を学生に周知することで、第2回までの学習方針を示すとともに、数学と物理に関する課題を与え、入学までの学力維持を促進した。第2回の同懇談会では、6名の教員が参加し、教員あたり2名の生徒を担当し、全ての課題ができるまで指導し、最後までやり遂げることで達成感を感じることの重要性を伝えることができたと思われる。

学外オリエンテーションでは、新入生同士及び教員との親睦を深めるために、自己紹介に時間を費やし、さらに、陶器づくりの体験を通して、ものづくりへの興味を持たせるイベントを実施した。しかし、工学的な要素がなく、専門教育への繋がりが薄かった、との反省のもと、平成28年度に向け、本学科の初年度導入教育検討WGにおいて、実施形態の検討を行った。その結果、6名程度のグループに分けた上で、ストローブリッジの制作を実施し、耐荷重及びデザインの両面でコンテストを行うこととなった。さらに、本イベントを実施することにより、ものづくりに対する意識がどのように変わったか、アンケート調査も実施することとなった。

「フレッシュマンセミナー」は2部構成とし、前半では、力学に関するリメディアルを実施し、後半では、人間情報工学に関する課題を課した。力学に関するリメディアルでは、講義の後に70%を合格とした達成度評価を実施した。70%に達しなかった学生については、正規の時間以外に追加講義及び再評価を繰り返し実施した。その結果、全員が合格のレベルに到達した。また、この際、合格点に達していても自身の達成度に満足していない学生の自主参加が10名程度あったことは、特筆すべきことと言える。人間情報工学に関する課題については、学科教員から課題の例を挙げてもらい、工学的な課題とはどのようなものか、を学ぶところから始め、図書館での文献検索及びWEBを利用した情報収集の仕方も学んだ。そして、学生毎に独自の課題を設定し、その解決策を考え、レポートとして提出させた。レポートの評価については、2名の教員でチェックを実施し、個別に、評価できる点、改善を要する点を指摘し、各学生個々のレベルに合わせた指導を行った。しかし、これらの実施方法の評価を行って

らず、効果を定量的に評価するために、平成 28 年度には実施する予定である。

3-3-3-2 カリキュラム及び授業方法の改善

学科のカリキュラムを検討するために教育プログラム検討委員会を設けるとともに、実験演習科目に特化した検討を行う実験演習検討 WG を設けている。

教育プログラム検討委員会では、本学科の授業科目を分野別に分類し、その最初に位置する授業科目を重点科目に設定し、科目によっては補助教員を配置することで、教育効果の向上を図った。この効果については、平成 26 年度以前の入学生との比較を行うなど、継続的に評価する必要がある。

実験演習検討 WG においては、半期終了後、実験演習科目に関する問題点を洗い出し、改善策を検討し、継続的な改善に努めている。本年度は、実験演習科目で設定しているテーマと講義科目との関連性に関して、十分議論されていないという意見を受けて、各テーマを整理し、関連性の低いテーマについては、テーマの変更を検討し、平成 28 年度から実施することとした。この結果は、上位に位置付けている教育プログラム検討委員会でのチェック・学科会議での承認を経て実施するという PDCA サイクルを形成している。

工学系学科の集大成の授業科目として位置付けられる卒業研究について、本年度は、専門分野の異なる 2~3 の研究室をグループとし、月に 1~4 回の合同ゼミを実施した。これにより、指導教員とは異なる視点からの指導を受けることで、より学際的な卒業研究の実施を推進できたものと思われる。さらに、卒業研究の計画的な遂行を促進するために、2 月の発表会とは別に、9 月に中間発表会を実施した。教員からの聴取した意見によれば、例年と比較して、テーマの決定の早期化、計画的な実施の促進、中だるみになりがちな夏季休暇の有効利用等の改善効果が見られた。

また、平成 29 年度からのクォーター制の導入にあたり、1 年次開講の計算機工学入門を前々期に週 2 回試行的に実施することで、問題点や効果の洗い出しを行うこととした。また、実験演習科目の対応について実験演習検討 WG で検討し、週 2 回の実施に対応できることを確認した。

3-3-3-3 学生支援

本学科には、学生相談の担当教員が在籍しており、大学生生活や私生活での相談について、積極的に利用することを勧めているとともに、該当教員以外の教員にも気軽に相談できる体制をとるように教員にも周知している。

3-3-3-2 に記した重点科目について、毎月の定例学科会議で出席状況を報告することとしており、出席状況が不良の学生の情報を共有し、担当授業科目で見守る体制を整えている。また、欠席が目立つ学生については、教務専門委員が面談し、注意・指導を行っている。

学生の成績は、学科長と教務専門委員が連携して管理を行っている。図 3 は学生が修得した単位を半期毎に積算した修得単位数と在籍学生数に対する割合の関係を示している。大部分の学生は学期毎に順調に単位を修得している。成績不振者に対しては、指導を行っている。また、所属教員の担当科目の学習状況についても、組織的に管理・支援を行っている。

卒業研究における研究室配属は、卒業研究有資格者を対象に研究室紹介や研究室訪問の機会を設けて研究テーマの紹介を行い、本人の適性や興味・関心などを勘案して配属を行っている。なお平成 25 年入学生については、在籍者に対する卒業研究有資格者の割合は 83%であった。

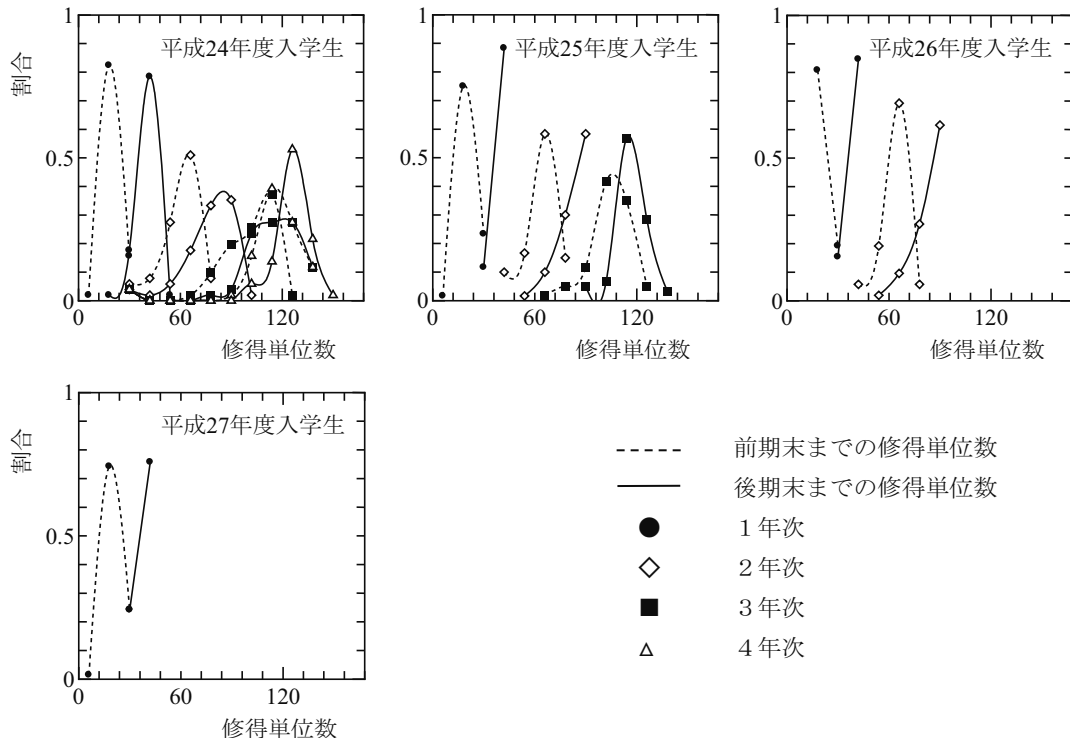


図1 単位履修状況 情報通信工学科

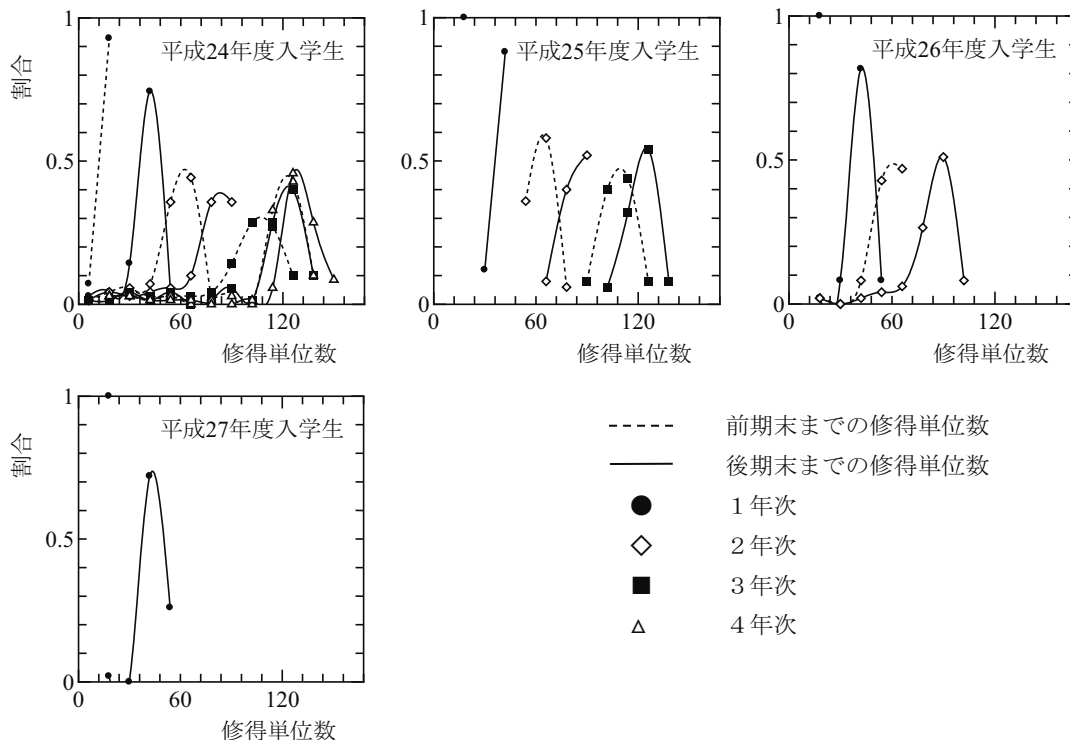


図2 単位修得状況 情報システム工学科

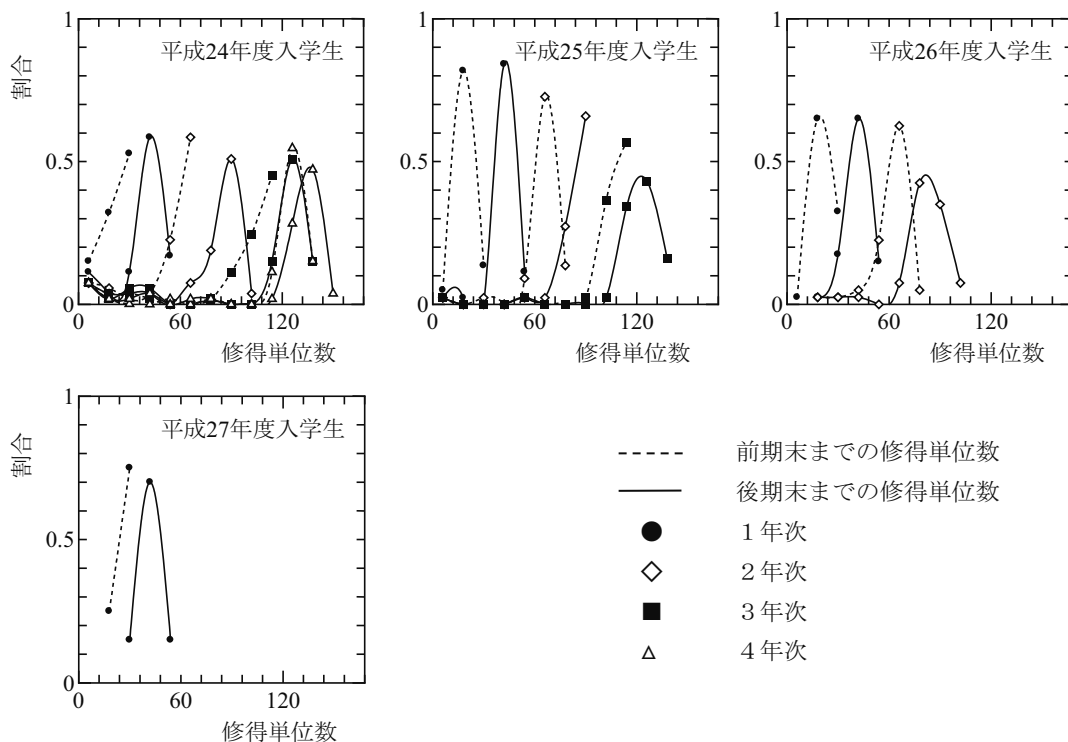


図3 単位履修状況 スポーツシステム工学科・人間情報工学科

3-4 デザイン学部

3-4-1 デザイン工学科

3-4-1-1 カリキュラム

デザイン工学科では、自ら発見した課題をデザインによって解決する能力の涵養をディプロマ・ポリシーに掲げ、その実現を、共通教育との連携により学科カリキュラムにおいて図ろうとしている。平成25年度より、コース制を領域制に改めたが、学生の領域配属は2年次からであるため、その効果・反省点はまだ把握できておらず、今後の課題である。

3-4-1-2 人材育成

本学独自の取組である「教育力向上支援事業」の一環として、「デザインパテントコンテストを活用した実践型創造力創出教育プログラムの開発」、「建築・デザイン海外研修による建築・教養教育の充実」、「新領域教育に対応した技術アドバイザー制度導入とプロトタイプデザイン技術教育の実践」、「ものづくり工房運営についての調査研究2」等のプログラムを実施した。

3-4-1-3 地域連携教育

「インターンシップ（学外実習）」では、デザイン関連企業や地域（自治体）関連のデザインプロジェクトに取り組み、実社会におけるデザインワークの体験的な理解を深めることができた。具体的には、文部科学省補助金事業「大学教育再生加速プログラム（インターンシップ等を通じた教育強化）」の支援を受け、初年次学生対象の「フレッシュマン就業力セミナー」にて、外部講師として、OB・OGデザイナーだけでなく、インターンシップ受入先から講師を招き、プレ教育として実施した。また、「龍の仕事展2015」及び「勝山街並み・体験ク

ラフト市 2015」を地域インターンシップとして実施した。中国・四国圏域インターンシップ等推進大学グループにおける実務者研修会に学部キャリア支援教員を中心に派遣し、インターンシップ等を通じた人材育成に関する研修を実施した。

3-4-1-4 IT 化の推進

タブレット端末を活用した体験型授業拡充のため、新規重点事業枠予算にて「アクティブ・ラーニングシステム」の環境整備を行い、利用方法に関する教員対象の研修会を実施した。これは、教育空間のグローバル化に備えた、下準備としての性格をもたせた作業でもある。

3-4-1-5 キャリア支援

デザイン学部では、保健福祉学部と違い、2 学科共通の活動も多い。キャリア支援に関しては、3-4-3 文部科学省補助事業に詳述した。

3-4-2 造形デザイン学科

3-4-2-1 カリキュラム

造形デザイン学科では、自ら発見した課題をデザインによって解決する能力の涵養をディプロマ・ポリシーに掲げ、その実現を、共通教育との連携により学科カリキュラムにおいて図ろうとしている。社会におけるデザインの役割やニーズの多様化に対応する専門教育を充実するために、平成 25 年度にコース制を領域制に改めたが、完成年度には至っておらず、その効果・反省点はまだ把握及び分析されていない。

3-4-2-2 人材育成

「領域演習 IV」において、社会性のあるテーマに対するデザインによる解決案の提案を促すプログラムを導入し、デザインと社会の関係性のなかでどのようにデザインの専門性が関わる事ができるかについて、具体的に考える機会を設けた。

その学修成果の外部評価を得るため、授業内外において各種コンペティションへの応募や作品発表の場の計画から実施まで念頭に指導を行った。また、国内外で活躍する作家やデザイナーを特別講師として招聘し、講義やワークショップ等開催を通じて、プレゼンテーションを含むデザインワーク全体におけるスキルアップそしてコミュニケーション力の促進を促すなど、デザインや造形活動の広がりや深化についての啓蒙と学修支援を行った。

3-4-2-3 地域連携教育

本学独自の取組である「教育力向上支援事業」の一環として、「キャリア形成支援のためのポートフォリオセミナー」「ワークショップを活用した学生のキャリア形成プログラム」「ビジュアルデザイン領域における発想力と企画提案力の向上を目的とした教育プログラムの実施及びカリキュラムの改善」等のプログラムを実施した。さらに、インターンシップや学外実習では、デザイン関連企業や地域（自治体）関連のデザインプロジェクトに取り組み、実社会におけるデザインワークの体験的な理解を深めた。4 年次の「卒業研究」では、地域企業や団体・行政との協働の下で学生が研究を進めるケースもいくつか見受けられ、社会におけるデザインの有用性への理解に結びついている。

3-4-2-4 ものづくり教育と IT 教育の推進

IT 化が進む今日では、IT 技術や情報リテラシーが当然ながら教育に導入されなければならない。ウェブ、動画、映像、CG を初めとする情報処理能力は造形デザイン学科においても授業導入されている。一方で、豊かな発想や構想力の涵養を導くため、アナログ的アプローチによるものづくりに重点を置く 1、2 年次授業「材料演習 I～V」を実施し、3 年次において

独創性や芸術性の高い造形デザインを生み出す能力の基礎づくりをした。

3-4-2-5 キャリア

デザイン学部としてのキャリア支援に関しては、次項目の文部科学省補助事業に詳述した。2 学科共通の活動も多く、3-4-1-3 にも記述された学部授業「フレッシュマン就業力セミナー」の実施をはじめ、教員を各種研修会に派遣し動向や方向性についての情報収集を図ることで、学科におけるキャリア支援活動に反映させた。また、学科授業「インターンシップ（学外実習）」では、3年生を対象とした12のインターンシップ・プログラムを用意し、デザインの専門性がどのように社会に貢献できるかについて実地体験を通して学修させた。そして、その報告会の企画・運営を委ね、学生の主体的な行動やリーダーシップ及び協調性を促し、さらに初年次生等への聴講参加奨励を行うことで、学年を超えた情報と成果の共有を図った。

3-4-3 文部科学省補助事業

1. はじめに

平成24年度より採択された文部科学省「産業界のニーズに対応した教育改善・充実体制整備事業」は平成26年度末にて終結したが、平成27年度より、サブグループ3校（岡山理科大学、山口東京理科大学、岡山県立大学）は、3大学連携の協定書を結び、連携会議による大学相互の授業参観等による教育力向上を目的にした取組を行った。また、平成26年度より従来のプログラムである「産業界のニーズに対応した自律的な技術者養成プログラム」はテーマAとして位置づけられ、新たに「大学教育再生加速プログラム（インターンシップ等を通じた教育強化）」がテーマBとして加わった。そのため、平成27年度は、本学は、中国・四国圏域インターンシップ等推進大学グループ会議（18大学）に属し、岡山県域（5大学幹事校：岡山理科大）を中心として、テーマB「中国・四国圏域での産官学協働によるインターンシップ等の推進」に重点を置いた教育プログラムへの取組を行った。

2. テーマ A「産業界のニーズに対応した自律的な技術者養成プログラム」（平成 26 年度終了）

(1) 3大学連携会議（平成 27 年 8 月 26 日）

岡山理科大学にて開催された「産業界のニーズに対応した自律的な技術者養成プログラム」第1回3大学連携会議（岡山県立大学・岡山理科大学・山口東京理科大学）において、協定書に基づく3大学の連携内容について確認を行い、今後の取組として相互授業参観などを中心とした取組を継続していくこととなった。

また、学生の成長評価アンケート実施については各大学に一任されることとなり、3大学共通指標の運用については適宜、情報交換していくことになった。

なお、今後10年間におけるまとめ校（年次計画作成、授業見学運用）は1年ごとの当番制とし、本学は平成28年度の担当となった。

(2) 連携大学による相互授業参観（平成 28 年 1 月 20 日、平成 28 年 1 月 27 日実施）

各大学において平成 27～28 年度の見学可能授業をリストアップし、岡山理科大学にて集約、3大学のリストが公開された。（岡山県立大学：8科目、岡山理科大学：9科目、山口東京理科大学：7科目）

本学において実施された授業見学は2件であった。詳細は下記の通りである。

① デザイン工学科 製品・情報デザイン領域演習Ⅱa（2年次生）

・実施日時：平成28年1月20日 14:20～15:50

- ・担当者：金丸, 三原
- ・内容：デザインの造形力習得を目的とした, 石膏型による造形課題及び3Dプリンタを使用した造形課題の制作を見学いただく。
- ・見学者：島田英之教授（岡山理科大学）
意見（抜粋）：複数の手段による造形の演習を通じて製品デザインの基礎を学ぶ内容であり, シラバス「人体と道具, アナログとデジタルの関係を意識した内容」という記述通り, 学生それぞれに深い考察にまで到達できる演習だと感じました。

② デザイン工学科 製品・情報デザイン領域演習Ⅱa (2年次生)

- ・実施日時：平成28年1月27日 14:20～15:50
- ・担当者：金丸, 三原
- ・内容：同上
- ・見学者：松浦洋司教授（岡山理科大学）
- ・意見（抜粋）：クレイによる造形では, ある程度形を決めた後, カッターナイフで詳細な形状出しを行い, 使い勝手などを確認するなど, デジタルとアナログの両面が融合された技能の習得を目指していることが確認できた。何人かの学生に質問したが, デザインへの思いを自分の言葉で語ってくれた。デザインはCAD上で考えるだけでなく, 模型など現物を見ながら行う必要があることを改めて確認できた。頭だけで考えたデザインは使い物にならないとの講義担当者の言葉は, 工学におけるものづくりにも言えると感じた。

3. テーマB「中国・四国圏域での産官学協働によるインターンシップ等の推進」

本学における主な取組は, 1) フレッシュマン就業力セミナー（全学部）, 2) 両学科毎のインターンシップ・プログラム, 3) 中国・四国圏域インターンシップ等推進大学グループ会議及び組織運営委員会主催のシンポジウム（フォーラム）への参加の3つである。

(1) フレッシュマン就業力セミナー（履修生：97名）

外部講師として, OB・OGデザイナーだけでなく, インターンシップ受入先から講師を招き, プレ教育として実施した。

日程	授業内容	担当講師（窓口担当教員）
4/14	1. オリエンテーション；就業力とデザイン力の接点	森下学部長・両学科長・野宮教授
4/21	2. デザイン工学分野学生の将来設計：進学編（大学院生：デザイン工学専攻）	美藤 亮（小野専攻長）
4/28	3. デザイン工学分野学生の将来設計：就職編（卒業生：株式会社グローリー）	木村直矢（小野学科長）
5/12	4. 造形デザイン分野学生の将来設計：進学編（大学院生：造形デザイン学専攻）	山本希恵（IT）・文堂宣輝（テキ）（難波専攻長）
5/19	5. 造形デザイン分野学生の将来設計：就職編（卒業生：株式会社IDA岡山本社／工房イクコ）	湯川敢介（グラ）・阿波夏紀（セラ）（難波学科長）
5/26	6. セルフマネジメントの要点（精神保健福祉士：梅花女子大学看護学部）	廣川空美（森下学部長）
6/2	7. キャリアプランニングのヒント：地域編＜企業＞（エクスライブ）	三井勇樹（野宮教授）
6/9	8. キャリアプランニングのヒント：総合編（クオリティ・オブ・ライフ）	原 正紀（森下学部長）
6/16	9. キャリアプランニングのヒント：地域＜NPO＞編（フレームデザイン）	北川 卓（野宮教授）
6/23	10. キャリアプランニングのヒント：地域＜NPO＞編（まちづくり推進機構岡山）	徳田恭子（森下学部長）

6/30	11. キャリアプランニングのヒント：地域〈個人〉編（イデア）	大月ヒロ子（森下学部長）
7/7	12. キャリアプランニングのヒント：製品・情報デザイン領域編（株式会社 博展）	中島健希（小野学科長/領域教員）
7/14	13. キャリアプランニングのヒント：ビジュアルデザイン領域編（株式会社アドバンスクリエイト）	西窪奈美（難波学科長/領域教員）
7/21	14. キャリアプランニングのヒント：建築・都市デザイン領域編（後藤亜貴建築設計事務所）	後藤亜貴（福濱教授）
7/28	15. キャリアプランニングのヒント：造形デザイン領域編（TENG Meister）	細川裕之（難波学科長/領域教員）
8/4	16. サブノート提出	小野学科長・難波学科長

(2) インターンシップ実施及びインターンシップ先開拓

デザイン学部キャリア支援委員会を中心に、インターンシップ実施及びインターンシップ先開拓活動に取り組んだ。

① 産学連携授業（ミロクテクノウッド）

- ・訪問先：株式会社ミロク及びミロクテクノウッド
- ・実施時期：平成 27 年 5 月 20 日
- ・担当教員：森下教授・三原准教授
- ・対象学生：製品・情報デザイン領域 3 年次生 13 名
- ・実施科目：製品・情報デザイン領域演習Ⅲa
- ・概要：(株)トヨタ自動車のレクサスブランドに使用されている木製高級ハンドルを製造する高知県南国市の(株)ミロクテクノウッドとの産学連携授業を製品・情報デザイン領域演習Ⅲa の授業課題として実施した。本授業では、実際に企業が直面している課題を学生がどのように理解し、どのようにデザインで解決策を導き出すかを検証するものである。

この授業は、「第 10 回金の卵 学校選抜オールスター デザインショーケース」展の大学選考対象でもある。



② インターンシップ先開拓

- ・訪問先：株式会社心石工芸（広島県福山市）
- ・実施時期：平成 27 年 5 月 26 日
- ・担当教員：三原准教授
- ・対象学生：デザイン工学科 製品・情報デザイン領域 3 年次生 5 名
- ・実施科目：製品・情報デザインゼミナールⅠ
- ・概要：インテリア関連企業に興味がある学生を対象とした、福山市の革張りソファを得意とする株式会社心石工芸の工場及びショールームの見学を実施した。同時に、株

式会社心石工芸からも雇用のマッチングについて相談があり、業界志望学生の紹介や将来的なインターンシップ生受入れに関する協議を行い、今後も継続して検討を行うこととなった。



③ 産学連携授業（テオリ・倉敷木材）

- ・訪問先：株式会社テオリ・倉敷木材株式会社
- ・実施時期：平成 27 年 7 月 8 日
- ・担当教員：益岡准教授
- ・対象学生：デザイン工学科 製品・情報デザイン領域 3 年次生 5 名・4 年次生 1 名
- ・実施科目：製品・情報デザイン論Ⅲ・領域演習Ⅲ
- ・概要：株式会社テオリ見学では、量産時の様々な加工方法や注意点、デザイナーとの協働の実態について説明を受けた。また実際の木材加工の注意点や、加工そのものを学習した。倉敷木材株式会社見学では、木材の種別ごとの特徴の理解を図った。「触り心地」「木目」「匂い」「比重の大小」「強度」「針葉樹・広葉樹」「産地」など様々な特質があり、「節や木目に合った価格」など大学内では教授の難しい分野について理解を深めた。



④ 「龍の仕事展」を活用したインターンシップ（D-INTERNSHIP）

- ・訪問先：倉敷アイビースクエア・アイビー学館
- ・実施時期：平成 27 年 9 月 12 日～20 日
- ・担当教員：森下教授
- ・対象学生：製品・情報デザイン領域 3 年次生 7 名
- ・実施科目：製品・情報デザインインターンシップ
- ・概要：D-INTERNSHIP とは、「龍の仕事展」を大学生の人材育成として活用したインターンシップ・プログラムである。（「D」とは「龍の仕事展」の「龍=Dragon」の「D」）大学生に、地元を代表する企業を知ってもらい、企業を通して地域の文化や歴史・風土を理解するとともに、地域戦略の思考を学んだり、社会人に求められる自己啓発力や自己教育力を育てることを目的としている。

「龍の仕事展」とは、毎年 9 月に倉敷アイビースクエア内のアイビー学館を会場として高梁川流域のものづくり企業、約 30 社が企業文化の展示を行い、商品の PR や販売を行うものである。出展する企業は、創業 100 年以上の歴史を持つ、各地を代表する

老舗企業から、新たに地域ブランドを立ち上げ、次世代へと受け継げるものを生み出す努力を続ける企業まで様々である。<http://project-g7.com/wordpress/>



⑤ 勝山街並み・体験クラフト市 2015

- ・訪問先：勝山町並み保存地区（岡山県真庭市勝山）
- ・実施時期：平成 27 年 10 月 3 日～4 日
- ・担当教員：森下教授, 野宮教授
- ・実施科目：製品・情報デザインインターンシップ, ビジュアルデザインゼミナール
- ・対象学生：デザイン工学科 3 年次生 7 名 造形デザイン学科 3 年次生 8 名
- ・概要：平成 27 年 10 月 3 日～4 日, 勝山町並み保存地区を中心として行われた「勝山街並み・体験クラフト市 2015」を活用したインターンシップ・プログラムを実施した。インターンシップ実施に当たっては, 事前説明会及び事前研修を実施し, プログラム終了後は後年次生を対象にした報告会を実施した。インターンシップでは, 体験クラフト市に出展する作家の工房を訪問取材し, 地域住民を対象にした広報ツールを作成し, 新聞チラシとして配布した。また, 開催期間中は, 各会場を取材して報告書作成に協力した。本プロジェクトは, 平成 25 年度から 3 年目になる事業で, 平成 28 年度は COC+事業の一環（地域インターンシップ）として実施する計画である。



⑥ 第 22 回ヤングセラミスト・ミーティング in 中四国

- ・訪問先：高知大学
- ・実施時期：9 月 25 日～11 月 21 日
- ・担当教員：作元講師
- ・対象学生：造形デザイン学科 造形デザイン領域 3 年次生 5 名
- ・実施科目：造形デザイン領域演習Ⅳ
- ・概要：ヤングセラミスト・ミーティング in 中四国は, 「セラミックス」をキーワードに, 大学・企業・公設研究機関の若手研究者が交流して活発な議論を展開し, 研究の活

性を図ることを目的としており、地域の若手研究者グループが独創的な発想を基に企画から運営までを行う地域の特徴を活かした行事である。後期授業にて研究、作品制作、発表会資料を作成し、11月21日の学会にて発表を行った。また、中四国の企業との交流を通じてインターンシップ先の開拓を行った。



⑦ 建築・都市デザイン領域学外研修

- ・訪問先：桜製作所／モリシゲ本社アトリエ（香川県）
- ・実施時期：平成27年11月12日
- ・担当教員：福濱教授・朴 講師
- ・対象学生：建築・都市デザイン領域／製品・情報デザイン3年次生21名
- ・実施科目：建築・都市デザインインターンシップ 他
- ・概要：建築・都市デザイン領域（建築設計IV履修）の学生を対象に、中国四国圏域におけるインターンシップ拡大を目的に学外研修を実施した。香川県高松市に所在する家具製造の2企業（株式会社桜製作所／株式会社森繁）は現代の住空間に適合するモダンな家具を製造・販売している。学外授業として、桜製作所やモリシゲ本社アトリエの体験では、実際の様々な木材加工方法や注意点、デザイナーとの協働の実態について学習することが出来た。大学で体験出来ない産学連携によるインターンシップでの情報や人材養成におけるキャリア教育の試みなど、産学連携教育の成果があった。



連携会議、フォーラム等への参加

- ・第1回中国・四国圏域インターンシップ等推進大学グループ会議（3名）
平成27年4月27日（月）サテライトキャンパスひろしま
- ・第1回中国・四国圏域インターンシップフォーラム（4名）
平成27年5月19日（火）岡山コンベンションセンター
- ・第1回岡山県域インターンシップ等推進委員会
平成27年6月9日（火）岡山理科大学（1名）
- ・第1回中国・四国圏域インターンシップ等専門人材育成研修会（2名）
平成27年8月27日（木）岡山国際交流センター

- ・第1回社会人基礎力育成研修会/中国・四国圏域インターンシップフォーラム（2名）
平成27年10月27日（火）広島国際会議場
- ・第2回岡山県域インターンシップ等推進委員会（1名）
平成27年12月14日（月）岡山理科大学
- ・インターンシップ等を通じた教育強化事業成果報告会（1名）
平成28年2月16日（火）東京国際交流館
- ・中国・四国圏域インターンシップ等推進組織 運営委員会及びフォーラム（6名）
平成28年2月19日（金）岡山国際交流センター
- ・産学協働教育シンポジウム「地域連携組織によるインターンシップの推進」（1名）
平成28年2月26日（金）スペース ニオ（日本経済新聞社 東京本社ビル2階）

4. 今後の展望

デザイン学部では、平成26年度で終了した文部科学省「産業界のニーズに対応した教育改善・充実体制整備事業（テーマA）」を3大学（岡山理科大学、山口東京理科大学、岡山県立大学）による連携事業として継続し、相互授業参観による授業方法の改善への情報交換を実施した。また、「中国・四国圏域での産官学協働によるインターンシップ等の推進（テーマB）」では、初年次生向けの「フレッシュマン就業力セミナー」を実施し、キャリア教育へのプレ授業として位置づけるとともに、地域インターンシップ受入先企業から講師を招き、COC+事業への導入的役割を担うことが出来た。今後は、地元企業との産学連携授業をさらに発展させ、地域の産業や文化への理解を促進させることが必要である。また、中国・四国地域での大学間連携を通じて得た人的ネットワークを今後も最大限活かして、教育の質向上と改善に向けて、教育力向上を推進していきたい。

3-5 まとめと課題

3-5-1 保健福祉学部

本年度のCOC+事業「地域で学び地域で未来を拓く‘生き生きおかやま’人材育成事業」の採択を受け、地域連携教育は本学教育において今後ますます重要性を増すと考えられる。平成29年度からのクォーター制導入を見据え、本学部教育の高い専門性を維持しつつ、副専攻制度として平成28年度からスタートする「岡山創生学」に、学生の地域活動を展開する学部独自科目を新設することを含め、副専攻の履修促進に向けたカリキュラムの一層の工夫が望まれる。また、オーストラリアでの保健福祉スタディーツアーは、本年度は開催日程を調整することにより、昨年度参加者がいなかった保健福祉学科学生の参加を促進できた。今後は学部専門教育科目としての単位化も視野に入れたプログラムの検討が必要である。看護学科では毎年韓国からの交換留学生を受け入れているが、今後は学部間連携協定を締結した香港理工大学との交流促進を図ることを含め、学部生の海外研修の促進を目指した一層のグローバル教育の機会の充実が望まれる。

3-5-2 情報工学部

情報工学部においては、基礎学力の補強を軸に学生支援をきめ細かく実施している。教育方法については、岡山県工学教育協議会主催の「岡山県工学教育協議会シンポジウム」に参加し、近隣大学・高専等の最新の教育方法に関する情報を収集すると共に、本学部の教育プログラムに関する発表を行い、他大学教員からの意見を聴取している。

平成27年度に採択されたCOC+事業に関連して、平成28年度入学生からはカリキュラムの

一部に地域との協働による授業科目が設置されるが、これらの授業科目と学内で実施する授業科目とを上手く連動させ、高い教育効果を上げることが今後の課題である。

3-5-3 デザイン学部

デザイン学部では、文部科学省「産業界のニーズに対応した教育改善・充実体制整備事業（テーマ A）」で開発した教育プログラムを活かして、平成 27 年度教育力向上支援事業として積極的に取り組み、学生の問題発見力や企画提案力の向上に結び付けることが出来た。また、「中国・四国圏域での産官学協働によるインターンシップ等の推進（テーマ B）」では、従来の就業体験型インターンシップに加えて、NPO 等との協働で地域貢献型のインターンシップ・プログラムを開発・実施することが出来た。しかしながら、次年度以降は、COC+事業への移行を前提に、今年度事業の成果と課題を整理して、継続的、発展的に展開することが課題である。

第4章 大学院における教育・研究活動と成果

4-1 大学院における教育活動

4-1-1 概要

本学大学院では、各研究科・専攻で設定するカリキュラム・ポリシー及びディプロマ・ポリシーに基づき、より高度な専門性を備え、社会進出にあたって指導的な立場に立つことのできる人材や研究者の育成を目指している。以上を基本として、少子高齢化やグローバル化に対応して、専門分野の視点から課題解決を図ることのできる人材育成のため、各研究科において、教育プログラムや授業内容及び研究指導法の工夫改善に取り組んでいる。

4-1-2 保健福祉学研究科

4-1-2-1 看護学専攻

4-1-2-1-1 カリキュラム改正

平成 24 年度に大学院に保健師養成課程を開講し、長期履修生が 1 名修了した。保健師国家試験受験資格取得目的で、学部生からの大学院入学希望者が増加し、平成 28 年度より保健師課程の定数を 2 名から 7 名にした。平成 28 年度の保健師養成課程受験者 9 名のうち合格者は 8 名で、合格者全員が入学手続きを行った。

4-1-2-1-2 グローバル教育

学部科目の「国際保健看護論」を院生有志に開放し、ネパール AMDA 病院看護部長及びトリブバン大学看護学科長による講義を受けた。グローバルな看護専門職育成を目的に教育力向上支援事業の助成を受けて、ネパールで「国際保健看護論演習」を行った。さらに平成 27 年度は香港理工大学との学術交流協定を結び、今後の学生間の交流を始める基礎づくりを行った。香港理工大学老年看護学担当教員の講義を実施し、大学院生有志が聴講した。講義の終了後は共同研究に向けて、ディスカッションの場を設定した。

4-1-2-1-3 地域連携教育

備中県民局「わが町で保健医療福祉の『人づくり地域づくり応援隊』事業（NPO かさおか島づくり海社受託）」と協働して、3, 4 年次生とともに、公衆衛生看護診断論演習を北木島で行い、離島の保健医療・看護の現状と課題について住民とともに地域の健康課題を明らかにし、課題解決に向けた提案を行った。

4-1-2-2 栄養学専攻

4-1-2-2-1 グローバル教育

中国四川大学の方定志教授による「栄養遺伝解析学特論」が、平成 27 年 8 月 3 日(月)～8 月 5 日(水)に行われ、保健福祉学研究科栄養学専攻博士前期 1 年次生 7 名及び保健福祉科学専攻栄養学大講座博士後期 1, 2 年次生 3 名が参加した。同年 10 月 15 日には、中国・南昌大学の Deng 教授による特別講義が行われ、学部生 7 名、大学院生 15 名、教員 6 名が参加した。

4-1-2-2-2 連携大学院教育

栄養学専攻では、岡山県内の大学及び学術施設と連携協定を締結し、学外の研究者による研究指導を受けることができる体制を整えている。本年度は以下の連携大学院教育を行った。

- ・生命工学特論（岡山県生物科学総合研究所 畑中唯史研究員 他）：7名受講
- ・食品微生物学特論 II（岡山県工業技術センター 三宅剛史研究員）：7名受講

4-1-2-3 保健福祉学専攻

本年度は、カリキュラムの変更はなく、外部講師による特別講義も実施していない。しかし、大学院生には他領域の授業を積極的に受講するよう奨励した結果、12名が他講座の9科目を受講した。

4-1-2-3-1 グローバル教育

平成27年9月に、スウェーデン農業科学大学ランドスケープ・アーキテクチャー教授のパトリック・グラン氏（Patorik Grahm）を招へいして、セミナーを総社市昭和地区（養護老人ホーム清梁園）にて開催した。題目は「自然環境と健康を科学する」である。セミナーでは、世界をリードするグラン氏によるリハビリガーデンでの研究成果の紹介と実践の様子（Nature based Rehabilitation）について解説を行った。セミナーには学部学生4名、大学院生1名が参加した。10月に開催した韓国保健産業振興院の鄭恩英氏（ジョン・ウニョン）による講演会「日韓における地域保健医療福祉の現状と課題について」へ参加した博士前期課程院生数は5名であった。

4-1-2-3-2 地域連携教育

本年度は、2名の大学院生が総社市の「コミュニティカフェ」や「地域サロン活動」に参加し、3名の大学院生がフィールド調査を行った。「コミュニティカフェ」とは、総社市が進める「人と文化の交差点」のことである。「地域の住民が集い語り合う、縁側のような場所」「嬉しいこと楽しいこと、悲しいことや困ったことを、お茶を飲みながら一緒に分かち合える場所」「自分の夢にチャレンジできる場所」「人と人が繋がり、いろいろな文化が行き交う場所」づくりの活動である。一方「地域サロン活動」とは、総社市社会福祉協議会が中心となって、地域で暮らす住民が気軽に集い、楽しく時間を過ごす「地域のお茶の間」のことで、市内には181か所（平成24年4月現在）のふれあいサロンができています。そして、8月と12月には、その中間発表会を実施した。また、1名の大学院生がスウェーデン農業科学大（パトリック・グラン教授）との共同研究に参加し、2名の大学院生が他大学研究者と意見交換をした。

4-1-2-4 保健福祉科学専攻

4-1-2-4-1 看護学大講座

インドネシア・ハサヌディン大学看護学科学科長より、大学院後期課程への留学希望があったので、今後の受け入れを見据えて意見交換の機会をもった。

4-1-2-4-2 栄養学大講座

海外連携協定大学における学長推薦を受けた留学生に対して、入学金免除、授業料の最長3年間の免除、ならびに奨学金の最長3年間の給付を行う海外特別奨学生制度を平成27年度に設けたが、その実質的な受け入れ体制が整備されたことを受け、平成28年度からスカイプ面接を活用した海外特別入学試験に合格したインドネシア・ハサヌディン大学からの留学生1名の栄養学大講座への受け入れ（指導教員：伊東秀之教授）が決まっている。このほか、南昌大学よりDeng教授を招聘し、10月15日に英語で特別講義およびディスカッションを行った。学部生7名、大学院生15名、教員6名の参加であった。

4-1-2-4-3 保健福祉学大講座

本年度の博士学位授与者は2名であったが、そのうちの1名は平成23年度に国際学術交流協定校である又松（ウソン）大学校の医療社会福祉学科から転学生として本学保健福祉学科に入学し、その後博士前期課程、博士後期課程と進学した学生である。また、平成27年10月に「日韓における地域保健医療福祉の現状と課題について」の題目で、韓国保健産業振興院の鄭恩英氏（ジョン・ウニョン）による講演会を行った。参加した博士後期課程院生数は3名である。

4-1-3 情報系工学研究科

情報系工学研究科では、急速に発展する環境の変化に対応するために、既存の教育研究分野にとらわれず幅広い視野を持ち、それぞれの研究内容のみならず融合型研究を深化させるための取組を行っている。

4-1-3-1 学生指導体制

4-1-3-1-1 システム工学専攻（博士前期課程）

平成25年度に情報工学部3学科に積み上げた3専攻（電子情報通信工学専攻、機械情報システム工学専攻、人間情報システム工学専攻）から1専攻に改組し、専攻内に5領域（情報工学領域、電子通信工学領域、ヒューマン・ロボティクス領域、機械プロセス・エネルギー工学領域、人間情報工学領域）を設けた。平成24年度以前の3専攻体制では、学生が所属する専攻を超えた授業科目を履修することは、専攻共通に開講される授業科目以外では、ほとんど見られなかった。しかしながら、1専攻化により、従前の専攻の枠を超えた授業科目の履修が、特に情報工学系の授業科目で活発になり、また、領域が細分化された関係で、多くの学生が領域を超えた授業科目を履修している。表1に、3専攻最後となった平成24年度入学生に対する授業科目（選択科目）を平成25年度以降の5領域に対応するよう分類し、平成24年度入学生がどの領域の授業科目に対して単位を取得しているかに関する分布を示す。表1において、太字斜体で示される数値は、学生の所属領域外の授業科目で単位を取得していることを表している。同様に、平成27年度入学生に対する選択科目の単位取得分布を表2に示す。表1と表2を比較することにより、1専攻化によって、学生は所属領域以外の授業科目を履修する行動をとっていることが顕著となっている。

表1. 平成24年度入学生の所属領域別に見た選択科目の取得単位数の領域別分布
（3専攻の授業科目を平成27年度の5領域に分類）
（太字斜体が所属領域外授業科目の単位を取得したことを示す）

学生の所属領域		取得単位数の分布(%)							合計	
		情報			電子	ヒュ	機械	人間		共通
		電子	機械	人間						
情報	電子	34.1			53.7				12.2	100.0
	機械		42.3		1.6	23.6	19.5		13.0	100.0
	人間									—
電子通信		22.5	2.0		66.5				9.0	100.0
ヒューマン・ロボ			30.1		2.7	31.5	19.2	4.1	12.3	100.0
機械・エネ			30.0		0.9	15.0	38.8	5.3	10.1	100.0
人間情報(注)			3.6		30.6	9.0	7.2	39.6	9.9	100.0

(注) 人間情報システム工学専攻学生5名中2名は情報通信工学科卒業生のため、電子情報通信工学専攻科目を数多く履修している。

表 2. 平成 27 年度入学生の所属領域別に見た選択科目の取得単位数の領域別分布
(太字斜体が所属領域外授業科目の単位を取得したことを示す)

学生の 所属領域		取得単位数の分布 (%)							合計	
		情報			電子	ヒュ	機械	人間		共通
		電子	機械	人間						
情報	電子	20.4	27.2		42.7	3.9			5.8	100.0
	機械	5.8	46.7	9.5	4.4	14.6	10.9	0.7	7.3	100.0
	人間		20.0	10.0	20.0	20.0		20.0	10.0	100.0
電子通信		11.0	15.0		67.8	0.5	2.8		3.0	100.0
ヒューマン・ロボ		2.9	24.6	4.3	1.4	33.3	13.0	17.4	2.9	100.0
機械・エネ			27.8	2.6	5.3	17.2	37.1		9.9	100.0
人間情報					9.2	8.1	8.1	70.5	4.0	100.0

しかしながら、情報工学部卒業生の約半数が、システム工学（博士前期課程）に進学しており、また、学外から本専攻に入学する学生が少ない現状において、学士課程教育との連続性を十分に考慮した教育プログラムとする必要がある。この観点において、情報工学系の授業科目が単一領域に集約された点は、学生の履修行動に柔軟性を与えたことになり評価することができる。しかしながら、情報システム工学科教員の所属領域が情報工学領域、ヒューマン・ロボティクス領域、機械プロセス・エネルギー工学領域に 3 分割されている点、人間情報工学科所属教員の授業科目が人間情報工学領域以外の領域に配置されている点などにおいて、学士課程教育との連続性が、必ずしも明快ではない。このため、学生の履修行動などに基づいてカリキュラム改善の PDCA サイクルを運用する際に、適切な評価をすることが困難となっていることは否めない。また、学生の研究指導、修士論文作成指導に際しても、領域内での議論を十分に尽くすことができない状況となっていることが散見されている。

このため、平成 27 年度において、博士前期課程における領域の再編を検討し、平成 28 年度入学生からは 1 専攻 3 領域（電子情報通信工学領域、機械情報システム工学領域、人間情報システム工学専攻）とすることとした。この再編により、各領域における教育体制が、情報工学部 3 学科の学士課程教育との連続性を担保すると同時に、1 専攻の利点を生かしつつ、他領域の学問分野との交流（授業化網の履修、異なる視点からの研究指導）が従来以上に活発になるような学生指導体制を整備した。

4-1-3-1-2 システム工学専攻（博士後期課程）

博士後期課程は、従来より 1 専攻として、電子情報通信工学大講座、機械情報システム大講座、人間情報システム工学大講座の 3 大講座での指導体制をとってきた。しかしながら、博士前期課程の 1 専攻化により、講座制から領域制への転換を図り、前述のとおり、領域制の利点を生かした柔軟な指導体制を整備したことを受け、博士後期課程においても大講座制から領域制への転換を平成 27 年度に検討し、平成 28 年度入学生より、3 領域制による学生指導体制とすることとした。併せて、情報技術を多様な分野に展開できる人材育成を推進するため、従来の主指導・副指導教員に加えて、主指導教員とは専門分野の異なる教員を指導体制に加えることができる研究アドバイザー制度を導入することとした。

4-1-3-1-3 連携大学院

情報系工学研究科では、岡山県内の公共機関及び企業と連携協定を締結し、学外の研究者による研究指導を受けることができる体制を整えている。平成 27 年度は 3 名の博士前期課程学生が岡山県工業技術センターで研究の一部を遂行した。

4-1-3-1-4 学外活動

従来より、学生に対しては、研究成果の学外口頭発表、論文投稿を奨励するのみでなく、他大学大学院生との交流、各種コンテストへの参加を推奨している。平成 27 年度では、特に、文部科学省「情報技術人材育成のための実践教育ネットワーク形成事業」に大阪大学を中心として選定された「分野・地域を越えた実践的情報教育協働ネットワーク（enPiT）」の組込みシステム分野（enPiT Emb：名古屋大学事業発展型 OJL（On the Job Learning））に博士前期課程学生 3 名が参加し、名古屋大学をはじめとする他大学大学院学生と組込みシステムに関するツール開発あるいは実証実験に携わった。

また、学外コンテストに博士前期課程学生が参加し、次に示すような成果を上げることができた。

- ACM 国際大学対抗プログラミングコンテスト・アジア地区予選つくば大会 Java Challenge 2 位
- 第 10 回コンピュータ大貧民大会優勝・検討賞
- 学生ケータイあわ〜ど 2015 ケータイアイデア部門入選

4-1-4 デザイン学研究科

4-1-4-1 カリキュラム改正

デザイン学研究科では、平成 26 年度、学部における学科再編に合わせて専攻科の再編（7 領域制から 4 領域制へ）を行い、本年度、再編後の最初の修了生を送り出すこととなった。カリキュラムの見直しは、入試制度も視野に入れた上での、抜本的な課題となる可能性も高い。

4-1-4-2 キャリア支援

近年の研究科の志願者数激減と定員割れ状況に対する対策として、学部生への大学院進学への魅力付けを促すために、学部生の教育場面において、大学院生との教育的接点を増やす試みを行った。具体的には、初年次生対象の「フレッシュマン就業力セミナー」において、大学院生をキャリア教育の講師（ティーチング・アシスタント：TA）として登壇させ、研究科の教育活動を紹介する機会にした。また、高年次生の授業科目でも、院生と学部生が合同で授業を受けられる機会を増やしたり、授業記録や受講生のアンケート集計等補助作業を担当させることで、教育・研究に対するモチベーションの涵養に勤める機会を与えた。さらに、教育・研究の実践の場を学外に求めて、全国レベルのデザインコンペティション等へのチャレンジを行い、優れた成果を出した。

4-1-5 まとめと課題

4-1-5-1 保健福祉学研究科

近年、大学院進学率が低迷する中、保健福祉学研究科は大学院オープンキャンパスを行うなど広報活動を積極的に展開し、平成 28 年度は博士前期課程と後期課程を含むすべての専攻で定員を充足した。大学院オープンキャンパスの事後アンケートから、大学院選びの決め手として重要なのが教員の研究内容であることが判明した一方、社会人の長期履修制度に対する改善の要望があることも判明し、平成 28 年度から、長期履修を履修開始後に短縮できる制度を導入した。大学院のグローバル教育の推進に関連して、看護学専攻では大学院生がネパールでの研修を実施したほか、保健福祉学大講座において韓国又松（ウソン）大学校からの留学生が平成 27 年度に博士の学位を取得し、また栄養学大講座においてインドネシア・ハサヌディン大学からの留学生を受け入れるなど、学術交流協定が活用されている。今後は大学院のさらなる充実に向け、スカイプ入試の積極的な活用等により留学生の受け入れを推進するとともに、HP や大学院オープンキャンパス等を通じて学生や社会人に本学教

員の研究内容をわかりやすく伝えるなど、地道な広報活動を続けることも必要である。

4-1-5-2 情報系工学研究科

平成 25 年度の博士前期課程 1 専攻化により達成された幅広い視野を持ち融合型研究を深化させる特徴を維持しつつ、学部教育で実現された 3 学科の特色を大学院教育に引き継ぐため、平成 28 年度から博士前期課程を 3 領域（電子情報通信工学領域、機械情報システム工学領域、人間情報システム工学領域）に再編する予定である。また、博士後期課程については、情報技術を多様な分野に展開できる人材育成を推し進めるため、平成 28 年度より、3 大講座を 3 領域に改め専門分野間の垣根を低くすると共に、専門分野以外の教員を研究アドバイザーとして指導体制に加える研究アドバイザー制度を導入する予定である。

4-1-5-3 デザイン学研究科

デザイン学研究科では、学部生への大学院進学への魅力付けを促すために、学部生の教育場面において、大学院生と教育的接点を増やす試みを行ってはいるが、研究科全体としては成果を出し切れていない現状である。根本的には、入試制度だけでなく、2 専攻 4 領域におけるカリキュラムの抜本的な見直しなどの改革が急務となっている。

4-2 大学院における研究活動

4-2-1 概要

本学大学院では、研究科学生において社会進出する際に高度な専門性を備えた職業人あるいは研究者として活躍できるよう、教員による研究指導の過程において、関係する学会での研究発表や論文投稿を奨励している。その範囲は国内、国際を問わず多岐にわたっているが、学生募集とも絡む課題として学生のモチベーション高揚のための取組でもあることについて、より一層周知が図られるべき活動であるといえる。

4-2-2 保健福祉学研究科

4-2-2-1 看護学専攻

4-2-2-1-1 学会発表

1. 外来化学療法中のがん患者に関わる看護師の意思決定支援に関する研究(指導教員：名越恵美)門倉康恵, 名越恵美; 第 30 回日本がん看護学会, 千葉 (2016 年 2 月 20-21 日)
2. がん化学療法を受ける患者のレジリエンスに関する研究の概観—国内文献からの検討—(指導教員：名越恵美)遠藤康恵, 小山直夏, 名越恵美; 第 30 回日本がん看護学会, 千葉 (2016 年 2 月 20-21 日)
3. 倫理的意思決定に関する研究の国内文献検討(指導教員：名越恵美)小山直夏, 遠藤康恵, 名越恵美; 第 30 回日本がん看護学会, 千葉 (2016 年 2 月 20-21 日)
4. Examination of Nursing Intervention Scale (Tentative) Evaluated by Patients(指導教員：實金栄)Mayumi Fukutake, Maki Kimura, Sakae Mikane, Kazuko Sumiyoshi, Takako Hiramatsu, Masako Kurose, Natsumi Yoda, Kumiko Fujiwara, Kazuo Nakajima, Yoshiko Futoyu: 10th International Nursing Conference, Korea, p196 (2015. 10. 22-23)
5. 地域在住高齢血液透析患者のスピリチュアリティへの関連要因の検討(指導教員：實金栄)楠木麻子, 為房夢子, 関水千紘, 實金栄: 第 35 回日本看護科学学会学術集会, 広島 (2015 年 12 月 5-6 日)
6. 国内文献における Mastery の概念分析—脳血管疾患患者への適応に向けて—(指導教員：名越恵美)八木一江, 名越恵美: 日本看護研究学会第 41 回学術集会, 広島 (2015 年

8月22-23日)

4-2-2-1-2 論文発表

1. ネパール農村における母子保健活動の現状報告(指導教員:二宮一枝)山形真由美,糸島弘和,藤田彩見,佐々木純子,二宮一枝:岡山県立大学保健福祉学部紀要(掲載決定)
2. ネパールの災害看護に関する現状と課題(指導教員:二宮一枝)Archana Shrestha Joshi,佐々木純子,二宮一枝)岡山県立大学保健福祉学部紀要(掲載決定)

4-2-2-2 栄養学専攻

4-2-2-2-1 学会発表

(1)国内学会

1. ヒトのタンパク質アルギニンメチル基転移酵素3(PRMT3)に対するモノクローナル抗体の作製ならびに免疫学的性質(指導教員:木本眞順美)森本亮祐,山本沙也加,津嘉山泉,山本登志子,鈴木麻希子,山下広美,高橋吉孝,木本眞順美,第38回日本分子生物学会年会,第88回日本生化学会大会 合同大会,神戸ポートアイランド,平成27年12月1日~12月4日,ポスター発表
2. 牛乳由来リポカリン型プロスタグランジンD合成酵素の精製と酵素学的性質(指導教員:山本登志子)田中充樹,木本眞順美,川井恵理佳,瀬来由衣,戸田圭祐,目賀拓斗,川上祐生,高橋吉孝,山本圭,村上誠,山本登志子,第38回日本分子生物学会年会,第88回日本生化学会大会 合同大会,神戸ポートアイランド,平成27年12月1日~12月4日,ポスター発表
3. 嚥下調整食開発に向けた自然薯低温乾燥粉末の物性ならびに嚥下機能評価(指導教員:山本登志子)田中充樹,大野智子,野村奈央,津嘉山泉,戸田圭祐,目賀拓斗,川井恵梨佳,中村孝文,木本眞順美,山本登志子,日本農芸化学会2016年度大会,札幌,平成28年3月27日~3月30日,ポスター発表
4. 自然薯のプロスタグランジンE₂合成系抑制と含有成分ジオスゲニンの効果(指導教員:山本登志子)目賀拓斗,戸田圭祐,津嘉山泉,伊東秀之,川上祐生,高橋吉孝,木本眞順美,荒川俊哉,山本登志子,日本農芸化学会2016年度大会,札幌,平成28年3月27日~3月30日,ポスター発表
5. 皮膚癌モデルマウスにおける自然薯の抗炎症・抗腫瘍効果(指導教員:山本登志子)津嘉山泉,武田泰典,戸田圭祐,目賀拓斗,川上祐生,高橋吉孝,木本眞順美,山本圭,村上誠,山本登志子,日本農芸化学会2016年度大会,札幌,平成28年3月27日~3月30日,ポスター発表
6. 乳中におけるL-PGDSの存在意義と酵素化学的性質(指導教員:山本登志子)木本眞順美,山本登志子,田中充樹,栗木隆吉,岡山県立大学OPUフォーラム2015,岡山県立大学,2015年5月29日,ポスター発表
7. トキワレンゲのポリフェノール成分と機能性(指導教員:伊東秀之)伊東秀之,加藤奈々,我如古菜月,岡山県立大学OPUフォーラム2015,岡山県立大学,2015年5月29日,ポスター発表
8. 肺線維症に対する抗体治療薬の開発を目指した基礎研究(指導教員:高橋吉孝)高橋吉孝,大河内修史,川上祐生,山本登志子,岡山県立大学OPUフォーラム2015,岡山県立大学,2015年5月29日,ポスター発表
9. 血糖値上昇抑制作用を有するザクロ葉の成分研究(指導教員:伊東秀之)赤井衣里阿,河辺聡子,加藤奈々,我如古菜月,好村守生,天倉吉章,伊東秀之,日本農芸化学会中四国支部第44回講演会(例会),岡山,平成28年1月23日,口頭発表
10. 高齢動物の骨格筋性状に及ぼす酢酸摂取の影響(指導教員:山下広美)阿部伶奈,丸田ひとみ,吉村征浩,木本眞順美,高橋吉孝,山下広美,日本農芸化学会中四国支部第44回講演会(例会),岡山,平成28年1月23日,口頭発表

1. 細胞質型アセチル CoA 合成酵素の核内移行シグナル配列の解析 (指導教員: 山下広美)
赤田千佳, 吉村征浩, 山下広美, 日本農芸化学会中四国支部第 44 回講演会 (例会), 岡山,
平成 28 年 1 月 23 日, 口頭発表

(2) 国際学会

山本登志子准教授が指導した博士前期課程の学生 1 名は, 平成 27 年 7 月にハンガリーで開催された国際会議でポスター発表を行い, Ono Pharmaceutical Awards を受賞した. また, 伊東秀之教授が指導した博士前期課程の学生 1 名は, 10 月にフランスで開催された国際会議でポスター発表を行い, ポスター賞を受賞した.

1. Physiological significance of the metabolic pathways for methylated arginines in rat brain (指導教員: 木本真順美) Sayaka Yamamoto, Toshiko Suzuki-Yamamoto, Arisa Ito, Suzuko Kaminoura, Yuki Kawakami, Hiromi Yamashita, Hitomi Hatakenaka, Yoshitaka Takahashi, Masumi Kimoto, 12th Asian Congress of Nutrition, Yokohama, Japan, May 14-18, 2015, ポスター発表
2. *Dioscorea japonica* extract suppresses cyclooxygenase-2 and microsomal prostaglandin E synthase-1 in lung carcinoma A549 cells and macrophage-like RAW264 cells (指導教員: 山本登志子) Keisuke Toda, Izumi Tsukayama, Takuto Mega, Mitsuki Tanaka, Yasunori Takeda, Toshiya Arakawa, Yuki Kawakami, Masumi Kimoto, Yoshitaka Takahashi, Toshiko Suzuki-Yamamoto, 12th Asian Congress of Nutrition, Yokohama, Japan, May 14-18, 2015, ポスター発表
3. Preventive effect of *Dioscorea japonica* on squamous cell carcinoma of mouse skin (指導教員: 山本登志子) Yasunori Takeda, Izumi Tsukayama, Takuto Mega, Keisuke Toda, Mitsuki Tanaka, Yuki Kawakami, Yoshitaka Takahashi, Kei Yamamoto, Makoto Murakami, Toshiko Suzuki-Yamamoto, 12th Asian Congress of Nutrition, Yokohama, Japan, May 14-18, 2015, ポスター発表
4. Purification and characterization of bovine lipocalin-type prostaglandin D synthase from cow's milk (指導教員: 山本登志子) Toshiko Suzuki-Yamamoto, Mitsuki Tanaka, Erika Kawai, Keisuke Toda, Yui Serai, Takuto Mega, Yuki Kawakami, Yoshitaka Takahashi, Kei Yamamoto, Makoto Murakami, Masumi Kimoto, 14th International Conference of Bioactive Lipids in Cancer, Inflammation and Related Diseases, Budapest, Hungary, July 12-15, 2015, ポスター発表
5. *Dioscorea japonica* extract suppresses cyclooxygenase-2 and microsomal prostaglandin E synthase-1 in lung carcinoma A549 cells (指導教員: 山本登志子) Keisuke Toda, Izumi Tsukayama, Takuto Mega, Yuka Konoike, Toshiya Arakawa, Yuki Kawakami, Masumi Kimoto, Yoshitaka Takahashi, Toshiko Suzuki-Yamamoto, 14th International Conference of Bioactive Lipids in Cancer, Inflammation and Related Diseases, Budapest, Hungary, July 12-15, 2015, ポスター発表
6. Effects of chronic intake of acetate on muscle fiber type and endurance performance (指導教員: 山下広美) Hiromi Yamashita, Chihiro Araoka, Yukihiro Yoshimura, Aya Araki, Masumi Kimoto, 12th Asian Congress of Nutrition, Yokohama, Japan, May 14-18, 2015, ポスター発表
7. Polyphenols from flowers of *Magnolia coco* and their inhibitory effects on the formation of advanced glycation end products (AGEs) (指導教員: 伊東秀之) Nana Kato, Satoko Kawabe, Natsuki Ganeko and Hideyuki Ito, The 7th International Conference on Polyphenols and Health (ICPH2015), Tours, France, 27-30 October, 2015, ポスター発表

4-2-2-2 論文発表

1. 高齢者嚥下食の開発に向けた自然薯のレオロジー解析（指導教員：山本登志子）山本登志子, 野村奈央, 山本沙也加, 田中充樹, 目賀拓斗, 津嘉山泉, 戸田圭祐, 川井恵梨佳, 大野智子, 木本眞順美, 岡山県立大学保健福祉学部紀要, 22, 印刷中, 2016.
2. 自然薯の保存方法の検討とその高機能性をいかしたレシピの開発（指導教員：山本登志子）目賀拓斗, 田中小百合, 津嘉山泉, 大本安梨紗, 田中充樹, 戸田圭祐, 川井恵梨佳, 吉尾壯兒, 木本眞順美, 山本登志子, 岡山県立大学保健福祉学部紀要, 22, 印刷中, 2016.

4-2-2-3 保健福祉学専攻

4-2-2-3-1 学会発表

(1) 国内学会

竹本与志人准教授が指導した前期課程の学生1名は, 平成28年1月25日に岡山で開催された岡山県保健福祉学会で口頭発表を行い, 後期課程学生1名の演題2つセットで岡山県社会福祉協議会長賞を受賞した.

1. 地域住民を対象とした認知症の人との接触経験の状況と認知症の人に対する態度の関係（指導教員：竹本与志人）三上舞, 杉山京, 中尾竜二, 竹本与志人, 日本認知症ケア学会, 第16回日本認知症ケア学会大会, 札幌, 2015年5月23-24日, ポスター発表.
2. 民生委員を対象とした認知症が疑われる高齢者を発見した際の援助行動の特徴（指導教員：竹本与志人）三上舞, 杉山京, 竹本与志人, 岡山県保健福祉学会, 岡山, 2016年1月25日, 口頭発表.
3. 介護福祉士の活気ある働きかたとジェンダー特性（指導教員：谷口敏代）時實亮, 谷口敏代, 第23回日本介護福祉学会, 金沢, 2015年9月26-27日, ポスター発表.
4. 言語性記憶における加齢及び検査語リストの構造化の影響（指導教員：中村光）竹田和也, 中村光, 澤田陽一, 藤本憲正, 津田哲也, 李多暉, 徳地亮, 第39回日本高次脳機能障害学会, 東京, 2015年12月10-11日, 口頭発表.
5. 認知症対応型共同生活介護（グループホーム）における管理者のサービス評価に対する認識：面接調査を通して（指導教員：谷口敏代）米原あき, 谷口敏代, 第23回日本介護福祉学会, 金沢, 2015年9月27日, ポスター発表.

(2) 国際学会

1. Physiological and psychological study on relaxation effects of Snoezelen Space（指導教員：坂野純子）Junko Sakano, Yoichi Sawada, Yuki Yajima, Yudai Hirai, and Shinichiro Sasahara, INFORMATION' 2015, Taipei, November 25-28, 2015, 口頭発表

4-2-2-3-2 論文発表

1. 認知症予防講座の参加者を対象とした認知症の人との接触経験と認知症の人に対する態度の関係（指導教員：竹本与志人）三上舞・杉山京・中尾竜二・竹本与志人, 岡山県立大学保健福祉学部紀要, 22, 印刷中, 2016.
2. 地域包括支援センターの専門職を対象とした認知症が疑われる高齢者の受診に対する援助困難感の構造に関する検討（指導教員：竹本与志人）杉山京, 三上舞, 中尾竜二, 佐藤ゆかり, 桐野匡史, 神部智司, 竹本与志人, 社会医学研究, 33(1)（掲載決定）, 2016.
3. 認知症対応型共同生活介護（グループホーム）における管理者のサービス評価に対する認識（指導教員：谷口敏代）米原あき, 谷口敏代, 岡山県立大学保健福祉学部研究紀要, 22, 印刷中, 2016.
4. 通所介護事業所の生活相談員における送迎業務の困難感と精神的健康の関連（指導教員：谷口敏代）合田衣里, 杉山京, 竹本与志人, 谷口敏代, 介護福祉学, 22(2)（掲載決定）, 日本介護福祉学会, 2016.

4-2-2-4 保健福祉科学専攻

4-2-2-4-1 看護学大講座

(1) 学会発表

1. Examination of Nursing Intervention Scale (Tentative) Evaluated by Patients (指導教員：荻野哲也), Mayumi Fukutake, Maki Kimura, Sakae Mikane, Kazuko Sumiyoshi, Takako Hiramatsu, Masako, Kurose, Natsumi Yoda, Kumiko Fujiwara, Kazuo Nakajima, Yoshiko Futoy, 10th International Nursing Conference, Korea, p196, 22-23 October, 2015, ポスター発表

(2) 論文発表

1. 看護師における職業的アイデンティティ, 職業経験の質と職業キャリア成熟の関係(指導教員：山口三重子) 狩野京子, 出井涼介, 實金栄, 中嶋和夫, 山口三重子, 日本看護評価学会, 5(1), 1-10 (2015)
2. Tapping but not massage enhances vasodilation and improves venous palpation of cutaneous vein (指導教員：荻野哲也) Ichimura M, Sasaki S, Mori M, Ogino T. Acta Med Okayama. 69(2):79-85(2015)
3. 育児期における父親の親性と母親の育児負担感に関する研究(指導教員：二宮一枝) 森永裕美子, 難波峰子, 二宮一枝: 小児保健研究 74(4), 519-526(2015)
4. 訪問看護ステーション管理者の職務継続意向モデルの検討(指導教員：二宮一枝) 佐々木純子, 難波峰子, 二宮一枝: 日本地域看護学会誌 18(2) (2015) 校正中
5. 患者の看護介入評価を測定する尺度の信頼性・妥当性の検討(指導教員：荻野哲也) 福武まゆみ, 木村麻紀, 實金栄, 住吉和子, 平松貴子, 太湯好子: 川崎福祉学会誌, in press (2015)

4-2-2-4-2 栄養学大講座

(1) 学会発表

山本登志子准教授が指導した博士後期課程の学生1名は, 平成27年7月にハンガリーで開催された国際会議でポスター発表を英語で行い, Ono Pharmaceutical Awardsを受賞した.

1. Preventive effect of *Dioscorea japonica* on squamous cell carcinoma of the mouse skin involving down-regulation of prostaglandin E₂ synthetic pathway (指導教員：山本登志子) Izumi Tsukayama, Yasunori Takeda, Takuto Mega, Keisuke Toda, Yuki Kawakami, Yoshitaka Takahashi, Masumi Kimoto, Kei Yamamoto, Makoto Murakami, Toshiko Suzuki-Yamamoto, 14th International Conference of Bioactive Lipids in Cancer, Inflammation and Related Diseases. Budapest, Hungary, July 12-15, 2015, ポスター発表
2. Inhibition of leukocyte-type 12-lipoxygenase activity by Chinese tea (指導教員：高橋吉孝) Yoshiko Mori, Akemi Otsuki, Shuji Okochi, Kensuke Okamoto, Yuki Kawakami, Toshiko Suzuki-Yamamoto, Hiromi Yamashita, Masumi Kimoto, Hideaki Tsuji, Hideyuki Ito, Ding Zhi Fang, Yoshitaka Takahashi, 12th Asian congress of nutrition (ACN2015), 14-18 May, 2015, ポスター発表
3. Inhibitory effect of nutmeg extracts on 5-lipoxygenase activity (指導教員：高橋吉孝) Yuki Kawakami, Yoshiko Mori, Kensuke Okamoto, Shuji Okochi, Toshiko Suzuki-Yamamoto, Masumi Kimoto, Hiromi Yamashita, Hideyuki Ito, Yoshitaka Takahashi 12th Asian congress of nutrition (ACN2015), 14-18 May, 2015, ポスター発表
4. Inhibition of atherogenic 12-lipoxygenase activity by tea extracts (指導教員：高橋吉孝) Yoshitaka Takahashi, Akemi Otsuki, Yoshiko Mori, Shuji Okochi, Yuki Kawakami, Ding Zhi Fang, and Hideyuki Ito, International Symposium on

Phytochemicals in Medicine and Food (ISPMF2015), Shanghai, 26-29 June 2015, 口頭発表(招待講演)

5. Acetic acid increases adenosine monophosphate level and phosphorylation of AMP-activated protein kinase in skeletal muscles (指導教員：山下広美) Aya Araki, Yukihiro Yoshimura, Masumi Kimoto, Hiromi Yamashita, 12th Asian Congress of Nutrition, Yokohama, 14-18 May, 2015, ポスター発表
6. Inhibitory effect of the leaf extract of pomegranate on postprandial glucose level in mice (指導教員：伊東秀之) Satoko Kawabe, Iria Akai, Nana Kato, Natsuki Ganeko and Hideyuki Ito, The 7th International Conference on Polyphenols and Health (ICPH2015), Tours, France, 27-30 October, 2015, ポスター発表
7. *Myristica fragrans* 成分による 5-リポキシゲナーゼ阻害効果 (指導教員：高橋吉孝) 川上祐生, 森香子, 岡本憲典, 大河内脩史, 金山友紀, 金子由季, 神崎圭太, 山本登志子, 木本眞順美, 山下広美, 伊東秀之, 高橋吉孝, 第 38 回日本分子生物学会年会, 第 88 回日本生化学会大会 合同大会 (BMB2015), 神戸, 2015 年 12 月 1 日-4 日, ポスター発表
8. ナツメグに含まれる 5-リポキシゲナーゼ阻害成分の探索 (指導教員：高橋吉孝) 川上祐生, 森香子, 岡本憲典, 大河内脩史, 金山友紀, 金子由季, 神崎圭太, 山本登志子, 木本眞順美, 山下広美, 伊東秀之, 高橋吉孝, 日本農芸化学会 2016 年度大会, 札幌, 2016 年 3 月 27 日-30 日, ポスター発表
9. 自然薯低温乾燥粉末の食品機能性の探索 (指導教員：山本登志子) 山本登志子, 川上祐生, 高橋吉孝, 木本眞順美, 津嘉山泉, 武田泰典, 目賀拓斗, 戸田圭祐, 吉尾壯兒, 岡山県立大学 OPU フォーラム 2015, 岡山県立大学, 2015 年 5 月 29 日, ポスター発表
10. Activation of AMP-activated protein kinase and stimulation of energy metabolism by the treatment of acetic acid in L6 myotube cells (指導教員：山下広美) Hitomi Maruta, Yukihiro Yoshimura, Aya Araki, Masumi Kimoto, Yoshitaka Takahashi, and Hiromi Yamashita, 8th International Conference on Cachexia, Sarcopenia and Muscle Wasting, Paris (France), 4-6, Dec., 2015, ポスター発表

(2) 論文発表

1. 高校生を対象とした分子生物学実験に関する報告 (指導教員：山本登志子) 津嘉山泉, 武田泰典, 川上祐生, 山本登志子, 岡山県立大学保健福祉学部紀要, 22, 印刷中 (2016).
2. Inhibition of leukocyte-type 12-lipoxygenase by guava tea leaves prevents development of atherosclerosis (指導教員：高橋吉孝) Yoshitaka Takahashi, Akemi Otsuki, Yoshiko Mori, Yuki Kawakami, Hideyuki Ito, Food Chemistry 186 2-5 (2015).

4-2-2-4-3 保健福祉学大講座

(1) 学会発表

竹本与志人准教授が指導した後期課程の学生 1 名は, 平成 28 年 1 月 25 日に岡山で開催された岡山県保健福祉学会で口頭発表を行い, 前期課程学生 1 名の演題 2 つセットで岡山県社会福祉協議会長賞を受賞した。

1. 民生委員を対象とした認知症が疑われる高齢者を発見した場合の地域包括支援センターへの援助要請意向とその関連要因の検討 (指導教員：竹本与志人) 杉山京, 三上舞, 竹本与志人, 第 22 回岡山県保健福祉学会, 岡山, 2016 年 1 月 25 日, 口頭発表。
2. 民生委員を対象とした地域包括支援センターへの援助要請意向の特徴に関する研究：認知症の早期受診の推進を目指した実態調査 (指導教員：竹本与志人) 杉山京, 中尾竜二, 三上舞, 澤田陽一, 桐野匡史, 竹本与志人, 第 16 回日本認知症ケア学会大会, 札幌, 2015 年 5 月 23-24 日, 口頭発表。
3. 民生委員を対象とした認知症の疑われる高齢者を発見した際の相談先の意向に関する

研究：相談をする人・機関，活動地域に着目して（指導教員：竹本与志人）中尾竜二，杉山京，三上舞，澤田陽一，桐野匡史，竹本与志人，第16回日本認知症ケア学会大会，札幌，2015年5月23-24日，ポスター発表。

4. 地域住民を対象とした認知症の人との接触経験の状況と認知症の人に対する態度の関係（指導教員：竹本与志人）三上舞，杉山京，中尾竜二，竹本与志人，第16回日本認知症ケア学会大会，札幌，2015年5月23-24日，ポスター発表。
5. アルツハイマー型認知症者における比喩理解の障害（指導教員：中村光）藤本憲正，中村光，福永真哉，京林由季子，竹田和也，李多暎，津田哲也，第39回日本高次脳機能障害学会，東京，2015年12月10-11日，口頭発表。
6. 認知症が疑われる高齢者の早期受診に向けた保健医療福祉連携モデルの理論構築（指導教員：竹本与志人）竹本与志人，杉山京，中尾竜二，三上舞，澤田陽一，桐野匡史，佐藤ゆかり，広瀬美千代，堀川涼子，神部智司，第16回日本認知症ケア学会大会，札幌，2015年5月23-24日，ポスター発表。
7. 新人介護福祉士の継続移行における経年変化（指導教員：村社卓）原野かおり，出井涼介，桐野匡史，谷口敏代，中嶋和夫，第23回日本介護福祉学会大会，金沢，2015年9月26-27日，口頭発表。

(2) 論文発表

1. 在宅高齢者からみた地域生活環境状態と地域生活環境満足度の関連（指導教員：村社卓）出井涼介，三原鉄平，實金栄，桐野匡史，中嶋和夫，村社卓，社会福祉学56(2)，75-87，2015。
2. 在宅で高齢者を介護する家族のソーシャル・ネットワークの類型化とその特徴（指導教員：村社卓）桐野匡史，出井涼介，松本啓子，岡山県立大学保健福祉学部紀要，22，印刷中，2016。
3. 介護技術評価尺度の開発（指導教員：村社卓）原野かおり，出井涼介，桐野匡史，谷口敏代，中嶋和夫，岡山県立大学保健福祉学部紀要，22，印刷中，2016。
4. 認知症が疑われる高齢者の早期受診に向けた保健医療福祉連携モデルの理論構築（指導教員：竹本与志人）竹本与志人，杉山京，早期認知症学会誌，9(1)（掲載決定），2016。
5. 地域包括支援センターの専門職を対象とした認知症が疑われる高齢者の受診に対する援助困難感の構造に関する検討（指導教員：竹本与志人）杉山京，三上舞，中尾竜二，佐藤ゆかり，桐野匡史，神部智司，竹本与志人，社会医学研究，33(1)（掲載決定），2016。
6. 民生委員を対象とした認知症が疑われる高齢者を発見した際の相談先の選択の意向（指導教員：竹本与志人）中尾竜二，三上舞，杉山京，竹本与志人，社会医学研究，33(1)（掲載決定），2016。
7. 「ホームヘルパーの主体的で柔軟性のある個別ケア」を測定する尺度の構造（指導教員：竹本与志人）広瀬美千代，杉山京，メンタルヘルスの社会学，21（掲載決定），2015。
8. 血液透析患者の主介護者を対象とした家族機能と療養負担感の関係（指導教員：竹本与志人）竹本与志人，木村亜紀子，杉山京，仲井達哉，佐藤ゆかり，桐野匡史，メンタルヘルスの社会学，21（掲載決定），2016。
9. 血液透析患者の心理的段階とその変容過程（指導教員：竹本与志人）竹本与志人，杉山京，桐野匡史，村社卓，岡山県立大学保健福祉学部紀要，22，印刷中，2016。
10. 認知症予防講座の参加者を対象とした認知症の人との接触経験と認知症の人に対する態度の関係（指導教員：竹本与志人）三上舞，杉山京，中尾竜二，竹本与志人，岡山県立大学保健福祉学部紀要，22，印刷中，2016。
11. Effects of hassles related to wheeled walking aid use on frequency of outings and quality of life among the elderly living at home.（指導教員：村社卓）三原鉄平，朴志先，村社卓，桐野匡史，奥野秀忠，中嶋和夫，日本保健科学学科誌，（掲載決定），2016。
12. 失語症者における言語流暢性課題の成績：品詞の影響と時間推移の分析（指導教員：中

- 村光) 李多暉, 中村光, 伊澤幸洋, 音声言語医学, 56(4), 335-341, 2015 .
13. 語用論的コミュニケーション評価尺度の開発：日本語版 Pragmatic Rating Scale の信頼性 (指導教員：中村光) 藤本憲正, 中村光, 伊澤幸洋, 津田哲也, 栗林一樹, コミュニケーション障害学, 32(1), 11-19, 2015.
 14. The effects of word class and aging on verbal fluency in Korean. (指導教員：中村光) Lee, D. Nakamura, H. Ryu, H., 岡山県立大学保健福祉学部紀要, 22, 印刷中, 2016.
 15. 日本語版 Pragmatic Rating Scale の妥当性と検査精度 (指導教員：中村光) 藤本憲正, 中村光, 清水洋子, 後藤良美, 福永真哉, 岡山県立大学保健福祉学部紀要, 22, 印刷中, 2016.

4-2-3 情報系工学研究科

博士前期課程では, システム工学専攻として 5 領域のいずれかに, 博士後期課程では, システム工学専攻として 3 大講座のいずれかに属しながら研究活動を展開している. 平成 27 年度の大学院博士前期課程学生による研究発表実績を表 1 に示す.

表 1 博士前期課程の研究発表件数

発表内容	件数 (H27 年度)	件数 (H26 年度)
査読付き学術論文	14	7
国際会議録	20	21
全国大会発表	77	88
支部大会発表	64	44
学術表彰・受賞	11	17

昨年と比較すると, 査読付き学術論文が 7 件増加している. 国際会議録は 20 件と昨年並みである. 全国大会発表は 11 件減っているが, 支部大会発表が 20 件増加している.

受賞の主な内容は, 平成 27 年度仁科賞 1 件, FIT2015 (情報科学技術フォーラム 2015) 奨励賞 2 件, 2015 年 IEEE 広島支部学生シンポジウム (HISS) 優秀研究賞 2 件, 同優秀プレゼンテーション賞 1 件, 平成 27 年度電子情報通信学会中国支部連合大会奨励賞 2 件, 学生ケータイあわ〜ど 2015 ケータイアイデア部門入選 1 件, 情報処理学会中国支部奨励賞 (第 66 回電気・情報関連学会中国支部連合大会) 1 件, 第 24 回計測自動制御学会中国支部学術講演会奨励賞 1 件である.

博士後期課程では, ほとんどが社会人学生であり, 本年度は業務多忙等による休学者が多く, 必ずしもその活動は活発ではない.

表 2 博士後期課程の研究発表件数

発表内容	件数 (H27 年度)	件数 (H26 年度)
査読付き学術論文	1	2
国際会議録	0	3
全国大会発表	1	3
支部大会発表	0	0
学術表彰・受賞	0	1

本年度は, 博士の学位を取得し, 研究者として 1 名の大学院生がそのスタートを切った.

今後は, 外国人留学生の増加を指向し, 国際交流を通じてよりグローバルな視点をもつ教育・研究が重要となる.

4-2-4 デザイン学研究科

デザイン工学専攻では、学生数の減少に伴い、昨年度ほどの研究成果は挙げられなかったが、デザイン工学専攻生が TA として指導したチーム（デザイン工学科生 2 名）が、電気自動車普及協議会主催の「国際学生 EV 超小型モビリティデザインコンテスト 2015」において優秀賞（ベネッセ賞）を受賞した。

造形デザイン学専攻では、研究指導の一環として、学会発表を効果的に用い学生の研究への動機付けを図るとともに、質の向上を図った。そのため、学会における研究発表、全国大会 4 件、中四国大会 4 件、産学官連携プロジェクト 6 件において、過去最高 14 の件数を実施することができた。

4-2-5 まとめと課題

4-2-5-1 保健福祉学研究科

本年度も多くの研究成果を発表したが、今後は研究成果の国際誌への投稿ならびに海外国際学会での研究発表のさらなる促進を図る必要がある。

4-2-5-2 情報系工学研究科

博士前期課程の研究活動は概ね順調である。一方、博士後期課程については、休学者の多いことが大きな理由ではあるが、研究活動の活性化が望まれる。平成 27 年度には博士後期課程の早期修了要件を明確に定め、研究活動の活性化を図ると共に、既に研究業績を有する社会人の修学環境を整備した。また、休学者数の減少と入学者数の増加には社会人が学びやすい環境への改善が必要であり、平成 28 年度より、博士後期課程の修了要件を 20 単位から 12 単位に引き下げる予定である。

4-2-5-3 デザイン学研究科

デザイン学研究科では、志願者数激減と定員割れ状況の中で、地域企業や行政・公共団体等との協働を教育手法に積極的に取り入れ、実践的で社会性の高い状況をつくり、院生の学会発表や作品発表について積極的な指導を行ってはいるが、研究科全体としては成果を出し切れていない現状である。根本的には、研究科の試験制度の見直しはいうまでもなく、専攻及び領域におけるカリキュラムの抜本的な見直しなどの改革が急務となっている。

4-3 大学院における国際交流

4-3-1 概要

本学大学院では、各研究科のディプロマ・ポリシーにおいてグローバル人材の育成を掲げている。国際会議での研究発表等については前項に掲載しているが、本学の各研究科で推進した、大学院生の参加する授業プログラムやセミナー、共同研究ならびにワークショップ等について紹介する。特に学術交流協定を締結した大学との交流が、前年度に比べて増加しており、ディプロマ・ポリシーの十全な達成に向けて、今後さらに取組の拡充が期待されるところである。

4-3-2 保健福祉学研究科

4-3-2-1 国際学術交流協定校教員による大学院講義

1. 栄養遺伝解析学特論（保健福祉学研究科博士前期課程栄養学専攻授業科目）
東アジア栄養学特別講義（保健福祉学研究科博士後期課程保健福祉科学専攻栄養学大講座授業科目）

- ① 日程：2015年（平成27年）8月3日（月）～8月5日（水）
- ② 受講者：保健福祉学研究科栄養学専攻博士前期1年次生7名及び保健福祉科学専攻栄養学大講座博士後期1,2年次生3名
- ③ 講義者：方定志教授（中国, 四川大学）
- ④ 講義内容：中国の栄養摂取状況や中国の栄養問題に関する原因解明に遺伝子解析を行った結果などについて講義された。

4-3-2-2 国際学術交流協定校との共同研究

本学教員は、大学院生とともに国際交流協定校の研究者と共同研究を企画し、成果をあげている。平成27年度の課題名は次のとおりである。

- (1) 課題名：中国茶の成分による動脈硬化原因酵素の阻害機構の解明

研究者：保健福祉学部栄養学科 高橋吉孝, 伊東秀之, 川上祐生
四川大学生物・分子生物学科 方定志
本学大学院生 1名

成果：以下の学会で口頭発表（招待講演）を行った。

高橋吉孝, 大槻朱美, 森香子, 大河内脩史, 川上祐生, Fang Ding Zhi, 伊東秀之, 茶剤による白血球型12-リポキシゲナーゼ阻害作用
International Symposium on Phytochemicals in Medicine and Food (ISPMF2015), Shanghai, 2015年6月26日-29日

このほか、インドネシア・ハサヌディン大学から特別研究員を受け入れ、共同研究を開始した。本研究員は平成28年度からは海外特別奨学生として博士後期課程に入学し、さらに研究を進める予定である。

保健福祉学研究科教員が国際共同研究を行った大学は、国際学術交流協定校である又松（ウソン）大学校のほか、協定校ではないが、延世大学、建陽大学、韓国保健産業振興院国際医療本部、ソウル市立大学、ベルゲン大学、スウェーデン農業科学大学、西ミシガン大学である。

また、社会福祉学専攻では、アデレードにおける多文化保健福祉研修プロジェクトを計画し、28年3月18日～3月28日に実施した。

4-3-3 情報系工学研究科

情報系工学研究科では国際会議での研究発表を推奨しており、平成27年度は第2章2-3で述べたように20件の実績を上げている。また、情報系工学研究科では、海外の教育・研究機関で活躍している研究者によるセミナーを不定期に開催しており、平成27年度は以下に概要を示す2回のセミナーを開催した。

開催日時	平成27年12月14日（月）10:20～11:50
開催場所	学部共通棟（南）8206講義室
講演者①	ニューヨーク大学（米国） Zhong-Ping Jiang 教授 Title: Event-Triggered Nonlinear Control: A Small-Gain Viewpoint

講演者②	南洋理工大学（シンガポール） Lihua Xie 教授 Title : Indoor Localization in the View of Internet of Things (IoT)
開催日時	平成 28 年 1 月 19 日(火) 13:30~15:00
開催場所	情報工学部棟 2202 室
講演者①	東南大学（中国） 自動化学院 魏 海坤（Haikun Wei Wang） 教授, 常務副院長 Title : Problems of Singularities in Training of Layered Neural Models
講演者②	東南大学（中国） 自動化学院 張 侃健（Kanjian Zhang） 教授 Title : Online Optimization for a Class of Stochastic Control Systems
講演者③	東南大学（中国） 自動化学院 サイ 軍勇（Junyong Zhai） 教授 Title : Global Output Feedback Stabilization of Nonlinear Systems Using Homogenous Domination Approach

4-3-4 デザイン学研究科

デザイン学研究科では、今年度、大学間の学術交流協定を締結した3大学（台湾・国立雲林科技大学, メキシコ・モンテレイ工科大学, メキシコ・モンテレイ大学）との大学院生の交換留学制度に向けての検討を開始した。具体的には、平成28年4月1日より、台湾・国立雲林科技大学設計学研究所博士後期過程の学生を客員研究員として招聘するための準備を行った。さらに、本学教員（研究科指導教員）がメキシコ・モンテレイ工科大学プエブラ校において、招待講義を行うなど教育レベルの国際交流を活発に行った。

具体的には、

- 1) 平成27年6月13~15日台湾・国立雲林科技大学デザイン学院にて、デザイン工学科児玉准教授が雲林科技大学教員との研究交流を実施した。
- 2) 平成27年9月22~23日台湾・国立雲林科技大学デザイン学院にて、本学部生6名が、雲林科技大学大学院生との合同ワークショップに参加し、同時に本学教員2名による交流セミナーを実施した。
- 3) 平成27年8月30日~9月10日、造形デザイン学科山下教授が、モンテレイ工科大学デザイン学デザイン学部（プエブラキャンパス）の招聘プログラムにて、講義とワークショップを実施した。
- 4) 平成28年1月19~31日、モンテレイ工科大学学生の作品展示会「メキシカン・エクスペリエンスデザイン in 日本」を林源十郎商店生活デザインミュージアム（倉敷市本町）で実施し、山陽新聞に掲載された。
- 5) 平成28年3月1~6日、本学卒業・修了制作展開催期間中、台湾・国立雲林科技大学デザイン学院設計学研究所及びメキシコ・モンテレイ工科大学デザイン学部生の卒業制作品を展示する第2回国際交流特別展示を実施し、同時に台湾・国立雲林科技大学陳光大博士・教授及びモンテレイ工科大学ハス・エルマス博士による国際交流セミナーを実施した。

4-3-5 まとめと課題

4-3-5-1 保健福祉学研究科

保健福祉学研究科では、平成27年度に学術交流協定を締結したネパール・トリブバン大学の教員の指導のもとで、現地でのフィールドワークを行ったほか、栄養学大講座では学術交流協定校であるインドネシア・ハサヌディン大学からの博士後期課程への海外特別奨学生の平成28年度受け入れを実施、保健福祉学大講座では同じく交流協定校である韓国又松（ウソン）大学校からの留学生が平成27年度に博士の学位を取得するなど、交流協定の実質化は着実に進んでいる。平成27年度には香港理工大学看護学院と本学保健福祉学部との間で学術交流協定も締結されたが、今後はその実質化が課題となるとともに、国際的な共同

研究ならびにグローバル教育のさらなる充実に向け、引き続き積極的な海外大学との学術交流協定の締結を目指していく必要がある。

4-3-5-2 情報系工学研究科

情報系工学研究科においては、大学間提携先である中国四川大学の電気情報（情報）学院が本学情報工学部と類似の教育・研究体制を敷いていることから、国際交流の気運が高まっており、平成 27 年 9 月には四川大学で国際交流ワークショップを開催した。平成 28 年度には本学で国際交流ワークショップを開催予定であり、これを足掛かりに大学院生による国際交流の活性化を期待したい。

4-3-5-3 デザイン学研究科

デザイン学研究科では、3 大学（台湾・国立雲林科技大学、メキシコ・モンテレイ工科大学、メキシコ・モンテレイ大学）との学術交流協定を基盤に、大学間交流を活発に進め、大学院留学生増強に向けての準備段階に入ったが、今後に向けて英語による授業科目の新設、異なる学事期での入学制度（秋入学）見直し、単位付与制度を含めた交換留学制度など受入態勢の整備・検討が課題である。

第2部 教育研究開発機構

概要

平成26年度10月に大学教育開発センター、国際交流センターの2センターが発足し、平成27年10月からはさらに学術研究推進センターがスタートした。これらのセンターは教育・研究の関わりの観点から一つの群を構成することが望ましいと考えられるため、平成27年4月から教育研究開発機構を発足させ、上記の3センターが同機構の傘下に入って活動を行う次第となった。将来的にはこれらのセンターが効果的な教育・研究のための事業を連携して行うことも期待される。このような大学機構改革に合わせて、本年度の教育年報も昨年度とは異なる構成を取るようになった。昨年度の年報では第2章においてFD等の教育活動を記し、その内容は概要、大学教育開発センター活動（教育企画室及び6部会）、教育力向上支援事業の3つで構成されていた。しかし、平成27年度は、教育研究を「教育研究開発機構」の下、第2部として再構成し、その内容を3章構成で記述することとした。第1章は大学教育開発センター活動と成果で6部会の活動、地域連携教育（教育改革WG）及び教育力向上支援事業の順で記述した。

第2章は国際交流センターが昨年度までは第1章中に分散して記述されていたのを、今年度から教育研究開発機構の下で活動することになったことを受け、新たに章を立てて記述することとした。第3章は学術研究推進センターとした。同センターは発足後間もないこともあって平成27年度に実施した業務は量的に限定されているものの、1章を付与して記述することとした。

第1章 大学教育開発センターの活動と成果

1-1 概要

大学教育開発センター（以下、センター）は2014年4月から半年の準備室の期間を経て、同年10月に発足し活動を開始した。2015年4月にはメンバー（センター員、幹事）を充実して大略現在の構成となって二年間の任期で活動を開始した。平成28年3月で発足以来一年半を迎えるが、当初、「アドミッション部会」、「共通教育部会」、「FD部会」、「教育評価部会」、「キャリア形成支援部会」、「学生支援部会」の機能的6部会制でスタートし、各部会とセンター全体の取りまとめを行うための「教育企画室」も同時に発足させた。当センターはその部会名称からも想像される通り、大学の入り口（入学以前）から出口（卒業及びそれ以降）まで縦断的に教育の課題を網羅し、学生のキャリアを縦断的、横断的に考慮しながら教育改善に向けた取組ができるような構成としている。世界的に見ても人材育成の仕上げである大学における教育改革は非常にダイナミックに動いている。これはグローバル化、技術革新、少子化等を受けた社会の変容などの複雑な要素が絡んでいると思われるが、グロー

バルな知識基盤社会において活躍できる人材育成を意図して行われているものであることは言を待たない。新しい時代の趨勢と大学志願者の特性の双方をよく見極めて教育改革を行うことによって本学の教育の質を高めること、また入学生の学修の促進を図り、個々の学生が在学中にキャリア（学士力及び社会対応能力）を積み上げながら進学と就職に備えることを促進し、社会が期待し、かつ学びを継続して社会を生き抜くような人材を輩出することを心がける必要がある。岡山県立大学では、過去着実にFDや様々な教育改革を行ってきたが、教育における「企画-実施-評価-フィードバック」というそれぞれの連環を考慮した仕組みを強く意識したものになっていなかった。それぞれの教育に係る重要要素（ポリシー、授業改善活動、学生授業評価アンケート、学生アンケート等）が独立して行われており、それらの実施効果を実際の教育に反映させるための方策が欠けていたり不備であったりするため、現在形骸化している部分も多い。これらの要素を有機的に結合し、大学理念や教育改革目標（ポリシー等）の実現に向けて、早急に改善を図る必要があり、そこにセンターの存在意義が見出される。

大学の教育は、当然のことであるが、大学を構成する教員は授業を提供する教員でありまた同時に学究の徒であるので、自らが行う研究の過程を学生に適切に示すことで課題発見や解決への興味を高め、研究の過程で確立してきた科学的追究におけるものの見方、考え方、課題発見や解決への手順等を通じて、後継者を育成する、の心で時間をかけて教育に当たる必要がある。大学におけるそのような観点では教育と研究は分立したのではなく、大学教育は両者が融合したものである必要がある。当センターは、未だ個々の教員の教育の実施に関する支援を展開するに至っていないが、今後さらに情報提供を行いつつ、教育支援の展開も徐々に進めてゆく方針である。

平成 27 年度、本学は文部科学省補助金事業である「地(知)の拠点大学による地方創生推進事業 (COC+)」に選定された。この事業は県内大学在学生の地元就職率を向上させて東京一極化を軽減するために地域創生を推進し、また学生に対する教育においても地域課題に取り組む授業を実施して、地域の自治体や民間、産業との交流を深めて地域との親和性を高め、地域との交流の中で社会人としてのコミュニケーション力や課題に協働して取り組む能力を育成しようとするものである。当事業は岡山大学や岡山理科大をはじめとする大学コンソーシアム岡山に参加するほとんどの大学、岡山県、総社市をはじめとする5つの自治体、また多くの経済、産業団体とタッグを組んで行われるものである。本学ではこれを「岡山創生学」という副専攻としてカリキュラムを構成し、全ての学部・学科から受講生を募り、学内で養う専門的知識や技術と地域での実践活動を結びつけることに想を練って欲しいと考える次第である。そのために、当センターでは従来の6部会に加えて新たに教育改革WG（ワーキンググループ）をセンターとCOC+推進企画委員会の下に置き、大学教育開発センター副センター長がWG長を務めることになった。なお、同事業は地域共同研究機構、地域連携推進センターと一体となって実施するものであり、その基盤作りは大学と自治体、市民、NPO、また大学と産業との協働で地域人材の育成と地元定着を図る仕組み作りが必要になるものの、事業全体として教育改革に収斂するものであるため、教育年報においてそれらを取り扱うこ

ととなった。

平成 27 年度において、センター組織で実施してきた業務は大略図 1 に示すようなものである。平成 27 年度計画において実施してきた業務概要は表 1 の通りである。ここに掲げる業務については平成 27 年度において実施したものであり多くの成果が得られているが、終了したもの、継続して行っているもの、緒についたばかりのもの等その進捗については様々である。各々の内容については各部会の報告を参照していただきたい。ただし、表に掲げた業務が全て本年報での記述対象になっているわけではない。

表 1 大学教育開発センターの各部会における主要業務

教育企画室	アドミッション部会	共通教育部会	FD 部会	教育評価部会	キャリア形成支援部会	学生支援部会	教育改革 WG (副専攻「岡山創生学」)
①FD・SD 研修会企画	①入試形態と入学後成績関連の分析と評価	①教養教育の体系化活動	①授業評価アンケートの実施と分析	①新シラバスの設計	①就職・進学支援体制構築	①学生アンケート企画の改善	①「岡山創生学」カリキュラム編成
②DP・CP・AP の整備 (定期見直し)	②入試改革対応と調査	②アクティブ・ラーニングの実践と評価	②相互授業参観の実施と評価	②体系的カリキュラム構築 (科目ナンバリング)	②インターシップ	②学生支援室企画の実施 (学生生活活性化)	②「岡山創生学」シラバス作成と連携
③教育年報の編纂と発行	③高大接続調査研究	③教養教育の成果検証 (ルーブリック)	③アクティブ・ラーニングの実践と評価	③GPA の実施と分析	③卒業時アンケート実施と分析	③ボランティア育成・組織化	③「岡山創生学」案内冊子等の作成
④副専攻「岡山創生学」活動推進	④大学授業開放の実施と評価	④共通教育と専門教育の連携	④教職員職能開発調査研究	④教育・学修の評価アンケートの作成と体系化	④卒業生、修了生 (OB, OG) アンケート	④障害者差別解消法施行対応	④域学、産学WGとの連携による演習科目構築
⑤クォーター制実施準備	⑤入学時アンケート等作成と実施	⑤地域連携基礎教育の企画と推進	⑤新任教員研修等企画	⑤クォーター制に関する調査	⑤キャリア支援システム構築 (ポートフォリオ)	③学生便覧の検討	
			⑥教育支援室企画		⑥同窓生組織化等		

1-2 大学教育開発センターの各組織の活動

1-2-1 概要

大学教育開発センターは、教育企画室、6 部会 (アドミッション部会、共通教育部会、FD 部会、教育評価部会、キャリア形成支援部会、学生支援部会) と本年度文部科学省の「地 (知) の

拠点大学による地方創生推進事業(COC+)」に選定されたのを機に設置された「教育改革ワーキンググループ(教育改革WG)」から成っている。現在、これらの部会では従来の業務として行っていたものを継承し発展させてゆくことと、今後の本学の教育改善に繋げて行くための新規事業の基本的に二本立てで業務を遂行している。センターでは、従来の委員会形式から自薦、他薦で選ばれたメンバーによるセンターの部会で構成されており、また事務局も教員と対等の立場で参加している。そのため、従来の委員会では実際の作業に携わるのは各学部・学科や事務局であったため連続性が担保されないという断続性の問題や課題遂行において十分掘り下げて実施する体制が欠けていたのに対して、センターと部会では従来の委員会と作業実施が学部・学科間や、教員と事務局間の境界を取り払いセンターと云うユニットで一体化して行われるところに大きな特徴がある。課題は色々と考えられるものの、各部会と云うユニットは今までの委員会では実現できなかった面を発揮しつつあり、大学の諮問を受けて作業するのみならず、自発的に企画提案を行うシンクタンク集団として機能し始めている。

1-2-2 教育企画室

1-2-2-1 概要

センターでは昨今の激しい教育改革の潮流を的確にとらえて本学の教育・研究活動をより効果的で先進的なものにするべく、平成 27 年度は教育企画室、幹事会、複数の部会¹、事務局を置いて活動を行っている。その中で、教育企画室は多様な機能を有するセンターの活動全体を俯瞰し、センター業務を部会縦断的、横断的に連携させてコミュニケーションを活発化させ、各部門の企画力、調査力、提案力の継続的向上を図ること、センター活動成果を大学システムに反映する目的で提案を行う作業等を実施している。以下に平成 27 年度のセンターと主要な活動について紹介する。

- ・大学教育開発センターと教育企画室の役割
- ・FD・SD 研修会の実施
- ・センター員に対する学外研修の機会提供
- ・事務局機能
- ・情報やデータに基づく大学教育開発センターの運営

1-2-2-2 大学教育開発センターと教育企画室の役割

センターでは多数の部会(6部会1WG)を擁しているため、各部会及びセンターとして円滑な業務遂行と情報の疎通等を図るために教育企画室を設置している。現在、教育企画室は、教育研究開発機構長、大学教育開発センター長、大学教育開発センター副センター長によつ

¹ センター発足時は6部会であったが、昨年度の文部科学省補助金事業である「地(知)の拠点大学による地方創生推進事業」取得後にセンターに属するワーキンググループ(WG)として「教育改革WG」が設置されたので、6部会1WGとなった

て構成されている。教育企画室の主要な業務は、①センターの幹事会の開催、②「FD・SD 研修会」の実施計画作成、③各部会の事業計画の取りまとめ、④部会活動の集約、⑤大学委員会（常任、専門）への提案及び、大学教育活動や改革に係るセンターの指針作成、⑥センター活動予算案作成、⑦新規事業の提案、⑧全学への情報提供等を行っている。

大学教育開発センターでは、教育の向上に向けて自主的に実施している部会活動等の成果を大学に提案すること及び大学からの諮問を受けて調査・研究等を行い答申することを業務として行っている。この双方向の流れを現状で示すと図1の様になる。

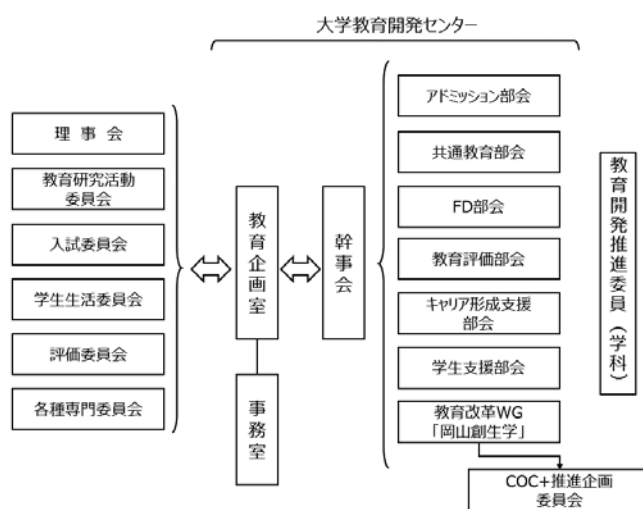


図1 大学教育開発センターにおける情報のフローと教育企画室の役割

1-2-2-3 FD・SD 研修会の実施

教員の教授能力改善、職員の職務能力向上を目的とするFD・SD (Faculty Development and Staff Development) 研修会の企画は教育企画室の主要な業務の一つである。センターの研修会は3種類に分けられている。一つは「全学研修会」であり、年2~3回の開催を目標とし、全教職員の出席を原則とする研修会である。外部から講師を招聘し、最新の教育関連情報を得て全学的な教育改革に役立つ情報を得ることを目的にしている。また全学研修会では、教職協働を考慮して両者にとって有用な研修の機会になるように配慮している。二つ目は「教育開発講座」であり、この研修会はセンターの6部会1WGの主要業務と関連するテーマを関連させて行うものであり、各部会が主催し、外部講師を招聘すること、あるいは内部の講師を立てるなど部会の采配でテーマ、人選を自主的に行うものである。「教育開発講座」はセンター関係者の出席を原則としているが、それ以外の教職員の参加は任意としている。三つ目の研修会である「センターワークショップ」は主にセンター内での教育に関する学修のための機会として設定した研修会であり、研修会への参加報告、部会等による調査・研究成果の発表を主眼として行う。「センターワークショップ」については、センター関係者の出席を原則としているが、それ以外の教職員の参加は任意としている。何れの研修会についても、実施の予告は全学的に行うことを原則とするが、「センターワークショップ」はセンター内で

の議論の場とすることもあり,そのような場合は開催の広報はセンター内に限定される.なお,学生(学部,大学院)の参加は「FD・SD研修会」,「教育開発講座」については全て,「センターワークショップ」についてはセンター内に限定しない場合については全て呼びかけを行う.

平成27年度は,「全学研修会」を1回(平成26年度に実施分2回),「教育開発講座」を6回,「センターワークショップ」を3回実施した.また,その他としてセミナーを1回開催した.その概要は表2及び3に示すとおりである.

【全学研修会】		
1	『全学的な教育改革のための組織改編と教職協働 ～愛媛大学での経験から～』	大学教育開発センター
2	『産業界ニーズ GP における本学デザイン学部の取組概要』	大学教育開発センター
3	『大学教育とファカルティディベロプメント』	大学教育開発センター
【教育開発講座】		
1	『岡山大学アドミッションセンターの十年』	アドミッション部会
2	『広島大学における「クォーター制(4学期制)」導入について』	教育評価部会
3	『発達障害の理解と支援—これからの大学に求められること』	学生支援部会
4	『スピーキングと多読学習に励む県大生—オープンボイス開発と英語高度化プロジェクト』	共通教育部会
5	『「地域密着型大学」発・キャリア支援のこれからのかたち』	キャリア形成支援部会
6	『「アクティブ・ラーニング(能動的学習)型授業の意義・効果・始め方』	FD部会
【センターワークショップ】		
1	『入試ワークショップ-全国大学入学者選抜研究連絡協議会・研究会参加報告』	アドミッション部会
2	『アクティブ・ラーニングに関する本学の実施状況と今後の展開』	FD部会
3	『現代の学生の特質を踏まえたグローバル人材育成教育』	大学教育開発センター
その他	グローバルセミナー『英語で学ぶプロジェクト企画とマネジメント』	大学教育開発センター

表1 大学教育開発センターFD・SD研修事業: H26~27年度実施状況

	講演タイトル	参加 教員	参加 職員	学生	学外
【全学研修会】					
1	『全学的な教育改革のための組織改編と教職協働 ～愛媛大学での経験から～』	111	43	0	0
2	『産業界ニーズ GP における本学デザイン学部の取組概要』	121	7	0	0
3	『大学教育とファカルティディベロプメント』	97	24	5	0
【教育開発講座】					
1	『岡山大学アドミッションセンターの十年』	50	8	0	0
2	『広島大学における「クォーター制(4学期制)」導入について』	78	20	2	0
3	『発達障害の理解と支援—これからの大学に求められること』	56	24	7	31

4	『スピーキングと多読学習に励む県大生ーオープンボイス開発と英語高度化プロジェクト』	18	9	5	1
5	『「地域密着型大学」発・キャリア支援のこれからのかたち』	51	7	1	3
6	『「アクティブ・ラーニング（能動的学習）型授業の意義・効果・始め方』	33	4	0	0
	【センターワークショップ】				
1	『入試ワークショップ- 全国大学入学者選抜研究連絡協議会・研究会参加報告』	25	6	0	0
2	『アクティブ・ラーニングに関する本学の実施状況と今後の展開』	34	7	0	0
3	『現代の学生の特質を踏まえたグローバル人材育成教育』	38	11	3	2
その他	グローバルセミナー『英語で学ぶプロジェクト企画とマネジメント』	5	3	18	3

表 2 各研修会の参加者数

なお、センターでは研修会講師の許可を得て撮影した講演ビデオやプレゼンテーションマテリアル、ハンドアウト等を学内専用サイトにおいて、教員や職員に提供している。授業やその他の止むを得ない事情によって出席できなかった教職員は自由に閲覧できるが、その利用は個人に留めるべきものであるため、学外等での使用は厳に慎んでいただきたい。

1-2-2-4 センター員に対する学外研修の機会提供

センターではセンター所属者（センター員）に対して学外で行われる教育関係の集会や学会に参加して関連知識を深めたり情報を収集しうる機会を提供するために、部会や参加者からの申請に応じて参加経費をセンター運営経費から支出するシステムを設けている。参加者にはおいては、復命書等に詳細な報告書や資料添付を行い、センター内における情報共有を図るように要請している。平成 27 年度は比較的申請は少なかったが、申請手続きのマニュアルを作成したこともあり、今後は活発化するものと想定される。

平成 27 年度の実績は 26 件であった。内、11 月以降が 16 件あり、センター員の教育研修への意識向上とセンター経費による出張方法への理解が深まったことの双方の可能性が考えられる。

1-2-2-5 センターの事務局機能

センターでは、各部会、幹事会の会合で実施される会議の議事要旨の収集及び作成等を行い、それをホームページに掲載（全教員・職員の閲覧が可能）すると共に、センター員への配布（メール配信）を行っている。また上述のように、FD・SD 研修会については、研修会の次第、ハンドアウト、プレゼンテーション資料、講演の写真・動画等をホームページに掲載する作業を行っている。その他、広報機能、予算執行手続き等の広範な業務を担っている。

それらの事務的業務に加え、各種の教育情報（論文、資料、ニュース）等の収集も行っている。また、次年度には紀要の発行、ニュースレターの発行も予定しているが、事務職員は現在一人に過ぎず、センターと事務局双方の作業を行っているために業務増加に対する対応は時間的に厳しい状況なのが実態である。

1-2-2-6 情報やデータに基づく大学教育開発センターの運営

センターは委員会組織とは異なり、教育に関する提案機能、諮問を受けて調査、研究を行い答申する機能を軸に動いている。最新の情報、既存情報を自ら獲得して創造的活動を随時行っているため、センター員の負荷を考慮する必要がある。そのため、部会ではコミュニケーションをメール、または平成 28 年度導入予定のグループウェアを介して効率的に実施することが望まれる。また IR (Institutional Research) は大学が記録あるいは取得したデータに基づく将来的活動の方針、方策を立てるために必須のものであるが、部会活動でそれを完全に担保することは、次年度導入予定の全学情報システムの導入によっても難しいと考えられる。そのため、センターの更なる活動強化には IR 担当者(職員)の導入が必要であり、本学における喫緊の課題と考えられる。

1-2-2-7 まとめと課題

教育企画室では文部科学省や中央教育審議会の最新情報の収集、また教育関係の研究や実践に関する国内外の情報の収集を行って時流を見極めること、また学内から得られる各種教育関連情報を基にセンター及び各部会における教育刷新のための事業立案を行い実施に移すことを促進する役割を担っている。平成 26 年度後半から 27 年度にかけて、3 種類の異なる機能を付与したセンターFD・SD 研修会を多数開催し、本学に外部の大学の情報提供を行い、一定の成果を収めた。よって次年度も同様に 3 種の研修会を継続して行うことが有用と考えられる。その中でも、平成 27 年度は特に部会の勉強会の位置付けであるセンターワークショップをより活発に行う必要があると考えている。それは各部会が行う事業は、その方向付けや評価において科学的洞察に基づく判断が必要であり、そのためには外部の既存情報に関する知識を得ることが大事で、各部会とも恣意的に判断するのではなくできるだけ多くの情報を収集して、科学的な見地から作業仮説に基づく事業推進を図ってゆくためである。本学の教育は、ある種堅実な従来型の「学士力」偏重教育が主流であると思われ、その方法論についても対象の学生からの評価を適切にフィードバックするという面で不足があり、学生の学修を活性化させる手段も大学として方針を立てて行ってきたとは言い難い。教育企画室では、次年度においても、教育の質の保証(企画-実施-評価-フィードバックの連環)を、教員、学生、職員のそれぞれの立場を考慮して高めるための方策を講じてゆく予定である。

1-2-3 アドミッション部会

1-2-3-1 概要

今後大学全体の入学志願者数の減少が見込まれる中、本学の教育に適性のある入学志願者を確保するための対策を講じることは急務である。この目的の達成に向けて、本年度は本学の魅力を高校ならびに受験生にアピールする企画であるオープンキャンパスや進学相談のアンケート分析、大学主催での計画的な高校訪問の企画などを行うとともに、入試改革の

基礎資料として、入学時アンケートならびに入試日程別の成績追跡調査と分析を実施した。さらに、高大接続事業として高校生のための大学授業開放を立案し、大学全体の企画として今年度初めて実施した。学内研修会としては、教育開発講座とワークショップを主催した。

1-2-3-2 入試環境調査

1-2-3-2-1 入学時アンケート

入学時アンケートは従来学部単位で任意に行われていたが、本年度は各学部で形式は異なるが、初めて全学部において入学時アンケートが実施された。

(1) 保健福祉学部

今後の入試改革に向けての情報収集と、広報戦略で重視すべき点を明らかにする目的で実施された。現在実施している個別入試が受験しやすかったと答えた学生は、理科の学力試験のみを個別学力検査科目として課している栄養学科では 90%を超えたのに対し、小論文と面接を課している看護学科と保健福祉学科では 70%台にとどまった。これらの学科で受験しにくかった理由としては小論文を挙げた学生が多く、苦手意識をもっていると答えた学生のほか、国語の問題のようで自分の意見が述べられないなど具体的に答えた学生も見られた。看護学科で実施している集団面接が受験しにくいと感じた学生が多いことも明らかとなった。受験科目にあつたら受験しなかったと思う学力試験科目として、最も少なかったのは英語である一方、すべての学科で TOEIC や英語検定のような外部試験の導入には抵抗感を持つ学生が多かった。また、いずれの学科でもほとんどの学生が、プレゼンテーションによる試験や聴講型試験に対して抵抗感をもっていることも明らかとなった。本学に期待することとしては、いずれの学科も就職支援と国家試験対策がトップであったほか、体験型授業など多様な授業を期待する学生が多かった一方で、教養教育の充実や外国人留学生の受け入れを期待する学生は少数であった。また、本学オープンキャンパスに参加したことがある学生は全体の 50%であったのに対し、本学の進学ガイダンスに参加したことがある学生、ならびに保護者対象説明会に参加したことがある学生はいずれも 10%台にとどまり、これらの大学広報としての効果の限界も示された。

(2) 情報工学部

大学選択の際に、予備校や受験雑誌の情報がほとんど参考にされておらず、高校教員からの意見が最も参考にされているという点は、保健福祉学部の結果と一致しており、受験生の獲得において高校進路指導教員との意見交換会や高校訪問など、大学教員と進路指導教員とのコミュニケーションが重要であることが確認された。広報媒体として大学ホームページや大学案内等を参考にする受験生が多いことも保健福祉学部の結果と一致したが、アドミッション・ポリシーを参考にする受験生が実質的にほとんどいなかったことが示され、他学部での調査が必要であると同時に、アドミッション・ポリシーの制定の際に意識すべき課題と考えられる。なお、各学科のカリキュラムは、国立大学で例が少ない複合型であるため、アドミッション・ポリシーでは、各学科の教育内容と工学の伝統的な分野である土木、機械、電気、応用化学との関係性を平易に説明する必要がある。また、オープンキャンパスを

参考にして受験した学生は推薦入試が中心で、中期日程の学生がほとんど参考にしていないことは、広報戦略の力の入れ方に一石を投ずるものと思われ、他学部でも同様の調査が必要である。

(3) デザイン学部

入学時に本学に期待したこととして専門教育がトップに挙げたこと、本学の志望動機として学科教育が希望に近いことがトップに挙げたことは、専門教育の重要性を改めて認識させた結果である。一方、入学時に不安に感じていることとして履修・単位修得のことが就職のことを抜いてトップであったことから、履修指導を丁寧に行うことが今後の課題であると思われる。今後は、受験生が参考としている情報や個別学力検査等の設問を追加し、広報戦略や入試改革のための基礎資料収集ができるアンケート内容となるよう検討することが望まれる。

1-2-3-2-2 入学試験区分別成績追跡調査

(1) 保健福祉学部

① 看護学科

平成 23 年度入学生から平成 27 年度入学生の入学後の成績を、入学試験区分（推薦入試、前期入試、後期入試の 3 区分、以下、入試区分）別に一元配置分散分析を用いて比較した。比較に用いた入学後の科目は、2 年次までに修得する専門基礎科目の成績を用いたため、3 年次以降の看護の専門科目や臨地実習は含まれていない。

入試区分	平成 23 年度	平成 24 年度	平成 25 年度	平成 26 年度	平成 27 年度
推薦入試	78.0±3.3	79.2±4.6	81.5±4.1	75.3±5.0	80.4±5.2
一般入試（前期日程）	78.0±5.1	79.9±3.4	80.9±3.8	76.8±5.1	78.1±5.0
一般入試（後期日程）	77.8±5.1	78.8±4.1	80.2±4.0	77.9±2.9	79.5±4.4
統計学的有意差	なし	なし	なし	なし	なし

科目全体の合計点でみると表に示したように、入試区分により成績の有意差はみられなかった。しかし、科目別にみると入試区分により有意差のみられた科目がみられた。有意差のみられた科目は、平成 23 年度入学生と平成 26 年度入学生の英会話 I、基礎英語 I、平成 24 年度入学生は基礎看護学実習 I、平成 25 年度入学生は、日本国憲法と薬理学であった。薬理学では前期入試の得点が高かった。英会話 I では、平成 23 年度生は前期入試の学生の得点が、平成 26 年度入学生は推薦入試の学生の得点が低かった。基礎看護学実習 I は後期入試の学生の得点が、日本国憲法は前期入試の学生の得点が低かった。以上の結果より今回検定した科目では、入試区分により入学後の成績に差があるとは言えない。

次に、入試区分（推薦入試と一般入試）の成績（小論文、面接試験、センターの得点）と入学後の成績について相関分析を用いて確認した結果、入試の成績と入学後の成績は有意な関係はみられなかった。小論文の得点とセンター試験の得点と入学後の成績には明らかな関係はみられなかった。面接試験と入学後の成績には有意差はみられなかったが、平成 24 年度入学生の一般入試では、面接試験の成績と入学後の成績の関係が $r=0.344$ 、 $p=0.068$ であ

り、面接試験が入学後の成績を予測する可能性が示唆された。センター試験の結果と入学後の成績の間には有意差はみられなかったが、センター入試の成績が最も低かった平成 25 年度入学生は、授業への参加態度や理解度及び学習意欲に関する問題がみられており、一定の基礎学力は入学後の学習を発展させるために必要であると考えられる。

以上より、入試区分により入学後の成績の差はみられないことから、入学後の学習への動機づけの重要性が確認された。また、入学時の面接の方法を工夫することで、良い学生を選抜できる可能性が示唆された。入学時の基礎学力はその後の学習に重要であり、基礎学力を測定する方法は入学時に必須であると考えられる。一方で、今回の分析に用いた科目は、基礎的な科目を中心に客観的な評価が可能な専門科目を選定した。3 年生以降のレポートで評価する看護の科目及び臨地実習は含まれていないため、「看護師の実践能力」についての評価は行えていなかったという限界がある。

②栄養学科

平成 23 年度入学生から平成 27 年度入学生までを対象として、入試区分別（推薦入試、前期日程、後期日程）と入学後の専門科目の成績について相関分析を行った。各年度とも入学後の成績の平均点には有意な差はみられなかった。

入試区分	平成 23 年度	平成 24 年度	平成 25 年度	平成 26 年度	平成 27 年度
推薦入試	77.9±2.5	78.9±7.3	82.0±4.5	79.0±4.3	78.3±4.4
一般入試（前期日程）	79.2±4.0	79.0±3.8	79.5±4.7	83.2±5.3	81.9±3.3
一般入試（後期日程）	74.1±4.5	81.3±0.8	79.7±9.1	84.7±5.8	78.7±4.8
統計学的有意差	なし	なし	なし	なし	なし

入試科目別の入試得点と入学後成績との相関について、推薦入試では小論文得点と面接得点を、前期日程ではセンター試験の合計得点、センター試験の英語の得点及び理科の合計得点、さらに個別入試科目の化学と生物の得点及び理科の合計、後期課程ではセンター試験の合計得点について、それぞれ入学後の成績との相関分析を行った。その結果、小論文では有意ではないが、負の相関がみられる年度（平成 23、26 年度）もあったが、面接では平成 27 年度のみではあるが入学後の成績と有意な正の相関（ $p < 0.05$ ）が見られた。前期日程では平成 26 年度の個別入試科目の生物で有意な正の相関（いずれも $p < 0.05$ ）がみられた。その他、センター試験の英語は有意ではないが、正の相関がみられる年度（平成 24 年度）もあった。後期日程では母数は少ないが、平成 24 年度（ $p < 0.05$ ）と平成 26 年度（ $p < 0.01$ ）のセンター試験合計で有意な正の相関がみられた。

以上の結果から、推薦入試においては面接を重視するなど、配点や内容も含めて今後の検討が望まれる。また、センター試験の配点等も再考してもよいと考えられ、さらに個別入試科目の化学と生物についても年度によっては有意な正の相関がみられ、出題内容あるいはセンター試験との配点割合などの検討が望まれる。

③保健福祉学科

平成 23 年度入学生（平成 27 年 3 月卒業）から平成 27 年度入学生までを対象に、入学時から平成 27 年度前期成績分までの個人データを用いて分析を行った。

入試区分	平成 23 年度	平成 24 年度	平成 25 年度	
			社会福祉学専攻	子ども学専攻
推薦入試	84.1±2.4	83.0±3.1	83.1±4.0	82.1±2.8
一般入試（前期日程）	83.6±4.0	82.3±2.5	82.0±3.7	84.3±2.6
一般入試（後期日程）	84.1±2.3	80.2±2.9	83.8±3.5	83.1±2.1
統計学的有意差	なし	なし	なし	なし

平成 26 年度		平成 27 年度	
社会福祉学専攻	子ども学専攻	社会福祉学専攻	子ども学専攻
82.0±2.7	81.5±2.2	84.7±4.4	85.7±3.0
83.3±5.4	82.7±4.2	84.7±4.8	85.3±4.6
82.9±3.6	85.6±3.9	84.6±3.3	81.3±4.7
なし	なし	なし	なし

入試区分別にみた入学後成績の比較については、各専攻における主要科目を選定し、Welch 検定を行った。Welch 検定で差が確認された場合には、Games-Howell 法による多重比較補正を行った。これらの検定では、p 値が 0.05 未満を示したものを統計学的に有意とした。

分析の結果、年度によっては一部の科目に有意差が確認されたものの、すべての年度において主要科目平均点には有意差が確認されなかった。入試区分別にみた入試得点と入学後成績との相関については、すべての学生が選択する受験科目（推薦入試は小論文と面接、一般入試は小論文と面接に加えて国語と外国語）を入試得点とし、入学後の主要科目平均点との相関係数（Pearson の積率相関係数）を算出した。相関係数は p 値が 0.05 未満を示したものを統計学的に有意とした。なお、本分析では一般入試の前期日程と後期日程は分けずに「一般入試」として分析を行った。分析の結果、年度により一般入試の入学生において面接の得点との間に有意な相関が確認されたものの、小論文や国語、外国語の得点との間には有意な相関が確認されなかった。

今後の課題として、入試区分別において入学後成績は有意差が確認されなかったものの、入試得点においては年度により一般入試において面接の得点と入学後成績との間に有意な相関が確認された。面接の得点が入学後成績と関係していたのは、本学科が専門職養成を主としていることが一因と考えられる。しかしながら、本結果のみでは面接重視型の選考へ移行することが最も良い選択か否かの判断ができないことから、今後は面接の評価基準の改訂を行ったうえで再度確認していくことが望まれる。

(2) 情報工学部

① 情報通信工学科

平成 23～26 年度入学生を対象として、学生ごとに、主要科目の素点（100 点満点）の平均点を算出した。入学年度ごとに、推薦入試、前期日程、中期日程の三つにグループ化し、相互に有意水準 95% で Welch 検定を行った。

入試区分	平成 23 年度	平成 24 年度	平成 25 年度	平成 26 年度	平成 27 年度
推薦入試	64.1±7.8	70.1±4.7	76.7±3.6	74.3±3.0	64.0±7.1
一般入試（前期日程）	70.4±4.4	72.4±7.4	78.2±4.3	77.1±2.3	68.6±5.2
一般入試（中期日程）	70.4±3.8	71.6±2.8	77.4±2.6	76.4±5.1	80.9±3.5
統計学的有意差	なし	なし	なし	なし	あり

平成 23～26 年度については、有意な差は認められなかった。平成 27 年度については、推薦と前期では有意差が認められなかったが、推薦と中期、前期と中期で有意差が認められた。

②情報システム工学科

共通教育科目の必修科目と学部教育科目の全科目を対象として、合格科目の素点に単位数の重みをつけて平均をとった。学生ごとに履修科目が異なるので、一人の仮想的な合格者の観測値の平均と考えて、平均値の 95%信頼区間をとっている。有意差は t 検定で確率が 0.05 を下回るものを有意差ありと判定している。

入試区分	平成 23 年度	平成 24 年度	平成 25 年度	平成 26 年度	平成 27 年度
推薦入試	74.8±2.5	77.3±3.1	76.6±2.3	77.3±1.9	78.5±1.9
一般入試（前期日程）	77.5±1.5	79.9±3.1	79.2±2.1	77.7±2.6	79.7±2.9
一般入試（中期日程）	79.6±2.1	77.7±1.3	78.3±1.6	80.5±1.8	81.0±2.3
統計学的有意差	推薦と中期の間 に有意差あり	なし	なし	推薦と中期の間 に有意差あり	なし

平成 23 年度の推薦と中期、平成 26 年度の推薦と中期において有意差が認められた。

③人間情報工学科

平成 27 年度に人間情報工学科が開設されたため、前身のスポーツシステム工学科の平成 23～26 年度入学生を対象として、入学年度ごとに、学部教育全科目の素点(100 点満点)の平均点を算出し、入試区分ごとの有意性を有意水準 0.05 で検定した。

入試区分	平成 23 年度	平成 24 年度	平成 25 年度	平成 26 年度	平成 27 年度
推薦入試	69.8±19.9	73.9±19.0	72.2±15.7	64.2±20.7	75.8±10.5
一般入試（前期日程）	78.6±15.4	78.8±15.9	78.3±13.9	71.0±17.3	76.3±12.5
一般入試（中期日程）	75.6±20.2	69.7±26.2	77.5±13.2	69.4±21.2	79.4±10.4
統計学的有意差	なし	なし	なし	なし	なし

平成 24 年度以前と平成 25 年度以降とは、指標とした授業科目が異なるため、単純な比較はできないが、いずれの入学年度においても入試区分による統計学的有意差は見られなかった。しかし、推薦入試の平均点は他の入試区分に比べ、低い傾向にある。

④情報工学部のまとめと課題

一部を除いて、入試区分ごとの平均点に有意な差は認められないものの、推薦入試の平均点が総じて低い。t 値の確率を見ると、例えば、情報通信工学科平成 23 年度の推薦と中期で 0.074、情報システム工学科平成 25 年度の推薦と前期で 0.081 であった。有意差はないが、有

意な傾向にはあると考えられるため、推薦入試では意欲や基礎学力のある学生が取れていない可能性があり、このことに対する高大連携を含む対策が課題としてあげられる。今後は、工学系学部の基礎科目である数学や物理により重点を置いた調査も必要と考えられる。

(3) デザイン学部

① デザイン工学科

デザイン工学科では、平成 23 年度入学生、平成 24 年度入学生、平成 25 年度入学生、平成 26 年度入学生、平成 27 年度入学生について、1 年次前期の代表的な 7 科目の平均点を入試区分別に比較した。

入試区分別の入学後成績の平均値に有意な差は認められなかったが、抽出した科目の平均点をみると、推薦入試の入学者は一般入試の入学者よりも英語はやや低い傾向にあり、実技を伴う科目はやや高い傾向にあることが確認できた。

入試区分	平成 23 年度	平成 24 年度	平成 25 年度	平成 26 年度	平成 27 年度
推薦入試	81.3±10.0	77.0±8.1	77.2±1.2	77.5±3.0	77.2±5.5
一般入試(前期日程)	79.6±6.9	80.0±6.8	79.0±2.5	77.5±2.4	77.9±5.4
統計学的有意差	なし	なし	なし	なし	なし

また、入試区分別にみた入試得点と入学後の成績との相関については、推薦入試における実技と面接に有意な相関は確認できなかった。一般入試においては、実技と国語においては有意な相関は確認できなかったが、平成 26 年度及び平成 27 年度の英語において有意な相関 ($p < 0.05$) が確認された。

入試区分・科目	平成 23 年度	平成 24 年度	平成 25 年度	平成 26 年度	平成 27 年度
一般入試・英語	$r=-0.037$	$r=0.080$	$r=0.078$	$r=0.592$	$r=0.542$
有意な相関	なし	なし	なし	あり	あり

平成 27 年度入試から、センター試験での利用科目や実技試験の配点の変更されたこともあり、今後も一般入試における英語に注視しながらの追跡調査を継続するとともに、センター試験利用科目や面接・実技試験のありかたについて、さらなる検討と必要な改善が望まれる。

② 造形デザイン学科

造形デザイン学科では、平成 23 年度入学生、平成 24 年度入学生、平成 25 年度入学生、平成 26 年度入学生、平成 27 年度入学生について、1 年次前期の代表的な 7 科目の平均点を入試区分別に比較した。

入試区分	平成 23 年度	平成 24 年度	平成 25 年度	平成 26 年度	平成 27 年度
推薦入試	79.3±6.1	79.5±6.0	76.5±4.3	78.2±5.3	80.7±1.9
一般入試(前期日程)	79.7±4.6	78.2±4.2	78.7±2.7	75.6±1.7	77.5±2.1
統計学的有意差	なし	なし	なし	なし	有

平成 23 年度～26 年度入学生においては、入試区分別の入学後成績の平均値に有意な差は認められなかったが、抽出した科目の平均点をみると、推薦入試の入学者は一般入試の入学

者よりも英語はやや低い傾向にあり、実技を伴う科目はやや高い傾向にあることが確認できた。一方、平成 27 年度入学生においては、推薦入試入学者の 7 科目すべての平均点が一般入試入学者よりも高く、有意な差 ($p < 0.05$) が認められた。

また、入試区別にみた入試得点と入学後の成績との相関については、推薦入試においては平成 24 年度の面接に有意な相関 ($p < 0.05$) がみられ、平成 25 年度の面接においては有意傾向 ($0.05 < p < 0.10$) が確認された。一般入試においては、実技と国語において有意な相関は確認できなかったが、平成 24 年度、平成 25 年度、平成 27 年度の英語において有意な相関 ($p < 0.05$)、平成 26 年度の英語には有意傾向が確認された。

入試区分・科目	平成 23 年度	平成 24 年度	平成 25 年度	平成 26 年度	平成 27 年度
推薦入試・面接	$r=-0.082$	$r=0.601$	$r=0.518$	$r=-0.019$	$r=-0.459$
有意な相関	なし	有	有意傾向	なし	なし

入試区分・科目	平成 23 年度	平成 24 年度	平成 25 年度	平成 26 年度	平成 27 年度
一般入試・英語	$r=0.220$	$r=0.355$	$r=0.432$	$r=0.305$	$r=0.408$
有意な相関	なし	有	有	有意傾向	有

平成 27 年度入試から、センター試験での利用科目や実技試験の配点に変更されたこともあり、今後も入試区別の入学後成績の有意差、及び一般入試における英語、推薦入試における面接に注視しながら追跡調査を継続するとともに、センター試験利用科目や面接・実技試験のありかたについて、さらなる検討と必要な改善が望まれる。

1-2-3-3 研修会等の実施

センター主催の教育開発講座及びワークショップのうち、アドミッション部会担当分の概要について述べる。

(1) 教育開発講座

講師：佐竹恭介氏（岡山大学アドミッションセンター特任教授）

題目：岡山大学アドミッションセンターの十年

日時：平成 27 年 5 月 12 日（火）16：00～17：30

会場：学部共通棟（北）8203 講義室

対象：全教職員、大学教員を志す大学院生

講演概要：

岡山大学アドミッションセンターは、平成 16 年 4 月に全学共同利用センターとして発足し、

- ・入学者選抜に係わる企画・立案及びその関連の研究
- ・入試問題作成、入試実施におけるミス防止等の統括
- ・大学概要及び入試関連の情報提供と広報活動

の三つを主な業務としている。これら業務の実施状況と活動経験から得られたことについて述べる。

参加者は、教員 50 名及び職員 8 名の計 58 名であった。大学院生も対象にしていたが、参加

はなかった。アンケート（回収率 72%）によると、満足または概ね満足と回答した割合が、研修会については 97%、講師については 84%であった。具体的な業務内容を分かり易く説明されたため、本学の入試業務にとっても大いに参考になったという意見が多かった。しかし、一部の参加者からは、大規模大学の事例であり、小規模大学の本学にそのまま適用するのは難しいとの指摘があった。

(2) ワークショップ

講師：吉原直彦（学生部長・教授）、榊原勝己（大学教育開発センター副センター長・教授）、佐藤絵梨（教学課教務班入試担当・主事）

題目：平成 27 年度全国大学入学者選抜研究連絡協議会大会参加報告

日時：平成 27 年 7 月 14 日（火）13:00～14:30

会場：本部棟大会議室

対象：全教職員

プログラム：

1. セミナー「大学入試と高校生の学習行動」報告
2. 公開討論会「大学入学者選抜の在り方について」報告
3. 企画討論会(1)「グローバル化時代の英語運用能力の育成と大学入試」報告
4. 企画討論会(2)「各大学の個別選抜改革・再考」報告 ※質疑応答 1
5. 研究会報告
- 5-1 選抜方法
- 5-2 入試制度・追跡調査
- 5-3 AO, 推薦, アドミッション・ポリシー
- 5-4 海外比較, 志願者の動向
- 5-5 高校教育
- 5-6 インターネット出願・広報 ※質疑応答 2

参加者は、教員 25 名及び職員 6 名の計 31 名であった。アンケート（回収率 72%）によると、満足または概ね満足と回答した割合が、ほぼ 100%であった。大学関係者の最大の関心事と言ってもよいテーマなので、満足度が高かったと考えられる。ワークショップの時間帯が授業時限と一致していなかったため、途中退席を余儀なくされたという指摘や、参加できなかった教職員のために、資料を回覧して欲しいという要望があった。

1-2-3-4 入試広報活動

(1) オープンキャンパス 2015

平成 27 年 7 月 25 日（土）に情報工学部とデザイン学部、7 月 26 日（日）に保健福祉学部がオープンキャンパスを開催した。参加人数は、保健福祉学部 1,890 名（前年比 8%増）、情報工学部 320 名（同 19%増）、デザイン学部 530 名（同 18%増）で、全体では 2,740 名（同 11%増）であった。一昨年度、昨年度の参加者増加率は、それぞれ前年比 11%、27%であり、近年順調に参加者が増加している。参加者にアンケートの協力を依頼し、保健福祉学部 766 名、情報工学部

42名, デザイン学部 257名, 計 1,065名から回答を得た. 以下に質問項目と集計結果を示す.

設 問	回 答	割合 (%)
説明会・体験講義などの内容はどうでしたか?	とても分かり易い	48.2
	分かり易い	48.1
	少し難しい	2.9
	とても難しい	0.3
知りたい情報は得られましたか?	十分得られた	45.4
	ある程度得られた	53.7
	あまり得られなかった	0.9
	ほとんど得られなかった	0.0
もっと説明が必要な情報は何か? (複数可)	学生生活	36.1
	学部の特色	35.6
	学費	29.1
	卒業後の進路	23.5
	教育内容	22.2
	入試方法	18.5
	その他	0.8
本学に興味を持った理由は何ですか? (5つまで)	地元の大学	51.6
	大学で学べること	37.8
	学費負担が少ない	29.5
	資格を取得できる	24.3
	将来がイメージできる	23.5
	就職率・資格合格率	23.1
	大学の印象	16.0
大学選びに参考とするものは何ですか? (複数可)	オープンキャンパス	74.6
	大学パンフレット	60.7
	先生・親の意見	36.3
	ホームページ	34.5
	進学ガイダンス	11.7
	受験情報誌	2.4
入学したいと思いましたが?	とても強く思った	33.8
	強く思った	27.6
	少し思った	27.5
	そう思わなかった	0.5
	入学を考えていない	2.3
	わからない	8.3

説明や体験講義の内容も分かり易く、多くの参加者が知りたい情報が得られたと感じたようである。大学教員としては研究や施設面の説明に力を入れがちであるが、高校生にとっては学生生活や教育内容、将来の就職先（資格取得を含む）が気になるようである。自由記述欄の意見として、全般的に多かったことは、在学生の意見が聞けてよかったということであった。

(2) 大学院オープンキャンパス

保健福祉学研究科では平成 26 年度に引き続いて平成 27 年度も大学院オープンキャンパスを実施した。昨年と同様、全体説明会では大学院の概要説明に加え、奨学金制度の説明や入試問題の閲覧を行った。専攻別説明会では、各専攻の教員ならびに院生による研究紹介などを行った。

日時：平成 27 年 5 月 9 日（土）

全体説明会：10：00～10：30

専攻別説明会：10：30～

会場：保健福祉学部棟

参加者数：80 名

80 名の参加者の中で、学外者が 3 割強と少なく、広報に改善が必要かと思われるが、京都や長崎から参加した学生もいた。心配事は学生では学費の負担がトップで、ここが進学ネックになっていることは明らかである。一方、社会人は職場の理解が得られるかがトップであったが、これと関連して自由記述の中に「長期履修の変更ができる」とよいとあったのは検討に値すると思われる。なお、大学選びの際に最も重視されているのは、全体として教員の研究内容がトップであり、今回保健福祉学専攻で実施したように、各教員の研究内容を紹介するのは有意義であると同時に、教員個人の HP を作成して研究内容を広く広報することも必要と思われる。全体として役に立ったと回答している学生が多い中で、「全く役に立たなかった」と答えた参加者が 1 名おり、改善点について検討が必要である。

なお、保健福祉学研究科では平成 21 年度以来、いずれかの専攻において定員割れを起こす状況が続いていたが、以下の表に示すとおり、本事業実施開始 2 年後の平成 28 年度入試ではすべての専攻で定員が充足され、一定の効果はあったものと推察される。この原因として、本事業により学生の大学院への理解が深まったと同時に、教員の大学院教育の重要性への意識改革もあったものと思われる。

保健福祉学研究科の入学者数の年次推移

	博士前期課程			博士後期課程
	看護学専攻 (定員7名)	栄養学専攻 (定員6名)	保健福祉学専攻 (定員7名)	保健福祉科学専攻 (定員5名)
平成25年度	5	6	6	4
平成26年度	3	6	4	6
平成27年度	10	7	5	7
平成28年度	11	6	8	6

デザイン学研究科では、次項の県大祭における進学相談コーナーの中で、研究科進学についての相談も受け付けた。

日時:平成27年11月7日(土)10:30~16:00(県大祭初日)

会場:デザイン学部棟1階 展示ホール

4年次学部生とともに保護者の研究科への理解を深めるために、保護者及び学生へ研究科の入試説明コーナーを設け、4年次生の保護者へ大学祭、研究科入試説明会の案内状を送付した。実施は、デザイン学部棟1階出入口・廊下付近に円卓、椅子を設け、図録、入試情報、梗概集、論文等の資料を用意して進学相談を行い、研究科指導資格のある各領域の教員が相談に対応した。さらに、製品・情報デザイン領域、建築・都市デザイン領域、ビジュアルデザイン領域、造形デザイン領域の4領域の作品を展示ホールに展示した。



製品・情報デザイン領域



建築・都市デザイン領域



ビジュアルデザイン領域



造形デザイン領域

(3) 県大祭における進学相談

平成27年11月7日(土)に開催された県大祭に係る学内開放(施設や教育研究内容の一般公開)と並行して、進学相談コーナーを開設した。学部または学科ごとの相談者数と主な相談内容は次のとおりである。

看護学科 10名

- ・文系か理系か
- ・実習場所は居住地を考慮してもらえるのか
- ・小論文のポイント、面接で気をつけること

栄養学科 5名

- ・取得可能な資格と就職先

- ・高校で化学や生物を履修していなくても大丈夫か
- ・専門科目の具体的な内容

保健福祉学科 12名

- ・学科について詳しく教えてほしい
- ・社会福祉士資格に関する質問
- ・小論文対策

情報通信工学科 3名

- ・三学科の違い
- ・どのようなところに就職できるのか
- ・大学院に進学した方がよいのか

情報システム工学科 3名

- ・三学科の違い
- ・推薦入試はどのようなものか
- ・大学院進学準備をいつから始めればよいのか

人間情報工学科 4名

- ・三学科の違い
- ・ゲームメーカーに就職できるのか
- ・学科名変更の理由

デザイン学部 20名

- ・学部の授業内容
- ・大学院の研究内容
- ・就職活動の際のポートフォリオ制作について

学内開催の進路相談会については、これまで、オープンキャンパスで実施していただけであった。大学祭での実施は初の試みである。予想されたことではあるが、オープンキャンパスに比べて、相談者数は少なかった。そのおかげもあって、じっくりと相談に乗ることができたため、相談者の満足度は高かったものと思われる。件数は少ないものの需要はあるようなので、少なくとも数年間は実施してみて、その効果を検証したい。

1-2-3-5 高大接続事業

昨年度までデザイン学部で実施されていた体験授業をもとに、全学的な高大接続事業として、「高校生のための大学授業開放」を実施した。これは、高校生向けにアレンジした本学の授業を提供することによって、高校生に大学で学ぶ意義と楽しさを理解させ、高校での学習に受験対策としてではなく、大学で学ぶために必要な基礎学力の修得のために取り組むきっかけとさせることを目的とした事業であり、高校での学習の目的を明確に定めさせることにより、高校と大学での学習効果の向上への反映が期待されるだけでなく、意欲の高い学生の入学にもつながることが期待される事業であるため、広報を目的としたオープンキャンパスとはベクトルが反対に近い事業である。

(1) 実施日

平成 27 年 6 月 27 日 (土) 13:30～ (デザイン学部)

平成 27 年 8 月 29 日 (土) 10:00～ (保健福祉学部)

平成 27 年 8 月 29 日 (土) 10:20～ (情報工学部)

(2) 授業内容

a. 保健福祉学部看護学科

10:10～11:40 高校生のための看護学入門 (講義)

13:00～14:30 高校生のための看護学演習 (演習)

b. 保健福祉学部栄養学科

10:10～11:40 高校生のための生化学入門 (講義)

10:10～11:40 高校生のための食品学入門 (講義)

13:00～15:00 高校生のための調理学実験 (実験)

13:00～16:00 高校生のための分子生物学実験 (実験)

c. 保健福祉学部保健福祉学科

10:10～12:00 社会福祉学概論・介護学概論・子ども学概論 (講義)

13:00～13:50 14:00～14:50 ソーシャルワーク・ケアワーク・保育内容 (演習)

d. 情報工学部

10:20～11:50 信号処理入門 (講義)

10:20～11:50 高校生のための材料力学入門 (講義)

10:20～11:50 身体の機能を学ぶ (講義)

13:00～14:30 信号処理入門 (演習)

13:30～15:00 高校生のための三次元 CAD 入門 (演習)

13:00～14:30 身体の機能に関する実験・演習 (演習)

e. デザイン学部

14:00～14:50 つかいやすいデザインをする (講義)

14:00～14:50 デザイン・素材加工の現在と今後 (講義)

14:00～14:50 プレゼンテーションの方法: 何をみせどう伝えるか (講義)

14:00～14:50 シンボルマーク・ロゴタイプデザインの実際 (講義)

14:00～16:00 作ってわかる! 3Dプリンタワークショップ (実技)

14:00～16:00 スタイルフォームによるモデリング (実技)

14:00～16:00 ミニ登り窯焼成体験 (実技)

14:00～16:00 フェルトメイキング (実技)

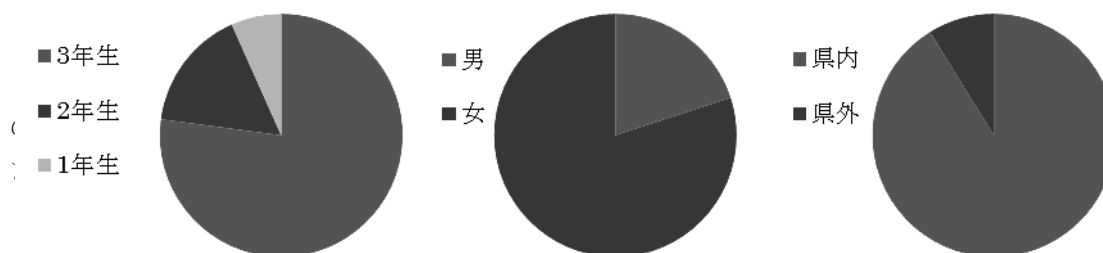
(3) 実施状況

a. 参加者数 (アンケート回収数)

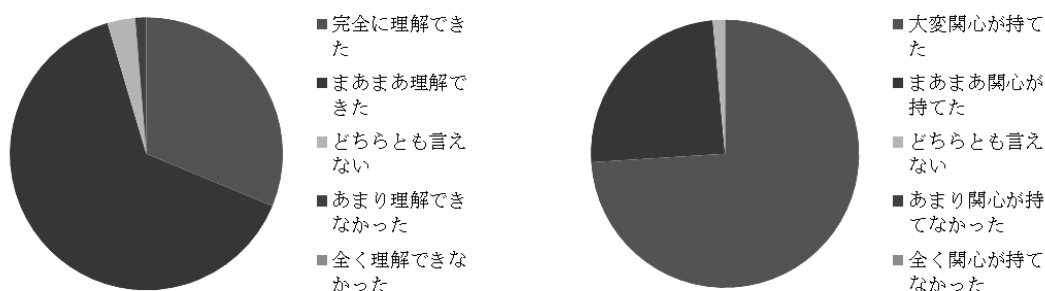
全体: 308 名 (保健福祉学部 222 名 (看護 66, 栄養 68, 保福 88), 情報工学部 46 名, デザイン学部 40 名)

3 年生が 77% を占めており, 高大接続の観点からも, また高校での学習のモチベーションの向上や進路決定への影響の観点からも, 1・2 年生の参加者数を増やすことは課題である。また, 東は京都, 西は熊本からの参加者もあったが, 県内からの参加者数が 91% を占めており, 県外からの参加者数を増やすための広報面での工夫が必要と思われる。

参加者数内訳：



b. 授業内容の理解度・関心度



ややハイレベルに設定した授業も多かったが、完全に理解できた（31%）とまあまあ理解できた（54%）で大部分を占め、全く理解できなかった学生はいなかった。また、ほぼ全員が授業に関心を持つことができ、あまり関心が持てなかった学生と全く関心が持てなかった学生はいずれも0であった。自由記述欄における「高校生活の中で化学と生物の知識を身につけないといけないと思いました。」「今学んでいる高校の分野がどのように大学で応用されているかを身をもって体感することで、何のために学んでいるかなどを確認することができました。」「今の勉強が大学での勉強にも繋がっているのだと嬉しく思いました。」などの記載から、本事業の第一の目的であるところの、「大学の授業を理解するために、高校での学習がいかに重要であるかを理解してもらう」という高大接続事業としての役割については概ね達成されていると思われた。さらに、「先生方の説明がとてもわかりやすくて楽しかったです。」「授業、実験ともに楽しく学ぶことができました。」「頑張って合格して貴学で学びたいと思いました。」など、「大学で学ぶ意義と楽しさを理解させ、大学が求める基礎学力やモチベーションを高校生に伝える」という事業の目的も達成されたものと考えられるとともに、FD 活動など本学教員の努力により達成されている、本学の丁寧でわかりやすい授業の広報にも役立ったと思われる。一方で、「福祉の講義は難しく、理解しにくいところもありました。」「講義では少し言葉などが難しく、話が理解しづらい部分もありました。」など、講義を難しいと感じた学生も多く、不本意入学を防ぐという本事業の目的の一つも達成されることが予想されるが、これについては今後の追跡調査が必要である。

(4) 事業の広報

本事業を何で知ったか（複数回答可）に対しては、本学の HP（44%）、オープンキャンパス（44%）、高校の先生（30%）が多く、特にオープンキャンパス後に参加登録者数が急激に伸びたことは、紙媒体や Web のみに頼らず、口頭での広報活動を行うことの重要性を示している。また、「その他」の中で「高校の授業で行われた大学説明会で知った」とあること、参加者数の多い総社高校と井原高校はいずれも高校に出向いての進学ガイダンスで本事業の

広報を行った高校であることから、広報活動における地道な人海戦術の重要性も示されていると思われる。なお、事業に参加した理由（複数回答可）としては、授業の雰囲気を知りたい（93%）、が圧倒的に多く、教員の雰囲気を知りたい（41%）が続いたが、設備を知りたい（23%）やキャンパスや学内に入りたい（14%）が少なかったことから、オープンキャンパスとの趣旨の違いについては参加者に十分伝わっていたと思われる。一方、オープンキャンパスに参加していなかったが本事業に参加した学生が参加者数の 24%を占めていたが、これが本事業のオープンキャンパスとの違いが理解されていたためか、単に開催時期が異なっていたことによるかは不明である。

(5) 今後の課題

開催時期については、大学全体の行事として位置づけるためにも、デザイン学部も同時期に開催すること、また参加者数の増加のためには、受験勉強のスパートにかかって 3 年生が忙しくなる 8 月の後半は避け、さらに 2 年生以下の参加を促すためにも、また県外者の参加を促すためにも、高校行事の準備や、県によっては 2 学期の開始時期に重ならないやや早い時期（8 月上旬から中旬）にずらすことは検討に値する。また、出前講義の依頼が一件もなかったことについては、ホームページでの広報を一旦打ち切ったことも影響したと思われ、来年度の広報の課題である。また、今回は気温が下がったこともあり熱中症の発症者はいなかったが、例年猛暑の時期に実施されることを配慮し、ペットボトルを参加者に配布することも考慮する必要がある。受験の予定に関する質問では、一般と推薦の両方を受験したいという学生（31%）を含め、本学を受験する予定の学生が参加者の 76%を占めたが、高大接続事業としての意義を考えた場合、開催の時点では必ずしも本学の受験を考えていなくても参加するような呼びかけも必要かと思われる。

1-2-3-6 まとめと課題

本学は本年度、「地（知）の拠点大学による地方創生推進事業（COC+）」に採択され、地域連携教育の活性化が新たな課題となっているが、文科省主導で進められている高大接続改革と平成 32 年度からの大学入学希望者学力評価テスト導入も控えており、これらを見据えたアドミッション・ポリシーの見直しと、それに合わせた入試制度改革は差し迫った課題である。これに向けた情報収集の一つの手段として、本年度は入学者成績追跡調査ならびに入学時アンケートを初めて全学的に実施したが、今後は学生の意識調査を含めたアンケート項目の見直しとアンケート様式の全学での統一、学生異動状況の追跡調査なども必要となる。さらに、高大接続教育の充実に向けた取組として実施した「高校生のための大学授業開放」は受験生の獲得が目的ではなかったにも拘わらず、結果として受講者の約 4 割が本年度の推薦入試を受験し、受験者数の半数を占めた。今後は、その効果を検証するための追跡調査が必要となるとともに、高大接続事業としての位置づけをさらに明確にしていくこと、そのカリキュラムの中にアクティブ・ラーニングや地域連携教育を取り入れること、入試へ活用していくことなども検討課題となる。

1-2-4 共通教育部会

1-2-4-1 概要

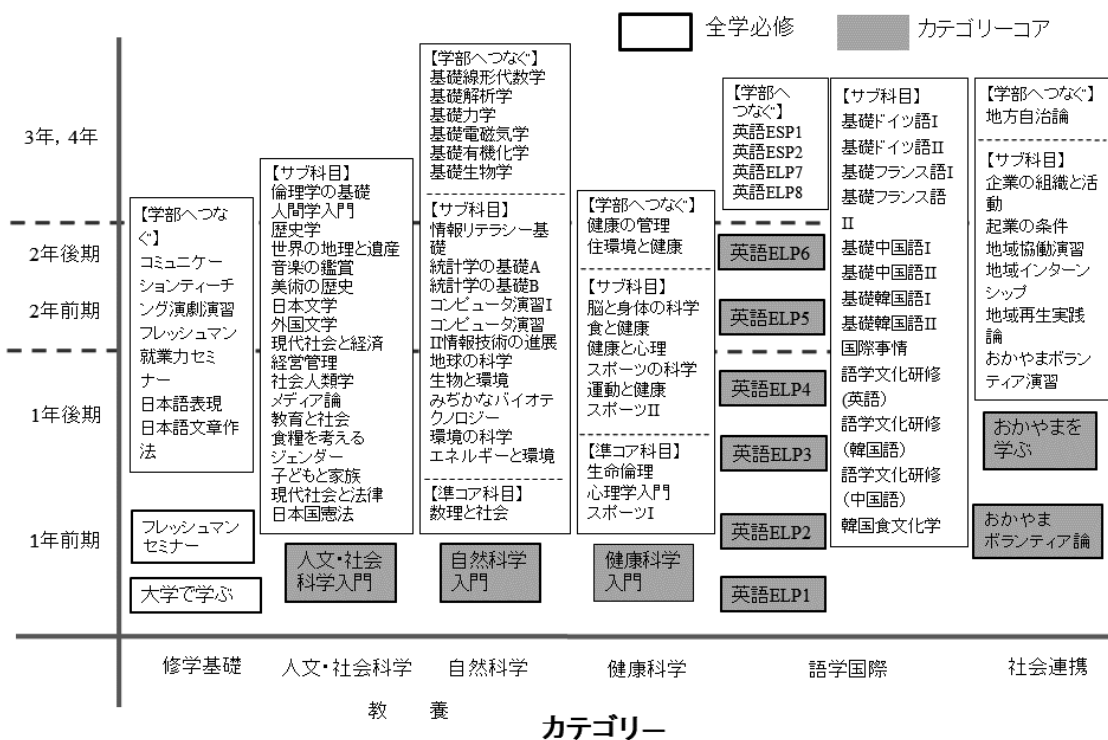
共通教育部は、大学教育開発センター規程第2条第1項第7号に示されているように「共通教育の充実及び共通教育と専門教育との連携に関する」業務を実施するために設置された部会である。平成27年度入学生から開始した共通教育科目に対するカリキュラム等の企画・立案を行うとともに、教養教育の体系化、教養教育に対する評価基準の作成と実施、共通教育におけるアクティブ・ラーニング授業の企画と実施などが具体的な業務である。

今年度は(1)共通教育科目のカリキュラムマップ作成とその検討、(2)新設コア科目の点検、(3)教育開発講座の企画と実施、(4)共通教育部担当科目のクォーター制時間割の作成、を行った。(1)～(3)の取組について以下に述べ、最後に平成28年度以降の課題をまとめる。

1-2-4-1-1 カリキュラムマップ作成と検討

平成27年度から共通教育科目を、教養的な授業科目、社会とのかかわりに関連する授業科目、汎用的技能に関連する授業科目などに分類し、それらを(1)修学基礎、(2)人文・社会科学、(3)自然科学、(4)健康科学、(5)語学国際、(6)社会連携、の6つのカテゴリーに分配した。さらに、修学基礎以外のカテゴリーにはコア科目を設定し、より具体的、実践的に学修内容の定着を図るためのサブ科目へと発展できるようにした。平成28年度開講予定の科目について作成したカリキュラムマップ(暫定版)を下に示す。

平成28年度 共通教育部 カリキュラムマップ



各カテゴリーにおいて、コア科目からサブ科目へとつながるフォーク型のカリキュラムを

意識しているが、各サブ科目の必要性については未だ検討を要する。また、各カテゴリーにおいて共通教育として普遍的な科目と時代の要請によって設定することが必要とみなされる科目を区別して示すことで、学生にとって見えやすい共通教育の姿を提示できると考えられる。これらの課題について、このマップをたたき台として、次年度以降も継続的に検討する予定である。

1-2-4-1-2 新設コア科目の点検

平成 27 年度から実施したコア科目「人文・社会科学入門」と「自然科学入門」について、担当教員間で課題を共有する目的で意見を集約した。次年度以降の改善に役立つと考え、本年報の資料として要点を記しておく。

【人文・社会科学入門】

○担当した所感

- (1) 全体的に、学生が授業を熱心に聞いていた。
- (2) 開始まで期間が短かったため授業の準備が大変だった。
- (3) 5回しかないので知識の広さや深さを盛り込めなかった。
- (4) 古代から現代までの、それぞれの時代を代表する哲学を取り上げたが、もし授業と試験を通して学生の頭の中に何かが残っていくとしたら、それは確かに「教養の芽」と言えるものとなるだろう。是非長く続けて行ってもらいたい。
- (5) 事務処理の負担は他の科目と比べられないほど重かった。
- (6) テスト監督補助は 2 名必要だと感じた。

○改善すべき点

- (1) 教室によっては、少し狭いという印象をもった。
- (2) 初夏に近づいても空調が入らず、蒸し風呂状態だった。
- (3) 実施された水曜日は 1 年生の科目が詰まりすぎている。
- (4) 試験問題のレベルが、特に保健福祉学部に関して易しすぎて、もう少し難易度を上げなければならないと思うが、今回（4 択 30 問）のような試験形式だとそれもなかなか難しいかもしれない。

○その他

- (1) 5 回目の授業で行ったテストでは、客観問題の他に、授業目標の「達成度」を回答させた。そのデータを分析すると (A) 分散分析の結果、客観問題では、学部間・学科間の有意な差は見られない。また、授業目標では、学部間の有意な差は見られた。(B) 重回帰分析の結果、授業目標の達成に対して、「学部ダミー」と「客観問題」が有意な影響を与えている。
($R= .479, p< .001$) 客観問題が簡単な問題だったので、学部間での有意な差はないが、授業目標を達成できているのは、①客観問題の得点が高い者、②保健福祉学部とデザイン学部 to 所属する者、ということがわかった。
- (2) ほぼ同じ授業をしているが、情報工学部の学生には、授業目標を達成できるような授業の内容・方法を考えるか、全学部 to 適合する授業目標を設定する等の改善が必要と思わ

れた。

【自然科学入門】

○担当した所感

- (1) 保健福祉学部とデザイン学部向けに「地震と建物」,「安全なカーブの曲がり方」,「コンパスが北を指す理由」,「タイムマシンの可能性」を題材として取り上げたが,大半の学生が熱心に聞いていた。
- (2) 情報工学部の学生向けには少し難易度を上げた物理を扱ったが,高校物理の延長上であったため,興味を持てなかったようである。
- (3) 各学部5回の授業なので,各学部の専門に沿って,できるだけ身近な題材も用いて講義を行い,化学に興味を持ってもらうことを目標に講義した。レポート等をみると,身近な事象と化学とが密接につながっていることに気づき,今後の生活や学習においても化学に興味を示してくれそうな学生が増えたように思う。
- (4) 入学して間もないこともあり,2年生の「環境の科学」と比較して,学生の受講態度は良かった。
- (5) 高校までの履修状況が大きく異なる中で(とくに保健福祉学部),学部ごとに共通のレポート試験は問題が多いと感じた。
- (6) 次年度は,生物学の基礎教養ということだけでなく,話題性のあるものをさらに取り込んでみたいと考えている。

○改善すべき点

- (1) 次年度の物理は,情報工学部も他学部と同じ内容にしてみる。
- (2) 水曜4,5限に必修科目が続くので,学生の集中力も考えると,実際困難だと思うが,時間割を考慮してあげても良いと感じた。
- (3) 教室の広さに対して,人数が多すぎ(とくに情報工学部),初夏の暑い日の午後4時から空調の入らない教室で暑さに耐えかねている状況は改善すべきと思う。
- (4) 期末レポート試験を再考したい。
- (5) 出欠管理と小テスト評価で作業を簡略化する必要がある。

○その他

- (1) 物理に関しては,興味と題材がマッチしていたせいか,デザイン学部が最も熱心であったと感じた。保健福祉の学生は理系物理選択～文系と,物理に対する距離幅が広すぎ,教えるのが難しかった。情報の学生は物理選択であるものの,物理の本質を理解できていない者も多くいるようであった。
- (2) 4月早々だったからかもしれないが,デザイン学部の授業態度が非常に良かった。

1-2-4-1-3 教育開発講座の企画と実施

センター主催の教育開発講座のうち,共通教育部会担当分の概要について述べる。

第4回教育開発講座(共通教育部会提供)

研修会名:「スピーキングと多読学習に励む県大生 -オープンボイス開発と英語高度化プ

ロジェクト」

日 時：平成 27 年 9 月 7 日（月）13：00～14：30
会 場：岡山県立大学 学部共通棟（南）1 階 LL 教室
講 師：三上ジュディス非常勤講師, 松田雅子教授, 南津佳広講師
参加者数：33 名（教員：18 名, 職員：9 名, その他：6 名）

<概要>

岡山県立大学では、今年度から英語高度化プロジェクトを開始した。本発表では、スピーキング力養成のための音声訓練と、本学独自で開発したスピーキングテスト「オープンボイス」について、デモンストレーションも行いながら報告した。また、それと平行してやさしい英語の本を 1 学期間に 600 ページを目標として多読することにより、バランスよく英語力を向上させる試みについて紹介した。



<アンケート結果> 回答者：22 名（教員：14 名, 職員：3 名, その他：5 名）

◎研修会の満足度	（教員）	満足:93 %	概ね満足:7 %
	（職員）	:67 %	:33%
	（その他）	:100%	:0 %
◎講師についての満足度	（教員）	満足:93 %	概ね満足 :7 %
	（職員）	:67 %	:33%
	（その他）	:80 %	:20%

なお、平成 28 年度のワークショップ「(仮題) 本学の教養教育について」の検討も行った。

1-2-4-2 今後の課題

最後に共通教育部会の今後の課題について、短期的なものとは長期的なものに分けて示す。

(1) 短期的課題（平成 28 年度に検討し、平成 29 年度からの実施を目指す）

(ア) クォーター制の目的にかなう開講計画と時間割作成

(イ) カリキュラムマップの作成

(ウ) コア科目「人文・社会科学入門」, 「自然科学入門」と、全学科必修科目「おか

- やまボランティア論」,「おかやまを学ぶ」のチェック体制の確立
- (エ) 英語新カリキュラム「English Language Program」の実施への協力と支援
 - (オ) 共通教育科目サブカテゴリー「国際」の充実
 - ①授業科目「語学文化研修」のチェック体制の確立
 - ②海外研修を伴う授業科目等をメニューとする授業科目「スタディツアー」(仮称)の検討
 - (カ) 共通教育科目カテゴリー「社会連携」の充実
 - ①「地(知)の拠点大学による地方創生推進事業(COC+)」への教育面の貢献
 - (キ) 個々の授業におけるアクティブ・ラーニングの検討
- (2) 長期的課題(平成29年度までに検討し,平成30年度からの実施を目指す)
- (ア) カテゴリーごとの配置授業科目の見直し
 - ①教養科目系の体系化
 - ②コア科目とサブ科目の連携強化
 - ③サブ科目の必要性検討と授業科目数の削減(授業科目の統廃合など)
 - (イ) 学部教育科目との連携
 - ①副専攻における授業科目の協働(社会連携関連や国際交流関連授業科目)

1-2-5 FD 部会

1-2-5-1 概要

FD 部会では、「教育の質の改善」を目的に,主として,1) 相互授業参観,2) 授業評価アンケート,3) FD 研修会について取り組んだ.FD 研修会の企画に際しては,平成29年度より導入予定のクォーター制では週2回の授業が実施され,これを契機にアクティブ・ラーニングを導入した授業が拡充されるであろうことを考慮した.また,相互授業参観結果を授業の実践に活かすための授業改善意見交換会も企画した.以下,各取組についての詳細を報告する.

1-2-5-2 相互授業参観

1-2-5-2-1 相互授業参観の概要

(1)平成27年度授業参観の方針

平成17年度の講演会,平成18年度のモデル授業参観の実績を踏まえ,平成19年度から平成25年度までの7年間にわたり授業の工夫や改善のための研鑽機会を設けるという目的のもと,全専任教員を対象とした相互授業参観を継続実施してきた.本年度は平成26年度に行った既活動の分析をもとに,実施内容・方法について改善を図った.

主な改善点は下記の通りである.

- ①活動の目的を明確に提示する
- ②参観レポートに観点別6項目を加える

- ③授業改善について情報共有できる場を設定する
- ④授業参観 web システムを構築し活動の効率化を図る

(2) 平成 27 年度授業参観の実施内容

1) 目的

具体的な授業の進め方や指導技術について他者から学び、自己の授業環境で活かすことのできる指導方法を模索することにより、よりよい授業づくりを推進する。

2) 実施方法

①公開授業の開示

すべての専任教員は、公開する授業科目 1 コマ（授業形態は問わない）を選び、その授業科目名、演習／実習／講義の別、当日の授業概要（200 字以内）、月日、時限、教室名を相互授業参観 web システムより入力する。

②参観授業の選択

参観を希望する教員は、相互授業参観 web システムの公開授業一覧より参観希望授業を選択する（他学部教員の公開授業を参観してもよい）。

③実施期間

平成 27 年 10 月 13 日（火）～ 10 月 30 日（金）の 3 週間。

3) 授業参観レポート

授業参観終了後、参観教員は下記項目について相互授業参観 web システムより入力する。

- ① 観点別 6 項目の意見・助言（意見・助言の記述及び、特に参考になった項目へのチェック）

項目 1： 授業の準備・導入

（例）環境づくり、出欠確認の仕方、前回授業のふりかえり、学習目標の確認 等

項目 2： 授業の展開

（例）形式、構成、時間配分、重要ポイントの強調、話し方、アクティブ・ラーニングの活用等

項目 3： 教材の内容・形態 [教材使用がある場合]

（例）伝えたいことが精選焦点化された内容、適切な教材形態、媒体 等

項目 4： 教材の使用 [教材使用がある場合]

（例）視聴覚機材等の適切な選択と使い方、教材提示のタイミング、板書の仕方 等

項目 5： 学生への関わり

（例）学生とのコミュニケーションの仕方、学生の意欲や理解を高める関わり方 等

項目 6： 授業のまとめ

（例）授業内容のふりかえり、予習復習など自己学習の促進

- ②その他、授業全体を通して参考となった点・工夫が見られた点・助言等（自由記述形式）

- ③今後、自身の授業改善において具体的に採り入れたい点（自由記述形式）

公開教員は相互授業参観 web システムにてレポート内容を確認後、同システムの授業公開教員コメント欄に入力する。

4) 授業改善意見交換会

相互授業参観活動を基に、具体的な授業の進め方や指導技術について意見交換・情報共有して今後の授業改善に役立てることを目的に、平成 28 年 1 月に授業改善意見交換会を開催した（詳細は後述）。

1-2-5-2-2 相互授業参観の結果

相互授業参観後に提出された授業参観レポート 90 枚を分析した結果を次に示す。

(1) 参観者の集計表

1) 授業公開者の所属学科

学科	人数	%
看護学科	4 (4.4)
栄養学科	14 (15.6)
保健福祉学科	11 (12.2)
情報通信工学科	15 (16.7)
情報システム工学科	5 (5.6)
人間情報工学科	14 (15.6)
デザイン工学科	8 (8.9)
造形デザイン学科	19 (21.1)
合計	90 (100.0)

2) 参観報告者の所属学科

学科	人数	%
看護学科	4 (4.4)
栄養学科	14 (15.6)
保健福祉学科	16 (17.8)
情報通信工学科	12 (13.3)
情報システム工学科	9 (10.0)
人間情報工学科	11 (12.2)
デザイン工学科	7 (7.8)
造形デザイン学科	17 (18.9)
合計	90 (100.0)

3) 参観報告者と授業公開者のクロス表

報告者の所属	公開者の所属								計
	看護	栄養	保健福祉	情報通信工	情報システム工学	人間情報工学	デザイン工学	造形デザイン	
看護学科	1	1	1	0	1	0	0	0	4
栄養学科	2	8	3	0	0	0	0	1	14
保健福祉学科	1	5	6	1	0	2	0	1	16
情報通信工学科	0	0	0	11	0	1	0	0	12
情報システム工学科	0	0	0	3	4	0	2	0	9
人間情報工学科	0	0	0	0	0	11	0	0	11
デザイン工学科	0	0	1	0	0	0	3	3	7
造形デザイン学科	0	0	0	0	0	0	3	14	17
計	4	14	11	15	5	14	8	19	90

4) 観点別参考意見の回答割合

観点	人数	%
授業の準備・導入	55 (61.1)
授業の展開	59 (65.6)
教材の内容・形態(教材使用がある場合)	48 (53.3)
教材の使用(教材使用がある場合)	49 (54.4)
学生への関わり	52 (57.8)
授業のまとめ	42 (46.7)

* 観点別に参考になったと☑が入っていた人数

(2) 観点別の意見・助言の結果

6つの観点,それぞれに記述された意見の合計は,305件であった.それらの意見を観点別に分析した結果,以下のような項目が導き出された.

観点1: 授業の準備・導入では,「前回授業の振り返り」「授業中の学習への指針」「導入の工夫」「導入の時間の使い方」「自己学習への指針」,

観点2: 授業の展開では,「学生同士で議論できる」「到達度確認・理解度確認」「時間の使い方」「話術の工夫」「展開方法・器材の利用」,

観点3: 教材の内容・形態では,「教材・資料の工夫」「理解度を深める工夫」「知識の定着を図る工夫」「ノートがとりやすい工夫」,

観点4: 教材の使用では,「授業展開に合った教材の選択」「教材の使い分けとバランス」「教材を使用するタイミング」「教材自体の工夫」「伝え方の工夫」,

観点5: 学生への関わりでは,「学生個々への対応」「学生の理解度に応じた対応」「学生の参加を促す対応」「学生の集中力持続への工夫」「授業の雰囲気作り」,

観点6: 授業のまとめでは「予習を促す工夫」「復習を促す工夫」「自己学習を促す工夫」「学生の意見を収集する工夫」「学習環境の工夫」

1-2-5-3 授業評価アンケート

本学では,FD活動の一環として,平成16年度より定期的(毎学期末)に授業評価アンケートを行ってきた.授業科目ごとの集計結果は各授業担当者にフィードバックし授業改善に活用してもらうとともに,これらのデータに基づいた評価尺度の妥当性・信頼性の検討,評価得点の経年変化の吟味など統計的分析も随時行っている.また,組織的(学部・学科・コース・カテゴリー別授業科目単位等)な教育改善の資料としても利用されている.以下に,前年度の報告(教育年報2014)以降の平成26年度後期及び平成27年度前期の授業評価アンケート結果の概要を示す.

(1) 授業評価アンケートの実施方法・活用方法

平成26年度後期については,原則として全授業科目(非常勤講師担当科目を含む)を評価対象とするが,学外実習をともなう科目や履修者が4人未満の科目などは,本学統一様式によるアンケート対象からは除いた.平成27年度前期については,原則として全授業科目を対象とすることは同じであるが,前述のように全授業科目で共通に行う6項目の他に,学部・

学科及び共通教育部独自の項目が設定されている。ここでは共通 6 項目のみを扱うこととする。アンケートは授業科目ごとに全受講生を対象として無記名・自記式（5 段階評価，マークシート方式）で各学期末に実施した。回収されたアンケートは教学課教務班が集計し，後日，統計処理した資料を授業担当者に送付している。学部・学科・コース・授業科目では，これらの資料に基づいた授業改善策などの検討が行われている。

(2) アンケート集計結果の概要と課題

平成 26 年度後期の実施科目数は 370 科目（実施率 96.1%，延べ実施教員数 175 人，延べ受講生数 12,771 人），平成 27 年度前期の実施科目数は 402 科目（実施率 98.0%，延べ実施教員数 178 人，延べ受講生数 15,706 人）であった。なお，実施教員数は授業担当代表教員でカウントしている。

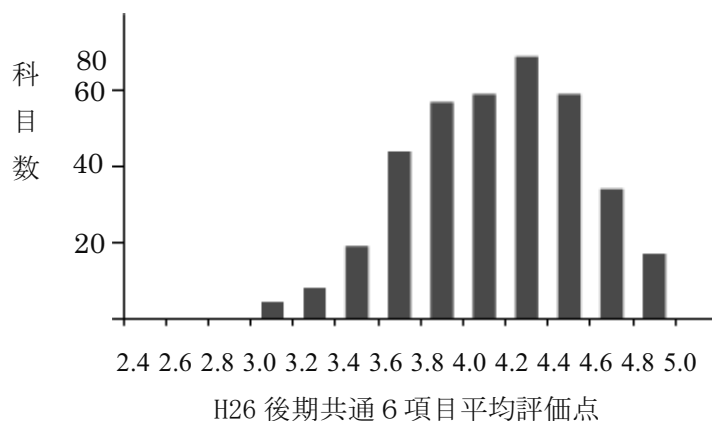
平成 26 年度後期及び平成 27 年度前期に実施した授業評価アンケートの平均評価点の分布をヒストグラムにて示す。平成 26 年度後期の共通 6 項目，及び平成 27 年度前期の共通 6 項目の全科目平均得点はそれぞれ 4.11（SD=0.38），4.13（SD=0.40）であったが，今回の得点はそれらとほぼ同じであった。また，平成 26 年度後期及び平成 27 年度前期の平均評価点における分布上の相違はほとんどなかった。

授業評価アンケート共通 6 科目

-
- 問 1 受講して知的刺激を受けましたか
 - 問 2 真剣に受講しましたか
 - 問 3 教員の熱意が感じられましたか
 - 問 4 学生の理解度に注意していましたか
 - 問 5 授業の進め方は丁寧でしたか
 - 問 6 総合的に判断して満足しましたか
-

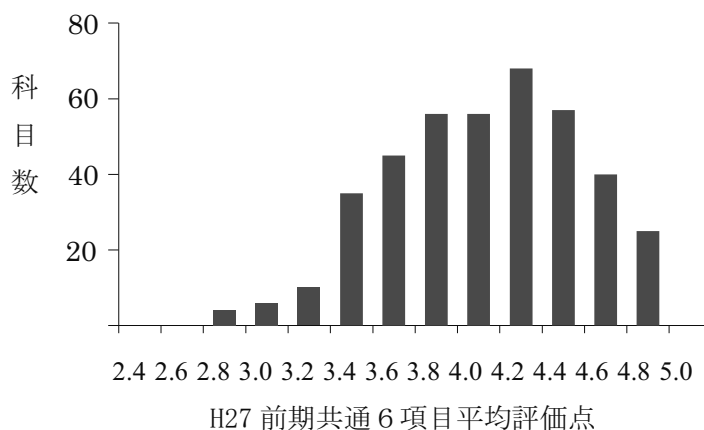
対象科目数：385 科目	実施科目数：370 科目	（実施率 96.1 %）
登録学生数：15,523 名	実施学生数：12,771 名	（実施率 82.3 %）
対象教員数：180 名	実施教員数：175 名	（実施率 97.2 %）
（うち，本学対象教員数 131 名	実施教員数 131 名）	

370 教科，平均 4.16，標準偏差 0.40



対象科目数：410 科目 実施科目数：402 科目 (実施率 98.0%)
 登録学生数：17,584 名 実施学生数：15,706 名 (実施率 89.3%)
 対象教員数：181 名 実施教員数：178 名 (実施率 98.3%)
 (うち、本学対象教員数 124 名 実施教員数 123 名)

402 科目 平均 4.13, 標準偏差 0.45



1-2-5-4 FD 研修会

平成 27 年度は、アクティブ・ラーニングに関する 2 回の研修会を企画するとともに、相互授業参観結果を授業の実践に活かすため、授業改善意見交換会を企画した。また、平成 28 年度よりクォーター制を導入予定の岡山大学で開催された FD・SD 研修「桃太郎フォーラム XVIII」(2015 年 9 月 10 日開催)に参加し、先進事例の調査を行った。

1-2-5-4-1 第 2 回大学教育開発センターワークショップ、「アクティブ・ラーニングに関する本学の実施状況と今後の展開 (I)」

(1)開催概要 本ワークショップでは、保健福祉学部、情報工学部、デザイン学部から各 1 件のアクティブ・ラーニング事例を紹介し、意見交換を行うことにより蓄積された授業法のノウハウを大学全体で共有し、アクティブ・ラーニング授業法のさらなる向上と、アクティブ・ラーニング導入授業科目の拡大を目指した。

開催日時	平成 27 年 9 月 15 日 (火) 13:00~14:30
開催場所	岡山県立大学 学部共通棟 (北) 8105 講義室
講師①	岡山県立大学保健福祉学部 中村光教授 保健福祉学部の「チームガバナビリティ演習」 ー経験学習モデルに基づく 3 学科合同授業ー
講師②	岡山県立大学情報工学部 井上貴浩准教授 人間情報工学科における PBL に基づく授業構成とその展望

講師③	岡山県立大学デザイン学部 森下眞行教授 「金の卵」学校選抜オールスターデザインショーケースにおける PBL 教育実践について
-----	---

(2)参加者 参加者数は41名で、その内訳は、教員が34名、職員が7名であった。

(3)アンケート結果 参加者には用意したアンケートの回答を要請した。回収した回答は22通（教員18名、職員2名、所属未記入2名）であった。研修会の満足度や講師についての満足度は以下の通りであった。

設問	教員・職員の別	満足	概ね満足
研修会の満足度	教員	82%	18%
	職員	100%	0%
	所属未記入	50%	50%
講師についての満足度	教員	77%	23%
	職員	50%	50%
	所属未記入	50%	50%

自由記述の中から、(A)今回の報告は全体を通して有益だったかどうかの感想・意見、(B)今後、自分の活動で本日得た知識や方法を活用する考えについて、(C)今回のワークショップ（講演、実施方法等）に対する感想・意見、(D)今後のワークに希望するテーマ、の四つについて分類したものを以下に示す。

(A)今回の報告は全体を通して有益だったかどうかの感想・意見

分類	記述
有用な点	<ul style="list-style-type: none"> ・各学部でどのようにアクティブ・ラーニングを実施しているのかが分かった。担当する実験などで取り入れてみたいと思った。（保健福祉学部教員） ・アクティブ・ラーニング(AL)の理論や理論モデルについて学習することが出来た。他領域の話題をいただくことで、現在ALを活用していない講義、演習にALを導入するための参考になった。（保健福祉学部教員） ・他学部の状況を垣間見ることが出来た。（情報工学部教員） ・他学部、学科の事情が分かりました。（情報工学部教員）
意見	<ul style="list-style-type: none"> ・講義におけるアクティブ・ラーニングの話を知りたかった。（情報工学部教員）

(B)今後、自分の活動で本日得た知識や方法を活用する考えについて

分類	記述
有用な点	<ul style="list-style-type: none"> ・講義形式の授業の内容をアクティブ・ラーニングも取り入れた形式にすることも考えているので。（保健福祉学部教員） ・本日の発表をそのまま授業に取り込めるわけではないが、考え方や方法（含、機器）等を参考としたい。（保健福祉学部教員） ・まず、学生が基礎知識を十分修得することが重要と思うので。（所属未記入）
意見	<ul style="list-style-type: none"> ・専門の異なる分野を越えて出来たら活用したいが、共有しうる手法とその効果、理論的

	<p>裏づけなどを経て、各教員へフィードバックする工夫が欲しい。教育系の教員の協力が必要。(デザイン学部教員)</p> <p>・学生同士のディスカッションを増やしていきたい。(デザイン学部教員)</p>
--	---

(C) 今回のワークショップ（講演, 実施方法等）に対する感想・意見

分類	記述
有用な点	<ul style="list-style-type: none"> ・他学部の取組も知ることが出来たため良かったと思います。(保健福祉学部教員) ・他領域の事例から、未導入の講義、演習に活用するアイデアをいただくことが出来ました。(保健福祉学部教員) ・学科構成を活用した取組は効果がありそうです。(情報工学部教員) ・各授業の内容がとてもよくわかりました。学生の意欲を高める学習効果が実践することで上がっていると思います。先生方のよく考えられている内容で学生にとっては、楽しい授業だと思います。(職員)
意見	<ul style="list-style-type: none"> ・動画や写真を入れての活動の様子はわかりやすいので、今後も取り入れて欲しい。(保健福祉学部教員) ・研修会の開催日時の連絡は早めをお願いしたい。(保健福祉学部教員) ・アクティブ・ラーニング、PBL など分野を問わず共通の理念はありますが、具体的な話になると学部ごとに違いが大きすぎると感じました。性格の異なる分野が一緒にワークショップをするのは、やや無理があるように思います。(情報工学部教員) ・13:45 頃 井上先生の途中から参加しての感想です。個々の実験の内容紹介だけでなく、教育プログラムとしてのALに対するフィロソフィー(DP, CPにおけるALの位置づけなど) 個々の実験を通してのステップアップ状況・評価などを聞きたかった。(情報工学部教員) ・「チームガバナビリティ演習」から・・・大学としてグループワークしやすい環境(ラーニング・コモンズ)が必要だと感じた。(デザイン学部教員) ・「人間情報工学科のPBL」から・・・グループワークはどのように取り入れているか? 「教えあい?」TA(優秀学生)は教えることで学びの効果が高まる。(デザイン学部教員) ・「金の卵」から・・・PBL=OJT→産学連携/講義=OFF JTの組み合わせの考えは面白かった。リアリティを持たせる現地活動は参考になったが、教育経費の保証が必要。(デザイン学部教員) ・学生が問題を自分で解決する能力を身に付けさせるような訓練に授業を通して取り組む必要性を改めて感じた。これまで、学生が問題が起こらないように予め解説したり教員(私)が、解決法を先に提案していたように思う。(デザイン学部教員)

(D) 今後のワークに希望するテーマ

<ul style="list-style-type: none"> ・反転授業の具体例と導入方法をご教授いただきたいです。(保健福祉学部教員) ・アクティブ・ラーニングについては、Part2, 3・・・と蓄積していくべきである。(デザイン学部教員)

1-2-5-4-2 第 6 回教育開発講座, 「アクティブ・ラーニング (能動的学習) 型授業の意義・効果・始め方」～キャリア教育・生徒指導等を教科科目の授業に埋め戻す～

(1)開催概要 「アクティブ・ラーニング型」授業体験のすすめ. 日本の教育現場で, いま「アクティブ・ラーニング」は最もホットなキーワードである. その背景には文部科学省の新学習指導要領に見られるように, 「何を教えるか」でなく「どのように学ぶか」「どのような力がついたか」を重視する方向への一大転換がある. 言い換えれば「アクティブ・ラーニング (能動的学習)」の実践が求められている. 日本の教育現場は, 大きく変わろうとしている. しかしその実践には, 現場の教員の意識改革を含めた具体的ノウハウが必要である. 「授業は黙って聞くもの」「教師は専門知識を教える人」といった従来の固定観念を根本から問い直し, 生徒が自発的に学ぶ姿勢を教師がサポートしなければならない. すでにアメリカでは, 「講義をなくす」試みが始まっている. しかし, こうした新しい試みは, 頭で理解しようとしてもなかなか受け入れることができない. そこで実際に現場に立つ教員の方々を対象として, 「アクティブ・ラーニング実践塾 (体験セミナー)」を実施し, その効果を自ら実感してもらうプログラムを開発した. 授業についてお悩みのすべての先生方におすすめする.

開催日時	平成 27 年 12 月 7 日 (月) 15 : 00～18 : 30
開催場所	岡山県立大学 学部共通棟 (東) 8902 講義室
講師	産業能率大学・経営学部教授／河合塾教育研究開発機構研究員 小林 昭文 先生

(2)参加者 参加者数は 37 名で, その内訳は, 教員が 33 名, 職員が 4 名であった.

(3)アンケート結果 参加者には用意したアンケートの回答を要請した. 回収した回答は 15 通 (教員 14 名, 職員 1 名) であった. 研修会の満足度や講師についての満足度は以下の通りであった.

設問	満足	概ね満足
研修会の満足度	93%	7%
講師についての満足度	87%	13%

※職員からの回答が 1 であったため, 教職員は分類せずに集計.

自由記述の中から, (A) 今回の研修会のテーマについての感想・意見, (B) 自分に必要な知識やスキルなどを学ぶことが出来た理由, (C) 今後, 自分の活動で本日得た知識や方法を活用する考えについて, (D) 今回の研修会 (講演, 実施方法) に対する感想・意見, の四つについて分類したものを以下に示す.

(A) 今回の研修会のテーマについての感想・意見

分類	記述
肯定的なコメント	・ 新米教・職員ですので, 授業の展開について, 自分が実施している方法がどのようによくてどのようによくないのか考えながら聞くことができました. これまでの長いご経験, ご実践のうえで, うまいかなかった点などもお聞きできましたし, とてもわかりやすく楽しい講義でした.

	<ul style="list-style-type: none"> ・現在注目されているアクティブ・ラーニングについて話が聞けた点は良かったと思います。 ・アクティブ・ラーニングの高校における現状を知ることができて有意義であった。 ・学生が主体的に取り組む授業方法を知りたかった。 ・アクティブ・ラーニングに関する内容であった。 ・高校の授業ではあるものの、AL とは距離があると思われていた理数系科目への AL 実践事例を知ることができた。 ・具体的な事例, 方法など分かりやすい内容であった。
改善要望 コメント	・高校の事例が前提となっていました, 大学の講義内容は複雑となっているので, 大学でのアクティブ・ラーニングの事例も知りたいと思いました。
その他の コメント	・今流行りの AL の風景というものが少し判ったのが良かった。

(B) 自分に必要な知識やスキルなどを学ぶことが出来た理由

分類	記述
肯定的な コメント	<ul style="list-style-type: none"> ・もともとが知識を十分に持てていなかったのですが, これまでは自分でこういったセミナーに参加する機会もなかなかつくれませんでした. 3 時間程度の時間に必要な知識や要素を盛り込んでくださっており, 非常にありがたいセミナーでした. 実際に講師の先生の AL のようなセミナーを受講し, 自分が受ける側としての経験も少しできてよかったです。 ・これまで必要性は感じていたが, 具体的にどう進めてよいかわからずにいたので, 有意義であった。
改善要望 コメント	・情報通信工学科の実験演習や卒業研究では, 既にアクティブラーニングの要素が取り入れられています. また, 授業においても予習や復習を促すように様々な工夫が行われています. 今回, お聞きした方法が技術者教育に本当に有効であるのかどうかという点については, 良く考える必要があると思います。
その他の コメント	・他の先生の意見を少し聞いたり話したりすることが, 一番有意義であった. =ピアラーニングということ?

(C) 今後, 自分の活動で本日得た知識や方法を活用する考えについて

分類	記述
肯定的な コメント	<ul style="list-style-type: none"> ・主体的に学ぶ経験は, 社会人になっても役に立つと思うので, そのような機会を学生のうちから経験してもらえるように学生に関わっていきたいです。 ・アクティブ・ラーニングを通じたコミュニケーション力や協調性の養成に活用したい。 ・ワーク中に学生が質問してくるとすぐに説明していたが, 今後はチームメンバーに問いかけるようにしたい。 ・活用できる講義とそうでない講義はあるが, 活用できる講義については是非活用したい。 ・高校と大学では異なる点もあるが, いくらかヒントになることがあれば先生方に活用していただきたい。

	<ul style="list-style-type: none"> ・学生たちが「自分で考え、動ける人」となることを意識し、窓口対応等において接したい。
改善要望 コメント	<ul style="list-style-type: none"> ・高校の授業では入試問題を解かせると言う最終目標があるが、大学の授業では、もっと本質的な内容を教える必要があり、今回の実践例を直接導入することはできない。 ・アンケートとは別に行ったアンケートを見ると学生の中には、電気系の測定技術や技術報告書の作成技術が自分にとっては必要のない技術と考えている学生もいますが、具体的な例を示しながら学生に理解を求めています。例えば、いくら良い仕事を行っても、相手に論理的に説明できなければその努力が評価されないことや学生の皆さんが上司の立場だとしたら論理的な技術報告書をまとめる方とそうでない方のどちらに重要な仕事を任せるとかという点を考えてもらっています。多くの学生は納得してくれますが、このような説明を行っても、なお納得していただけない学生もいます。授業の進め方も重要ですが、それ以上に学生のモチベーションを高めることが重要だと思います。授業科目についても授業毎の小テストを行うなど予習、復習を促す取組を色々としています。今回の講演で紹介された方法が本当に技術者教育にとって良い方法であるのか良く考えたいと思います。15コマのうち1コマ、2コマであれば良いかもしれませんが、15コマともこのような方法を取るのとは得策とは思えません。これまで反転授業などいろいろな方法が提案されていますが、賛否両論があり、必ずしも流行の方法が良い方法とは限らないと思います。学生の理解度を高めるには、地道な努力が必要だと思います。

(D) 今回の研修会（講演、実施方法）に対する感想・意見

分類	記述
肯定的な コメント	<ul style="list-style-type: none"> ・大学入学前の高校においてどのような学びがなされているのかを知ることができて有意義であった。引き続き AL についての実践例等を知る機会があれば、良いと思います。アンケートの回答方法が分かりにくかった。 ・教員同士のグループ討議の時間があつたことがよかったです。 ・一般に知識提供型になりがちだと思われる物理でもアクティブ・ラーニングができるという事例を見せていただいて、大変参考になりました。今後、自身の活動に反映させていこうと思います。
改善要望 コメント	<ul style="list-style-type: none"> ・付箋に書いて貼ってという形式がすでに AL の形骸化であり、やらされ感があつて気が進まなかった。地道に現場で実践している経験者の講師の方には大変失礼かと思うが、もっと、大学ならではのクリエイティブなアプローチも紹介して欲しかった。
その他の コメント	<ul style="list-style-type: none"> ・今回提案されたアクティブ・ラーニングの方法は、科目によって向いているものと向いていないものはあると思う。 ・いろいろな方のご意見も聞けてよかった ・前回 11 月のキャリア形成支援部会の講座とよいつながり、流れであつた。（両先生とも「社会に出てからつながる教育」という大原則） ・キャリア形成支援部会の中で最近の学生の圧倒的な受身の姿勢（AL よりワンウェイがよい）はショックであつたが、学生は未体験なものに不安を持っているだけではないか。高校からも AL が定着すれば自ずと大学でも受け入れられるのではないか。

1-2-5-4-3 授業改善意見交換会

(1)実施概要

相互授業参観活動を基に、具体的な授業の進め方や指導技術について意見交換・情報共有し、今後の授業改善に役立てることを目的に、授業改善意見交換会を開催した。

開催日時：平成 28 年 1 月 21 日（木）16:00～17:30

開催場所：岡山県立大学本部棟 2 階大会議室

参加者：各学科教員, 事務局職員, 大学教育開発センター員, 計 54 名

プログラム：

- 1 開会（尾崎 FD 部会長）
- 2 相互授業参観の実施結果報告（山口教授, 磯崎教授）
- 3 グループディスカッション（野宮教授）

テーマ：「よりよい授業づくりの方法とは」

相互参観授業レポートの観点 6 項目より最大 3 項目を選び、「よりよい授業づくりの方法」をテーマにディスカッションする。

- ・ディスカッションし、内容、結果を模造紙にまとめる
- ・各班の代表者にて発表する

- 4 まとめ（田内大学教育開発センター長）

- 5 閉会（尾崎 FD 部会長）

(2)グループディスカッションについて

所属混成による 8 班（各班 6～7 名）をグルーピングし、「よりよい授業づくりの方法」をテーマに班別のディスカッション（30 分間）を行った。次に各班の代表者により、ディスカッションの結果を発表した（各班約 3 分）。



写真 1（ディスカッション風景）



写真 2（発表風景）

各班において選択された項目とディスカッションの内容（抜粋）は下記の通りであった。

【1 班】

〈項目 1 授業の準備・導入〉

- ・より良い授業のポイントを事前の準備・導入とすると、全ての授業内容を事前に公開するのも大変だが一つの方法である。

〈項目 5 学生への関わり〉

・学生とのコミュニケーションを高めるために多様なアクセス方法を準備することも重要である。

【2班】

〈項目5 学生への関わり〉

- ・講義科目について学生の意欲を高めるため、アクティブ・ラーニングが効果的な反面、知識解釈が低下する恐れがある。
- ・実習科目ではアクティブ・ラーニングが効果的である。
- ・確認のための小テストの実施は学生の意欲面において効果的だが、強制的で自発性を損なう可能性がある。

【3班】

〈項目2 授業の展開〉

- ・パワーポイントにも良い部分と悪い部分があり、板書も同様である。それらのメリット、デメリットを理解する必要がある。

〈項目5 学生への関わり〉

- ・学生の顔と名前を覚えることにはメリットがあるが、実現は難しい。

〈項目6 授業のまとめ〉

- ・学生を予習、復習に導く手段はあるのか。

【4班】

〈項目2 授業の展開〉

- ・学生のモチベーションを90分間持続させるためには、毎回ミニッツペーパーを最後に配布し、講義の内容やキーワード等を記入させる方法が効果的である。出席確認もできるため効率的である。

〈項目3 教材の内容・形態 [教材使用がある場合] 〉

- ・パワーポイントと板書はどちらが効果的であるのか。情報工学部では式展開等の理解に時間がかかるため、板書が適している。パワーポイントでは教える分量を多くでき動画等を見せることもできるため、その場での理解が深まるが一方で頭に残らない傾向がある。

〈項目5 学生への関わり〉

- ・学生に白紙を机に出させ、質問や発言のあった学生に押印し授業の最後に提出させ成績に反映させるという方法で、学生に発言を促すことができる。

【5班】

〈項目2 授業の展開〉

- ・振り返りテストを毎回実施、採点は隣り合った学生同士で行う。
- ・以前は振り返りテストを実施していたが、現在は成績根拠を残さなければならないことから資料が膨大になるため止めている。しかし、実施していた時のほうが学生の理解力は高かった。
- ・予習については、学生に違った見解や理解を持たせたくないのであまりさせていない。
- ・予習については、次回分の教科書ページを教えて読ませることで、前後理解ができるよう

にしている。

〈項目 3 教材の内容・形態 [教材使用がある場合]〉

- ・ パワーポイントや板書の内容を配布していたが、学生が自身でノートを書く方が集中できる。
- ・ パワーポイントと比較して板書では提示できる情報量が限られるが、その方が良い場合もある。
- ・ 1式と2式の間を説明するようにしている。
- ・ 図を見せる時にパワーポイントを使っている。

〈項目 5 学生への関わり〉

- ・ わざと静かにすると、寝ている学生が目覚ますときがある。
- ・ 予習で英文章を覚えさせて、予習試験とする。

【6班】

〈項目 2 授業の展開〉

- ・ アクティブ・ラーニングについては、学生の主体性に任せて成功する例もあるが、フォローアップが難しい面もある。複数教員で実施する場合は、相互調整 [内容, 手法] が重要である。

〈項目 3 教材の内容・形態 [教材使用がある場合]〉

- ・ 科目によってはパワーポイント／キーノートの使用やアクティブ・ラーニングが適しないもの（例えばプログラミング言語の習得／暗記）や、正解が提示できないもの（ロールプレイング）があり、手段の選択が重要である。

〈項目 4 教材の使用 [教材使用がある場合]〉

- ・ パワーポイント／キーノート等のプレゼンテーション用アプリについては、一長一短（視覚的理解に適する／教員の進行が速くなりがち）があり、自覚的な使い方（使い分け）が必要である。（パワーポイント使用者としてはプロジェクターの能力（ルーメン）を確保願いたい）

【7班】

〈項目 1 授業の準備・導入〉

- ・ シラバスを詳細に書いて伝えることが大切（授業の導入時, 再度提示）。
- ・ ルール作りが大切（例：遅刻をした学生への対応について不公平にならないための配慮が必要）
- ・ 授業の内容と質問を出席カードで提出させ、次の授業につなげる（授業態度として評価に反映）。
- ・ 学科の専門科目を履修優先すると、共通教育科目は空きコマの中から選ぶしか無くなる。土日開講, 6 限開講等, 専門科目の時間割配置の見直しが必要。

【8班】

〈項目 2 授業の展開〉 及び 〈項目 5 学生への関わり〉

- ・ 授業配分について、授業内で「起・承・転・結」をつける。また配分にも注意することで、

「学生のモチベーションの持続」及び「雰囲気作り」につながる。

なお、ディスカッションのテーマとして選択された項目の総数は下記の通りであった。

項目 5 学生への関わり・・・6

項目 2 授業の展開・・・5

項目 3 教材の内容・形態 [教材使用がある場合]・・・3

項目 1 授業の準備・導入・・・2

項目 4 教材の使用 [教材使用がある場合] 及び、項目 6 授業のまとめ・・・1

(3) アンケート結果

参加者には用意したアンケートの回答を要請した。回収した回答は 51 通（教員 47 名，職員 3 名，所属未記入 1 名）であった。意見交換会の満足度等は以下の通りであった。

意見交換会について	とても満足 20%	満足 62%	どちらともいえない 13%
実施方法について	とても満足 10%	満足 50%	どちらともいえない 25%
講師の発表について	とても満足 10%	満足 37%	どちらともいえない 21%
会の長さについて	とても長い 2%	やや長い 6%	ちょうどよい 63%
必要な知識・方法は学べたか	かなりできた 15%	できた 63%	どちらともいえない 14%
得た知識・方法を活用しますか	是非活用したい 20%	できれば活用 59%	どちらともいえない 12%

自由記述の中から、(A) 今回の意見交換会は全体を通して有益だったかどうかの感想・意見、(B) 今後、自分の活動で本日得た知識や方法を活用する考えについて、(C) 今回の意見交換会（実施方法等）に対する感想・意見、(D) 今後の同会に希望すること、の四つについて分類したものを以下に示す。

(A) 今回の意見交換会は全体を通して有益だったかどうかの感想・意見

分類	記述
有用な点	<ul style="list-style-type: none"> ・他学科や他学部の先生とお話する機会が少ないので、とても良い機会になったと思います。（保健福祉学部教員） ・色々な意見が聞けて、自分の授業を見直す機会になったと思います。（保健福祉学部教員） ・時間配分に注意した授業の組み立てという意見については、我々事務職員においてもプレゼンや講師的な事務をする機会もあることから、大変重要なことと認識しており、起承転結の比率等、参考にしたいと思います。（事務職員） ・多くの意見が聞けたので有益でした。授業の準備に役立つ意見が多くあった。（保健福祉学部教員） ・他学科の先生の話が聞けるのはあまりない機会ですので、参考になりました。（デザイン学部教員） ・授業の組み立て方や PPT の長所短所、出欠カードの有効な使い方等、なるほどと思える授業での工夫が聞けました。（デザイン学部教員） ・授業参観以上に様々な事例や工夫を知ることができた。（情報工学部教員）

意見	<ul style="list-style-type: none"> ・もう少しテーマが絞れると深い議論ができたかもしれない。(情報工学部教員) ・授業参観報告以上の改善提案に至らなかったのも、具体的で実効性のある改善案を生み出す努力が必要ではないか。(デザイン学部教員) ・グループワークも良いと思いますが、予想外の方向に話が進むと、あまり得るものがないと思います。教員個々の工夫しているところを発表していただければ参考になると思います。(所属未記入)
----	--

(B) 今後、自分の活動で本日得た知識や方法を活用する考えについて

分類	記述
有用な点	<ul style="list-style-type: none"> ・出席カードについて、色々な取組があると思いました。取り入れられそうなことから始めたいと思います。(保健福祉学部教員) ・大変参考になったが、自分の授業に取り入れられるかは十分検討してからになる。(情報工学部教員) ・アクティブ・ラーニングの導入、小テストへの導入、等。(情報工学部教員) ・自分の授業にどのように生かすか思案中。(デザイン学部教員)
意見	<ul style="list-style-type: none"> ・ただし条件があつて、教卓周りの前時代的な IT 機器を改善すべきである。(デザイン学部教員) ・自分なりの工夫していること以外の情報がありませんでした。(所属未記入)

(C) 今回の意見交換会（実施方法等）に対する感想・意見

分類	記述
有用な点	<ul style="list-style-type: none"> ・グループで話し合う機会があるところが良いと思いました。(デザイン学部教員) ・話しあいしやすい雰囲気であった。(保健福祉学部教員) ・他の先生と話をする機会が設けられていたのでよかった。(情報工学部教員) ・全体の長さとしては 90 分が良いと思いました。時間の内訳では、話し合いがもう少し長ければ良いと思います。(保健福祉学部教員)
意見	<ul style="list-style-type: none"> ・意見交換が活発にできましたが、まとめる時間が少し足りなかったと感じました。(デザイン学部教員) ・グループで話し合う機会があるところが良いと思いますが、はじめから司会の方が決まっていれば短い時間を有効に使えらると思います。(保健福祉学部教員) ・ディスカッションの時間が短い。目的の設定が大まかすぎる。(デザイン学部教員) ・できれば、学生を交えた交換会を行なうと良いのではないだろうか。(デザイン学部教員) ・いくつかの学科では、この時間に学生実験、実習があり、かなりの割合の教員が参加できていないところが見られたようです。そのような学科も参加できる工夫が望まれます。(センター職員) ・自主的参加者が増えれば良いと思います。(保健福祉学部教員) ・討議の時間がもう少しあればいいと思いました。(盛り上がったところで終了という気

	<p>がしました)。(保健福祉学部教員)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・あらかじめ議論のテーマを定めておいた方が, 時間が無駄にならないと思う。(保健福祉学部教員) ・色々な意見は出たが, 模造紙にまとめることが難しかった。(情報工学部教員) ・ディスカッションの時間が短い or テーマが明確でなかった。(情報工学部教員) ・もっと1年に数回開催してもよいのではと思った。(事務職員) ・グループワークの時間を長くしてほしいと思いました。(所属未記入)
--	---

(D) 今後の同会に希望すること

	<ul style="list-style-type: none"> ・グループワークは参考になる意見が多く出るので, とりあえず全教員が一回りするまでは定期的開催の方がよいと思います。(保健福祉学部教員) ・参加している教員より, このような場に参加しない教員が本来参加すべきなのではないでしょうか。(デザイン学部教員) ・将来的にできれば二日間に分けて行ったらいいと思います。(デザイン学部教員)
--	---

1-2-5-5 まとめと課題

平成 27 年度の FD 部会活動を総括する. 相互授業参観と授業改善意見交換会をペアで開催することにより, 他者の授業からヒントを得るだけでなく, 異なる学部にも所属する教員同士の意見交換を通じて多くの新しい気づきが生じており, 良好な結果が得られた. FD 研修会では, 主にアクティブ・ラーニングを題材に取り上げたが, アンケート結果からも継続を望む意見が多い. 従って, 以上の取組については, 今後も継続することが望ましいと考えられる. 一方, 授業評価アンケートに関しては, 評価結果が高止まり傾向に有り, 質問項目の検討が必要であろう. 以上に述べた以外にも, FD 部会では, 教育優秀教員の表彰や新任教員用テキストについても検討を行っており, これらの早期実現が課題である.

1-2-6 教育評価部会

平成 27 年度の教育評価部会活動としては, 以下の 7 項目について重点的に検討を行った.

- 1) GPA の運用
- 2) クォーター制
- 3) シラバスの改正について
- 4) 科目ナンバリングについて
- 5) 学修評価について
- 6) 実施した FD・SD 研修会について
- 7) その他

1-2-6-1 GPA の運用について

GPA (Grand Point Average) は過去に本学でも導入が議論されたが, 導入に係るメリットが見いだせないとの学内意見が大勢を占め見送られた経緯がある. しかし, GPA 算出におい

では様々な変法（計算方法）は様々な方法があるもののグローバルに通用する成績評価手法であるため、その導入を図り、かつ有効な活用法を見出すことは意義があると認められ、平成 25 年度には導入が開始され、かつ実施方法の大略についても検討された。平成 26 年を試行の年として、平成 27 年度から実施（ただし、しばらく試験運用期間（27～28 年度）を置いて計算方法、運用方法について検討を進める）することとした。

平成 26 年度の試行時に、再度各学部から意見を聴取した際、受講を途中で止めた科目、不合格科目の成績を計算式に含める方式（当初案）と、それらを含めずに再履修後の単位取得時の成績のみを計算する方式を推す学部があり意見が分かれた。それぞれの方式共に運用の方法次第によって学修を促す効果があると認められるため、同年度は試行ということもあって決着せずに実施の経緯を見て後日一方式に統一するという方向となった。そのため、本学の教学システムには二つの計算方式の GPA が算出できるようにセッティングを行った。

平成 27 年度はこの問題について検討を深めるべく幾つかの調査を行った。一つは GPA を導入している他大学における計算方法の調査で、大学のホームページから情報収集を行った。その結果、再履修後の単位のみ有効としていたのが 30 校（国公立 11 校、私立 19 校）、不合格単位も最終通算 GPA に算入していたのが 12 校（国公立 5 校、私立 7 校）、学域によって異なる 1 校（国立）、明記していなかった大学が 12 校（国立 4 校、私立 8 校）あった。今回の限定された調査の結果では、再履修後の最終成績のみ有効としている大学が多い傾向であった。もう一つの資料は、本学の平成 27 年度の 4 年次生の過去の成績を二つの計算式の GPA に換算したものの比較を行ったものであるが、両計算方式間で差異が大きかったのは情報工学部、少なかったのが保健福祉学部とデザイン学部であった。この差異は前者の学部において再履修が多く行われていることを裏付けるものと考えられた。

GPA の計算方式や計算に投入する科目の詳細、履修取り消し制度の導入、学部の成績評価の特性検討等さらに検討を深める必要があると認められ、これらに関する結論は次年度における各種データを基にして、次年度（平成 28 年）に最終結論を得る方向で検討を進めることとした。

1-2-6-2 クォーター制導入について

本学はクォーター制の導入を平成 29 年度からと定めた。国内の大学でもセメスター制からクォーター制への変更が進みつつあるが、各大学とも導入後日が浅いこともあり情報が広く行き渡っていない現状である。学内にはクォーター制に関する各種の情報を求める声もあり、また学内における導入への具体的検討に当たっては既に導入を進めている大学における導入の検討過程や導入後の実施状況に係るデータの収集が本学のクォーター制導入の議論のために必要と考えられた。

そこで、教育評価部会では、本学の学事暦におけるクォーター制の導入に関する基礎資料を学内に提供するために、すでにクォーター制を導入している大学から入手した資料や各大学のホームページ情報、さらには文部科学省の情報をもとに、平成 27 年 6 月 19 日に「大学におけるクォーター制導入の動向調査」という報告書を提出した。本報告書は、①国公私

立大学における学時暦の変更の導入状況, ②学時暦変更と文部科学省の政策動向 (AP 事業とCOC+事業), ③学時暦変更によるメリットとデメリット, ④7つの資料 (岡山大学, 広島大学, 千葉大学, 筑波大学, 東京大学, 文部科学省の資料2種類) から構成されている。

本報告書では, 「すでにクォーター制を導入している大学名」「クォーター制導入予定大学名」「3学期制を導入している大学名」「6区分のセメスター制度を導入している大学名」「クォーター制の導入を検討している大学名」を紹介した。その上で, 文部科学省が, 大学設置基準を改正し, 平成25年4月1日から, 「弾力的な (柔軟な) 授業期間の設定」を認めていることを踏まえ, 学事暦の変更は, 主体的に活動できる能力を培うための留学, インターンシップ, 地域における活動などをしやすくする条件をつくるために必要であるとともに, AP 事業やCOC+事業を実施する際にも必要であると結論付けた。最終的に, 学時暦変更によるメリットとして, ①学期の区切りや長期休業期間を海外の大学に合わせることができると, 留学などの学生・教員の国際交流が推進されること, ②週に複数回授業をすると, より集中した学習が可能となり, 教育効果が高まること, ③2か月程度の短期休学が可能となり, 社会体験活動へ参加しやすくなること, ④学外で行う地域関連科目に出席できることを挙げた。一方, デメリットとしては, 学事暦変更の移行期における調整作業が難しいことを挙げた。

また, 平成27年6月30日に, 広島大学の教育・国際室副理事 (教育改革担当) の小澤孝一郎教授を招聘し, 「広島大学における『クォーター制 (4学期制)』導入について」というタイトルの講演を, センターの教育開発講座 (教育評価部会) として全学に提供した。広島大学は, 平成27年度から学年暦をクォーター制へと移行させ, 平成28年度からクォーター制を本格実施する予定である。講演内容は, ①背景, ②クォーター制導入の経緯, ③クォーター制導入の目的と概要, ④アクティブ・ラーニング (PBL) の推進であった。広島大学のクォーター制導入の目的の一つは「短期間で集中して授業を実施することによる教育効果の向上」にあるが, 教育効果の向上のために, クォーター制のみならず, アクティブ・ラーニングを強化していることも紹介された。本講演では, 広島大学のクォーター制の全体像についての情報を得るだけでなく, クォーター制導入後の時間割の作り方など, クォーター制を導入する際のより細かな方法や注意点について情報を得ることができた。

教育評価部会としてはこれらの一連の作業と報告書, 研修会開催でクォーター制に関する役割を終え, 後は大学委員会及び各学部での検討に委ねることとした。

1-2-6-3 シラバスの改正について

「全授業科目において授業計画 (シラバス) が作成され, かつその内容として科目の到達目標, 授業形態, 事前・事後学修の内容, 成績評価の方法・基準が示されていること」は文部科学省が種々の事業等申請において基礎要件の一つとしているところである。また大学認証評価においては, 「教育の質の保証」に関わる要件として扱われ, シラバスの書式や記載内容の重要度は急速に増している現状である。

シラバスは大学における教育改革においてもその基本をなすものであり, 科目から科目

群へ、また科目群からカリキュラムへと、教育の目的性を明確にしたカリキュラム構成（科目ナンバリング等）を実現する最少要素である。現在、大学のディプロマ・ポリシーやカリキュラム・ポリシーを実際のカリキュラムに反映させることが求められているが、それを実現するためには大学統一的に現在のシラバスフォーマットを再考し、当該目的のために最適化を図る必要がある。シラバスの最適化に向けた改正は、大学の教育ポリシーを反映させるため以外にも、授業のあり方の基本を定めるものとなるべきであると考えられる。基本とは、授業の目標と行程と成果の関連性、適切な予習と復習の促進、適正な評価方法等であって、全学的合意の下で実施される場合、学生の学修態度を規定する要因にもなり得る。最適化に向けたシラバスフォーマット改正の試みは目的性を持ったカリキュラム構築の基本として着実にやってゆく必要がある。教育評価部会では、本年度現在のシラバスの問題点を洗い出し、新しいシラバスの提案を行うべく作業を進めた。

国内外大学のシラバスを検討した結果、本学におけるシラバスの改定に当たっては、①授業の行程を現在の各講義（あるいは各単元）のタイトルのみならず、内容の概略も同時に示すことで、そこに、課題の有無や時間外学習（予習、復習）を示すことができればより望ましい。また、②成績評価の方法や基準を具体的に示すこと、等が挙げられた。実際に使用する場合を想定した改定版を作成して大学の常任委員会に報告を行ったが、本学の現行の Web を用いたシラバス執筆システムには項目の作成に限界があることが明らかになり、可能であるのは上記①の一部（講義（単元）の説明）のみであるため、本年度はそれを試行することを提案した。

平成 28 年度はさらに踏み込んだシラバス案の検討と提案を行い、従来各科目の独立性が顕著であった大学カリキュラムを各科目や各科目群が系統的かつ有機的に教育・学修に作用するように学部、学科、教員がチームという観点からカリキュラムを考慮する雰囲気や体制作りを目指したい。

1-2-6-4 科目ナンバリングについて

センターの教育評価部会では、他大学で実施されている科目のナンバリングの現状について、文部科学省や各大学のインターネット上の情報をもとに明らかにした。その上で、本学における科目のナンバリングのあり方について議論を行った。

科目のナンバリングとは、「授業科目の学修段階や順序等の体系性を明示することを通じて、学生がレベルや専門を勘案して授業科目を履修できるようにするものである」（中央教育審議会大学分科会、大学教育部会「(第 10 回) 資料」8 頁の国際基督教大学の例を引用)。

まず、平成20年12月24日の中央教育審議会の答申「学士課程教育の構築に向けて」において、「明確化した『学習成果』や教育研究上の目的の達成に向け、順次性のある体系的な教育課程を編成する（教育課程の体系化・構造化）」（中央教育審議会大学分科会、制度・教育部会報告書の20頁を引用）ことが求められていることを確認した。その上で、教育課程の体系化・構造化のためには、ディプロマ・ポリシーとカリキュラム・ポリシーを前提に、カリキュラムマップや科目のナンバリング、さらには履修モデルを明確にする必要が

あることを確認した。

科目のナンバリングの方法は複数存在するが、平成 27 年度は、他大学ですでに実施されている、以下の 2 つのパターンについて検討を行った。今後、他のパターンについても検討し、本学に合った科目のナンバリング方法を明らかにするとともに、教育課程の体系化・構造化を目指す予定である。

①パターン 1（田中正弘氏資料参考）

学問分野—学部・学科番号—科目区分—難易度—通し番号

例：CLI-34-4-203

*学問分野：科研費細目表の分類

- ・ 3 文字の作成ルール 例：細胞生物学 Cell biology→CEB
- ・ 文字が重なった場合には、別の文字を使用。
- ・ 科目が複数分野にまたがる場合には、最も比重が置かれている分野を選択。
- ・ 外国語の専門科目は FLE (Foreign language education) とする。
- ・ 他の語学科目は独自の分類を行う。例：English: ENG, French: FRE
- ・ 科研の分類に当てはまらない科目（ゼミナール、卒業研究、キャリア教育など）の場合、オリジナル分野を作成。例：Seminar: SEM, Thesis: THE, Career Education: CAE

*学部番号 10 の位 例：10 文学部, 20 理学部

学科番号 1 の位 例：1 日本文学科, 2 英文学科, 3 史学科

*科目区分

- 1 基礎科目 2 教養科目 3 学部共通科目 4 学科科目 5 資格関係科目
- 6 外国人留学生科目

*難易度

- 1 1 年次レベル 2 2 年次レベル 3 3 年次レベル 4 4 年次レベル
- 5 大学院単位交換レベル 6 修士課程レベル 7 博士課程レベル

*通し番号

以上の番号等を列記したもの

例：CLI-34-4-203

②パターン 2（北海道大学資料参考）

大分類—レベル—中分類—小分類—言語

例：ABC_DE 1 2 3 4

*大分類

開講部局等__学科等

*レベル(学年とレベルは一致するものではない。4 年生次学生向け科目であっても、3000 番台などの番号がある)

- 1 0 0 0 番台 全学教育科目（語学上級科目, 高年次対象科目を除く）
- 2 0 0 0 番台 学部専門科目（基礎的な内容の科目）
- 全学教育科目（語学上級, 高年次対象科目）

- 3000番台 学部専門科目（発展的な内容の科目）
 全学教育科目（高学年次対象科目）
- 4000番台 学部専門科目（卒業論文, 卒業研究関連科目, 医・歯・薬・獣5～6年科目）
- 5000番台 大学院（修士・専門職専門科目＜基礎的な内容の科目＞大学院共通授業科目）
- 6000番台 大学院（修士・専門職専門科目＜発展的な内容の科目, 研究指導科目＞）
- 7000番台 大学院（博士専門科目＜研究指導科目を含む＞）

*中分類, 小分類

学問分野を示すコード

各教育課程（大分類）の中で, 100 個以内の学問分野を中分類・小分類とする. なお, これらの分類は学問分野を示したものであり, 授業科目名とは一致するものではない.

例:

中分類	コード	小分類	コード
物理数学	1	物理数学Ⅰ	1
		物理数学Ⅱ	2
		物理数学Ⅲ	3
力学	2	連続体力学	1
		量子力学	2

*使用言語

例: 0: 日本語で行う授業

- 1: 英語で行う授業
- 2: 日本語及び英語のバイリンガル授業
- 3: 英語以外の外国語で行う授業
- 4: その他（例えば, 日本語とドイツ語のバイリンガル授業）

引用・参考文献

- ・中央教育審議会大学分科会, 制度・教育部会「学士課程教育の構築に向けて（審議のまとめ）」平成20年3月25日（＝平成20年12月24日の中央教育審議会の答申「学士課程教育の構築に向けて」）
- ・中央教育審議会大学分科会, 大学教育部会「(第10回) 資料」平成24年2月2日
- ・文部科学省「ナンバリングについて」
 (http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/giji/_icsFiles/afieldfile/2014/02/03/1343750_3.pdf)
- ・北海道大学教育改革室「順次性のある体系的な教育課程の構築に向けて—ナンバリング実施の手引き—」平成25年6月.
- ・田中正弘「科目ナンバリング作成について」日本女子大学FD講演会, 平成27年12月3日.

1-2-6-5 学修評価について

教育評価部会では、科目（シラバス）、カリキュラム、評価を三位一体として考えている。教育や学修の評価は初年次から卒業、修了、卒後に至るまで、場合によっては生涯に亘って継続して観察する価値があると考えられる。現在まで、本学では卒業アンケート以外は、教育・学修に関わるものとして入学時アンケート、年次アンケート、卒業後・終了後（卒業生・修了生）アンケートは全学で一致して実施することはなかった。しかし、本年度は入学時アンケートを全学的に行うことになり、大学院修了時アンケートや卒業生・修了生アンケートも実施される運びになった。今後は年次アンケートについても考慮しなければならないが、これらのアンケートに系統性、構造化が考慮されていなければ、その結果を教育や学修の改善にフィードバックさせることは難しい。現在、文部科学省の「学士力」や経済産業省の「社会人基礎力」が項目として挙げられているが、これはよく吟味し、実際の教育や学修実践のプロセスにまでブレークダウンして考えてゆく必要がある。そのため、教育評価部会では、教育の質の保証を系統的に考える基盤を提供することを目途に、今後の評価と実践に関する考え方についての検討を行った。

1. 高等教育政策の量的拡大と質的充実の流れ

「大学」は、高度職業教育、リベラルアーツ、学術・研究という3つの機能を源流にもつ。これらの機能は、かつて個々の大学に備わっていたが、徐々に1つの大学が総合的に担うようになった。戦後日本では、特に高度経済成長期後、進学率の上昇によって高等教育機関の量的拡大が政策的に進められた。しかし、1970年代後半、18歳人口の推移が横ばいになると、高等教育機関の質的充実が政策的に進められた。ところが、1980年代後半、第2次ベビーブーム世代への対応として、高等教育機関の量的拡大が政策的に進められた。

大学設置基準の大綱化（1991）以降、「自己評点検・評価」など高等教育機関の「質保証」が本格化した。大学教育審議会は、「大学教育の改善について」（1991）、「大学教育の一層の改善について」（1997）、「21世紀の大学像と今後の改革方策について」（1998）を答申し質保証を促した。また、中央教育審議会は、「大学の質の保証に係る新たなシステムの構築について」（2002）を答申し、「我が国の高等教育の将来像」（2005）によって大学の機能別分化を促し、「学士課程教育の構築に向けて」（2008）によって学士課程の質保証を求めた。

2. P D C Aサイクルにおける教育原理と教育評価

中央教育審議会は、「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて」答申（2012）において学修調査などの質保証システム構築を求め、教育実行再生会議の議論を受けて、「大学ガバナンス改革の推進について（審議まとめ）」（2014）においてガバナンスの強化を求めている。「成熟した社会」「予測困難な時代」にあって、法令遵守に基づいたガバナンスを強化し、学修成果の把握、教育課程の体系化、教育方法の改善、教員の力量向上などを行い、客観的指標に基づいて組織経営を行うこと（IR）が求められている。

IRの目的は、学修の質保証はもちろん、P D C Aにおける課題の特定、ステイクホルダーへの社会的説明、ミッションの共有と戦略的計画の根拠、など様々である。このIRの指標の1つがいわゆる教育評価であり、教育評価には、教育の原理的な要素が組み込まれ、常

にPDCAが想定されていなければならない。フォーマルな教育は、理念、根拠、目的、計画、内容、方法の要素から成り、計画－実施－評価－改善のサイクルをたどる。ここには、「何をめざすのか?」「どんな学生像で?」といった議論が必要である。

3. 本学の大学教育開発センターと教育評価の設計

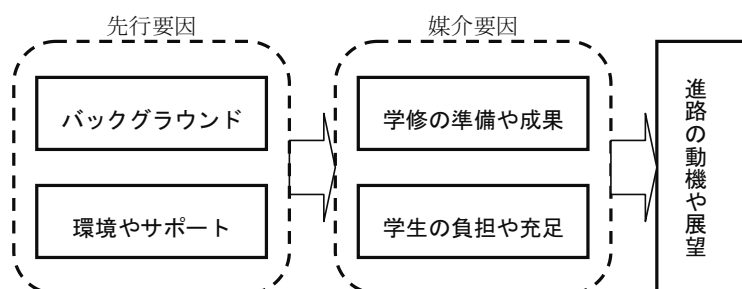
本学では、組織改革の一環として、大学教育開発センターが設置された。本センターがどのように機能分化するかによって、教育評価アンケートの構成も異なる。便宜的に、①インプット（入学）、②アウトプット（支援）、③スループット（教育と研修）に分けることができる。①には「アドミッション」、②には「キャリア形成支援」「学生支援」、③には「共通教育」「FD」「教育評価」の各部会が配置される。実効性のあるIRを行うには、本センター全体として、どのような主題を組み込むのか、議論する必要がある。

高等教育機関における教育評価のためのアンケート調査には、「通時的な設計」と「共時的な設計」が必要である。「通時的な設計」としては、①入学前や入学時→②在学期間→③卒業時や卒業後、といった時系列で配置できる。在学生が対象なので、上記は実施時期ではなく、実施内容を示している。また、「共時的な設計」としては、①バックグラウンド、②本学の環境やサポート、③学生の学修（準備や成果）、④学生の心理（負担や充足）、⑤進路（動機や展望）などが考えられる。

4. IRに活用できるアンケート

かつて、アメリカを中心に、「アウトカム（学修成果）」研究として、パフォーマンス・インジケータの開発があった。その後、日本でも、主にアメリカの調査研究が紹介され、東大などのチームが調査研究を実施してきた。現在では、国立大学や私立大学を中心に、多くの大学で学生生活の把握のためのリサーチが行われている。その一方、東大の調査を含め、マッピングや質問項目は恣意的かつ部分的であり、多くの課題が残っている。結局、できる限り、学生生活を客観的かつ全体的に把握できるように設計する必要がある。

客観的かつ全体的な把握のためには、本学で行われてきた個別のアンケートについて、質問項目の客観性を高め、マッピングに位置づけ直す必要がある。先行研究を集約すると、大学における教育の要素は大別して4つあり、これを「学修のマッピング」として以下に示しておくこととする。なお、本学では、共通教育と専門教育、学部や学科で、「共通の事項」と「独自の事項」があると思われる。そのため、教育評価（測定）を行う際の質問項目は、これらに「共通の事項」と「独自の事項」に適合する内容でなければならない。



平成 28 年度は、さらに詳細、かつ具体的な検討を実施する予定である。

1-2-6-6 FD・SD 研修会

本年度、教育評価部会では本学が実施を予定している平成 29 年度からのクォーター制導入（1-2-6-2 クォーター制導入について、を参照）に備え、特に既にクォーター制を実施している数少ない大学の中から、近隣の広島大学に依頼し、センターFD・SD 研修会の一つである教育開発講座においてクォーター制をテーマとした教育評価部会主催の研修会を実施した。当該講演の実施時に掲示したテーマ、概要を以下に示す。

【講演タイトル】平成 27 年度大学教育開発センター第 2 回「教育開発講座」、広島大学における「クォーター制（4 学期制）」導入について

【講師】広島大学 教育・国際室副理事（教育改革担当）小澤孝一郎先生

【開催日時】平成 27 年 6 月 30 日（火）13：00～14：30

【会場】：岡山県立大学、学部共通棟（南） 8206 教室

【概要】大学のグローバル化に対応するため、我が国の大学は学期制度の抜本的な見直しを迫られている。その選択肢の一つに所謂「クォーター制（4 学期制）」があり、各大学が工夫して「クォーター制（4 学期制）」への移行を図っている。広島大学においても平成 27 年度から学年暦をクォーター制へと移行させ、平成 28 年度からの本格実施に向け、現在トライアルを実施しているところである。本講演では、議論の過程を含め、広島大学でのクォーター制導入の概要について紹介する。さらに、広島大学ではクォーター制導入の目的の一つに短時間で集中して授業を実施することによる教育効果の向上を掲げているが、これに加え、多彩なアクティブ・ラーニングの実施も目指しており、併せて紹介する。

①背景

②クォーター制導入の経緯

③クォーター制導入の目的と概要

④アクティブラーニング（PBL）の推進

【参加者】100 名（教員：78 名、職員：20 名、学生：2 名）

【アンケート結果】 回答者：75 名（教員：61 名、職員：13 名、学生：1 名）

（人数（％））

	講演の満足度			
	とても満足	満足	どちらとも言えない	やや不満足
教員	24 (39)	31 (51)	5 (8)	1 (2)
職員	4 (31)	9 (69)	0	0
学生	100 (1)	0	0	0

1-2-6-7 その他

教育評価に関しては、大学院の修了時アンケートの原案作成を教育評価部会が主となって教育企画室と協働して行った。このアンケートは大学院の教育面及び研究面の両方の観点から設問の作成を行った。特に前者の教育に関しては、大学院における基礎教育の観点も

考慮して作成を行った。さらに、この大学院アンケートは今後実施が想定される学士課程教育における年次アンケートとの接続も考慮に入れた。

今年度は大きな進捗はなかったが、現在実施している授業評価アンケートの改正するための準備をFD部会等と部会横断的に進める予定である。

1-2-6-8 まとめと課題

教育評価部会では、GPA、クォーター制、シラバス、カリキュラムマップ、教育評価アンケート等について検討を行った。GPAは平成27年度から実施に至ったが、未だその計算法や利用法についての学部間の議論は終息していない現状である。計算法については平成28年度の早い機会に一本化し、利用法についても一定の指針を作成し固めて次年度履修案内への掲載準備を行う予定である。クォーター制については初期の混乱期において教育評価部会の果たした役割（国内現状調査、研修会の企画と実施）は大きかったが、平成29年度に向けた実質的な検討（学事歴、時間割）の段階へと進展したため部会事業としては終了したものとみなした。シラバスは9月に教育評価部会から教育研究活動委員会へ提案を行い、一部について限定的な実現を見たが、システムの関係上、提案事項の全てを取り込むのは無理であることが判明したため次年度に課題として残された。平成29年度は全学情報システムが稼働することもあって、部会としては平成28年度の早い機会に報告書をまとめて教育研究活動委員会に提案してゆく予定である。しかし、シラバスは本学における教育改革の実現及び教育の質の保証の実現の基礎となるものでもあり、慎重に決定を下さなければならない。完成度の高いシラバスを基盤として人材育成を意図したカリキュラム構築が意味を成すようになるが、カリキュラムマップを構築するためには科目ナンバリングが有用である。既存のシステム以外にも本学独自のアイデアを取り入れることも考慮しつつナンバリングに関する研究と提案を平成28年度も継続して行う。教育評価アンケートは、今年度は部会で「大学院修了時アンケート」を作成し、3月に実施した。現在分析中であり、本年度年報には掲載しないが、来年度年報においては分析結果を示す予定である。現在本学では、アンケート結果の利用が十分になされていないこと、またそのために現在用いているアンケートが十分利用価値の高いものであるかどうかの判定が出来ていない。部会では、平成28年度は本部会のみならず他の幾つかの部会と横断的に連携して本学のアンケートによる教育評価を検討する計画である。

1-2-7 キャリア形成支援部会

1-2-7-1 概要

キャリア形成支援部会は、平成26年度末で廃止となった就職支援専門委員会の業務を引き継ぎつつ、これまで主に学部・学科における専門的キャリア教育に依存してきたあり方を改め、学部・学科横断的な全学的取組として以下に示す調査研究・企画立案業務を掲げ、学生支援班とも協力しながら本学学生のキャリア形成を支援することを目的とした部会で

ある。すなわち 1) キャリア教育及び就職支援プログラムの現状調査と検証 2) インターンシップ企画と実施 3) 卒業生の組織化（同窓会との連動） 4) 就職支援計画 5) ボランティアの育成と組織化支援等である。以下に本年度の活動概要を記す。

1-2-7-2 就職支援活動とインターンシップ

1-2-7-2-1 就職支援活動と実績

全学部を対象として、就職活動の時期に合わせ就職ガイダンスや自己分析検査、各種模擬テストを実施するとともに、大規模な合同企業説明会へ就職活動バスを運行するなどの支援を行った。また、専門のキャリアカウンセラーによる就職相談を週 3 日（休業期間等を除く）実施し、学生への個別指導等を行った。（詳細は付録 1 F を参照のこと）

各学科においても、就職担当教員が中心となり、学科の特性に応じた就職指導やセミナー、企業説明会等を開催し、学生を細やかに支援した。

1-2-7-2-2 インターンシップ

本学では、学生のキャリア形成を支援するため、自らの専攻、将来のキャリアに関連した就業体験を行うため、NPO 法人 WIL や総社市、真庭市、病院や民間企業等との連携を図り、インターンシップ参加希望学生への支援を行った。なお、情報工学部とデザイン学部においては授業科目として取り組んでいるほか、保健福祉学部においては、特定の資格取得を目的に各種実習として取り組んでいるが、本報告には含まれていない。

平成 27 年度の NPO 法人 WIL、総社市及び真庭市におけるインターンシップの実施状況は次のとおりである。

（1）NPO 法人 WIL との連携

本学では、厚生労働省が行っていたインターンシップ事業（平成 14～21 年度）を引き継いだ NPO 法人 WIL のインターンシップ支援サイトを利用してインターンシップを実施した。平成 27 年度の WIL のインターンシップ事業への参加学生は 16 人で、実習先は県内 15 企業（団体）であった。

〔厚生労働省及び NPO 法人 WIL の行うインターンシップ実績〕

単位：社、人

年 度	H16	H17	H18	H19	H20	H21	H22	H23	H24	H25	H26	H27	計
受 入 企業社数	12	7	11	9	12	11	13	19	10	34	29	15	182
参 加 学 生 数	17	13	15	12	17	15	25	25	18	51	38	16	262

[平成 27 年度実習先]

実 習 先 企 業 ・ 団 体
岡山県（農林水産部），岡山市立中央図書館，おかやま信用金庫，ダイヤ工業（株），（株）トンボ，丸五ゴム工業（株），（株）N I C S，シバセ工業（株），（株）両備システムズ，（株）ウエスコ，（株）ハーバー・ソフトウェア，（株）環境科学設計，（株）リックコーポレーション，（株）ファジアーノ岡山スポーツクラブ，（有）アクセス

（2）総社市との連携

総社市のインターンシップは、本学と総社市の連携協力に関する協定の一環として平成 21 年度から実施しているもので、平成 27 年度は、秘書室、市民課、政策調整課、土木課、環境課、農林課、総社市図書館、総社市消防本部など多部署にわたり、19 名が参加した。また、インターンシップで体験した結果をもとに、学生が市に政策提言することを義務づけ、市はその提言の中から独創性や実現可能性などを評価して、3 名の学生を選び表彰した。

[総社市インターンシップ参加者]

年 度	H21	H22	H23	H24	H25	H26	H27
人 数	11	19	23	21	15	12	19

（3）真庭市との連携

真庭市のインターンシップは、本学と真庭市の連携協力に関する協定の一環として平成 27 年度から実施したもので、平成 27 年度は、総務課、地域振興課、都市住宅課、建設課などの部署にわたり、初年度であることもあり、1 名が参加した。

[真庭市インターンシップ参加者]

年 度	H27
人 数	1

1-2-7-3 教育開発講座の実施

平成 27 年度 大学教育開発センター研修会として、第 5 回教育開発講座をキャリア形成支援部会では以下のとおり実施した。

- 講師：児美川 孝一郎 先生（法政大学キャリアデザイン学部教授）
- 題目：「地域密着型大学」発・キャリア支援のこれからのかたち
- 実施日時：平成 27 年 11 月 6 日（金）12:40～16:00
- 会場：学部共通棟（東）8903 講義室
- 参加人数と構成：教員 51 名，職員 7 名，その他（大学院生及び学外者）：4 名，計 62 名
- スケジュール：12:40～14:10 講演
14:10～14:40 質疑応答
15:00～16:00 ディスカッション

（1）講演概要

学生へのキャリア形成支援の歴史背景を俯瞰し、その位置づけや意義の変化等を明らか

にすることで、地域密着型大学に求められているキャリア形成支援はどのようなことが求められているかを論じた。以下の柱と流れに沿って問題提起を試みた。

1. 大学におけるキャリア支援のこれまで
2. 今日の大学をめぐる状況
3. 大学におけるキャリア支援—どこに問題があったのか
4. 大学におけるキャリア支援のこれからのかたち
5. 「地域密着型大学」が直面する課題と可能性

(2) ディスカッション概要

教職員の能動的な参加を促すワークショップの企画、学生によるピア・サポート活動の活用を切り口にしながら、大学におけるキャリア支援を活性化させるための方策について、幅広い観点からアイデアや意見の交換を行った。

(3) アンケート調査

回収率は58%(36名)であった。

以下、研修会全体についての問い（アンケート設問5）に対する回答を挙げる。

今回の研修会全体を通して：実数（%）

	1. とても有用	2. 有用	3. どちらとも いえない	4. あまり役に 立たない	5. 全く役に 立たない	6. 無回答
教員	19(59)	11(34)	2(6)	0	0	0
職員	1(100)	0	0	0	0	0
学生	0	0	0	0	0	0
学外参加	2(100)	0	0	0	0	0
所属不明	0	1(100)	0	0	0	0

この結果に代表されるように、全てのアンケート設問に関して 1. とても有用、2. 有用が主たる回答であり参加者の満足度は概ね高かった。今回の教育開発講座では、キャリア形成支援が単なる就職支援に終わるのではなく学生の資質や社会の変化とともに内容も変化しているとの指摘とその情報をもたらされたことから、参加者は有用性を見いだしたと読み取ることができる。一方、自由記載のコメントでは「地域密着型大学としてより具体的事例や方法の提示が欲しかった」という意見感想もあり、一部教員においては学生のキャリア形成支援に関する次の具体的ステップへの模索や意識があることも分かったことから、今後の企画立案及び周知にさらなる工夫が必要である。

1-2-7-4 アンケート調査の実施

1-2-7-4-1 卒業生及び修了生アンケート

(1) 実施概要

卒業生及び修了生アンケートは、岡山県立大学・大学院の教育研究や学生支援のための活動の充実に向けた基礎資料を得ることを目的として、平成22年度、平成23年度の卒業生と修了生を対象に実施した。

アンケートは、マークシート方式による多岐選択式で実施した。質問内容は、在籍中の本学の教育研究に対する評価や満足度、修得できた知識・技術・能力等を中心に構成した。質問項目は、卒業生アンケートは30問、修了生アンケートは25問で構成した。アンケートの回収数は、卒業生アンケートは55部（発送数795部、回収率6.9%）、修了生アンケートは15部（発送数174部、回収率8.6%）であった。（アンケート内容及び結果は付録1Dに記載）

（2）アンケートの結果概要

①卒業生アンケート

- ・卒業生アンケートのうち、大学の教育体制に対する評価をみると、共通教育や専門教育をはじめ、実践的な教育、少人数教育等のほとんどの項目で高い評価を得ていた。ただし、外国語学習に対するサポートについてのみ、やや低い評価となっていた。
- ・地域社会との交流やクラブ・サークル活動、学生生活や就職活動への支援体制については、その評価がほぼ二分する結果となっていた。
- ・在籍中に修得できた知識・技術・能力等に対する評価については、チームワークや専門分野における知識や技術、実行力や社会的責任など、広く大学での教育や学生生活を通じて修得できたと回答している人が多かった。ただし、リーダーシップ、創造力、コミュニケーションスキル、異文化理解の修得に対しては必ずしも高い評価ではなかった。
- ・なお、大学に対する教育内容や卒業後の仕事や生活への役立ち度については、回答者の8割以上の人々が満足していた。

②修了生アンケート

- ・修了生アンケートのうち、大学院の研究指導体制の充実度については、授業内容、研究指導、研究設備等についていずれも高い評価となっていた。
- ・在籍中に修得できた知識・技術・能力等に対する評価と、それを社会にどの程度役立てることができたかについての質問では、論理的思考力、問題解決力、発信力等をはじめ、広く大学院での研究や専門教育を通じて修得でき、かつそれを社会に役立てることができたと回答する人が多くなっていた。
- ・卒業生アンケートと同様に、コミュニケーションスキルや異文化理解の修得に対する評価はやや低くなっていた。

（3）アンケートの結果からみえた課題

全体的にみて、岡山県立大学・大学院で実施している教育研究、学生支援活動に対する評価は概ね良好であった。ただし、コミュニケーションスキルや異文化理解の修得については、学部教育、大学院教育ともに卒業生、修了生からの評価は必ずしも高くなかった。本学では、すでに大学改革の一環として外国語教育の充実化に向けた取組に着手しているが、今後はそれらの取組がどの程度、成果として表れるのか期待される。

1-2-7-4-2 就職先アンケート調査

（1）実施の背景

岡山県立大学では、地域の発展に寄与できる人材を継続的に輩出していくため、本学の卒

業生・修了生（平成17年度～26年度：以下OB・OG）の就職先事業所にご協力をいただき、教育研究及び学生支援の充実のためにアンケート調査を実施した。

各事業所における本学OB・OGの人材像についての意見を聴取し、本学の教育課程、教育方法の改善に資することを目的としたものである。

（2）実施形態・回収結果

231件のアンケートを、各学部からピックアップした就職先（過去、各学科で10年間に就職した人数の多い上位30社：保健福祉学部 86件、情報工学部 73件、デザイン学部 72件全部で231件）に対しアンケートを依頼した。（11月18日に各事業所の人事部門に送付。12月18日までに無記名での回収依頼を行った。）また回収件数は113件（回収率49%）であった。

設問は30問で、マークシート方式で実施した。（アンケート結果は付録1Eに記載）質問内容は、以下の項目で構成した。

- ・岡山県立大学OB・OGの社会人基礎力について
- ・岡山県立大学に期待することについて
- ・今後、岡山県立大学に期待する人材育成について
- ・人材育成に向けた岡山県立大学との連携について
- ・岡山県立大生を採用する場合の判断基準に関して
- ・岡山県内事業所を対象とした、岡山県立大生を採用する場合の判断基準に関して

就職先アンケート結果に実施の数値をまとめた（大学HPに掲載）。以下にその内容分析結果を記載する。

岡山県立大学OB・OGの社会人基礎力に関する評価項目（問1～11）については、どの項目でも平均以上の評価を受けている結果となった。その中での特記事項としては、誠実さ・責任感等 ①とてもそう思う 25%、協調性や自立性等 ①とてもそう思う 18%～25%と高い評価である一方、語学力・グローバル化の評価は、④あまりそう思わない 17%と低い評価であり、これらは、OB・OGアンケート結果と一致した傾向を示していると言える。

岡山県立大学に期待することについての問い（問12～15）については、豊かな人間性に溢れた人材の育成、優れたコミュニケーション能力を有する人材の育成が、基礎学力・教養を有する人材の育成、高い専門性・能力を有する人材の育成よりも高い期待値が示された。就職先としては、まず“人材”の本質的なところを重視していて、“良い人材”の供給の期待値が高い。基礎能力や高度な専門性については、“人材”より優先度は低いが、それなりのものを期待している点と、近年の各業界で要求される知識等については、就職先での専門教育や実践教育でより高いレベルの人材に育てていく傾向と一致していると思われる。

岡山県立大学の人材育成への期待値（問16～20）については、教養と強い精神力を兼ね備えた人材育成に高い期待があり、次いで多様な社会活動経験を有する人材育成、また専門知識を基盤とした即戦力となる人材育成に期待がある。先の設問で示された回答によく対応しており、課内における専門的な知識・教養のみならず、課外でのインターンシップ、ボランティア等の活動を通じた幅広い経験とそれらの過程で培われた強い精神力を有する人材

の育成が期待されていると考えられ、本学の目指す方向性と一致している。

人材育成に向けた岡山県立大学との連携（問 21～23）については、最重要項目として約60%がインターンシップと回答し、採用活動を背景にした、直接的な人材に接する結びつきを重視していることが明確であり、本学としての更なる有効なインターンシップの形態を、就職先と連携しながら進めていくことが肝要となると思われる。

採用活動での本学 OB・OG の実績に関する事（問 24, 25）や、岡山県内事業所のみを対象とした、岡山県立大生を採用する場合の判断基準（問 24～26）に関しては、参考程度の評価が示され、あくまで人物本位ということが示された。

（3）まとめ

今回のアンケートにより、就職先での OB・OG の評価の全体像は把握することができたと思われる。現状での高評価のポイントである“良い人材”の育成を継続していくとともに、今後の時代の変化に対応していける素養を身につけていくための教育についての検討を進めていくべきである。

また、地域貢献という点からは、更なるインターンシップの強化等を念頭に、より具体的な結びつきを進めていくことが期待されている。

1-2-7-5 県大吉備塾の開催

この調査研究は、卒業生を特別講師として招聘し、講演会やワークショップ・ディスカッション等を開催し、学科学部を越えた教職協働（同窓会含む）の視点から調査研究を進め、本学に適した適用や在学生へのキャリア形成支援への展開及び構築について探って行くことを目的とする。以下に初回の第3回県大吉備塾第1部から第6回までの開催概要を記す。どの回においても参加した学生及び教員によるアンケート結果は、吉備塾の内容が意義のあるものであったとの回答が多かった。

第3回県大吉備塾 第1部

○学外講師：アイディアファクトリー株式会社、イラストレーター つなこ氏

（デザイン学部ビジュアルデザイン学科・平成19年度卒業）

○対談者：吉原直彦 教授（造形デザイン学科）

○実施日時：平成27年7月23日 14:30～15:45

○会場：共通棟南 8206 教室

○企画運営：難波久美子, 齋藤美絵子

○参加人数と構成：学生 35 名/教員 11 名/その他 3 名/計 49 名

本学デザイン学部ビジュアルデザイン学科グラフィックデザインコース 平成 19（2007）年度卒業生で、株式会社 アイディアファクトリーのイラストレーターである、つなこ氏を講師として招聘した。講演前半は、2008 年に就職して以降の自分が関わった仕事として、キャラクターデザイン、イラスト、ゲームのキャラクター監修のほか企画立案、シナリオ及び後進指導や広報展開などを紹介いただいた。そして、在学時からの精力的な活動を、複数のクリエイター登録、携帯用のアバターや Web ゲームのイラスト、さらには書籍の表紙・マン

が担当を通じ出版にも関わった例を挙げ、各々の仕事で得た経験の大切さについて述べていただいた。後半は、吉原教授との対談形式により、在学時から現在までを通して、志を 1 ステップずつ具体的なかたちにすることで未来を切り拓くプロセスの重要性や、彼女が仕事を通して大切にしていること、大学時代の勉強がどう現在の仕事に反映されているかなどについて、掘り下げて具体的に語ってもらった。講演の最後には、使用ソフトや練習法などの専門性のあることや、仕事に対するモチベーションの維持についてなどが、質疑応答された。

第 3 回県大吉備塾 第 2 部

○学外講師：東京大学大学院農学生命科学研究科応用生命化学専攻 清水誠氏
(保健福祉学部栄養学科・平成 11 年度卒業)

○実施日時：平成 27 年 7 月 23 日 16:00～17:00

○会場：共通棟南 8206 教室

○企画運営：山下広美

○参加人数と構成：学生 101 名/教員 7 名/計 108 名

清水誠氏は現在、生体のエネルギー代謝の基礎研究及び、生活習慣病の予防に貢献しうる食品の機能性成分について東京大学農学生命科学研究科で助教として教育・研究を行っている。清水氏が過ごした岡山県立大学での学部生時代の様子、また生化学分野の勉強にどのように取り組んでいたか、さらに大学院時代にはラボで研究漬けだった様子を、詳細に語った。また博士後期課程修了後に選択したアメリカでの研究生活について、そのハードな研究生活の様子を自身の夢とともに詳細に語った。大学で仕事をすることのやりがいや、研究職を取り巻く環境について総括した。

第 4 回県大吉備塾

○学外講師：Pino Graphics 代表, デザイナー 吉城敬和氏

(デザイン学部ビジュアルデザイン学科・平成 8 年度卒業, デザイン学研究科ビジュアルデザイン学専攻・平成 12 年度修了)

○実施日時：平成 27 年 10 月 22 日 14:30～15:50

○会場：デザイン学部棟 3414 教室

○企画運営：難波久美子, 齋藤美絵子

○参加人数と構成：学生 21 名/教員 9 名/計 30 名

本学デザイン学部ビジュアルデザイン学科グラフィックデザインコース第 1 期卒業生で、大阪・岡山のデザイン事務所に勤務の後、2006 年に独立し、現在は主に岡山のイベントや展覧会などの印刷物をデザイン・ディレクションしているデザイン会社 Pino Graphics 代表、グラフィックデザイナーの吉城敬和氏を講師として招聘した。独立後に手がけられた業務を中心に、学生時代の経験や社会とのギャップなどを織り交ぜながら、具体的には、次の①から③の流れで講義された。

まず、『①人間関係・信頼関係について』では、デザイナーとしての打ち合せの重要性や、取材力、社会人としてのモラルなどについて実体験を元に解説いただいた。次に、『②デザイ

ンスキルについて』では、学生の頃にこだわっていた「つくりたいデザイン」よりも「クライアントに喜ばれるデザイン」の価値を見出し、喜ばれることが信頼されることに繋がり、次の仕事に繋がるという内容であった。最後に、『③大学院進学から得られたこと』では、大学卒業後2年間の社会人経験を経て「社会で通用しない」という反省や「もっと知識や技術を得たい」というモチベーションから本学大学院へ進学したこと、必要性を持って勉強するという経験の良さについて紹介され、さらに学んだ事を活かす力についてご講義された。

第5回県大吉備塾

看護学科：国立病院機構岡山医療センター脳卒中リハビリテーション看護認定看護師

鳥越俊宏氏（保健福祉学部看護学科・平成14年度卒業）

栄養学科：光生病院管理栄養士 三宅知美氏（保健福祉学部栄養学科・平成16年度卒業）

保健福祉学科：岡山旭東病院医療ソーシャルワーカー 白神彩子氏（保健福祉学部保健福祉学科・平成21年度卒業）

○テーマ：「医療現場におけるチームアプローチ」

～脳卒中（脳血管障害）患者へのかかわりを中心に～卒業生の実践

○実施日時：平成27年10月29日（木）12：40～14：10

○会場：学部共通棟（南）8206大講義室

○企画運営：山本浩史

○参加人数と構成：学生143名／教員6名／計149名

それぞれのパネラー（卒業生）から、卒業して現場に入職した頃の苦労話や喜び、それぞれの現場の様子や仕事の内容（日頃の業務等）についてご説明していただいた。特に鳥越氏からは、認定看護師になられた経緯やその業務、三宅氏からは、病院内での管理栄養士のポジションについて、白神氏からは、入職した頃の苦労された点や担当されたケースの話を聞くことができた。その後、事例（脳卒中患者）をもとに、それぞれがどのように関わるのか、パネラーからご発言いただき、それぞれの役割の理解を深めた。最後にフロアからの質疑応答を行った。

第6回県大吉備塾

○学外講師：

サノヤス造船株式会社 氏平信輔氏（情報系工学研究科機械情報システム工学専攻・平成21年度卒業）

株式会社マリタイムイノベーションジャパン 連山大志郎氏（情報系工学研究科機械情報システム工学専攻・平成24年度卒業）

サノヤス・ライド株式会社 筒井将人氏（情報系工学研究科機械情報システム工学専攻・平成25年度卒業）

○テーマ：「スケールの大きなモノづくり」

○実施日時：平成27年11月13日（金）14：20～15：50

○会場：情報工学部棟 2202講義室

○企画運営：石井裕

○参加人数：計 21 名

株式会社マリタイムイノベーションジャパンの連山大志郎氏(2010 年修了)から「造船業界を取り巻く環境」と題して、穀物や鉄鉱石、石炭などを運搬するばら積み貨物船の設計に約 5 年間携わった経験から、現在出向中の業務について、船底の流体シミュレーション等が説明された。貿易の 99.7%が海運で行われ、まだまだ需要の多い業界であることなど、魅力が紹介された。続いて氏平氏より「船のできるまで」として、新造船の基本設計や技術開発に従事される中で、船が完成するまでの流れを普段行っている機関部の設計業務や現業部での実習などを交えてお話いただいた。船の契約方法や、設計から命名引渡まで 2,3 年かかり、多額の契約内容に緊張された話など興味深い内容であった。参加されていたデザイン学部教員の方から、「他国と比較して高額とされる日本はどこで勝負しているのか」などの質問があり、日本の船の技術力の高さで勝負している回答があった。3 人目のサノヤス・ライド株式会社の筒井将人氏(2014 年修了)から、「遊戯機械のメカニズム」と題して、遊園地に設置されているジェットコースターや観覧車といった遊戯施設がどのようにして創られているのかについて設計業務の立場からご紹介いただいた。このような遊戯施設はいわゆる”一点もの”で、サポート体制の重要性などについても説明があった。講演後に実際の船舶の設計書を拵げていただき学生達を取り囲みながら先輩に色々と尋ねていた姿は、まさに県大吉備塾の象徴的な雰囲気となった。

1-2-7-6 キャリアポートフォリオの検討

(1) キャリアポートフォリオとは

キャリア形成支援部会では、学生のキャリアアップや多様な人材の円滑な就職を促進するため、生涯を通じたキャリアプランニング及び職業能力の証明ツールとして、キャリアコンサルティング等の学生への相談支援のもと、求職活動、職業能力開発などの各場面において活用できるキャリアポートフォリオの検討を進めている。大学のキャリア教育プログラムの実施や就職活動の際のインターンシップ、自らのキャリア教育の状況、自らの人格形成の将来の目標等を記入することにより、学生自らが主体的に行動できるように、キャリアプランニングのためのツールとして活用することができる。

具体的には、自らの能力・興味・関心・適性、今までの自分の実績の振り返り、正課での履修状況、学内・学外での研修成果、今まで取得した免許・資格、クラブや部活動の記録、学外でのボランティア経験、留学経験の有無、将来の自分の目標を記載し、キャリアコンサルタントからの助言、自らの活動結果のフィードバックを行い、全人格の形成の支援ツールとして活用することを目指す。また、学生が 3 年次に行う履歴書の作成、就職活動のエントリーシートの作成に必要な情報を蓄積するのにも役立つ。

(2) キャリアポートフォリオの質問項目案

学生自身での振り返りや情報整理を目的として、検討中の質問項目案を以下に示す。

A) 過去の自分史, 自己診断の作成

i. 過去の自分史 (高校まで)

- ① 趣味や特技
- ② 一番夢中になったこと
- ③ 好きだった科目
- ④ クラブ活動や友人との交流についての思い出
- ⑤ 感動した出来事, 本, 映画, イベント
- ⑥ 好きな言葉
- ⑦ 将来の夢
- ⑧ 理想としている人
- ⑨ 周りの人に長所, 短所をどのように評価されているか
- ⑩ この大学に進学した目的
- ⑪ この学科を選んだ理由

ii. 自己診断

- ① 豊かな人間性 (感性や人間性の豊かさ)
- ② 主体性 (物事に意欲をもって進んで取り組む力)
- ③ チームワーク (相手の意見や立場の違いを尊重・理解し, 調和を図る力)
- ④ リーダーシップ (他者に方向性を示し, 目標の実現のために人をまとめる力)
- ⑤ 専門分野における知識や技術
- ⑥ 専門知識や技術を実務に活かす力
- ⑦ 論理的思考力
- ⑧ 問題解決力 (問題を発見し解決する力)
- ⑨ 創造力 (常識にとらわれず, 新しいアイデアや発想を生み出す力)
- ⑩ 実行力 (目的を設定し, 確実にやりとげる力)
- ⑪ 計画力 (目標達成に必要なプロセスを明らかにし, 計画する力)
- ⑫ 発信力 (自分の意見や考えを相手にわかりやすく伝える力)
- ⑬ 情報リテラシー (情報機器を活用した情報収集力と分析力)
- ⑭ コミュニケーションスキル (語学など国際化への対応能力)
- ⑮ 異文化理解 (多様な文化を理解し, グローバルな視点から多面的にものごとを考える力)
- ⑯ 社会的責任 (社会のために行動し, 貢献しようとする姿勢)
- ⑰ 規律性 (社会の規範やルールに従って行動する力)

B) 大学卒業後のキャリアプランの作成

- i. 働く目的
- ii. 卒業後に身につけていると予想する能力
- iii. 将来取り組みたい仕事
- iv. 仕事を通じて達成したい目標
- v. その他 (本人の自由記入欄)

C) 在学中のプラン, 実施状況の作成

- i. 課程で関心を持って取り組んだこと, 取り組んでいること (科目名等, 理由, 得られたこ

と)

- ii. 課程で実施されるキャリア教育（科目、インターンシップ等）の取組（同上）
- iii. 課外での学習歴（教育機関、内容・目的、得られたこと）
- iv. 課外での社会活動歴（サークル、ボランティア、インターンシップ、アルバイト等）（内容、得られたこと、果たした役割、貢献したこと）

（3）今後の活用等

キャリア形成支援部会で検討しているキャリアポートフォリオの他に、来年度以降で、関連システムとして学生の学修過程の記録のための「学生ポートフォリオ」、あるいは統合的な業務運用のための「全学情報システム」などの導入が計画されており、これらの動向を踏まえながら、より適正な形のキャリアポートフォリオに時点修正を図っていく。

また、文部科学省、厚生労働省及び経済産業省が普及を目指す「ジョブ・カード」との整合性や、経済団体による企業・社会が求める人物像との対応関係も踏まえつつ、取りまとめを行うとともに、学生の利用率向上にも配慮したシステム設計を行う。

1-2-7-7 まとめと課題

キャリア形成支援部会は、学生支援班と連携して本学学生のキャリア形成を支援することを目的とし、学部・学科横断的な全学的取組として調査研究・企画立案業務を掲げて実施している。これまで、学部ごとに情報収集及び支援してきたことを全学的に把握できたことは今年度の成果といえる。例えば、就職支援やインターンシップ情報の把握、卒業生の活躍を在学生キャリア支援へと結びつける試みとして開催した県大吉備塾などである。また、教育開発講座の取組としてキャリアデザインの専門家を外部講師として招いての研究・情報交換、卒業生・修了生及び就職先アンケートでは、本学における学生支援のための活動の充実化に向けた基礎資料を得ることができた。今年度得られたこれらの情報を基に今後はアンケート結果のフィードバックの方法を探るとともに、既に着手しはじめているキャリアポートフォリオ整備の充実、卒業生の組織化（同窓会との連動）やボランティアの育成と組織化支援等を行っていくことが課題である。

1-2-8 学生支援部会

1-2-8-1 概要

学生支援部会は、学部学科横断の全学的取組として、1) 学生生活支援、2) 障がい学生支援、3) 学内バリアフリー・ユニバーサルデザイン、4) TA、アルバイト計画と実施の業務を所掌するが、部門として学生支援室・学生相談室・保健室を擁し、学生における心身の健康や主体性の涵養に資する広汎な調査研究・立案・実施の活動を行っている。

1-2-8-2 学生支援室の開設（目的・機能）

学生にとってのボランティア活動は、地域貢献のみならず地域の教育力のなかで豊かな

人間形成や幅広いキャリア形成につながる有意義な活動である。しかし、本学の地域社会における活動の実績は一部の学生に限られる。さらに、平成 28 年から施行される障害者差別解消法を受け、学内のハード面、ソフト面の両面の合理的配慮を進めていくことが求められているなかで、学生による相互支援、助け合い活動、つまり学内におけるボランティア活動も重要となってくる。このような学生の主体的な活動を組織的に支援することを目的として、平成 27 年 10 月 1 日に以下に掲げる業務を行う学生支援室を開設した。また、学生の情報収集のための窓口として本部棟 1 階に学生支援室を設置した。

- (1) 学生ボランティア活動の支援に関すること
- (2) 障がいのある学生の支援に関すること
- (3) 学内のバリアフリー環境等の点検・改善に関すること
- (4) その他学生の支援に関すること

今年度の取組としては、①「東日本大震災復興支援ボランティア派遣事業」支援、②「キャンパス・マネージャーの活動」支援、③「ラーニング・コモンズ」設置に向けた活動を実施した。①及び②については、次の項で具体的な内容を示す。学生の主体的な学修活動や助け合い活動などを促すためには、組織の核となる学生を育て、組織を整備することが最優先事項となる。支援室業務に関連する本学の学生組織には、学友会、ボランティア部、キャンパス・マネージャーが該当する。従って、これら組織メンバーと各組織の活動の現状と課題、各組織の連携の模索、新たな学生組織構成等に関する意見交換会を 3 回実施した。また、ハード面として新たな学生組織が中心となり学生の主体的な活動を企画・立案・調整するための場として、ラーニング・コモンズの設置を企画した。

1-2-8-3 ボランティア活動支援

○東日本大震災復興支援ボランティア派遣事業（AMDA との連携）

本学では、平成 23 年度から大学コンソーシアム岡山の枠組みのなかで、岡山経済同友会主催の東日本大震災復興支援ボランティアに数名の学生が参加して活動を行ってきた。しかし、大学コンソーシアム岡山に参加する機関（大学）に派遣人数の割り当てがあったため、支援活動への参加を希望しても全員が参加できる状況ではなかった。このため、平成 25 年度に本学と AMDA、総社市との連携協定が発足したことを受け、AMDA の協力の下で地域貢献とキャリア形成を目的とした本学独自の東日本大震災復興支援ボランティア活動を平成 27 年度から実施することになった。

第 1 回目の本年度は、移動日も含めて 9 月 12 日（土）から 9 月 16 日（水）までの 5 日間の日程で実質 3 日間の活動を実施した。

9 月 12 日（土）

午後 岡山県立大学 出発

9 月 13 日（日）

午前 宮城県南三陸町 到着

「南三陸農工房」にて畑作業（収穫作業、水やり作業など）

午後 「さんさん商店街」にて語り部ガイドによる講和と町内視察（旧戸倉中学校, 防災対策庁舎 など）

「さんさん商店街」の美化活動（草抜き, ゴミ拾い, SNS による情報発信）

夜 「まなびの里いりやど」にてキャリア研修

『挑戦する若者の話「何のために働く? What do you work for?」』

南三陸町観光協会の方 2 名, 南三陸復興ダコの会の方 1 名をお招きして

9月14日（月）

午前 宮城県気仙沼市 到着

語り部ガイドによる市内視察（唐桑半島ビジターセンター津波体験館, 鎮魂之碑, 展望台 など）

午後 岩手県陸前高田市「奇跡の一本松」見学

岩手県大槌町 到着

AMDA 現地スタッフとともに町内視察

夜 「岩手県立陸中海岸青少年の家」にてキャリア研修

『東日本大震災の渦中, 社会福祉法人堤福社会がどう機能して, 職員はどう動いたか』 社会福祉法人堤福社会勤務の方

『地域おこしの業務と課題』 大槌復興推進隊勤務（地域おこし担当）の方

9月15日（火）

午前 「大槌稲荷神社」にて 『大槌まつり』に向けた清掃活動（床掃除, 砂利ひき, 草抜き, 畳拭き, 落ち葉ひろい など）

午後 現地出発

9月16日（水）

午前 岡山県立大学 到着

参加した学生は, 非日常である被災地の現状を目の当たりにし, 震災の怖さを知り, 防災を考え, 今の自分にできることは何なのかを深く考える機会となった. また被災者とのふれあいを通して, 家族や友人の大切さや感謝の気持ちを改めて感じる機会となった. さらに, 自分は近い将来, どんな仕事に就いて, どんなことをしてみたいのか, 考える機会にもなった. 活動を終え, 学生たちはそれぞれの日常に戻り, この活動での体験を家族や友人に伝えた. そして, 活動内容をポスターにして食堂に掲示した. 学生にとって「今の自分にできること」の一つは多くの人に, 被災地のこと, 被災者のことを伝えることであった. なお, 東北大震災復興支援ボランティアの活動については, 公立大学協会主催の大学評価ワークショップ（平成28年2月8日（月）実施）にて, 学生プレゼンテーションを行い, その学びについて高い評価をいただいた.

○キャンパス・マネージャーの活動支援

（1）概要

本学には, 広く学生の自主的建設的な意見を大学運営に反映させるため, キャンパス・マ

ネージャー（学生生活企画提言委員）の制度が設けられており、平成27年度は24名の学生（保健福祉学部8名、情報工学部8名、デザイン学部8名）が学長から委嘱されている。学生生活全般に亘る企画、提言を行っており、平成27年度は、学内点検における施設設備等の改善提案や通学時の交通マナーの向上に対する取組などにおいて、学生の視点からの提案や活動が行われ、学生生活の充実に向けた対応が図られた。

（2）キャンパス・マネージャーの活動状況

平成27年度におけるキャンパス・マネージャーの活動状況は以下のとおりである。このうち、学内点検においては各学部棟・共通棟・図書館・体育館・学生会館をはじめとした屋内施設と屋外施設の広範囲にわたり学生から要望等が出された。主なものはトイレなど設備の老朽化対応や時間外の飲食や入館に関する利便性の確保、ならびにバリアフリーに関する施設改修上の課題についてであった。大学側からは対応あるいは検討について状況をとりまとめ、最終打合せ会議にて報告することとしている。

名 称	日時・場所	出席者	主 な 内 容
辞令交付式 第1回打合せ 会議	H27. 11. 6 12:00～12:30 本部棟2階 中会議室	キャンパス・マネージャー12名 学生部長 事務局2名	○キャンパス・マネージャーの辞令交付 ○事務局から活動実績・活動計画の説明 ○学内点検 ○卒業記念品候補品の選定
交通安全指導 に参加	H27. 12. 2～ H27. 12. 17 (上記のうち6日)	キャンパス・マネージャー9名 事務局2名	○通学時の交通マナー及び安全な通学路への誘導
第2回打合せ 会議 (意見交換会)	H27. 12. 18 9:00～11:40 本部棟2階 中会議室	キャンパス・マネージャー6名 学生部長 学生支援室長 事務局2名	○学内点検についての要望の確認と意見交換 ○学生アンケートについての意見交換
第3回打合せ 会議	H28. 3. 29 10:30～11:30 本部棟2階 小会議室2	キャンパス・マネージャー6名 事務局2名	○学内点検結果についての回答報告 ○来年度の活動についての意見交換

（3）意見交換会

平成27年12月18日に6名の学生代表、学生部長、学生支援室長及び学生支援班職員2名にて意見交換会を実施した。その際、平成27年度キャンパス・マネージャー学内点検とりまとめ表及び平成27年度学生アンケート用紙を参考資料とした。

学内点検結果からは、キャンパスの施設設備の利便性について、バリアフリーについて及び学習・情報環境についての改善意見が出された。なかでも施設案内の分かりにくさや休講情報に関する情報面の課題、及び障がい者を対象にした施設バリアフリー面での配慮（ドア・トイレや動線の問題）についての指摘が目を引いた。

学生アンケート項目については、学生会館の利便性について、食堂等の営業時間の短さや食事の内容及び衛生面など、運営全般にわたって具体的な改善意見が出された。またアンケ

ート項目自体の工夫についても意見があった。

その他、キャンパス・マネージャー活動自体について、マネージャーがより広く学科など周囲から意見が拾える仕組みや学生が自由に意見を言えるフォーラム的な場の要望などが出された。



意見交換会風景

1-2-8-4 教育開発講座の実施（平成 27 年 8 月 28 日）

―障害学生支援に関する研修会の実施及び学外研修会の参加―

（1）平成 27 年度大学教育開発センター研修会・第 3 回教育開発講座の実施

研修会名：「発達障害の理解と支援―これからの大学に求められること―」

日 時：平成 27 年 8 月 28 日（金）12:40～14:20

会 場：岡山県立大学 学部共通棟（南）8206 講義室

講 師：柘植 雅義先生（筑波大学教授、筑波大学附属大塚特別支援学校校長兼任）

参加 者：118 名（教員：56 名、職員：24 名、学部生 5 名、大学院生 2 名、外部 31 名）

概 要：

障害者差別解消法の施行（平成 28 年 4 月）により、大学においても「合理的配慮」という新たな概念に基づいた指導・支援に取り組む必要があることについて解説頂き、大学がインクルーシブ（inclusive）になることは社会がインクルーシブになることに大きく影響すると、多様性に挑戦することの重要性を述べられた。講演に引き続き行われた懇談会では、学生支援部会員や他大学教員から発達障害学生の具体的な修学支援の相談について助言を頂くことができた。

アンケート結果：回答者 82 名（教員 40 名、職員 11 名、その他 31 名）

研修会の満足度	(教員)	とても満足	25%	満足	60%
	(職員)	同上	27%	同上	64%
	(その他)	同上	32%	同上	58%
報告内容の活用希望	(教員)	是非活用したい	28%	できたら活用したい	55%
	(職員)	同上	36%	同上	55%
	(その他)	同上	45%	同上	42%

（2）障害学生支援に関する主な学外研修会への参加

・「平成 27 年度障害学生支援実務者育成研修会（基礎プログラム）」

- (8/20-8/21, 里ライフサイエンスセンター)
- ・「平成 27 年度第 6 回 障がい学生支援委員会 (大学コンソーシアム岡山)」
(10/27, ノートルダム清心女子大学)
- ・平成 27 年度 全国障害学生支援セミナー専門テーマ別セミナー 2
(2016. 2/9, 天満研修センター)
- ・「発達障害のある学生の支援に関する勉強会」(2016 3/4, 川崎医療福祉大学)

1-2-8-5 学生相談室の活動

(1) 相談体制

学生相談室は平成 6 年 5 月に開設された。開設当初は本部棟 1 階事務室横にあったが、平成 8 年からは図書館 2 階個人閲覧室の一室、平成 24 年度からは学部共通棟 (西) へ移動し、さらに、平成 26 年度からは学生相談室の認知度向上を図る観点から環境を整備し、より入りやすくより安心して相談できる環境づくりを目指している。

談室のスタッフは平成 6～9 年度は学内カウンセラー 2 名 (臨床心理士) により週 2 日、平成 10 年度からは臨床心理を専門とする学内カウンセラー 1 名と学外嘱託カウンセラー (臨床心理士) 1 名が新たに配置され、4 名体制で週 4 日開室していた。

平成 11～12 年度は学内カウンセラー 2 名と学外嘱託カウンセラー 1 名の週 3 日、平成 13～16 年度は学内カウンセラー (臨床心理士, 心理学専門) 3 名と学外嘱託カウンセラー (臨床心理士) 1 名の 4 名で週 4 日開室していた。

平成 17 年度からは学内カウンセラー (臨床心理士, 心理学専門) 3 名と学外嘱託カウンセラー (臨床心理士) 3 名の計 6 名体制となり、月～金曜日まで毎日開室できる体制となった (ただし、休業期間中を除く)。平成 27 年度の開室時間は週 24～26 時間である。

[平成 27 年度 開室時間と運営スタッフ]

曜日	時間	氏名	備考
	相談室長	吉原 直彦	学生部長
	学校医 (精神科)	中田 謙二	高梁病院精神科医
月	16:30～18:30	京林 由季子	保健福祉学部准教授
火	10:00～14:00	津川 美智子	学外カウンセラー
	16:00～18:00*	迫 明仁	情報工学部教授
水	9:30～13:30	斉藤 弘美	学外カウンセラー
	13:30～18:30	疋田 基道	学外カウンセラー
木	9:00～12:00	疋田 基道	学外カウンセラー
金	12:00～16:00	津川 美智子	学外カウンセラー
	17:30～19:00	谷口 敏代	保健福祉学部教授

*第 1 週, 第 2 週のみ

平成 20 年度から、精神科医である中田謙二医師が学校医として加わり、学生への面談や相談室カウンセラーへのコンサルテーションを行っており、学生相談室長 (学生部長) を含め、

計 8 名のスタッフで構成され、この他に保健室及び学生支援班と連携を図りながら運営している。

(2) 相談室の取組

月～金曜日の開室時間内のカウンセリング以外に様々な取組を行っている。入学式当日には、学生相談室（愛称：ほっとルーム）のパンフレットを配布し、カウンセラーの自己紹介や学生相談室の PR を行い、気軽に来室できる雰囲気作りを行っている。同時に、誰でも予約なしで学生相談室を来訪、見学できる「ちらっとほっとルームキャンペーン」を実施した。また、相談室会議やカンファレンスを年 3 回開催した。

さらに、平成 26 年度より教育力向上支援事業に鑑み、平成 27 年度はデザイン学部の協力を得てパンフレットを刷新、より入りやすい雰囲気にするため外壁を装飾し、誰もが親しみを感じられるような明るく暖かい雰囲気の相談室にするための作業が行われた。

〔学生相談室の取組〕

前期	概要
4 月	入学オリエンテーション (ほっとルームパンフレット配布及び掲示) こころの健康調査 (UPI) (ほっとルームカード配布) ちらっとほっとルームキャンペーン
6 月	学生相談室会議・ケースカンファレンス
後期	概要
1 1 月	学生相談室会議・ケースカンファレンス
2 月	学生相談室会議・ケースカンファレンス

また、各学部教員からの要請やカウンセラーが重要ケースと判断した場合、相談室長や複数のカウンセラー、関係する学部長や教員で対応について協議することとし、学生への緊急対応及び危機介入時には岡山県精神保健福祉センターに相談・協力を得ることにしている。

平成 23 年度からは、平成 22 年度に構築した「こころの健康管理システム」(別図参照)を活用し、「こころの健康調査 (UPI: University Personality Inventory)」の結果や学生指導における事例等の情報管理を行い、学生個々のニーズに応じた効果的な相談を行っている。

(3) 学生相談内容及び相談件数

学生相談室は来談者との秘密保持の厳守が必要である。相談の内容は、①対人関係（友人・親・教職員・アルバイト等の上司や同僚等）、②修学や進路に関する事、③情緒的な問題、④教員へのコンサルテーション等である。件数は少ないが保護者からの相談もある。相談内容は多岐にわたり、中には病理水準域の学生も来室する。

来室のきっかけは、①学生の自発来談、②保健室からの紹介、③学生友人からの紹介、④教職員からの紹介に分類される。電話やメールでの相談対応は原則として行わないが、学生の状況によっては電話によるカウンセリングを行うこともある。

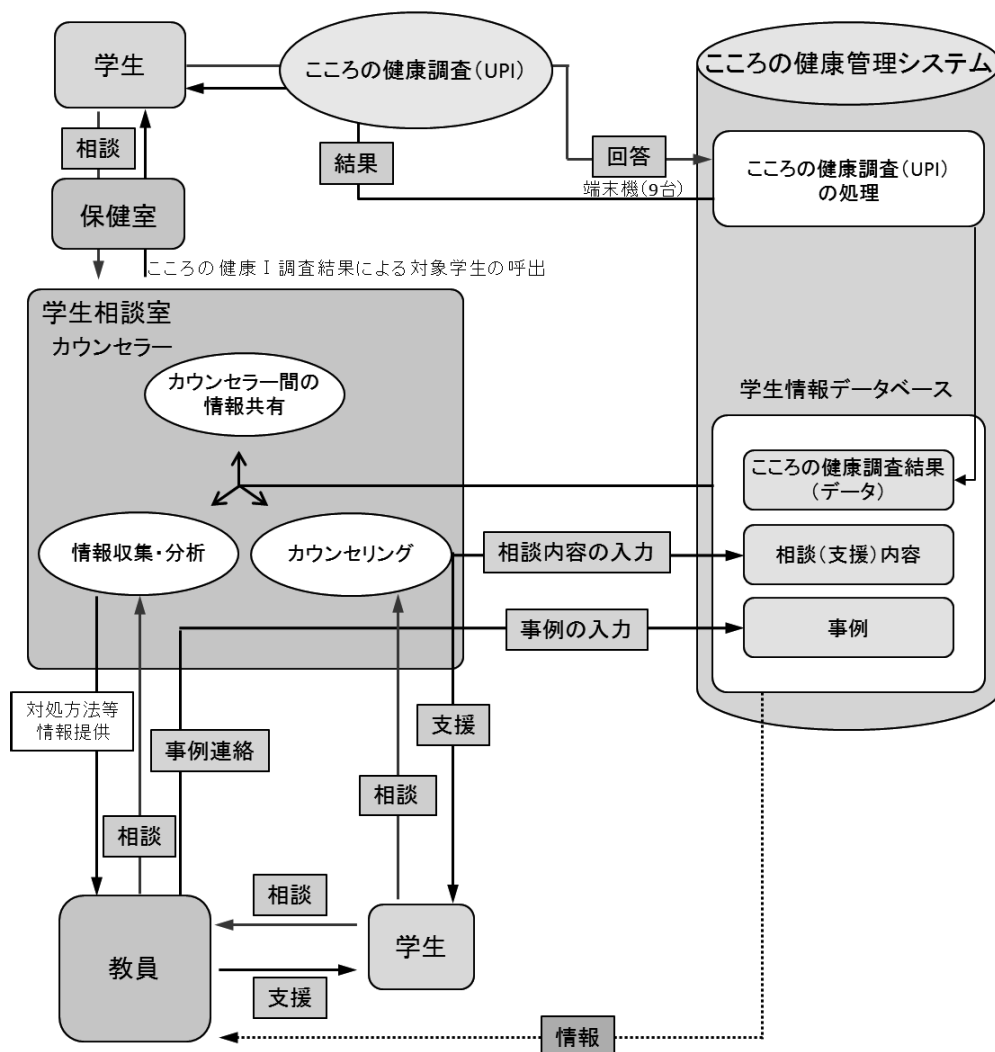
相談の基本的なスタンスは、学生に個別に会い、ゆったりと時間をとり、学生が語る内容を聴いて、心理臨床の専門家として必要な支援を行い、また、学生が自己を語り、自己を理解し、自己をまとめていく過程を大切にして、個々の学生の発達や成長という視点から心理教育的な関わりを行っている。危機介入が必要な場面を除いては、学生本人が自ら解決できるように支援をしていきたいと考えている。

来談者の平成 26 年度及び平成 27 年度の月別人数は、下表のとおりである。

〔月別延来談者数〕

	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	計	うち学生 来談者数		
	月	月	月	月	月	月	月	月	月	月	月	月		うち 実数	延 数	実 数
27年度	32	99	137	81	14	32	45	24	39	22	15	5	545	66	466	58
26年度	78	86	91	28	15	36	91	15	37	22	17	22	538	48	482	38

こころの健康管理システム



1-2-8-6 保健室の活動

(1) 保健室業務

保健室は、開学時より本部棟 1 階にある。主に学生の健康診断、健康相談、健康診断証明書等の発行、けがや急病の手当等、学生の心身の健康に関わる業務を行っている。

保健室のスタッフは、常勤職員は養護教諭 1 名のみであるが、本年度より医師免許を持つ教員 2 名が保健室主任を、学生部長が保健室長を兼務している。

本学では、開学当初より平成 26 年度 3 月末まで森下病院の森下和郎先生、本年度 4 月より済生会総合病院の塩出純二先生に学校医を委嘱しており、学生の健康や感染症予防対策、その他保健活動に関する相談をしている。

(2) 具体的内容

保健室で行う主な取組は次のとおりである。

- ・学生定期健康診断
- ・学生の心身の相談
- ・オープンキャンパスや大学祭等における救護業務
- ・健康診断証明書、検査結果証明書等の証明書発行
- ・「保健だより」による健康に関する情報発信
- ・インフルエンザ流行時期等の感染症予防対策
- ・けがや病気の手当及び緊急時の救急搬送依頼
- ・学生相談室の予約等

(3) 平成 27 年度保健室利用状況 (H28. 3. 31 現在) (人)

	内科	外科	その他	検査等	相談	証明書	その他
H26 年度	135	102	46	585	121	718	7
H27 年度	124	97	87	527	280	682	25

1-2-8-7 学生アンケートの更新・実施

(1) 概要

平成 27 年 11 月に、本学学生からの意見聴取活動の一環として、学部生及び大学院生全員を対象とした学生アンケートを実施した。これは従来実施の学生生活アンケートにおける学生生活全般に関する質問項目を見直し、かつこれに学修全般に関する質問を追加したものである。全体構成は Part1 「学生生活全般について」 30 問、Part2 「学修全般について」 30 問の計 60 問である。アンケートの回答者数は学部生 1,440 名（回収率 87.9%）、大学院生 170 名（回収率 80.6%）、計 1,610 名（回収率 87.1%）であった（全学的な回答状況の詳細は巻末付録 1-B 参照）。以下、Part1 「学生生活全般について」アンケートの実施状況について述べる。

(2) Part1 「学生生活全般について」アンケートの項目概要

学生生活全般に関する質問は、通学に関するもの（4 問）、家計に関するもの（3 問）、部活動に関するもの（1 問）、悩みに関するもの（5 問）、情報提供や学習環境に関するもの（5

間), キャンパスの安全に関するもの(1問), 福利厚生に関するもの(3問), 進路開拓支援に関するもの(6問), 全般的な要望等(2問)の計30問であった。

(3) Part1「学生生活全般について」アンケート回答状況の概要

以下, 幾つかの質問における回答状況からみられる特徴を述べる。

【悩み】

大学生の現在の悩みは, 学年によって傾向が異なり, 1年生(35.7%)と4年生(31.0%)は学業に関する悩みを抱えている学生が多く, 2年生(45.2%)と3年生(74.4%)は進路や就職に関する悩みを抱えている場合が多い。

こういった悩みは学内の友人や先輩に相談することが最も多いようだが(46.5%), だれにも相談しない(できない)者も10人に1人はいるようだ(10.7%)。また, 学生相談室や教職員に相談する者はごくわずかである(2.4%)。

学生相談室の認知度については, 65.6%であるが保健室の認知度(84.5%)に比べると低い。さらに, 両方とも知らない者が10人に1人いることもわかった(11.3%)。利用についても多くの学生が利用していない現状が見えてきた(77.2%)。

【学習環境(情報・施設)】

休講情報や学内情報の提供に関する満足度では, 満足度80%以上が5.8%と最も低く, 20%~50%が最も高い値となり, 半数は情報の提供方法に満足していない傾向がみえる。

学内施設の配慮・改善の必要性については, 特に感じていない者は半数以下(43.2%)で, 通路やスロープ, トイレ, 障害物, 照明などに配慮や改善を求めている者は半数以上であった(56.8%)。

【福利厚生】

学生会館の食堂及び喫茶の利用満足度では, 満足度50%未満の学生が45.9%で, 利用したことがない学生5.6%を合わせると, 51.5%と過半数である。その理由はキャンパス・マネージャーとの意見交換会の結果にもみられるように, 内容のみならずサービスの提供時間帯などの運用面や衛生面など多岐にわたっているとみられる。

【自習場所】

学内の自習場所として図書館や講義室などを利用しているものが合計で41%程度であるが, 学外で自習する者の方が多い(44.8%)。自習環境に満足している者は21.3%程度であり, 利用時間帯の工夫や施設設備の充実を望んでいる者が75.6%にも及んでいる。

【ボランティア活動】

団体に所属して活動している者は7.9%とごくわずかである, その過半数は保健福祉学部の学生(57.0%)であった。また, 活動するつもりがない者が全体で35.0%。学部別では情報工学部が56.4%と最も高く, 保健福祉学部が17.5%と最も低かった。

一方で, 活動したことはないが情報を求めている者は全体で30.8%, 学部内では保健福祉学部で32.3%, 情報工学部で27.1%, デザイン学部で35.0%と約3人に1人はボランティア活動には興味を持っていて, その情報を求めていることがみえてきた。

(4) Part1のまとめ~改善に向けて

悩み相談に関しては、学生相談室の認知度を上げるための従来取組（案内環境の改善）に加えて、学生集団の支え合いを促す活動など、多面的な取組が求められる。学習環境のうち情報提供に関しては、平成 29 年度に学生ポータルを含む全学情報システム導入が予定されており、学生支援の観点から活用計画が急がれる。安全面に関しては、平成 28 年度施行の障害者差別解消法施行に規定する合理的配慮の観点から、施設改修等の計画が学内で進められている。福利厚生に関しては、学生生活の基本となる食の環境改善について、学生生活委員会でも話し合われ、他大学等の調査が開始されている。自習環境については、部会提案による新たなラーニング・コモンズ計画が平成 28 年度に実施に移される予定である。ボランティア活動に関しては、情報提供、リーダー／フォロワー育成、ミーティング環境の 3 点が課題であり、コモンズを学生支援の窓口及び活動の拠点とする計画である。

1-2-8-8 まとめと課題

これまで報告してきたように、当部会が所掌する学生支援に関する活動は多岐にわたっているが、その目的は概ね以下の 3 点に集約される。

- (1) 心身の健康と安全をベースにおく学生生活への適応に向けた支援
- (2) 人間的成長に向けたキャリア形成のために課外の主体的学修を促すための支援
- (3) 多様な活動を保証するために必要な利便性の確保に向けた支援

このうち (1) は学生相談室や保健室をコアに本学構成員のネットワークを生かして取組む支援活動であり、とりわけ平成 28 年度においては障害者差別解消法の施行に伴い努力義務とはいえ、ハード／ソフトの両面から合理的配慮に基づく対応が迫られる課題を有する。特に発達障害等が危惧される学生への対応について全学的な知識とスキルの共有が求められる。(2) はボランティア活動などのアクティブ・ラーニングの土壌づくりが根幹にあるが、平成 28 年度設置予定のラーニング・コモンズにおいて、学生支援室をコアにした情報発信と学生主体のグループワーク企画、ならびにこれを補完するリーダー／フォロワー育成の取組についての企画立案が急務である。課外では手つかずであった TA 等の活用についても、コモンズを拠点に推進できると考える。(3) は新たな課題であるが、学内施設等についてとかく管理面が強調されていた点やローテクな情報環境のもと情報の共有が不徹底であった点について、課外における学生の多様な学修活動を支援するため、より柔軟な発想をもって利便性の確保に取り組む時期が来ていることを、学生アンケート結果は示している。平成 29 年度導入の学生ポータルはその回答の一つであるが、コモンズ設置予定の学生会館をコアにした主体的学修に必要な利便性確保の提案についても、当部会が中心となって広くアイデアと協力を求め、推進したい。

1-2-9 教育改革ワーキンググループ（教育改革 WG, COC+事業）

平成 27 年度の「地(知)の拠点大学による地方創生推進事業(COC+)」に本学が選定されたことを受け、センターではその教育を担当する「教育改革WG」をセンターとCOC+事業を結び付けるものとして、部会に準ずる形で平成 27 年 10 月に設置した。教育改革WGの記

述は1-3項の地域連携教育,を参照されたい。

1-2-10 まとめと課題

本年度のセンター活動の部会担当部分については,特に制約をかけずに各部会それぞれ比較的自由に纏めたのが実態である。それは,本年度がセンターの部会メンバーが固まって1年目であり,未だセンターの目標共有や各部会事業の関連などが十分に煮詰められていないこと,また個々の部会事業と他部会事業との関連がやや縦割りの傾向になっているものの部会の特性を認識するのに必要な時間とみなされるためである。しかし,その様な状態は徐々に改善してゆく必要がある。そのため,本年度の教育年報が纏まった後に来年度の年報作成に向けた検討委員会を構成して立ち上げ,年報記述における体裁の統一はもとより,センターの事業目的,目標に沿った部会事業や部会間連携事業のあり方を意識した年報作成に向けて作業を開始する計画である。

上記の理由で,本年度のセンター各部会の事業報告は従来事業の継承からその枠を超えて大きく踏み出したものとは未だなっていない萌芽状態という認識である。大学の設置理念,教育理念,ディプロマ・ポリシー,カリキュラム・ポリシー等を具体的な人材育成像と結び付け,それらを実際の科目・カリキュラム実践,キャリア支援へとブレークダウンして実施へと移し,その良否を実施-評価・分析-フィードバックの連環において明確にし,改善を継続する作業を後数年かけて軌道に乗せる必要がある。その目的に沿って部会事業が本年度に増して連携性を高め,目的共有を図るのが次年度の課題である。

また,センターの部会機能が向上してゆくにつれて,構成員の負荷も高まっている。情報収集やデータ分析のためには専門職の存在が欠かせない条件になってきている。今後のセンター機能の成否はその点にかかっていると云える。

1-3 地域連携教育 (COC+)

1-3-1 概要

今年度の地域連携教育は,

- (1) 新しく発足した共通教育部による共通教育科目カテゴリー「社会連携」に配置された全学科1年次生必修科目「地域ボランティア論」及び「少子高齢社会論」の新設実施
 - (2) COC+事業の選定による副専攻「岡山創生学」の新設に向けた取組
- である。

昨年度までの全学教育研究機構の見直しが行われ,今年度より,共通教育部が発足した。これに伴い,従来の全学教育科目から共通教育科目への変更が行われた。このため,地域連携教育のうち共通教育関連授業科目は,社会連携教育推進室が所管するカテゴリー「社会連携」に配置されることとなった。さらに,今年度より,全学科の1年次生を対象とする必修科目「地域ボランティア論」及び「少子高齢社会論」が新設された。

一方、文部科学省が平成 27 年度に公募した「地（知）の拠点大学による地方創生推進事業」に選定された「地域で学び地域で未来を拓く‘生き活きおかやま’人材育成事業」（以下、本 COC+事業という）は、岡山県の「晴れの国おかやま生き活きプラン」（平成 26 年度から 3 年間）及び「おかやま創生総合戦略」（平成 27 年 10 月）とも方向を一にしており、また、県内の事業協働自治体の政策課題も取り込みながら、学長の強力なリーダーシップの下、これまで本学が取り組んできた教育改革、域学連携、産学連携活動を、表 1 に示す県内自治体、大学、企業、団体等と協働して発展させ、地域志向事業として推進することによって、事業協働地域内への若者の定着率を向上させることを目的としている。そのために、岡山県をはじめ、各事業協働自治体の地域戦略を反映した下記 3 つの目標を設定し、本事業期間内（平成 27 年度～平成 31 年度の 5 年間）を通して、「教育改革」、「域学連携」及び「産学連携」活動を相互に連携・実施しながら、若者の地域定着を進める産・学・官・民協働の体制を整備し、地域で学び、地域を志向し、“生き活きおかやま”を創生する人材を育成する。

なお、文部科学省より本 COC+事業に対して助成されるのは平成 31 年度までとされているが、本学の地域連携教育は、「人間・社会・自然の関係性を重視する実学を創造し、地域に貢献する」という教育研究の理念に基づいて、平成 32 年度以降も継続・発展される。

[目標Ⅰ（教育改革）]

地域を志向し、地域の未来を切り拓く知識と高度な専門性を身につけた実践力のある人材の育成

[目標Ⅱ（域学連携）]

子育て・教育支援、高齢者・障害者支援、防災・減災支援等により、安心して生活することのできる魅力ある地域づくり

[目標Ⅲ（産学連携）]

岡山県内の市町村の共通課題である健康寿命の延伸、中小企業・小規模事業者の技術支援、観光振興などの分野の研究開発を通じた雇用創出

表 1. 「地域で学び地域で未来を拓く‘生き活きおかやま’人材育成事業」協働機関

参加大学	岡山大学、岡山理科大学、ノートルダム清心女子大学、就実大学、山陽学園大学、倉敷芸術科学大学（COC 既採択校）、くらしき作陽大学（COC 既採択校）、吉備国際大学（COC 既採択校）
参加自治体	岡山県、岡山市、倉敷市、笠岡市、総社市、備前市、真庭市、高梁市
参加企業等	岡山県経済団体連絡協議会、岡山県商工会議所連合会、岡山県経営者協会、一般社団法人岡山経済同友会、岡山県中小企業団体中央会、岡山県商工会連合会、岡山県産業振興財団、中国銀行、トマト銀行、岡山経済研究所、山陽新聞社、岡山 NPO センター

1-3-2 教育の仕組み

昨年度までの全学教育研究機構を改組し、今年度から共通教育部による共通教育科目が

開講された。共通教育科目としての地域連携教育は、カテゴリー「社会連携」内の授業科目を中心に行われる。また、平成 28 年度に新設する副専攻「岡山創生学」では、共通教育科目内カテゴリー「社会連携」をさらに強化するとともに、各学部の学部教育科目とも連携しつつ地域連携教育を構築していく。

COC+事業「地域で学び地域で未来を拓く‘生き生きおかやま’人材育成事業」は、若者の地元定着率の 10%向上を目的として、教育改革、域学連携及び産学連携により地域を志向する人材の輩出とその受け皿づくりを行う。教育改革では、「岡山創生学」を副専攻として新設し、実践的な専門性と高い地域志向を有する人材の育成を図る。そのため、平成 29 年度より全学的な導入が決定しているクォーター制を活用し、長期インターンシップ、ボランティア等を実施する。域学連携では、自治体、NPO 等と協働で子育て、高齢者・障害者支援等を実践し、住み易く、安心安全で魅力ある地域づくりに貢献する。そして、協働機関との連携の場として「地域創生 commons」を設置・運営し、教育改革における地域演習科目実施を支援する。産学連携では、地場産業の支援による産業活性化を推進し、魅力的な雇用創出に努めるとともに、雇用マッチングシステムを開発することで雇用開拓と若者の地域への就業機会を拡大し、学生の県内定着を促進する。

本 COC+事業は、表 1 に示す事業協働機関との連携の下、図 1 に示す実施体制により組織される。

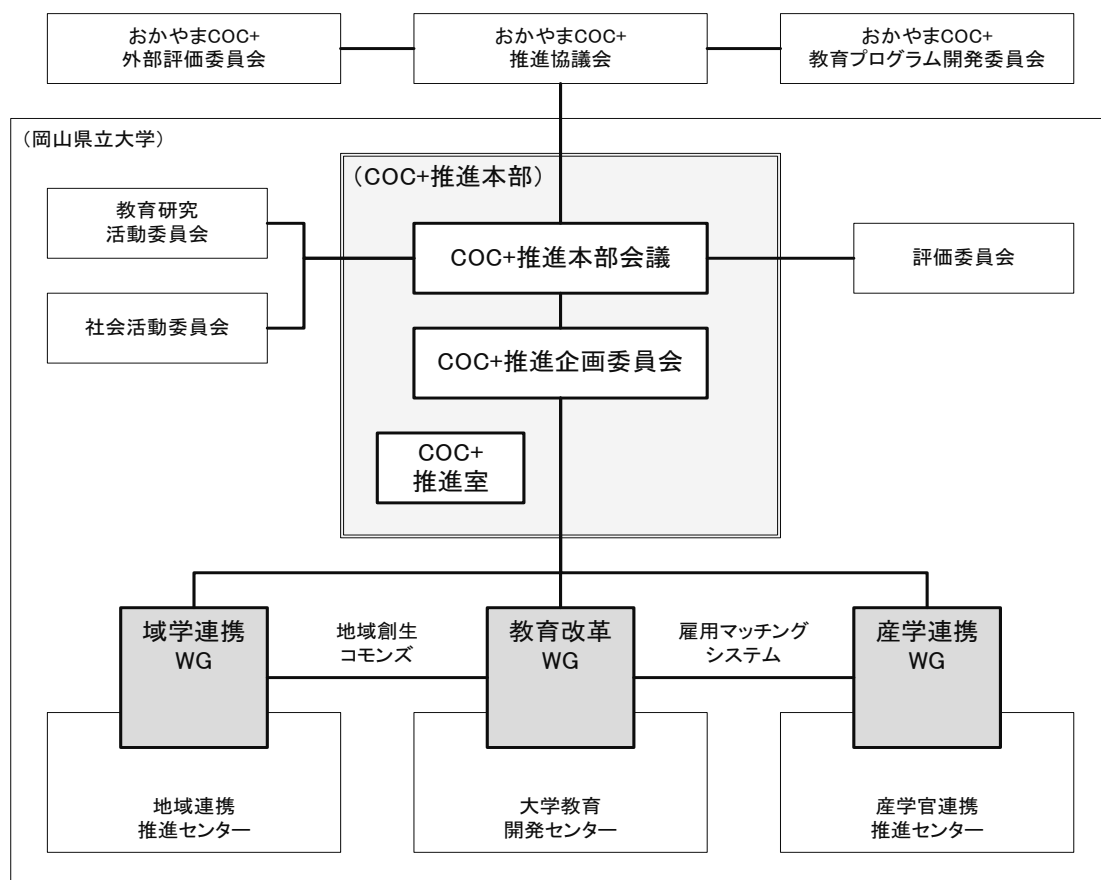


図 1. COC+実施体制

本 COC+事業における教育改革の概要は、次のとおりである。

a. 「岡山創生学」科目群の開設

本学では、地域を志向する教育プログラムとして、「岡山創生学」科目群を新設する。本科目群は基礎と実践に大別され、基礎科目では、地域を知るために、社会連携に繋がる基礎知識や岡山県の地域政策等を学ぶ。実践科目では、地域学習の場である「地域創生コモンズ」を拠点とし、アクション・ラーニングを通して学ぶ。

b. クォーター制を活用した長期インターンシップシステムの開発

本学が平成 29 年度に導入するクォーター制を活用し、自治体、企業等に向けた、実施方法や評価方法、事前・最中・事後の学生指導をシステム化した「長期インターンシップ」（1ヶ月以上）を高年次に開設する。

c. 「岡山創生学」科目群を実効性あるものにするための方策

「岡山創生学」科目群の学びを副専攻と位置付ける。また、学生一人一人の学修過程を教員が指導できるように「学生ポートフォリオ」を導入する。

これらの教育改革は、COC+推進本部（COC+推進企画委員会）の下に設置された教育改革 WG を主体として企画立案され、共通教育部及び各学部において実施される。教育改革 WG の所掌業務は、

- 本学が進める副専攻「岡山創生学」の開発に関すること
- 本学が進める学生ポートフォリオの開発等のキャリア形成支援に関することと定められている。教育改革 WG は、センターと直結し、
- 大学教育開発センター・副センター長（WG 長）
- 大学教育開発センター・共通教育部会長（副 WG 長）
- 大学教育開発センター・キャリア形成支援部会長
- 共通教育部・社会連携教育推進室長
- 本学教員
- COC+推進室副室長
- COC+推進室員

を構成員としている。

1-3-3 授業の構築

今年度において、共通教育科目内のカテゴリー「社会連携」として、必修科目である「地域ボランティア論」及び「少子高齢社会論」、選択科目である「企業の組織と活動」「起業の条件」「地方自治論」について開講した。平成 28 年度からは、COC+事業の趣旨を踏まえ、さらに社会連携科目間の連携を強めながら、副専攻「岡山創生学」の学生の学びを支援していく必要がある。

1-3-4 実施状況

今年度の各科目の実施状況は次のとおりである。

①「地域ボランティア論」前期・全学1年次生・1単位（必修）

本科目は今年度、新規で開講した全学必修科目であった。シラバス作成段階では、3学部の特性も踏まえ、主に県内の様々なボランティア活動者及びNPO法人で活躍している活動者を招聘した。講義の内容であるが、招聘したゲストスピーカーから各々の活動内容の説明を聞き、その後、科目担当教員との対談を行うものであった。それぞれの学部生にとって、興味が湧く講義とそうでない講義があったように見受けられるが、全体的にはそれぞれのゲストスピーカーから多くのことを学びとれたことが、講義ごとのコメントシートからうかがうことができた。

次年度からは「おかやまボランティア論」と名称を変更するが、初回の講義において、COC+事業との関連性や、なぜ、この講義が全学必修科目なのか、丁寧に説明を行う必要がある。

②「少子高齢社会論」後期・全学1年次生・1単位（必修）

本科目は、「地域ボランティア論」と同様に今年度、新規に開講した全学必修科目である。共通教育における地域連携教育の基礎科目として位置づけ、今直面している少子高齢社会の現状と課題及びその取組について検討することを目的とした。具体的には、(1)少子高齢社会に対する基本的な理解を深める、(2)少子高齢社会への取組について理解を深める、(3)自分達の住んでいる地域や課題に関心を持ち、地域社会の活性化について、多角的な視点で考察できる力の醸成を目指した。

次年度は「おかやまを学ぶ」と科目の名称を変更するが、COC+事業との関連性を考え、授業内容も検討しなければならない。特に地域志向への意識づけを強化することを目指したい。

③「企業の組織と活動」前期・1単位（選択）

企業とはどういうものか、その組織と活動から働くことの意味等、役員クラスの3名のオムニバス方式で講義を進めた。講義の感想レポートと出席で評価している。学生からは、琴線にふれる内容で感動した旨の感想も多い。

④「起業の条件」前期・1単位（選択）

講義内容については、起業のために必要な知識（ベンチャー立上げとその持続及び知的財産）の修得を目的としており、その目的に沿った内容になっている。授業アンケートを通じた評価は高く、有意義な講義を実施していると判断される。授業担当者として、実務経験者2名を非常勤講師としている。これは本授業の目的から、実務経験者が最適であり、今後も非常勤雇用の継続が望ましいと考える。履修学生は、デザイン学部と情報工学部の学生である。将来、起業の可能性がある学生は、極めて熱心に受講している。

⑤「地方自治論」後期・2単位（選択）

講義では、住民に最も身近な行政主体であり、住民の社会・経済生活に対し、重要な役割を担っている地方自治の仕組みや制度、地方自治体の活動、住民の役割等について理解を深め、地方自治の現状と課題、あるべき姿などについて考察することを目標としている。

なお、平成 28 年度からは、副専攻「岡山創生学」としての性格付けをより明確に打ち出し、地方自治体における喫緊の課題である地方創生について、岡山県の状況を中心に考察する機会としてとらえ、行政サービスを提供する側、受ける側の観点から、それぞれの責任と役割を考える契機とできるようにする。

1-3-5 育成する人材像と修得すべき能力

副専攻「岡山創生学」では、学びの中で地域の魅力に触れ、コミュニケーションや協働の中で地域課題を認識し、ともにその解決までのプロセスを体験することで地域への愛着の形成や共感力を高め、それを基盤として専門性を存分に発揮して地域の持続的発展のために貢献することができ、社会の変化に対して高い適応能力をもつ人材を育てるものである。このような人材になるために修得すべき能力を次のように設定する。

- (1) 地域「おかやま」の実態を体験的に学び、「おかやま」の魅力を発信する力
- (2) 実践的学習の中からアクション・ラーニングのプロセスを通じて課題を認識する力
- (3) 地域で人とコミュニケーションを取りながら協働して課題解決に取り組む力
- (4) 学部・学科の専門性を活かし、自律的に課題解決法を考える応用力
- (5) 持続可能な地域「おかやま」の未来を展望し、一市民としてまた専門家として社会に参画する力

1-3-6 教育プログラムの内容

副専攻「岡山創生学」では、低年次に「おかやま」の魅力と課題を学ぶ地域志向基礎科目、高年次に地元就職を意識させる地域志向実践科目を配置して、事業協働地域への定着を図っている。本副専攻の教育プログラムを岡山県の代表農産物である“もも”の育成に模して、1年次に地域志向の動機を「知る（植え付け）」、2年次に各学部・学科の専門性を加味して「学ぶ（受粉）」、高年次により専門的な視点から「高める（摘果）」の3段階に分け、卒業時に「収穫・出荷」ができるようなイメージで設計している。

1. 1年次では、地域「おかやま」を知り、地域と協働するための準備をする授業科目を配置している。岡山を中心とした地域の現状とグローバル化の中にある岡山の位置付けを知識として学び、地域に住む様々な人と接するために、現代社会で求められるボランティアなどを通して、また、大学生と社会の接点の現状やありかたについての学びを通して、地域志向を植え付ける。
2. 2年次では、地域「おかやま」の課題を、学外における協働を通して発見し、解決に向けた取組を実践する授業科目を配置している。学部・学科の専門性にとらわれることなく地域社会を見つめる冷静な観察眼を習得するだけでなく、入学後に学んだ専門性を受粉させ、専門の学びが、どのように地域課題の解決に役立てられるかを自律的に考える。
3. 3年次では、より専門的な視点から地域「おかやま」の課題を見つめ直し、自己のキャリア形成を支援する授業科目を配置している。地方自治や企業活動の仕組み、地域社会に

おける自己の役割認識を涵養する学びの後、長期インターンシップを通して、より実践的な地域協働を体験することで、専門性による摘果を行う。

4. 教育課程は共通教育科目と学部教育科目から厳選された授業科目から構成され、また、講義科目での学びの後に演習科目を配置することで、実学としての地域協働を涵養する。

前述した「修得すべき能力」を学修させるために、「岡山創生学」科目群は、平成27年度入学生から全学科必修科目として開設している共通教育科目「地域ボランティア論」、「少子高齢社会論」の内容を強化し、新設する5科目を加えた計12科目で教育プログラムを構築している。各科目の開講計画を表2に、各授業科目の相互関係を示すカリキュラムマップを図2に示す。このうち、「おかやまボランティア論」は今年度より開設した「地域ボランティア論」を名称変更及び内容見直しをしたものであり、同様に、「おかやまを学ぶ」は「少子高齢社会論」の後継科目である。副専攻「岡山創生学」としては、共通教育科目として「おかやまボランティア演習」、「地域再生実践論」、「地域協働演習」を、情報工学部の学部教育科目として「エンジニアリング演習」を新設する。

なお、学部教育科目あるいはCOC+参加大学製作の授業コンテンツを今後、順次追加していく予定としている。

表2. 「岡山創生学」授業科目表

区分	授業科目名	授業の方法	開講時間数	開講単位数	開講年次				必要単位数
					1	2	3	4	
共通教育	おかやまボランティア論	講義	15	1	◎				6単位
	おかやまボランティア演習	演習	30	1	◎				
	おかやまを学ぶ	講義	15	1	◎				
	地域再生実践論	講義	15	1		◎			
	地域協働演習	演習	60	2		◎			
	地方自治論	講義	30	2			○		4単位
	地域インターンシップ	演習	120	4			○◆		
	企業の組織と活動	講義	15	1			○		
	起業の条件	講義	15	1			○		
学部教育	チームガバナビリティ演習	演習	30	1			○◆		
	エンジニアリング演習	演習	120	4			○◆		
	デザインプロジェクト演習	演習	120	4			○◆		

【注】 ◆印で示される授業科目を1科目以上修得すること。

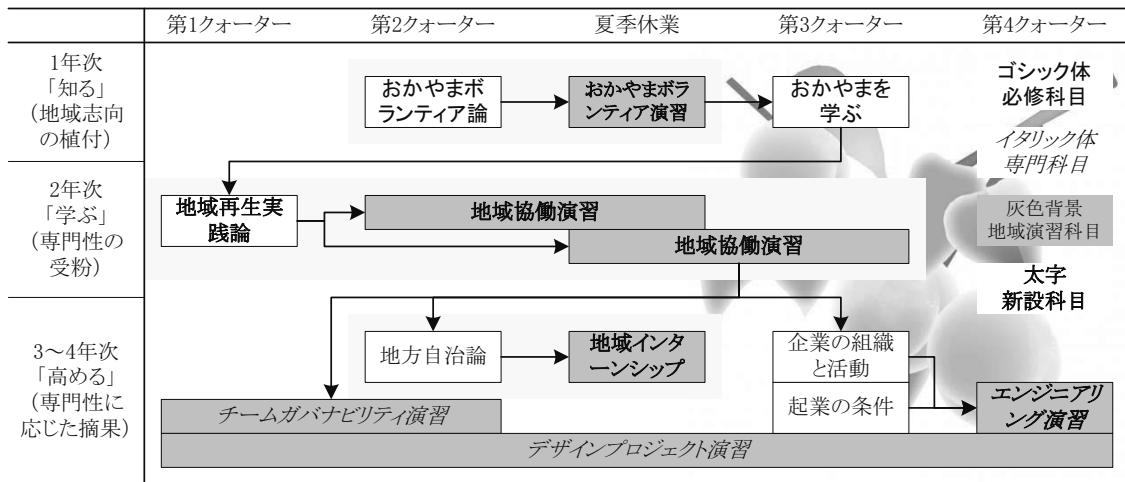


図 2. 「岡山創生学」カリキュラムマップ

1-3-7 まとめと課題

平成 27 年度では、全学科必修科目として新設した「地域ボランティア論」及び「少子高齢社会論」を開講するとともに、COC+事業の選定を足掛かりとして、本学の教育研究理念である「人間・社会・自然の関係性を重視する実学を創造し、地域に貢献する」を地域連携教育として具現化すべく、平成 28 年度入学生からの副専攻「岡山創生学」の企画立案 (P:Plan) を行った。平成 28 年度から共通教育科目として 3 科目 (新設 1 科目と、新装 2 科目) が実施 (D:Do) され、平成 29 年度には共通教育科目として新設 2 科目が実施される。これらの科目自体の評価 (C:Check) 手法に関しては、今後も教育改革 WG と共通教育部 (特に社会連携教育推進室) と連携し、継続的に検討を進めていかなければならない。また、副専攻「岡山創生学」が目指す教育成果の検証に関しては、センターにおいて、ジェネリックスキル (リテラシー及びコンピテンシー) を評価する PROG テストの実施が検討されており、その結果の取り扱いを早急に見極めることも必要である。これらの評価に基づいた改善 (A:Action) に着手しながら、継続的な教育プログラム改善を行っていく。

副専攻「岡山創生学」で開設される地域演習科目 (特に地域創生コモンズを活用する演習科目) における課題設定に対しては、域学連携 WG との協働、長期インターンシップの設計では、産学連携 WG との協働は必須であり、平成 28 年度以降に 3 つの WG の連携、協働は、より重要なものとなる。

一方、学生ポートフォリオの開発支援については、大学教育開発センターキャリア形成支援部会と連携を図り、副専攻「岡山創生学」としての項目の追加、全学への展開法を企画立案する。また、学生ポートフォリオと、本 COC+事業で開発する雇用マッチングシステムとのインターフェース設計では、産学連携 WG と密接な連携が求められる。

1-4 教育力向上支援事業

1-4-1 目的

本学の教育力向上支援事業は大学全体や学部・学科等の人材養成の目的, 学生に身につけさせるべき学習成果を明確にし, 教育活動の成果として, 本学が学生に保証する基本的な資質を身に付けた人材を輩出し, 社会の信頼に応えるため, 教育の充実・質の向上及び教員の教育力の向上に直接結びつく調査並びに実践活動に助成費を交付する事業である。

平成 27 年度事業については学長による教育改革の方針, 教養教育改革・グローバル化教育・地域貢献教育の観点に基づき, 引き続き学生部長・各学部長・共通教育部長・大学教育開発センター長ならびに教学課の協働により申請のあった事業計画を審査する体制とし, 採択に向けた作業を行った (21 件・採択は平成 26 年度)。平成 28 年度事業についても平成 27 年 11 月に, 同様の体制で審査を行った。

1-4-2 本年度実施事業及び来年度実施予定事業

(1) 平成 27 年度教育力向上支援事業一覧

平成 27 年度において採択・実施された教育力向上支援事業は以下のとおり。

平成 27 年度 教育力向上支援事業 採択事業一覧 (全 21 事業)

代表者所属	代表者氏名	事業名	査定額 (千円)
情報工学部 人間情報工 学科	高戸 仁郎	地域資源を活用したスポーツ授業の 開発と効果検証	250
デザイン学部 デザイン 工学科	朴 貞淑	使える役に立つ実践的な韓国語を身 につける学習支援	160
保健福祉学部 栄養学科	岸本 妙子	共通教育と専門教育の連携によるグ ローバル社会に対応できる管理栄養 士養成プログラムの開発	630
デザイン学部 デザイン 工学科	岩本 弘光	建築・デザイン海外研修による国際 交流推進と建築・教養教育の充実 2	1,300
保健福祉学部 看護学科	山口 三重子	看護実践能力向上に向けたブレンデ ィッドラーニングシステムの構築	250
保健福祉学部 看護学科	名越 恵美	成人看護学急性期におけるシミュレ ーション教育効果の検証	350
保健福祉学部 看護学科	川村 友紀	看護専門職のためのグローバル・ラ ーニングシステム構築	800

保健福祉学部 看護学科	井上 幸子	精神保健活動の国際的理解と実践力の獲得支援	450
保健福祉学部 保健福祉学科	佐藤 和順	リアリティショックを克服し就業継続できる力量を有した保育者養成のプログラム開発	450
情報工学部 情報システム工学科	福田 忠生	ものづくり関連授業の総合的理解度の向上に向けた教育方法の検討	100
情報工学部 人間情報工学科	井上 貴浩	実用的課題の実験科目への導入とメカトロ教育への実践	100
デザイン学部 造形デザイン学科	島田 清徳	ワークショップを活用した学生のキャリア形成プログラム	600
デザイン学部 造形デザイン学科	山下 万吉	キャリア形成支援のためのポートフォリオセミナー及び企画提案力向上を目的とした教育プログラムの実施	300
保健福祉学部 保健福祉学科	中村 光	岡山県立大学に適合した保健・医療・福祉の多専門職連携教育プログラムの開発	350
デザイン学部 デザイン工学科	福濱 嘉宏	デザイン学部・保健福祉学部学際的教育－初等教育施設に関する見学と講義	100
デザイン学部 デザイン工学科	金丸 敏彦	ものづくり工房運営についての調査研究 3	380
デザイン学部 デザイン工学科	森下 眞行	デザインパテントコンテストを活用した実践型創造力創出教育プログラムの開発	450
デザイン学部 造形デザイン学科	齋藤 美絵子	情報工学部・デザイン学部 合同による協働教育プログラムの実践	300
大学教育開発センター アドミッション部会	高橋 吉孝	高校生のための大学授業開放	980
大学教育開発センター キャリア形成支援部会	難波 久美子	キャリア形成支援を目的とする教育体制整備に関する調査研究	700
大学教育開発センター 学生支援部会 (学生相談室)	迫 明仁	学生相談室業務の機能向上と情報発信のための環境整備	400
		計 (千円)	9,400

(2) 平成 27 年度教育力向上支援事業の概要と成果

ア 教養教育及び共通教育に関わる取組

共通教育【スポーツ教育】

事業名	地域資源を活用したスポーツ授業の開発と効果検証
代表者	高戸 仁郎 (情報工学部人間情報工学科教授, 健康・スポーツ教育推進室長)
概要及び成果	<p>(概要)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 共通教育におけるスポーツの授業として, 連携協定を締結している自治体の観光資源を活用した新たなアウトドアスポーツ実習の授業計画策定のための基礎調査の実施 ・ 先進事例の担当者に対するヒアリング調査の実施 ・ 実習予定地の実地検分の実施
	<p>(成果)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 8 月 6 日から 7 日にかけて開催された三陸ウォーターワイズプロジェクトの視察を行い, 担当者に対し, 海洋における事業実施のリスク管理, 用具の選定法, スタッフに対する募集人員の目安など, 様々な事項についてヒアリング調査を行った. ・ 9 月 14 日から 16 日にかけて笠岡市白石島の施設を視察し, マリンスポーツ指導者に対し, 受け入れ可能人数, アクティビティの詳細, 緊急時の対応など, 様々な事項についてヒアリング調査を行った. ・ 2 月 11 日から 12 日にかけて, 笠岡市白石島のアウトドアスポーツ施設を実地検分し, マリンスポーツと並行実施可能な種目について実際の運動量を計測するなどして, 有効性と妥当性を検証した. <p>施設, 指導者に対する受講生の数など, 具体的な募集人員が明らかになった一方で, 宿泊施設や荒天時の対応等の課題もみつかった.</p>

平成 27 年度は本事業の初年度であり, 新たな授業計画策定に求められる授業規模, 実施スケジュール, 実施種目等について, 先進事例を視察するとともに, 授業担当者からのヒアリング調査によって, リスクマネジメント, 適切な用具の選定法等について具体的な示唆が得られた. また, 授業実施候補地における実地検分により, 受け入れ体制等の課題も新たに発見されたため, 今後は実際の授業を想定したシミュレーションにより学生の身体及び心理面に及ぼす効果を検証する.

共通教育【語学・グローバル教育】

事業名	使える役に立つ実践的な韓国語を身につける学習支援
代表者	朴 貞淑 (デザイン学部デザイン工学科講師)

概要及び成果	<p>(概要)</p> <p>グローバル化の進展とともに、日韓における国際的に活躍できる学生の育成が求められている。使える役に立つ実践的な韓国語を目指して、話し方・聞き方・書き方・読み方などのコミュニケーション能力を身に付けることで、学生のスキルアップにつなげる。</p> <p>韓国語の自己評価の一つの方法として、ひとりでも多く、韓国語能力試験 (Test of Proficiency in Korean, TOPIK) の合格に向けて、韓国語受講生の能力に適したレベルに応じて、段階的に学習を導入し、活躍できる基礎をつくる。</p> <p>平成 27 年度において、韓国語能力試験 (TOPIK) 1 級に 1 名が合格している。また、2016 年 4 月 17 日の韓国語能力試験 1 級及び 2 級に 2 名がチャレンジした。韓国語能力試験に合格した学生は韓国語に自信をつけた。(1 級は、自己紹介、買い物、注文など、生活に必要な基礎的な会話などができ、身近な話題の内容を理解し、表現でき、簡単な文章などを作成できるレベルである。)</p>
--------	---

今までの成果を踏まえて、実践的な韓国語を身につける学習支援について、韓国語教育に関する実態の把握、動向、改善点などが抽出され、今後、より多くの成果が期待出来る。

共通 - 専門教育【グローバル教育】

事業名	共通教育と専門教育の連携によるグローバル社会に対応できる管理栄養士養成プログラムの開発
代表者	岸本 妙子 (保健福祉学部栄養学科教授・共通教育部兼務)
概要及び成果	<p>(概要)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・国際的な健康課題や食糧問題、及び宗教上の食の禁忌などの国際食文化について理解し、基本的な知識を習得して、グローバル社会に対応できる管理栄養士として栄養指導や食品調理技術を英会話能力と連関させて身に付けることができる専門職養成を目指して、共通教育での特別授業、及び専門教育での実習を実施した。さらに、海外研修での食育実践を経験した学生による岡山市内の小学校での英語による食育実践を行った。 <p>(成果)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・平成 27 年度に共通教育科目「食糧を考える」において「日本の地方社会でのムスリム食事情」と題した特別授業 (90 分) を実施し、受講した 30 名においてハラール食品への理解を深めることができた。 ・イスラム教徒対応を想定して、ハラール食に関する食育教材及びその食育教材を用いた授業の中で使用するワークシート (献立 A 及び B) を作成し、栄養学科 2 年次生 (42 名) 対象の「調理学実習Ⅱ」の 1 コマ

	<p>(90分)においてグループワークによる食育授業を実施した。ワークシートでは、食材ではなく調味料に不正解が多かった。また、作成した食育教材の内容理解度を図るための授業後アンケートでは、正解率が食材については90%以上だったものの、醤油・味噌については81%、ハラール食品を取り扱う際の調理行動については50%前後であった。ハラール食に関する知識や理解についてこれまで学ぶ機会がなかった場合でも、ハラール食に関する食育教材やグループワークを活用することで、ハラール食への理解や普及に大いに効果があることが示された。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「給食経営管理実習」でのメニューを参考に、献立C(和食)及び献立D(洋食)について普通食及びハラール対応食を栄養学科4年次生(30名)に喫食させ、比較官能評価を行った。ハラール食についてほとんどの学生(82.7%)が予備知識を有していなかったが、官能評価結果についてほとんどの料理で有意差が見られなかった。ハラール食の識別についてはスープのだしの違いに気づいていた人が多かった。喫食経験により、ハラール食に関する適切な知識や食品調理技術を充実させることができることが示唆された。 ・オーストラリアでの海外研修において豪州小学校7学年生の日本語授業で、栄養学科学生8名による食育実践を行い、帰国後、平成27年11月に岡山市内の小学校での英語による食育実践を行った。食育実践を経験した学生を対象とした専門分野の活用や異文化理解等の項目についての5段階評価では、今後の専門分野の学習や外国語習得への意欲に関して高い評価が得られた。このことから、海外研修での食育実践を経験した学生の外国語の習得や専門職教育における学びの意欲向上が伺えた。
--	--

平成27年度に共通教育科目「食と健康」での食文化領域での学習、及び「食糧を考える」での食糧事情に関する学習、学部教育科目「調理実習Ⅱ」でのグループワーク及び授業後アンケート、課外でのハラール対応食の喫食及び比較官能評価を実施した。

今後は、同一の栄養学科学生が「食生活論」や「食糧を考える」を履修した後に、学部教育科目において異文化や宗教上の違いへの理解を深め互いの文化を尊重する姿勢を養成できる食育教材を経験し、次に、ハラール対応食による喫食経験をj得るという、年次ごとの実践でより有効な成果が見込まれる。さらに、一部の学生は海外研修での食育実践を経験して、グローバル社会に対応できるような意欲ある人材に成長することが期待される。

共通 - 専門教育【グローバル教育】

事業名	建築・デザイン海外研修による国際交流推進と建築・教養教育の充実2
代表者	岩本 弘光 (デザイン学部デザイン工学科教授)
概要及び成果	(概要) ・急速にグローバル化する社会にあつて、本学における国際交流推進と建

	<p>築教養教育充実は喫緊の課題であるが、本学学生の西日本中心の意識テリトリーを広く海外に広げ、また、国外の優れた建築を習得するには講義でなく実際の空間体験に導くほかはない。このように、国際交流推進と建築教育力の向上は密接にリンクしており、こうした課題に本事業は応答している。</p> <p>(成果)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・平成 27 年 9 月 11 日から同年 9 月 19 日に至る 9 日間の日程で、参加学生 8 名、引率教員 2 名計 10 名で海外研修を実施した。 ・研修に先立って建築講義 5 回 10 コマ、初級スペイン語講座 4 回 4 コマを実施して研修に備えた。 ・学生幹事により研修前に「資料集」を作成した。 ・研修後には「研修記」を作製して成果を確かなものにした。 ・都市はフランスのパリ、マルセイユ、ニームとスペインのバルセロナを訪問して、近代建築を切り拓いたル・コルビジエのサヴォア邸やミース・ファン・デル・ローエのバルセロナ・パビリオン、ガウディのサグラダ・ファミリアを始めとする一連の作品、ロマネスク作品建築の名品ル・トロネ修道院、古代ローマ時代最大級の水道橋ポン・デュ・ガールなどを研修した。 ・学生は研修日を重ねるにつれ異文化に慣れ親み、自由に行動するなど国際交流推進の萌芽が確認できた。 ・研修前講義で蓄えた知識を実地研修して、生きた建築・教養教育を涵養して教育力向上に大きな成果を得ることができた。
--	--

イ 専門教育に関わる取組

専門教育【看護学科】

事業名	看護実践能力向上に向けたブランディッドラーニングシステムの構築
代表者	山口 三重子（保健福祉学部看護学科教授）
概要及び成果	<p>(概要)</p> <p>平成 25 年度から開始した看護学科全教員による事業である。平成 24 年度から全国に先駆けて本学科が開始した学士課程 4 年間で看護師国家試験受験資格を取得する教育課程（カリキュラム）の評価及び看護若手教員の教育力向上を意図して、「臨床アセスメント能力の評価」「実習目標等の見直し」「ブランディッドラーニングの導入」「卒業時看護技術到達度評価」「若手看護教員 FD プログラムの作成」を平成 25 年度から 3 年間にかけて実施する。</p>

	<p>(成果)</p> <p>臨床アセスメント能力は「呼吸に関するアセスメント・技術」に焦点化し、講義後の評価を行い OSCE 等のシナリオを検討した。実習目標の見直しでは、近年ルーブリックが重視されていることからまず基礎看護学実習に焦点化し、縦断的にルーブリックを用いた評価を行った結果、学修課題に対する実習内容や指導方法の見直しの必要性が示唆された。若手看護教員 FD プログラムは、千葉大学看護学科と連携しながら本学科の特性をふまえて実習領域の試案を作成した。ブランディッドラーニング及び卒業時看護技術到達度評価についても縦断的にアンケートを実施し、その結果については分析中である。</p>
--	--

平成 24 年度に改正された本学科のカリキュラムの評価を行うために、改めて看護学科の AP, DP, CP を見直すことから始め、この 3 年間で看護学科が重視し、新規に立てた科目（看護倫理学、看護アセスメント学、臨床アセスメント学等）の評価及び学生が自主的に学ぶことができるブランディッドラーニングシステムの活用についても縦断的にアンケート調査を行い、継続的に教育評価を行っている。アンケート結果は、現在、集計・分析が進行中である。本学科が保健師国家試験受験資格を取得するコースを大学院に移したことで、学部で行われる看護専門職としてベースとなる基礎知識や看護実践能力の修得がより重視されると思われるので、本事業で明らかになったエビデンスがいかに看護基礎教育に寄与できるか今後も検討していくことが課題である。

専門教育【看護学科】

事業名	成人看護学急性期におけるシミュレーション教育効果の検証
代表者	名越 恵美（保健福祉学部看護学科准教授）
概要及び成果	<p>(概要)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・又松（ウソン） 大学校と共同の評価表改訂版の作成。 ・講義内でのシミュレーション演習の精選のための研修会参加。 ・成人急性期実習後の演習によるビデオ撮影と学生の変化の確認とアセスメント力の検証 <p>(成果)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・又松（ウソン） 大学校と共同で看護アセスメント学における胃がん手術後の観察項目と配慮に関する評価表改訂版を作成。教員と共に演習で使用し、タブレット端末によるビデオ撮影により、動画を視聴しながら自分の技術を可視化し、ディブリーフィングを実施。学生は、演習実施者、観察者ともに認知領域だけでなく、精神運動領域・情意領域の学習が深まった。 ・看護アセスメント学でのシナリオ作成と演習方法の精選に関する研修会を受講し、タブレット端末使用の演習は、講義・演習ではなく自己学

	<p>習に使用することが望ましいとの判断に至った。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・作成された評価表は、学生の自己学習に関してルーブリックになり得るため、今後は自己学習ツールとしてタブレット端末と評価表の活用を行う。 ・成人急性期実習後の演習によるビデオ撮影と学生の変化の確認とアセスメント力の検証においては、観察の視点が明確になり、評価表での点数は、49点から54点へ向上したが、評価表小項目の内容を繰り返し演習する必要性が示唆された。
--	---

平成27年度には、シミュレーション教育に向けての評価表を作成し、一部学生が演習で利用した。学生は評価項目とディブリーフィングでの振り返りにより自己技術力・アセスメント力を振り返ることができた。

平成 28 年度は、学生の自己学習力向上にむけて評価表をルーブリックとして使用する予定である。さらに、患者の安全・安楽を考慮したうえでのアセスメントができるよう他の事例についてのシナリオと評価表の作成が必要である。

専門教育【看護学科】

事業名	看護専門職のためのグローバル・ラーニングシステム構築
代表者	川村 友紀（保健福祉学部看護学科助教）
概要及び成果	<p>（概要及び成果1：看護学科4年生統合実習B：北木島宿泊研修）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・10月と11月の2回に分けて4年次生が統合実習B（実習施設：笠岡市）で1泊2日の宿泊研修（地区踏査、インタビュー、家庭訪問、介護予防事業、ディサービス、小学校・中学校訪問等）を行い、島の現状と課題について関係者に報告し意見交換した。 ・中学校では生徒4名を対象に性感染症に関する健康教育を実施した。 ・成果報告書を作成し、次年度の教材とする。 ・大学院生1名が大学院の演習にて参加したが、大学院生と行動を共にすることで大学院教育への関心と理解が深まっていた。 ・小グループに分かれての活動であったため、互いの学びを共有することで島の健康課題や地域包括システムの必要性、また看護者としての役割について考えることができていた。 <p>（概要及び成果2：看護政策マネジメント論）</p> <p>グループワークでは、乳幼児、学童、妊産婦、成人、高齢者、精神保健福祉のグループに分かれ、笠岡諸島における地域包括ケアシステムについて既存資料（報告書）等を分析して現状を把握した。さらに、4年生の統合実習全体報告会に参加し、質疑応答や保健所長はじめとする関係者の助言指導等から、現状と課題を整理することができた。この成果は、次年度の統合実習Bの準備につながり、基礎資料として活用される。</p>

	<p>(概要及び成果 3 : 大学院生 : 公衆衛生看護診断論)</p> <p>島の運動会 (春 ; 飛島) に続き, 北木島において地区踏査・家庭訪問等により「地域を看護する」ために必要なアセスメントを実施した. 特に島での宿泊体験と家庭訪問では, 看護師経験を活かした保健師学生の視点は, 同行した学部生に学びの深さや広がりを与えた. 大学院生自身も限られた時間の中で, 1 人では体験できなかった小中学校関係者や漁師の方々へのインタビュー結果を共有することで, 視点の広がりを得て地域包括ケアシステムの必要性等について示唆を得ることができた.</p>
--	--

平成 27 年度は, 学部生の新カリキュラムのもと統合実習 B を北木島にて行った. 学部生全員が島に宿泊し生活体験をする中で, グループに分かれての研修での学びを共有することで, 島の地域特性と健康課題をアセスメントし地域包括システムにおける看護の役割や多職種との連携の必要性について学ぶことができていた. 今後も地域連携推進センター, 備中保健所, 笠岡市, NPO 等との連携協働のもとに, 看護専門職のためのグローバル・ラーニングシステム構築に努めたい.

専門教育【看護学科】

事業名	精神保健活動の国際的理解と実践力の獲得支援
代表者	井上 幸子 (保健福祉学部看護学科准教授)
概要及び成果	<p>(概要及び成果)</p> <p>大学院生が授業の一環として海外に渡航し, 現地にて地域精神保健活動に関するテーマで演習を行うことが可能かどうか検討するため, 現地 3 日間の日程で南オーストラリア州アデレードを訪問し, 行政による地域精神保健活動を視察した. 訪問先は次のとおりである.</p> <ul style="list-style-type: none"> ・Citi Centre : 南オーストラリア州政府オフィス. オーストラリアの精神保健活動について話を伺った. ・Norwood Child and Family Health Centre : 精神疾患や精神障害の相談, 産後うつ, 子育て時期の母親と子どものメンタルヘルス, 子育て力が弱い家族の支援などを行っている. ・Eastern Community Mental Health : 16 歳から 65 歳までの思春期から成人期の地域住民を対象とした相談事業や簡単な診察などを提供している地域精神保健施設. ・Eastern Intermediate Care Centre 及び Inpatient Rehab and Eastern Acute : グランサイド・キャンパスと呼ばれるエリアでは, 精神障害者に対応するための様々な機能をもつ施設が複数集まっている. 精神疾患の急性症状に対応できる医療機能を備えた施設, 及び地域移行への中間施設が設置されていた. ・Elpida House : グループホームのような施設で, 地域生活を送る精神

	<p>障害者の生活の場. 住宅地に設置されていた.</p> <p>オーストラリアでは, 精神保健のほとんどの事業が行政により実施されており, 財源, 人員配置において日本とは比にならない大きな予算と人材が確保されていた.</p>
--	--

財源や人員配置にあまり左右されず日本の看護師や保健師が国内の地域精神保健活動に取り入れ実践可能な事業として, 精神障害者への直接的な援助技術の習得ではなく, 予防や疾患啓発など地域移行を支えるプログラムを学ぶという方法が考えられる. 例えば, 中高生に向けた疾患啓発と地域コミュニティへのメンタルヘルス教育である. 今後は, 演習テーマを「オーストラリアのメンタルヘルス啓発活動について学ぶ」などに絞ってプランニングし, 実施時期や他科目との連続性についても調整を行う必要がある. また, 演習ではなく共同研究やプログラムを学ぶためのワークショップ開催などの方法も考えられるため, 今後はより実現可能な方法について計画案を検討する.

専門教育【保健福祉学科】

事業名	リアリティショックを克服し就業継続できる力量を有した保育者養成のプログラム開発
代表者	佐藤 和順 (保健福祉学部保健福祉学科教授)
概要及び成果	<p>(概要)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 第 56 回中・四国保育学生研究大会への参加 ・ 基礎ゼミナール合同研究発表会の実施 ・ 幼稚園・保育所等の見学・体験学習, 現職者の講話の実施 ・ 「チュッピーひろば」を活用した地域貢献及び保育実践力の醸成を目指す協働授業の実施 ・ 岡山県内の幼稚園・保育所・認定こども園を対象にした「保育者に求められる職務・資質に関する調査」の実施 <p>(成果)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 保育学生研究大会に参加し, 他大学の学生の研究発表等に触れることで, 大学での学びの芽生えとすることができた. ・ 幼稚園・保育所等の見学, 現職者の講話を通して, 保育職の現状を理解し, 自らの理想の保育者像を明確化することができた. ・ 「保育者に求められる職務・資質に関する調査」の結果概要 (回収 1, 434 部, 回収率 41. 0%) については, 日本保育学会第 69 回大会にて発表予定である.

- ① 平成27年度は1年次生を対象とした中・四国保育学生研究会への参加, 各施設等の見学, 体験学習, 2年次生を対象とした基礎ゼミナールの合同研究発表会, 3年次生を対象とした講話を通じた保育者の現状を理解させる学習等, 学年相応の事業展開をすることがで

きた.

- ② また, 学生も参加する学内の親子交流広場事業である「チュッピーひろば」を活用した協働授業を通して地域貢献及び保育実践力の醸成を継続して行った.
- ③ 今後は各取組, 協働授業の連携を図り, より効果的な事業展開をする必要があると考える.

専門教育【情報システム工学科】

事業名	ものづくり関連授業の総合的理解度の向上に向けた教育方法の検討
代表者	福田 忠生 (情報工学部情報システム工学科准教授)
概要及び成果	(概要) ・1年次から3年次へと連続するものづくり基礎科目・実験演習科目の連携 ・対象科目で共通する機械部品教材の選定 ・選定教材による加工法・製図法に対する講義を実施 ・選定教材による強度計算に対する講義を実施 (成果) ・片持ち梁形状のドアノブを選定教材とし, 製造法・荷重負荷時の変形挙動・CAE解析など, 複数の科目で連携した講義を行い, 理解度向上に寄与することが出来た. ・新たにワークガイドを共通教材とし, 履修学生1人につき1個を割り当てることで, 計測・製図など体験的な学習支援を実施し, 理解度向上に寄与することが出来た. ・独自アンケートによるものづくりに関する学生の意識調査を実施し, 次年度以降のシラバス作成に成果を反映することが出来た.

ものづくりの総合的理解には, 実現象を見る・聴く・触るなどの経験が重要である. 本事業は「実物を用いた授業により, 学生が科目間の関連性も含めて総合的に理解できるようにすることを目的とする」としており, 科目間の連携を重視して多様な観点から検討・実施した. 科目間の同一教材による連携や, 製図・計測用の共通教材を1人に対して1個を割り当てることは, 学生が実際に手にとって作業することが可能となり, 理解度向上に寄与すると期待される. 今後は, さらなる体験的な学習支援など改善策の検討が見込まれる.

専門教育【人間情報工学科】

事業名	実用的課題の実験科目への導入とメカトロ教育への実践
代表者	井上 貴浩 (情報工学部人間情報工学科准教授)
概要及び成果	(概要) ・メカトロニクス関連課題の新規追加を含んだ教育プログラムの改善が教員の知識拡大につながり, ひいては新規課題の導入や修正から得ら

	<p>れる知見が教員にフィードバックされる構造が構築できる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・工学系技術者としての内定率向上を目指している。 ・演習・実験科目におけるメカトロ教育を意識したより実践的なテーマや課題の構築。 ・ロボット設計と制御に関する課題設定に向けての調査等を行う。 <p>(成果)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・旧来のマイコンから高性能マイコン (SH-7125) への移行を完了した。 ・それに伴う電子回路製作とプログラム開発の修正を行った。 ・直流モータ用ドライバ回路の製作とモータの速度・トルク制御の課題を新たに構築した。 ・ステッピングモータ制御に関わる課題を調査し準備が整った。 ・MATLAB/Simulink による制御系設計課題を新規で追加できた。 ・現在でも産業分野で多く利用される古典制御手法によるロボット制御系設計の手順を解析ソフトにより作成でき、新規課題として追加した。
--	--

これらのようなメカトロ教育に沿った新規の小課題を多く導入することで、より実用的かつ実践的な技術を体得することができる。近年、コスト削減の観点から試作機を極力減らす開発手法が盛んであり、それを実現するためには数値解析によるシミュレーションが欠かせない。本事業では、制御工学での古典制御の代表であるPID制御を重視し、豊富な実例を踏まえた広範囲な小課題を新規に取り入れることができた。今後は、多関節ロボットの設計ノウハウやそれらの制御手法まで網羅した課題作りに挑戦したい。

専門教育【造形デザイン学科】

事業名	ワークショップを活用した学生のキャリア形成プログラム
代表者	島田 清徳 (デザイン学部造形デザイン学科准教授)
概要及び成果	<p>(概要)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・造形デザイン領域テキスタイル分野で学ぶ学生に向け、自主性とコミュニケーション力に重点をおいた実践的なインターンシッププログラムを実施した。 ・受け身の授業ではなく、学生の自立心を涵養するために、地域の幅広い年齢層に対応できるワークショップを学生自らが企画立案し、教員・美術館学芸員の監督のもと、実施した。 ・学生が講師役を務めることから、実践的な専門能力・実務能力を養うとともに、年齢の異なる人々と交流することによって、世代間コミュニケーションを学び、社会への適応能力を高めることを目的とした。 <p>(成果)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・小学生以上を対象とした藍染体験のワークショップを実施し、22名の参加があった。(事前予約制)

	<ul style="list-style-type: none"> ・小学生以上を対象とした型染体験のワークショップを実施し、11名の参加があった。（事前予約制） ・屋内広場に、来館者が織や糸つむぎ、組紐などを自由に体験できるワークショップコーナーを設置し、3日間で127名の参加があった。 ・普段は受け身で教わる立場の学生を、逆の教える立場に立たせた時に、次のような効果があった。 <ul style="list-style-type: none"> ＊組織や仕事のやり方を学び、自己の適性や職について考える。 ＊職場や社会のルールを知り、それらへの適応能力を意識し高める。 ＊現場で教える立場に立つことで、自分の長所や欠点を自覚する。 ＊幅広い年齢層との交流によりコミュニケーション力を身につける。 ・相手の立場に立った計画立案、準備計画、伝えること教えることなど、受入組織及び一般の方を意識しながら様々な体験を通して学習に対するモチベーションを高めることができた。 ・来年度以降は、ワークショップのメニューをテキストに限定せず、他の専門分野の教員と連携しながら事業をブラッシュアップさせるため、具体的な検討を開始している。
--	---

専門教育【造形デザイン学科】

事業名	キャリア形成支援のためのポートフォリオセミナー及び企画提案力向上を目的とした教育プログラムの実施
代表者	山下 万吉（デザイン学部造形デザイン学科講師）
概要及び成果	<p>（概要）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・様々な手法を駆使してビジネス展開や国際交流を行うアーティストと、産業界で活躍する企業人を外部講師として迎え、造形デザイン学科2～3年次生を主対象としたポートフォリオセミナーと講義を実施。学科生の“進路選択や就職への意識の向上”“ビジネスに対する発想力、企画提案力及び制作意欲の向上・強化”を目的とする。 ・上記教育プログラムを通して、新領域の教育カリキュラムに対する新たな視点の獲得：専門分野を横断した作品の在り方とそのビジネス展開について、造形デザイン学科教員間で新たな視点を得つつ、意識を高める。 <p>（成果）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・8月、菅公学生服株式会社開発本部マーケティング室長の岩井聡氏を招き、第1回のポートフォリオセミナーを実施。「造形領域論Ⅲ」を受講する学生12名がポートフォリオのプレゼンテーションを行った。学科学生26名が参加。 ・10月、外部講師としてアーティストユニット・うるまでるびの2人を

	<p>招き, 特別講義を実施. ジャンルを横断したコンテンツの発想方法や制作手法, グローバルな視点でのモノづくりについて話を伺った. 学科学生約 40 名が参加.</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 11 月, アーティストの大竹夏紀氏を招き, 第 2 回のポートフォリオセミナーを実施. 前半では臆染めの実演を交えながら, 講師の活動を紹介するレクチャーを実施し, 後半では 7 名の学生がポートフォリオプレゼンを行った. 学科学生 40 名が参加. ・ 2016 年 2 月, 四国タオル工業組合理事長・近藤氏 (他 2 名) を招き, 第 3 回のポートフォリオセミナーを実施. 就活を控えた 3 年生数名が自身のポートフォリオのプレゼンテーションを行い, 企業目線での講評をいただいた. 学科学生 33 名が参加.
--	---

専門教育【横断的／学際的取組】

事業名	岡山県立大学に適合した保健・医療・福祉の多専門職連携教育プログラムの開発
代表者	中村 光 (保健福祉学部保健福祉学科教授)
概要及び成果	<p>(概要)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 保健福祉学部 3 学科の 3 年次生を対象に, 保健・医療・福祉専門職における interprofessional working (IPW) を実践的・体験的に学ぶ「チームガバナビリティ演習」(選択, 1 単位) を開講した. ・ 授業は, 「IPW に関する講義」「IPW のためのチームビルディング演習」「クライアントとの交流」「病院実習」「成果報告会」から構成した. <p>(成果)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 看護学科 1 名, 栄養学科 14 名, 保健福祉学科 6 名の学生が受講した. ・ 学生の授業満足度は極めて高かった (例: 授業評価アンケート平均 4.7 点) . ・ OPU フォーラムにおいて, 本プログラムにおける取組を紹介した. ・ 大学教育開発センターFD 部会センターワークショップにおいて, アクティブ・ラーニングとしての本プログラムにおける取組を紹介した.

平成27年度において保健福祉学部で唯一の学科横断型授業であり, 学外教育資源 (外部講師, 患者会, 臨床施設) の協力を得ながら, 保健・医療・福祉分野の専門職を目指す学生が実践的にチーム協働を学ぶ場として定着し, キャリア教育としての側面も持つ, 学部の特徴的カリキュラムと評価されている.

今後の課題として以下のことが挙げられる.

- ①IPW教育における岡山県立大学モデルとしての情報発信の強化,
- ②COC+事業における副専攻「岡山創生学」の授業科目としてのプログラムの改良と発展.

専門教育【横断的／学際的取組】

事業名	デザイン学部・保健福祉学部学際的教育 －初等教育施設に関する見学と講義－
代表者	福濱 嘉宏（デザイン学部デザイン工学科教授）
概要及び成果	<p>（概要）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・こども学専攻の学生と建築・都市領域の学生が、同一の保育園を異なる日時に見学し、それぞれレポートを作成した。 ・保育園の設計経験が豊富な建築家として袴田善夫氏を招き、特別講義をおこなった。この講義には、こども学専攻と建築・都市領域の学生が合同で参加した。 ・建築・都市領域の成果発表・講評会に建築の教員のほか、上記特別講師の袴田氏に加え、こども学専攻の教員と学生が参加した。 <p>（成果）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・こども学専攻の学生は実習で保育園施設を体験する機会がすでにあるものの、独特な教育方針（本件の場合はモンテッソーリの教育思想）による現場に触れたことの意義は大きかったようである。建築的にも洗練されたユニークな空間であり、その点も刺激的であったようである。建築・都市領域の学生は、学習対象として保育園を体験するのは初めてであり、貴重な機会になったようである。 ・袴田氏の講義は、実務的な観点から利用の問題について考察するよい機会となったようである。 ・建築・都市領域の成果講評会には、こども学の学生から運営サイドでなければ発することのできない率直な意見が活発に呈された。建築の教員や学生だけでは見過ごしたまま終始したであろう状況が、よい方向に突破されたことは大きな成果であった。

専門教育【横断的／学際的取組】

事業名	ものづくり工房運営についての調査研究3
代表者	金丸 敏彦（デザイン学部デザイン工学科教授）
概要及び成果	<p>（概要）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ものづくり工房では、この技術・技能・安全性が途切れることなく各学年に確実に受け継がれるような取組。 ・技術、技能を指導だけに留まらず、学生が自ら考え、深化させ、常に高い創造性をもちながら工夫と改良を積み重ねて行けるような環境づくり。

	<ul style="list-style-type: none"> ・デザイン学部の学科及び領域を超えて知識・情報を共有できる「学生の学生による学生のための創造空間-アクティブ・ラーニング・コモンズ」ものづくり工房の構築. ・アトリエ棟工房機械操作マニュアル映像化の取組. <p>(成果)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・出会いと学びの場アクティブ・ラーニング・コモンズに必要な設計を行った. ・コルク素材の商品開発を行った. 製作を通しアクティブ・ラーニング・コモンズ環境の考察を行った. ・商品開発されたデザインを学生自身が意匠登録を行うための学習を行った. ・上記の情報共有をネットワーク上で行った. 学生と研究者が Evernote を利用し情報の共有を計った. ・アトリエ棟工房の機械操作マニュアルを web 上で自由に確認できる環境を整えた.
--	---

専門教育【横断的／学際的取組】

事業名	デザインパテントコンテストを活用した実践型創造力創出教育プログラムの開発
代表者	森下 眞行 (デザイン学部デザイン工学科教授)
概要及び成果	<p>(概要) 文部科学省が主催する「デザインパテントコンテスト」を活用した問題解決型教育 (PBL) により, 学生の知的財産権に対するマインドを向上し, 地域社会や産業界に貢献できるデザイナーの育成を目的としている. 成果目標は,</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. デザインパテントコンテスト参加による知的財産権マインドの向上, 2. 具体的なニーズに基づく実践的な課題設定力とアイデア創造力の向上, 3. 産学連携による問題解決型授業による自発的な授業参画意識の向上. <p>(成果)</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 平成 27 年度デザインパテントコンテスト : 製品・情報デザイン演習Ⅲ履修対象者 13 名全員が応募したが, 残念ながら登録出願支援対象創作には選ばれなかった. 理由としては, 1) コンテスト対象として取組んだ産学協同研究課題が本コンテストの意図する分野と異なっていたこと, 2) 他大学での知的財産教育が進展して, 応募数が増加したことなどが考えられる. 2. 広域大学知的財産アドバイザー派遣事業「デザイン利活用による地域

	<p>貢献ネットワーク（幹事校：広島市立大学）」</p> <p>平成 26 年度より, 本学が参加し, 大学の知的財産権の管理体制構築, 管理運営, 活用促進へ向けて取組を始めたが, 平成 27 年度末で終結することが決定. 広域ネットワーク活動については, 平成 28 年 2 月 5 日第 2 回ネットワーク推進会議（広島市立大学）にて, 大学間連携で自主的活動を継続することを決議した.</p> <p>3. 本学教員及び教職員向け「第 1 回知財教育セミナー」を本事業で実施した.</p> <p>日時：平成 28 年 2 月 12 日（金） 13:00～16:00 デザイン学部 会議室 (3309/3310)</p> <p>目的：他大学での知的財産教育の取組を紹介し, 本学教員・職員・学生の知的財産権に対する意識向上及び FD・SD 活動の向上とする.</p> <p>内容：</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「デザイン利活用による地域貢献ネットワーク（幹事校：広島市立大学）」の活動紹介 デザイン学部長・教授 森下眞行 ・「美大生の特性を活用した知財教育（I）」 <p>講師 名古屋造形大学社会交流センター長／教授 下尾邦之 氏</p> <ul style="list-style-type: none"> ・講師を囲んで, 質疑応答・意見交換会 ・参加者数：28 名（教員 22, 職員 3, 大学院生 3）
--	--

専門教育【横断的／学際的取組】

事業名	情報工学部・デザイン学部 合同による協働教育プログラムの実践
代表者	齋藤 美絵子（デザイン学部造形デザイン学科准教授）
概要及び成果	<p>（概要）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・アート&テクノロジー施設の視察, 研修：先端テクノロジーを用いた新しい表現や事例を数多く扱う施設へ出向き, 世界水準のメディア芸術や IT サービスに触れる. また, 参加学生達は, 現在学んでいる両学科の専門性と結びつけ, 近い将来に社会で貢献するためのアウトプットイメージを構築する. ・2学部協働ワークショップの実施：情報工学部情報システム学科の学生とデザイン学部造形デザイン学科の学生が混在するチームを形成し, ある条件の元で与えられた社会的課題を, それぞれの専門性を活かしながら解決策としてのコンテンツを導き出す. 目的と目標を共有したうえで最終成果物の完成を前提とした協働体験は, 就業後のイメージを得ることに繋がるため, 将来の見通しを考えるきっかけとなる. <p>（成果）</p>

	<ul style="list-style-type: none"> ・ナレッジキャピタル視察・研修による専門知識・技術向上に対する動機付け：専攻の異なる学生が混在する4～5人のグループに分かれナレッジキャピタル内のメディア芸術やITサービスを見学し学生間で意見交流を行った。有意義な意見交換のためには、自身の専門性や基礎力が求められ、それらを強化することで意見交流の楽しみが増す。基礎力の向上～意見交流～新たなアイデアの創出という好循環をもたらした。 ・2学部協働ワークショップによる対話力の向上：専攻の異なる学生が混在するチームで目的・目標を共有し2日間という限られた時間でスマホアプリの企画を完成させることは参加学生にとって社会参加や就業イメージを喚起することに繋がった。また、発想を豊かにし、その能力を向上させることができた。いかにして自身と他者の意見を交流させるかを自ら考え実践するとともに、その意義や効果を実感することができた。
--	--

ウ その他, 全学的な教育改善を軸とする取組

高大接続教育【全学的取組】

事業名	高校生のための大学授業開放
代表者	高橋 吉孝（大学教育開発センターアドミッション部会部会長）
概要及び成果	<p>(概要)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・高校生向けにアレンジした大学の授業をすべての学部・学科で計画し、本学において県内外の高校生に公開した。 ・授業はすべての学部・学科で、講義形式のものと演習・実習形式のものを準備した。 ・実施日時は次のとおり、 デザイン学部：平成27年6月27日（土）13：30～ 保健福祉学部：平成27年8月29日（土）10：00～ 情報工学部：27年8月29日（土）10：20～ <p>(成果)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・総勢308名の高校生が参加し、その内訳は保健福祉学部222名（看護66, 栄養68, 保福88）、情報工学部46名、デザイン学部40名であった。 ・3年生が77%を占めており、東は京都、西は熊本からの参加者もあったが、県内からの参加者数が91%を占めていた。 ・ややハイレベルに設定した授業も多かったが、完全に理解できた(31%)とまあまあ理解できた(54%)で大部分を占め、全く理解できなかった学

	<p>生はいなかった。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ほぼ全員が授業に関心を持つことができ、あまり関心が持てなかった学生と全く関心が持てなかった学生はいずれも0であった ・アンケートから、本事業の第一の目的であるところの、「大学の授業を理解するために、高校での学習がいかに重要であるかを理解してもらう」という高大接続事業としての役割については概ね達成されていると思われた。
--	---

高大接続教育の充実に向けた取組として実施した「高校生のための大学授業開放」は受験生の獲得が目的ではなかったにも関わらず、結果として受講者の約4割が本年度の推薦入試を受験し、受験者数の半数を占めた。今後は、その効果を検証するための追跡調査が必要となるとともに、高大接続事業としての位置づけをさらに明確にしていくこと、カリキュラムの中にアクティブ・ラーニングや地域連携教育を取り入れること、入試へ活用していくことなども検討課題となる。

学生支援【全学的取組】

事業名	キャリア形成支援を目的とする教育体制整備に関する調査研究
代表者	難波 久美子（大学教育開発センターキャリア形成支援部会）
概要及び成果	<p>(概要)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・卒業生等を招聘する講演会プログラム「県大吉備塾」として実施する。 ・短期的な就職活動に関する内容ではなく、業界の特徴や方向性など現場の情報も含めて講演頂く。 ・1回当たり1～4名程度の講師を招聘する。 ・各回20～30名程度の学生参加者を見込み、評価のためのアンケート調査を実施する。 <p>(成果)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・各学部の卒業生を講師招聘し、講習会を開催した。初回は7月23日に実施し、第3回県大吉備塾として開催した。また第4回を10月22日に、第5回を10月29日に実施し、第6回を11月13日に実施した。 ・各開催回においてアンケート調査を実施し、運営方針の評価検討を行った。 ・保健福祉学部、デザイン学部、情報工学部それぞれの学生のニーズや考え方を抽出した。

学生支援【全学的取組】

事業名	学生相談室業務の機能向上と情報発信のための環境整備
代表者	迫 明仁（大学教育開発センター学生支援部会・学生相談室）
概要及び成果	<p>(概要)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・学生相談室の環境デザインに関するコンセプトを再構築する。 ・具体的な環境デザインの設計と製作を行う ・インターネット技術を活用する情報発信を検討する ・環境整備の結果について評価（分析）を行う <p>(成果)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・学生相談室の外装を中心に検討し、デザイン学部学生の協力を得て誘因性を高めるための装飾及びオブジェの配置を行った。 ・環境整備（壁面装飾）前・後についてSD法により比較した（調査対象：学生168名）.活動性,評価性,力量性の3因子を抽出した.壁面装飾後の因子得点から,活動性と力量性が大きく改善し,評価性もやや改善されたことが確認された.（関連学会発表予定） ・情報発信については,独自の携帯アプリも検討したが,大学全体として導入するポータルサイトに組み込む方式へと変更した.これにより,コンテンツについては学生支援部会と共同で構成することとなった.

来談者中心の相談業務にあっては,自発的な来談を誘発するための工夫が求められる。

本事業の目的の一つは,相談室壁面に装飾を施し誘目性を引き出すことにある.デザイン学部学生の協力により,壁面装飾とオブジェの配置ができた.装飾前と後の印象をSD法により解析した結果,大きく改善したことが示された.この結果が来談者（未来談者）にとって有効に機能することを期待したい。

二つめは,利用しやすさ向上のためのシステム作りである.ユビキタス時代に対応する相談室案内や相談予約システムの開発・導入である.全学的なポータルサイト構築に合わせてコンテンツや運用方法の検討を継続中である。

主にこれらの二つの課題に取り組むには単年度では限界があり,また改善・開発の成果（来談者数の変化など）を評価するために,次年度も事業を継続する計画である。

（3）平成28年度教育力向上支援事業

平成28年度事業については,平成27年11月に審査を行った.採択・実施された教育力向上支援事業(21件)は以下のとおり。

代表者所属	代表者氏名	事業名	査定額 (千円)
保健福祉学部 看護学科	高橋 幸子	e-ラーニングを使った授業内・授業外の英語学習の構築	310
保健福祉学部 栄養学科	新田 陽子	韓国食文化を通じたグローバル化教育の推進と教育力向上・開発	550
情報工学部 情報システム工学科	石井 裕	ビブリオバトルによる読書推進とコミュニケーション能力向上プログラム開発	100
情報工学部 人間情報工学科	高戸 仁郎	地域資源を活用したスポーツ授業の開発と効果検証	300
デザイン学部 デザイン工学科	岩本 弘光	建築・デザイン海外研修による国際交流と建築・教養教育の充実 3	1000
保健福祉学部 保健福祉学科	中村 光	岡山県立大学に適合した保健・医療・福祉の多専門職連携教育プログラムの開発	740
情報工学部 人間情報工学科	井上 貴浩	実用的課題の実験科目への導入とメカトロ教育への実践	720
情報工学部 人間情報工学科	瀬島 吉裕	機械系科目の接続を考慮した学習教材の開発	480
デザイン学部 デザイン工学科	森下 眞行	デザインパテントコンテストを活用した実践型創造力創出教育プログラムの開発	400
デザイン学部 造形デザイン学科	樫尾 聡美	学外文化施設との連携によるキャリア形成への取り組み	500
デザイン学部 造形デザイン学科	島田 清徳	ワークショップを活用した学生のキャリア形成プログラム	250
デザイン学部 造形デザイン学科	野宮 謙吾	大学間連携によるキャリア教育プログラムの実践	300
デザイン学部 造形デザイン学科	山下 万吉	キャリア形成支援のためのポートフォリオセミナー及び企画提案力向上を目的とした教育プログラムの実施	300
保健福祉学部 栄養学科	岸本 妙子	共通教育と専門教育の連携によるグローバル社会に対応できる管理栄養士養成プログラムの開発	300

保健福祉学部 保健福祉学科	佐藤 和順	リアリティショックを克服し就業継続できる力量を有した保育者養成のプログラム開発	400
デザイン学部デザイン工学科	朴 貞淑	キャリアアップにつながる実践的韓国語学習支援	250
デザイン学部 デザイン工学科	金丸 敏彦	ものづくり工房運営についての調査研究 4	450
デザイン学部 造形デザイン学科	齋藤 美絵子	情報工学部・デザイン学部 合同による協働教育プログラムの実践	400
大学教育開発センター キャリア形成支援部会	山下 広美	キャリア形成支援を目的とする教育体制整備に関する調査研究	750
大学教育開発センター アドミッション部会	高橋 吉孝	高校生のための大学授業開放	970
情報工学部人間情報工学科 (学生相談室)	迫 明仁	学生相談室業務の機能向上と情報発信のための環境整備	500
		計 (千円)	9,970

1-4-3 まとめと課題

平成 27 年度における個別の事業の成果については、1-4-2-(2)-ア～ウで紹介した通りだが、前年度までに比べセンターにおける 2 つの部会による全学的な取組ならびに学部・学科横断的な取組が目を行っている。一方で教養教育を中心としたアクティブ・ラーニングに関する取組は顕著ではなく、引き続き課題を残した。なお、平成 27 年度の事業紹介とともに、全学的ないし横断的な取組のなかから選ばれた 3 件について、平成 28 年 2 月 7 日、8 日開催の、公立大学政策・評価研究センター主催「大学評価ワークショップ」における大学プレゼンテーションにて、報告を実施した。

平成 28 年度事業については、改めて学長方針である教養教育・グローバル化教育・地域連携教育の改革推進の観点に基づき募集を行ったが、同時に他への波及効果の高い事業について優先的に配分を行った。

今後に向けての課題としては、アクティブ・ラーニングの視点をもつ申請や教養教育に関する申請の増加を促さなくてはならない点や、合同報告会については未実施であるためその実施を通じて取組テーマや組織を超えたノウハウの共有をはからねばならない点が挙げられる。

特色ある本事業の成果は、「学生の学修成果への反映」が究極の目的となる。これに向けて、全教員における本事業の意義の共有を改めてはかりたいところである。

第2章 国際交流センターの活動と成果

2-1 概要

国際交流センター（以下、センター）は、本学同窓会から寄贈された建物を活用する形で、平成 26 年 10 月にオープンした。本学の関係規程により、業務は以下の通りと定められており、「機能としてのセンター」及び「場としてのセンター」の2つの側面を持っている。

- (1) 本学の教育研究に係る国際交流推進のための企画立案並びに情報の収集及び提供に関すること。
- (2) 本学の教育研究に係る国際交流事業の企画及び実施に関すること。
- (3) 学生及び教職員の外国語能力並びに外国人の日本語能力の向上支援に関すること（岡山県立大学語学教育推進室が所掌する業務を除く）。
- (4) 学生及び教職員の海外派遣の企画並びに調整に関すること。
- (5) 海外からの研究者、留学生等の受入推進に関すること。
- (6) 各学部、学科等が実施する国際交流事業への協力に関すること。
- (7) 海外協定大学との交渉及び接遇に関すること。
- (8) センターに設置する機器等の運用及び維持管理に関すること。
- (9) その他国際交流の推進に関すること。

平成 26 年度の活動は半年間であったが、アデレイド大学英語教育センターの協力のもとでの Skype 英語や、学内外の英語教員による「英語村」等を試験的に実施しながら、より効果的な取組の推進に向けて、課題や改善点等を探った。

平成 27 年度は、専任でセンター長を務める特任教授を 4 月から新たに採用するとともに、各学科代表 8 名、英語教員代表 1 名、事務代表 1 名の総勢 10 名の幹事を選任して、本格的に活動をスタートさせた。

センター幹事会を合計 5 回開催し、基本的方向性や具体的取組内容等を随時協議した。

「機能としてのセンター」では、学長方針に基づく国際交流協定校の増大や海外語学文化研修の充実など、従来の取組を強化するとともに、インドネシアから学生民俗音楽舞踊グループを招いての芸術文化交流の推進や、豪州、ネパール、インドネシア、香港の大学との共同研究の推進への支援、留学生受入拡大のための各種調査研究の実施及び「博士後期課程留学生特別入学試験制度」の創設、国際交流推進の基盤整備としての「アクションプラン」の策定など、多くの新たな取組にチャレンジした。

「場としてのセンター」では、学期中は英語村を毎日「開村」（月～金の午後の 3 時間）するとともに、週 1 回の Skype 英語を継続したほか、「韓国語村」や季節毎のイベント等を随時開催した。さらに、海外とインターネット接続できる機器を活用して、イタリアや韓国、中国、インドネシアを結び、特別講義や入学選考の審査等を支援した。

2-2 国際交流における活動

2-2-1 国際交流協定校

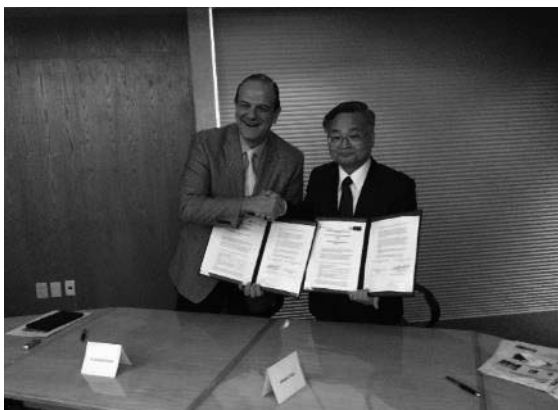
大学間の協定校は、平成 26 年度末時点で 9 校だったが、平成 27 年度には 4 校増やして、合計で 13 校となった。内、ネパールからは訪問団を本学に迎え（4 月）、台湾（11 月）及びメキシコの 2 校（12 月）へは、学長を団長とする友好訪問団を派遣して調印式に臨むとともに、交流拡大に向けたトップ会談を行った。

【大学間協定校】

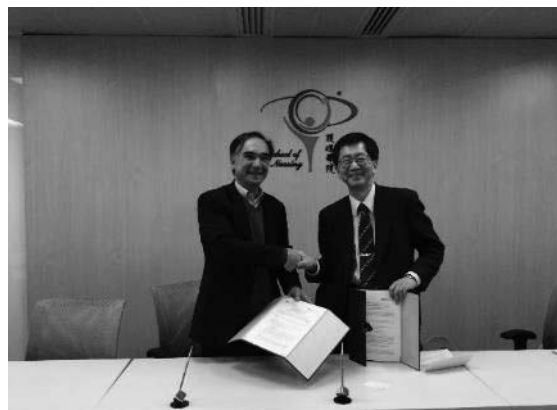
- 平成 8 年 (1) バンガー大学（英国）、(2) セント・アンドリュース大学（英国）
- 平成 17 年 (3) 又松（ウソン）大学校（韓国）
- 平成 19 年 (4) 四川大学（中国）、(5) 南昌大学（中国）
- 平成 20 年 (6) 延辺大学（中国）
- 平成 23 年 (7) 東北師範大学（中国）
- 平成 26 年 (8) ハサヌディン大学（インドネシア）、(9) アデレード大学（豪州）
- 平成 27 年 (10) トリブバン大学（ネパール）、(11) 雲林科技大学（台湾）
(12) モンテレイ工科大学プエブラ校（メキシコ）
(13) モンテレイ大学（メキシコ）

また、平成 27 年度はこの他にも、米国及び中国の複数の大学から、副学長等を団長とする訪問団を受け入れ、交流拡大に向けた意見交換等を行っており、平成 28 年度以降の進展がおいに期待される場所である。

学部学科間交流協定では、保健福祉学部が香港理工大学の看護学院（2 月）と、また情報通信工学科が上海交通大学の自動化工学科（7 月）と、それぞれ協定を締結した。



モンテレイ大学 MOU 調印式



香港理工大学 MOU 調印式

2-2-2 語学文化研修等

まずは、平成 26 年度の参加者による報告会を 4 月に開催して、平成 27 年度プログラムへ

の学生の注意関心を喚起した。

英語に関しては、例年通り、英国バンガー大学へ、8月下旬から約3週間、11名の学生を、また豪州アデレード大学へ、2月末から約3週間、12名の学生を、それぞれ派遣した。

平成25年度のプログラム開始から3回目となるアデレード大学については、課外活動の充実が課題であったことから、今年度委嘱したばかりの芳賀浩本学客員教授（アデレード在住）の指導のもと、初めての試みとして、アデレードの食べ物や流通の状況、都市計画、交通対策、観光振興など、多様なテーマによる特別講義と現地視察を3回実施した。



バンガー大学研修



アデレード大学研修

韓国語では、過去2年間参加者不足で実施できていなかった又松（ウソン）大学校での研修に、7名の応募があったものの、韓国国内での新型コロナウイルスの流行により、同大学での研修が取り止めとなった。その後、センター幹事の尽力もあり、ソウル市の梨花女子大学における本学学生向けの特別研修を実現することができ、2月下旬の6日間、7名の学生を派遣した。同大学を中心とした語学指導も文化体験も、短期間でありながら大変充実していたことから、参加学生の評価は高いものとなった。

中国語については、応募者が少なく、3年連続で不成立となった。

平成26年度にスタートした「南オーストラリア州保健福祉スタディツアー」には、7名の学生が参加し、3月下旬の約1週間、専門研修、英語研修、福祉施設訪問、学校訪問等を行った。



梨花女子大学研修



南オーストラリア州スタディツアー

一方、例年通り「日本語・日本文化研修」を7月下旬～8月上旬に本学で実施し、南昌大学

の学生 11 名を受け入れた。

2-2-3 教育交流

「芸術文化交流」は、語学があまり得意でなかったり、国際交流にはそれほど興味関心が無かったりする学生にもアピールできることから、インドネシアのハサヌディン大学の学生民俗音楽舞踊グループ 20 名を 11 月に初めて招き、本学大学祭での公演に加え、学生との音楽や日本文化を通じた交流などを実施した。あわせて、滞在中の学生のサポートをするボランティア学生を本学内で募るなど、相互理解の促進等に努めた。

イタリアのキエーティ大学（7月）やハサヌディン大学（10月、12月）との間での Skype を活用した遠隔授業の実施に加え、台湾の雲林科技大学及びメキシコのモンテレイ工科大学プエブラ校との間での、学生が制作した作品の展示会や国際セミナーの開催（1月、3月）等に際して、センターとして支援を行った。



ハサヌディン大学音楽舞踊グループ

2-2-4 国際交流センター（建物）内での様々な活動

4月から本格稼働を始めた英語村は、英語のネイティブ・スピーカー等とおしゃべりやゲームを通じて、学生に英語の楽しさを体得させる取組であるが、学期中は月～金の毎日、12：00 から 15：00 まで開村した。指導者は、いずれも学外者の中から、前期は女性 2 名、後期は男性 2 名が務め、合計約 140 回の開村に延べ約 500 名の学生が来訪した。取組の PR と体験者増大を目的に、合計 8 回の特別イベント（クリスマス・パーティなど）も実施した。

本学で韓国語も教えるデザイン学部教員が、語学学習支援と韓国理解の促進のため、初めての試みとして、原則週 1 回、各 1 時間の韓国村を開催し、のべ約 160 名が参加した。

アデレード大学との Skype 英語は、バンガー大学及びアデレード大学での語学文化研修の事前研修としての位置付けも加えながら、木曜日の夕方に 1 時間実施した。合計約 30 回行い、のべ約 130 名の学生が参加した。

その他、中国村のトライアル開催、留学相談（平成 28 年 3 月から約半年間の豪州語学留学に結び付いた）、遠隔での授業や協議、入試選考、各種会議や視察など、平成 27 年度は、総計

で約 1,300 名が来訪した。



英語村



Skype 英語

2-2-5 共通教育との連携

チラシを頻繁に作成・配付するなど、国際交流センター内での各種活動のPR及び来訪者増のための様々な取組を、語学教育推進室を始めとした多くの教員と連携しながら推進した。こうしたことも活かしつつ、海外での語学文化研修等の企画・実施に当たっては、協働体制を一層強化することができた。特に、諸事情により中断していた語学文化研修（韓国語）が再開できたことは特筆すべき点であった。

2-2-6 まとめと課題

本格的な取組が実施された初めての年であったが、利用者数は、英語村の約 500 名を始め、総計でのべ約 1,300 名となった。学生が実践的な英会話を学んだり、国際交流関連の情報を得たりする場所等として、一定の貢献はできていると考えられる。

一方で、センター来訪者の固定化がある程度見られることから、より多様な学生の利用に結び付くよう、情報発信の工夫と強化が必要となっている。また、平成 28 年度計画にもあるとおり、英語村等の学習成果について語学教育推進室と連携して検証し、得られたエビデンスをセンターとして広報していき、教員の理解と協力を得る必要がある。

「機能としてのセンター」の役割も含め、取組推進のための「学内人的ネットワーク強化」としては、センター幹事を中心に、その先のつながりも大切にする必要がある。平成 27 年度の様々な挑戦を通じて、センターの機能や取組に対する学内理解も進んできており、スモール・サクセスを着実に積み上げて、多くの学生・教職員の信頼を得ることが肝要である。

2-3 国際交流における教育・研究支援活動

2-3-1 国際交流協定校

中国, 韓国, インドネシアの協定校 4 校を対象に, 試験的に, 「博士後期課程留学生特別入学試験制度」を創設した. インドネシアからの 1 名が, 平成 28 年 4 月に入学した.

〈概要〉

- ・ 入学金・授業料は免除, 月額 8 万円の奨学金, 選考は書類と面接 (Skype 利用可)
学生交流を促進するため, 台湾の雲林科技大学及びアデレード大学との間での具体的な協議及び関係要領の作成準備等を開始した.
- ・ 協定校等からの留学生を支援するため, 7 月に留学生連絡会議を開催して, 困り事等の確認及び対応策の検討を行った. 初めての試みとして, 又松 (ウソン) 大学校からの交換留学生 2 名に対して, のべ 15 時間の「特別日本語指導」を行った.
- ・ 協定校との意見交換や連携強化等のために, 新たな協定書の調印時を除き, 学長, センター長, センター幹事等が, 又松 (ウソン) 大学校, ハサヌディン大学, アデレード大学, トリブバン大学, 雲林科技大学等を訪問した.

2-3-2 国際研究協力

ハサヌディン大学については, 本学教員の訪問が 3 回 (5 月, 9 月, 3 月), 同大学からの教員の受入が 2 回 (11 月, 1 月) あったほか, 同大学若手教員を, 1 月から客員研究員として受け入れており, 国際共同研究の機運が盛り上がっている.

アデレード大学については, 10 月の本学教員の同大学訪問を, 3 月の本学での新たな国際学術イベントの実現へと結び付けることができた. 今後の国際共同研究への発展がおおいに期待できる.



アデレード大学国際学術イベント

ネパールについては, AMDA ネパール支部並びにトリブバン大学との交流が鍵となる. 4 月の訪問団受入に加えて, 両者と連携しながら, 大学院看護学専攻の特別授業を現地で実施 (12 月 / 学生 3 名参加) した際には, 共同研究についても実践並びに協議を深めた.

香港理工大学については, センターの紹介で, 本学教員が 3 回訪問 (5 月, 9 月, 2 月) するとともに, 同大学教員を 1 回受け入れ (1 月) た結果, 複数の国際共同研究の芽が生まれ始めている.

さらに、中国については、これまで交流のあった複数の大学から、客員研究員を、3 カ月間～半年間程度受け入れた。

上記の各取組に対しては、要所において、センターとして可能な支援・協力を行った。

2-3-3 基盤整備

全学の教職員が、理解・認識を共有しながら、各種の取組を効果的かつ総合的に実施できるよう、具体的な行動計画である「国際交流アクションプラン」の策定を進めた。

学内外への PR の強化のため、センターのホームページを 4 月に新設するとともに、1 年を通して、その内容の充実に努めた。

本学が受け入れている留学生は、1 桁であり、その増大が喫緊の課題となっている。このため、本学の PR の強化、入学試験制度の改善、協定校との学生交流のための要領の整備、留学生への効果的支援、教職員の意識改革など、受入拡大に向けて、課題の抽出や国内外の先進事例調査を、年度を通して実施した。

海外における取組の充実強化のため、香港及び豪州（アデレード）に各 1 名の客員教授を配置した。

2-3-4 まとめと課題

新たな取組を幾つものスタートさせるとともに、基盤整備の面でも、多くの前進があった。

そうした中で、ホームページを始め、例えば外国語対応の充実等、PR の方法・内容については、改善の余地が大きい。広報メディア開発センター等の学内関係機関とも連携を密にしながら、積極的に取り組んでいく必要がある。

第3章 学術研究推進センターの活動と成果

3-1 概要

本章では、平成 27 年 10 月に発足した学術研究推進センターについて、設置の経過ならびにその社会的背景について述べる。平成 18 年に大手研究機関における研究費の不正使用が発覚し、調査の結果多くの国立大学で架空請求書による預け金等の事例が確認された。これを受け文部科学省は平成 19 年に「研究機関における公的研究費の管理・監査のガイドライン」を制定し、研究費不正使用防止を呼び掛けた。しかしながら一斉調査を行うと、平成 24 年には 14 研究機関で預け金・プール金の存在が確認された。そこで同省は、平成 26 年に平成 19 年のガイドラインを改訂し、研究費不正使用の撲滅と研究者倫理教育の充実を各研究機関に強く促した。これを受けて本学では平成 27 年度の取組として

- ・コンプライアンス研修の実施
- ・研究倫理教育研修の実施
- ・公的研究費の適正な執行の管理監督
- ・外部業者に対する不正行為に加担しない旨の誓約書の徴収
- ・内部通報制度の有効活用の推進

を挙げ、特に前 2 項の実施にむけた組織づくりを目的として、同年 6 月に学術研究センター準備室が発足した。同準備室においては、学術研究推進センターの 10 月発足にむけての活動計画・規程等の議論がなされた。また、7 月に行われた科学技術振興機構（JST）が主催する研究倫理確立取組や研究倫理教育教材の説明会に準備室長ならびに企画広報班 1 名を派遣し、研鑽とした。このような経過を踏まえ、10 月準備室員 4 名に、コンプライアンス推進責任者として 3 学部長ならびに事務局総務課長を加えた 8 名をもって学術研究推進センターを発足させた。

3-2 学術研究推進と教育活動

3-2-1 概要

前述の経過により、本年10月に教育研究開発機構下における大学教育開発センター、国際交流センターに続く第3のセンターとして発足した。本センターの急務としては、「研究活動における不正行為への対応等に関するガイドライン」（平成26年8月26日文部科学大臣決定）に基づき、文科省科研費新規申請に対し要件とされた学内での研究倫理教育を実施することである。本件については事務局総務課企画広報班と連携し、12月に開催の運びとなった。次節3-2-2において、その詳細を述べる。いまひとつの活動課題として、本学学生（大学院生）に対する研究倫理教育が挙げられる。これについては 3-2-3節にて述べる。

3-2-2 コンプライアンス及び研究倫理研修会

(1) 第1回コンプライアンス及び研究倫理研修会の開催

開催概要

第1回の全学研修会は、「コンプライアンス及び研究倫理研修会」と題して、以下の要領で開催された。その案内として、本研修会は岡山県立大学における研究費の不正使用防止等に関する規程第10条第1項に規定するコンプライアンス教育、及び岡山県立大学の研究活動における不正行為防止等に関する規程第4条第1項に規定する研究倫理教育としての研修会であることが明示され、さらに同会は、研究費の執行に携わる全ての教職員を対象に受講を義務化されたものであることが示された。

開催日時	平成27年12月10日(木曜日), 14時20分～15時50分
開催場所	学部共通棟北8206講義室
挨拶	岡山県立大学学術研究推進センター長 金川明弘教授
講師①	岡山県立大学事務局企画広報班班長 小野和之総括参事
	岡山県立大学における規定改正等の説明
講師②	三宮公認会計士事務所代表 三宮紀彦氏
	コンプライアンス及び研究倫理教育研修 質疑応答

研修会では、金川センター長による挨拶のあと、企画広報班小野班長より、平成27年6月18日に施行された「岡山県立大学における研究費の不正使用防止等に関する規程」及び「岡山県立大学の研究活動における不正行為防止等に関する規程」についての説明があった。また、その具体的な取組として同年7月27日決定の「岡山県立大学における研究費の不正使用防止計画」の説明があった。引き続き、三宮公認会計士事務所代表三宮紀彦氏による研修会が行われた。氏は合同会社SRK総合リスク研究所員という肩書も有し、企業、商工会議所、大学等においてコンプライアンス違反未然防止等のセミナー講師を数多くこなしている。内容は、カラ出張、カラ謝金、カラ発注等の事例の報告とその対策、また論文不正問題として、捏造、改竄、盗用、また二重投稿などの事例解説とその処分等についての説明があった。

開催資料

研修資料は、学内教職員専用ホームページで閲覧可能とし、ビデオ記録も学内教職員に対して貸し出しを行えるようにした。また、このビデオ記録を用いて当日出席できなかった教員・職員対象に翌年1月29日に同じ研修内容を視聴できる機会を設けた。

参加者

平成27年12月10日(木)開催の研修会の参加者は123名で、その内訳は、教員が97名、職員が24名、学生2名であった。また、未受講者を対象として、平成28年1月29日(金)及び平成28年3月23日(水)に追加研修会を開催し、その他に個別対応も実施した。以上による最終的な受講状況を次表にて示す。

平成27年度コンプライアンス及び研究倫理研修会参加状況について				
		受講人数	在籍者数	受講率
保健福祉学部	看護学科	20	21	95%
	栄養学科	18	20	90%
	保健福祉学科	27	29	93%
	計	65	70	93%
情報工学部	情報通信工学科	21	21	100%
	情報システム工学科	21	21	100%
	人間情報工学科	16	16	100%
	計	58	58	100%
デザイン学部	デザイン工学科	15	18	83%
	造形デザイン学科	19	21	90%
	計	34	39	87%
	教員	157	167	94%
	職員 ※	36		
	学生	3		
	合計	196		

※ 嘱託職員, 臨時職員, 特任教授等を含む。

3-2-3 まとめと課題

本年度においては第1回コンプライアンス及び研究倫理研修会の準備と開催に多くの時間と労力を要したが, 教員ならびに職員に対するコンプライアンス及び研究倫理教育に関しては所期の目的を達成したと言えよう。しかしながら学生(大学院生)に対するコンプライアンス及び研究倫理教育は必ずしも十分とはいえない。今回の研修会は学生も参加可能ではあったが, 連絡・周知が不十分であったため, 学生の参加は3名にとどまっている。この件をふまえ

- (1) 新入生オリエンテーションの中で, 全研究科・専攻の新入生を対象に研究倫理教育を実施する。
- (2) 定期的に学内で開催される研究倫理教育研修会への参加を呼び掛ける。
- (3) 大学ホームページに科学技術振興機構(JST)作成の論文不正防止に関するパンフレットなどを掲載する。

といった内容を次年度の課題としたい。

第3部 附属図書館の活動と成果

概要

本学図書館は大学設置基準第38条に示す大学附属図書館として、学部の種類、規模等に応じ、専門書、学術雑誌、視聴覚資料等の教育研究上必要な専門的資料を系統的に備えるべく努力をしてきた。また、グローバル化の中で学生に必要とされる広い視野と教養を涵養すべく、一般教養図書、語学学習推進図書についても各学部教員、また共通教育部教員の視点で選書し、充実を図っている。さらに学術情報の電子化や検索システムの整備を行い、学生、教員、地域に向けたサービスの維持・向上を目指し、積極的な取組を進めている。

1-1 図書館活用の推進

1-1-1 図書館の利用状況

平成27年4月から平成28年3月の期間における図書館の利用状況を以下に示す。蔵書冊数は約20万冊でその内訳として、和書が約8割、洋書が約2割を占め、その他視聴覚資料が約2.4%となっている。入館者数は約10万人で貸出冊数は約2万冊となり、平成25年からほぼ同様の推移となっている。施設等の利用状況として、館内PC、研究閲覧室およびグループ閲覧室の貸し出し件数は平成25年から増加傾向にある。研究閲覧室およびグループ閲覧室は、学生の主体的、能動的な学修を支援する場として設けられているスペースで、近年多くの大学や図書館で設けられているラーニングコモンズに準じたものである。グループ学習等による自発的な学修の意識が定着してきているのかもしれない。当館のエントランス部分に設けたラーニングコモンズの稼働率については未測定であるが、常時学生がグループでの学習を進めている様子が見受けられた。

平成27年度図書館利用状況について

(1) 蔵書冊数

(H27.3.31現在)

分類	和書	洋書	視聴覚	合計
0 総記	12,866	3,133	166	16,165
1 哲学	7,941	1,232	184	9,357
2 歴史	6,263	562	462	7,287
3 社会科学	37,229	5,253	851	43,333
4 自然科学	44,873	13,345	1,419	59,637
5 工学・工業	17,284	5,103	347	22,734
6 産業	2,613	425	49	3,087
7 芸術・スポーツ	19,163	4,327	1,410	24,900
8 語学	4,350	3,277	30	7,657
9 文学	11,409	964	67	12,440
合計	163,991	37,621	4,985	206,597
構成比	79.4%	18.2%	2.4%	100%

(2) 入館者数等

項目	開館日数	入館者数 (人)		貸出冊数 (冊)		貸出人数 (人)		学外者利用 (人)
			1日平均		1日平均		1日平均	
27年度	269	88,196	328	19,022	71	8,637	32	1,929
26年度	269	100,654	374	20,445	76	9,239	34	1,724

(3) 資料受入状況

項目	和書		洋書		計	
	27年度	26年度	27年度	26年度	27年度	26年度
図書	1,900	2,363	238	261	2,138	2,624
雑誌	130	133	24	45	154	178
視聴覚資料	65	80	12	2	77	82

(4) 相互協力

項目		件数	
		27年度	26年度
文献複写	複写提供件数	467	556
	複写取寄件数	1,269	1,185
相互協力	借受冊数	62	35
	貸出冊数	149	263

(5) 施設等の利用

項目	件数	
	27年度	26年度
館内パソコン利用者数	3,539	2,755
ノートパソコン (館内貸出)	7	47
研究閲覧室	1,276	1,553
グループ閲覧室	146	210

1-1-2 図書館ギャラリーの利用状況

図書館では、学生・教職員・院生の貸出冊数の増加、また特集本コーナーや、図書館のギャラリーの貸出しにより、図書館の利用率向上を目指している。図書館ギャラリーは、学生や教員に館内の壁面等の空間を有効活用してもらうことにより図書館利用の増加を図ったもの

で,平成 27 年度はデザイン学部の学生や教員により多く利用された.図書館利用者に安らぎを与えるような展示を意図した.本年度の図書館ギャラリーの利用状況を以下に示す.

	申込者	作品	展示期間	作品紹介
1	文芸部	邂逅(kaikou)	4/6 ~ 5/9	文芸部の作成した冊子を無料配布.
2	デザイン学部 授業担当教員	グラフィックデザイン 演習課題ポスター (2年生)	6/5 ~ 7/30	岡山県の特産品をテーマとするシルクスクリーン印刷によるポスター(グループワーク)
3	デザイン学部学生	静寂の中のざわめき	6/8 ~ 6/15	雨をテーマにした作品で人が通るとゆれて音が鳴る作品
4	デザイン学部学生	紫陽花のランプ	6/16 ~ 6/23	梅雨の時期なので雨を感じる作品を制作しました
5	①デザイン学部 担当教員	①光と影の抽象の構成	11/5 ~ 11/30	①カメラを用いず,印画紙に直接物体を置いて露光し抽象的なシルエット写真をつくる
	②デザイン学部 担当教員	②美味しいテキスト イル		②「美味しい」をテーマに自由に発想を広げて構成し友禅の技法で布に染色する
6	Okayama Bookworms	ビブリオバトルで紹介した本の展示	11/7	今までに行ったビブリオバトル.その時に紹介した本を展示しています.
7	デザイン学部学生	ただよう	12/1 ~ 1/15	雲は触って確かめることはできませんが,見た目から感じられる質感のイメージは多くの人に共通しています.風に流されて徐々に変化する雲を集合体が生み出す独特の質感で表現しました.
8	デザイン学部学生	お弁当アイドル	12/14 ~ 12/18	お弁当アイドルとは,お弁当のお惣菜(しゃげや卵焼きなど)をモチーフにして結成された,架空のアイドルグループです.今回はその中から「しゃげ」と「ブロッコリー」をイメージした衣装を製作しました.
9	デザイン学部学生	贅肉	12/14 ~ 12/18	食べることは,生きていく上で欠かせないものだと思います.食べれることは幸せです.美味しいと幸せな気持ちになります.はるか昔の祖先から,栄養のあるもの,カロリーのあるものは美味いと感じ

				るようにインプットされています。そう考えると今の日本には幸せが溢れています。溢れてこぼれています。
10	デザイン学部学生	箱シリーズ	12/14 ~ 12/18	「どうしても捨てられない物」これには流行や時代が変わってもその人の心の中で生き続ける強い力があると思っています。身近な人から集めたそれをモチーフに柄を作り、布にプリントしました。そして、思いをとどめておけるよう、箱に展開しました。
11	OkayamaBookworms	ビブリオバトル開催	12/16	月1回開催しているビブリオバトル行う
12	デザイン学部 担当教員	句集の装丁	1/7 ~ 2/23	・代表作品1句（自作） ・句集の装丁
13	デザイン学部学生	sight touch smell	1/14 ~ 4/25	視覚, 触覚, 嗅覚で鑑賞するタペストリーを製作した。素材には全て天然素材を使用しており, 羊毛, 綿, 麻を, 緑茶, 紅茶の葉などの天然染料で染めた。自然の力で生まれ, 生きてきた繊維の生命力や繊維そのものの持つ独特の触り心地, 様々な表情, 匂いを感じてもらいたい。
14	デザイン学部 担当教員	・カップ&ソーサー ・土鍋	2/19 ~ 3/24	造形デザイン領域演習Ⅱaの授業で学生が取り組んだ課題作品です。カップ&ソーサーはカフェでの使用を想定して美味しいコーヒーが飲めるようなデザインを目指し, 量産できる技法で制作しました。土鍋は, 既存の形にとらわれない自由な造形と使うことを意識して手捻りで制作しました。今の時期にぴったり学生オリジナルの食器の提案です。

1-1-3 学生を対象とした図書館利用教育

図書館では蔵書検索方法やデータベース活用法を具体的に示す「図書館ガイダンス」への受講を学生に勧め、学生への教育・研究支援を図ってきた。本年度は共通教育講義科目「大学で学ぶ」（対象：全学科1年，必修）での図書館長担当授業において、図書館ガイダンス受講を復習課題として導入した。その他の正課内および正課外でのガイダンス受講状況を以下に示す。

平成 27 年度 図書館ガイダンス実施結果

○新入生ガイダンス

実施日	参加人数	申込内容	学科
4月～6月	44	大学で学ぶ	看護
	44		栄養
	61		保健福祉
	67		通信
	50		システム
	42		人間情報
	45		デザイン工学
	50		造形デザイン
6月5日	19	図書館ガイダンス	認定看護
合計	422		

○文献の探し方

月	参加人数	申込内容	学科
4月10日	1	文献の探し方 (ScienceDirect)	看護学専攻
5月19日	43	文献の探し方 (PubMed・CiNii・医中誌)	フレッシュマンセミナー
10月6日	10	文献の探し方 (PubMed・ScienceDirect)	看護学科
2月8日	5	文献の探し方 (医中誌・CiNii)	栄養学科(個人申込)
合計	59		

○その他

月	参加人数	申込内容	学科
7月28日	12	ガイダンス	南昌大学の学生11名及び 引率教員1名
10月8日	10	ガイダンス	総社東小学校生活科授業 「大学の施設見学」
10月22日	40	ガイダンス	倉敷工業高校ファッション 技術科1年生
1月27日	12	OPAC 検索	看護学科入学前ガイダンス
合計	74		

1-1-4 選書ツアー学生参加状況及び学生希望図書の状態

平成 21 年度より実施している選書ツアーは、学生が学習や研究に役立つ書籍を書店で実際に手に取って選書する企画である。本年度は 15 名の学生が参加し、教養書や専門書を選書した。内訳を以下に示す。また学内で希望図書の申請のあった図書数を以下に示す。

選書ツアー2015（平成27年5月30日実施）

学部	学科	参加人数	新規購入冊数
保健福祉学部	看護	0	0
	栄養	2	15
	保健福祉	2	30
	大学院生	2	12
小計		6	57
情報工学部	情報通信	2	25
	情報システム	1	12
	人間情報(スポーツシステム)	1	12
	大学院生	3	32
小計		7	81
デザイン学部	デザイン工学	1	10
	造形デザイン	1	4
	大学院生	0	0
小計		2	14
合計		15	152

学生希望図書（平成27年度）

学部等	大学院			保健福祉			情報工			デザイン		総計
	保健福祉学	情報系工学	デザイン学	看護	栄養	保福祉	情報通信	情報システム	人間(スポ)	デザイン工学	造形デザイン	
受付数	6	6	3	0	1	2	7	0	4	14	16	59
購入	5	5	3	0	0	2	7	0	4	13	13	52
購入不可	1	1	0	0	1	0	0	0	0	1	3	7
申込者数	4	1	1	0	1	2	2	0	1	3	6	21

1-2 サイエンスダイレクト利用講習

英語文献の利用推進を図るため、平成28年1月29日にサイエンスダイレクト利用講習を実施した。内容は、自分の研究テーマに必要な論文を探すコツ、集めた論文を効率よく管理する方法、無料文献管理ツールの使い方、文献を利用する際の著作権上の注意点等であった。参加した大学院生から、「無料文献管理ツールを十分活用できるようになりたい」や「英語のライティング講習も企画してほしい」などの感想があった。参加人数は26名であった。参加者の内訳を以下に示す。

教 員 8名 (看護 2, 栄養 3, 保健福祉 2, 情報通信 1)

大学院生 6名 (保福 4, 情報 2)

学部生 12名 (保福 9, 情報 3)

1-3 電子ジャーナルの利用

教育・研究推進に必要な英語文献の電子ジャーナルが普及している。以下に本学で利用可能な電子ジャーナルのタイトルおよびその利用状況を示す。今後は教員への英語文献の希望調査を毎年行い、実状に合わせた英語文献の整備を計画している。

平成 27 年度 利用可能な電子ジャーナルタイトル

(平成 28 年 3 月 31 日現在)

	分 野	ダウンロード数
ScienceDirect (908 タイトル)	健康科学・神経科学等	5,286
InfoTrac (153 タイトル)	社会科学・自然科学・人文科学・芸術等	74
タイトル名	分 野	ダウンロード数
The American journal of clinical nutrition	食品科学・栄養学	115
Applied physics letters	物理学一般/応用物理学	125
The British journal of nutrition	食品科学・栄養学	17
Childhood education	教育学	3
ECS journal of solid state science and technology	物性物理学/物理化学・理論化学/電子材料・デバイス	17
Educational administration quarterly	教育行政・学校運営	0
IEEE journal of solid state circuits	情報科学	34
IEEE transactions on computer-aided design of integrated circuits and systems	情報科学	4
IEEE transactions on computers	情報科学	18
Journal of biological chemistry	生化学・分子生物学	1,322
Journal of child and family studies	社会心理学・精神医学/家族・ジェンダー	1
Journal of the electrochemical society	物性物理学/物理化学・理論化学/電子材料・デバイス	16
The Journal of nutrition	食品科学・栄養学	113
Nature neuroscience	神経科学	11
Nursing research	看護学	16

Nursing science quarterly	看護学	22
Proceedings of national academy of sciences	科学技術一般	251
Word & image	言語・言語学	7

1-4 リポジトリ公開登録及び利用状況

現在,日本の機関リポジトリ設置機関数は世界有数の規模にまで広がり,教育研究成果の公開やオープンアクセスの義務化も検討されようとする現状にある.このような中,オープンアクセスへ寄与することは研究者や大学,研究機関として必要とされる条件となりつつある.本学におけるリポジトリ公開登録件数および利用状況を以下に示す.

リポジトリ公開登録件数 1,251件(平成28年3月31日現在)

	公開登録件数	ダウンロード数	閲覧
平成25年度	343件	245件	1,352件
平成26年度	29件	11,608件	6,488件
平成27年度	879件	34,399件	6,286件

1-5 まとめと課題

図書館の利用率の向上を図るために,図書館ガイダンスや個別での申し込みに対して図書館の利用方法や蔵書検索の方法の教示を行ってきた.また選書ツアーの企画と周知により学生の自主的な選書と学修支援に取り組んだ.その他多様な図書館利用の取組として,ギャラリー展示事業を実施した.一方,電子ジャーナルの学習・研究への活用促進を図る目的で,講習会を開催した.またオープンアクセスへの寄与を目的としてリポジトリ公開登録を促進した.今後の課題として,学生や留学生,また学内外の図書館利用を推進するために,図書館ホームページの内容を充実させると共に利用しやすい工夫を行う必要がある.また洋雑誌および電子ジャーナルを利用頻度の観点から見直すために,それらの利用に関するアンケート調査を実施して,ニーズに基づき最適化を図る.また学生の自発的・能動的な学修を促すために,ラウンジ内のラーニングコモンズや,ラーニングコモンズ機能を備えた研究閲覧室・グループ閲覧室の利用促進を図る予定である.

付録 1

A 入試統計

A-1 学士課程

一般入試

単位：人

学部	学科	平成27年度						平成28年度					
		募集人員	志願者数	受験者数	合格者数	入学者数	倍率	募集人員	志願者数	受験者数	合格者数	入学者数	倍率
保健福祉学部	看護学科	28	138	91	33	31	2.8	28	200	117	33	31	3.5
	栄養学科	28	102	100	33	30	3.0	28	152	140	37	28	3.8
	保健福祉学科社会福祉学専攻	28	130	75	34	28	2.2	28	78	41	32	30	1.3
	保健福祉学科子ども学専攻	14	77	44	18	14	2.4	14	59	37	15	15	2.5
	学部計	98	447	310	118	103	2.6	98	489	335	117	104	2.9
情報工学部	情報通信工学科	37	673	320	109	52	2.9	37	578	308	107	45	2.9
	情報システム工学科	37	1,048	508	131	37	3.9	37	775	397	129	48	3.1
	人間情報工学科	27	380	191	52	27	3.7	27	291	154	74	44	2.1
	学部計	101	2,101	1,019	292	116	3.5	101	1,644	859	310	137	2.8
デザイン学部	デザイン工学科	30	181	176	38	35	4.6	30	138	131	35	32	3.7
	造形デザイン学科	38	104	103	41	38	2.5	38	97	92	42	38	2.2
	学部計	68	285	279	79	73	3.5	68	235	223	77	70	2.9
合計		267	2,833	1,608	489	292	3.3	267	2,368	1,417	504	311	2.8

○倍率＝受験者数／合格者数

推薦入試

単位：人

学部	学科	平成27年度						平成28年度					
		募集人員	志願者数	受験者数	合格者数	入学者数	倍率	募集人員	志願者数	受験者数	合格者数	入学者数	倍率
保健福祉学部	看護学科	12	47	47	12	12	3.9	12	41	41	12	12	3.4
	栄養学科	12	34	34	13	13	2.6	12	39	39	12	12	3.3
	保健福祉学科社会福祉学専攻	12	33	32	13	13	2.5	12	32	32	13	13	2.5
	保健福祉学科子ども学専攻	6	23	23	6	6	3.8	6	21	21	7	7	3.0
	学部計	42	137	136	44	44	3.1	42	133	133	44	44	3.0
情報工学部	情報通信工学科	13	28	28	14	14	2.0	13	29	29	13	13	2.2
	情報システム工学科	13	26	26	13	13	2.0	13	19	19	13	13	1.5
	人間情報工学科	13	25	25	13	13	1.9	13	18	18	14	14	1.3
	学部計	39	79	79	40	40	2.0	39	66	66	40	40	1.7
デザイン学部	デザイン工学科	10	19	18	10	10	1.8	10	13	13	10	10	1.3
	造形デザイン学科	12	34	34	12	12	2.8	12	36	36	12	12	3.0
	学部計	22	53	52	22	22	2.4	22	49	49	22	22	2.2
合計		103	269	267	106	106	2.5	103	248	248	106	106	2.3

○倍率＝受験者数／合格者数

第3年次編入学試験

単位：人

学部	学科	平成27年度				平成28年度			
		志願者数	受験者数	合格者数	入学者数	志願者数	受験者数	合格者数	入学者数
保健福祉学部	栄養学科	16	16	1	1	13	13	1	0
デザイン学部	デザイン工学科	3	2	1	0	3	3	1	0
合計		19	18	2	1	16	16	2	0

○募集人員は、いずれも若干名

A-2 大学院課程

博士前期課程・修士課程

単位:人

研究科	専攻	平成27年度						平成28年度					
		募集人員	志願者数	受験者数	合格者数	入学者数	倍率	募集人員	志願者数	受験者数	合格者数	入学者数	倍率
保健福祉学研究科	看護学専攻	7	11	11	10	10	1.1	7	15	15	11	11	1.4
	栄養学専攻	6	8	8	8	7	1.0	6	8	8	8	6	1.0
	保健福祉学専攻	7	6	5	5	5	1.0	7	8	8	8	7	1.0
	研究科計	20	25	24	23	22	1.0	20	31	31	27	24	1.1
情報系工学研究科	システム工学専攻	52	79	78	70	66	1.1	52	56	55	50	46	1.1
デザイン学研究科	デザイン工学専攻	7	3	2	2	1	1.0	7	2	1	1	1	1.0
	造形デザイン学専攻	9	5	5	5	5	1.0	9	6	6	6	6	1.0
	研究科計	16	8	7	7	6	1.0	16	8	7	7	7	1.0
合計		88	112	109	100	94	1.1	88	95	93	84	77	1.1

○倍率=受験者数/合格者数

博士後期課程

単位:人

研究科	専攻	平成27年度						平成28年度					
		募集人員	志願者数	受験者数	合格者数	入学者数	倍率	募集人員	志願者数	受験者数	合格者数	入学者数	倍率
保健福祉学研究科	保健福祉科学専攻	5	7	7	7	7	1.0	5	8	8	6	6	1.3
情報系工学研究科	システム工学専攻	6	3	3	3	3	1.0	6	1	1	1	1	1.0
合計		11	10	10	10	10	1.0	11	9	9	7	7	1.3

○倍率=受験者数/合格者数

B 学生アンケート (学部・大学院)

調査項目：以下の集計表に示す 60 項目

調査時期：平成 27 年 11 月

調査対象：平成 27 年度在学生 1,610 人 (学部 1,440 人・研究科 170 人)

回収率：87.1%

集計方法：学部・大学院別・項目ごとの有効回答の範囲内での単純集計

〔学生生活:大学〕

設問1. あなたの住まいについて教えてください

単位：%

①県内・自宅	②県内・アパートなど	③県外・自宅	④県外・アパートなど	⑤その他
42.8	46.7	3.0	6.7	0.9

設問2. あなたの通学時間について教えてください

①15分未満	②15～30分未満	③30～60分未満	④1時間～2時間未満	⑤2時間以上
29.0	28.6	20.6	20.0	1.8

設問3. 主たる通学手段を教えてください

①徒歩または自転車	②原付又は自動2輪車	③自家用車	④JR吉備線(岡山方面から)	⑤JR吉備線(総社方面から)
34.1	9.4	24.7	21.9	9.9

設問4. あなたは1週間のうち、大体何日大学に通っていますか

①5日以上	②4日	③3日	④2日	⑤1日以下
64.0	18.9	10.4	4.2	2.5

設問5. 生活費を主に何によって支えていますか

①仕送りや家庭の補助	②仕送りや家庭の補助及びアルバイト	③仕送りや家庭の補助及び奨学金	④アルバイト及び奨学金	⑤アルバイト
28.1	33.6	10.2	15.3	12.8

設問6. 授業料減免制度、(独)日本学生支援機構の奨学金について知っていますか

①両方とも知っている	②授業料減免のみ知っている	③奨学金のみ知っている	④両方とも知らない
54.6	4.6	23.0	17.8

設問7. 入学後のアルバイトについて教えてください

①本部棟掲示板で探した	②友人等の紹介で始めた	③情報誌等で探した	④その他	⑤アルバイトの経験が無い
4.2	28.4	41.5	18.7	7.2

設問8. 部・サークルへの加入について教えてください(複数加入の場合、主たる団体を選択)

①部[体育系]	②部[文化系]	③サークル[体育系]	④サークル[文化系]	⑤入っていない
39.3	23.7	7.6	7.8	21.6

設問9. 現在、どのような悩みがありますか(最もそう思うものを1つ選択)

①現在の学業	②進路や就職	③健康や対人関係(含む家庭)	④家庭における経済的事情	⑤ない
24.9	43.7	12.4	5.1	13.9

設問10. 悩みは、誰に相談しますか(最もそう思うものを1つ選択)

①家族・親戚	②学内の友人・先輩	③学生相談室(ほっとルーム)・教職員	④学外の人(SNS関係も含む)	⑤誰もいない
29.1	46.5	2.4	11.3	10.7

設問11. 学生相談室(ほっとルーム)・保健室の場所を知っていますか

①両方とも知っている	②学生相談室(ほっとルーム)のみ知っている	③保健室のみ知っている	④両方とも知らない
61.4	4.2	23.1	11.3

設問12. 学生相談室(ほっとルーム)・保健室を利用した満足度

①満足度 80%以上	②満足度 50～80%未満	③満足度 20～50%未満	④満足度 0～20%未満	⑤利用したことがない
8.2	8.5	4.4	1.7	77.2

設問13. オフィスアワー制度やアドバイザー制度を利用した満足度

①満足度 80%以上	②満足度 50～80%未満	③満足度 20～50%未満	④満足度 0～20%未満	⑤利用したことがない、もしくは知らない
4.3	9.5	7.0	2.7	76.5

設問14. 休講等授業や学内情報に関する情報提供に対する満足度

①満足度 80%以上	②満足度 50～80%未満	③満足度 20～50%未満	④満足度 0～20%未満	⑤わからない
5.8	28.1	32.4	24.0	9.7

設問15. 課外に図書館を利用しての満足度

①満足度 80%以上	②満足度 50～80% 未満	③満足度 20～50%未 満	④満足度 0～20% 未満	⑤利用したことがない
25.6	47.2	16.4	4.2	6.5

設問16. 課外に語学センター(語学推進室)や国際交流センター(英語村等)を利用しての満足度

①満足度 80%以上	②満足度 50～80% 未満	③満足度 20～50%未 満	④満足度 0～20% 未満	⑤利用したことがない
7.7	22.8	17.6	6.5	45.4

設問17. 課外に情報教育センター(PC ルーム)を利用しての満足度

①満足度 80%以上	②満足度 50～80%未 満	③満足度 20～50%未 満	④満足度 0～20%未 満	⑤利用したことがない
13.4	34.8	20.8	7.5	23.5

設問18. 課外に運動施設を利用しての満足度

①満足度 80%以上	②満足度 50～80% 未満	③満足度 20～50%未 満	④満足度 0～20% 未満	⑤利用したことがない
14.7	29.9	14.6	5.3	35.6

設問19. 学内施設で安全面等から配慮の必要を感じるがあれば教えてください(最もそう思うものを1つ選択)

①通路・スロープの状 態や位置・傾斜県内・自 宅	②トイレの位置や形 態・数県内・アパートな ど	③キャンパス内の障 害物や照明等県外・ 自宅	④建物・教室内の障害 物や物品の状態	⑤特に感じていない
12.8	15.1	18.3	10.6	43.2

設問20. 食堂(1F)及び喫茶(2F)を利用頻度を教えてください

①ほぼ毎日	②週に3～4回位	③週に1～2回位	④月に2～3回位	⑤利用したことがない
27.7	16.9	18.5	29.9	7.0

設問21. 食堂(1F)及び喫茶(2F)を利用しての満足度

①満足度 80%以上	②満足度 50～80%未 満	③満足度 20～50%未 満	④満足度 0～20%未 満	⑤利用したことがない
11.0	37.6	27.8	18.1	5.6

設問22. 売店の利用頻度を教えてください

①ほぼ毎日	②週に3～4回位	③週に1～2回位	④月に2～3回位	⑤利用したことがない
21.0	26.0	33.1	17.8	2.0

設問23. 卒業後の進路の第1希望は何ですか(最もそう思うものを1つ選択)

①進学(大学院・編入 学)	②公務員・教員(幼稚園 教諭を含む)	③医療・福祉関係(看護・ 介護関係)	④民間企業	⑤自営(起業を含 む)
17.6	22.9	18.6	38.8	2.1

設問24. 進路に向けた準備・活動をいつ頃から始めようと考えていますか(あるいはいつ頃から始めましたか)

①大学3年生より前	②大学3年生の前期～ 夏休み	③大学3年生の後期	④大学4年生以降	⑤まだ何も考えていな い
15.8	26.4	29.7	15.8	12.4

設問25. 希望する就職地域はどこですか(最もそう思うものを1つ選択)

①岡山県内	②中国・四国地方	③関東あるいは関西 等の大都市圏	④その他(海外を含 む)	⑤未定
34.5	12.8	26.9	7.8	18.0

設問26. 就職情報をどのように得ていますか(最もそう思うものを1つ選択)

①担当教員	②就職資料室・大学求人情報検索シ テム「求人ナビ」・学内キャリアカウンセラー	③学部内掲示板	④就職情報誌・ 情報 Web サイト	⑤その他(友人の口コ ミ等)
10.3	14.9	13.4	40.9	20.5

設問27. 進路について、主に誰に相談していますか(あるいは誰に相談したいですか)

①家族・親戚	②学内の友人・ 在学中の先輩	③OB・OG	④学内キャリアカウンセラー、教員県外・ア パートなど	⑤その他(学外の知 人等)
41.3	28.4	5.9	13.2	11.2

設問28. 本学の就職支援体制に対する満足度

①満足度 80%以上	②満足度 50～80% 未満	③満足度 20～50%未 満	④満足度 0～20% 未満	⑤わからない
4.3	16.5	15.3	12.0	51.9

設問29. 大学への要望や期待について、最も強く思うものはなんですか

① 授業方法、カリキュ ラムの工夫・改革	②実験室・実習室等施設設 備の充実	② 就職支援の 充実	④カウンセリング・相談体制 の充実	⑤その他
36.4	21.7	27.3	3.8	10.9

設問30. 全体として本学での大学生活に満足していますか

①満足度 80%以上	②満足度 50～80% 未満	③満足度 20～50% 未満	④満足度 0～20%未 満	⑤わからない
15.3	51.5	21.9	7.9	3.4

〔学修について:大学〕

設問1. 所属学部等のディプロマポリシー(学位授与の方針)を知っていますか?

単位:%

①知っている(自ら)	②知っている(教員からの指示等で)	③聞いてはいるが内容までは知らない	④聞いたことがない	*
7.8	8.7	25.7	48.0	9.7

設問2. 所属学部等のカリキュラムポリシー(教育編成の方針)を知っていますか?

①知っている(自ら)	②知っている(教員からの指示等で)	③聞いてはいるが内容までは知らない	④聞いたことがない	*
9.3	11.0	34.7	37.7	7.3

設問3. 入学時の履修案内は4月の履修登録時に見ますか?

①見る(毎学年・ほぼ全ての項目)	②見る(毎学年・開講計画等一部)	③見る(たまに)	④見ない(持っている)	⑤見ない(なくした)
43.8	28.7	18.8	6.7	2.0

設問4. 履修登録のガイダンスは参考になりますか?(4月の履修登録オリエンテーション等)

①満足度 80%以上	②満足度 50~80%未満	③満足度 20~50%未満	④満足度 0~20%未満	⑤わからない
25.8	43.5	15.5	6.0	9.2

設問5. 課程における科目の位置づけの理解度は?(履修モデル等)

①満足度 80%以上	②満足度 50~80%未満	③満足度 20~50%未満	④満足度 0~20%未満	⑤わからない
13.9	46.5	22.5	5.6	11.4

設問6. 選択科目の登録は何を参考にしますか?(最も参考にするもの)

①卒業要件単位	②時間割	③授業内容(シラバスなど)	④教員の指導助言	⑤その他(友人・先輩の助言等)
45.3	19.2	23.8	2.1	9.6

設問7. 登録にあたってのWebシステムの満足度は?(登録手順・方法や使い勝手について)

①満足度 80%以上	②満足度 50~80%未満	③満足度 20~50%未満	④満足度 0~20%未満	⑤わからない
20.4	47.0	20.3	8.9	3.3

設問8. シラバスの活用頻度は?

①ほぼ全ての履修科目をほぼ毎回	②ほぼ全ての履修科目を登録時のみ	③指示された科目のみ指示された回に	④任意に、たまに見る	⑤ほとんど見ない
6.6	30.1	15.2	30.2	17.9

設問9. シラバスでよく見る項目は?(最も参照するものを1つ選択)

①概要	②授業科目の到達目標	③授業スケジュール	④評価	⑤自主学習ガイド
26.2	9.6	25.0	37.5	1.6

設問10. 履修におけるシラバスの満足度は?(役立っているかどうかについて)

①よく役に立っている	②まあまあ役に立っている	③普通	④役に立っていない	⑤わからない
7.9	37.9	34.6	10.3	9.3

設問11. 共通教育(全学教育)の満足度は?

①満足度 80%以上	②満足度 50~80%未満	③満足度 20~50%未満	④満足度 0~20%未満	⑤わからない
8.9	47.1	28.7	11.4	3.9

設問12. 共通教育(全学教育)で関心を持つ科目群は?(比較して最もそう思うものを1つ選択)

①教養(自然科学系)	②教養(人文・社会科学系)	③健康科学系(含むスポーツ)	④語学・国際系	⑤社会連携系(地域・キャリア関係)
20.9	28.2	23.6	16.0	11.2

設問13. 共通教育(全学教育)で強化して欲しい科目群は?(最もそう思うものを1つ選択)

①教養(自然科学系)	②教養(人文・社会科学系)	③健康科学系(含むスポーツ)	④語学・国際系	⑤社会連携系(地域・キャリア関係)
16.7	22.5	18.9	25.1	16.7

設問14. 共通教育(全学教育)で強化して欲しい点は?(最もそう思うものを1つ選択)

①授業内容の充実	②授業方法の改善	③自習ガイダンスの充実	④履修上の相談等の充実	⑤施設・設備の利便性
44.1	31.1	6.6	6.6	11.7

設問15. 専門教育(学部教育)の満足度は?

①満足度 80%以上	②満足度 50~80%未満	③満足度 20~50%未満	④満足度 0~20%未満	⑤わからない
25.1	52.4	15.0	5.4	2.1

設問16. 専門教育(学部教育)で強化して欲しい点は?(最もそう思うものを1つ選択)

①授業内容の充実	②授業方法の改善	③自習ガイダンスの充実	④履修上の相談等の充実	⑤施設・設備の利便性
36.2	33.8	9.1	6.8	14.2

設問17. 一般的に授業内容で充実して欲しい点は?(最もそう思うものを1つ選択)

①基礎的な内容の充実	②基礎・応用の連携的な内容の充実	③実験・実習的な内容の充実	④キャリア形成的な内容の充実	⑤今のままで良い
34.4	25.2	16.1	12.0	12.3

設問18. 一般的に授業方法で改善して欲しい点は?(最もそう思うものを1つ選択)

①講義方法や理解支援上の工夫	②資料提示のメディアや扱い方	③グループ学習などの工夫	④適切な自習内容・方法の指示	⑤教員のコミュニケーション方法
48.0	16.5	11.7	13.2	10.5

設問19. 1週間あたり、あなたの自習時間の合計は?(全授業期間で平均してのおよその時間数)

①30~40時間	②20~30時間未満	③10~20時間未満	④5~10時間未満	⑤0~5時間未満
6.6	12.3	24.5	26.0	30.5

設問20. あなたの主な自習場所は?(最もそう思うものを1つ選択)

①図書館(ラーニングコモンズ含む)	②語学センターやPC室など	③学部棟の講義室や実験・実習室	④その他の学内施設	⑤学外(自宅等)
22.7	6.6	18.3	7.6	44.8

設問21. 自習環境で改善して欲しい点は?(最もそう思うものを1つ選択)

①施設自体の拡充(新たな施設など)	②施設利用可能時間帯の工夫	③設備・機器の充実	④チューターなど人的支援	⑤今のままで良い
20.6	34.1	20.9	3.1	21.3

設問22. 一般的に履修相談で改善して欲しい点は?(最もそう思うものを1つ選択)

①質問への回答内容	②質問への回答方法の工夫	③質問時間の確保	④質問時のコミュニケーション	⑤今のままで良い
13.0	11.4	19.3	8.7	47.5

設問23. 一般的に成績評価で感じることは?(単位認定等で最もそう思うものを1つ選択)

①基準に照らして大体納得している	②結果を教員に質問し納得している	③質問しても納得いかなことがある	④単位が取れさえすればよい	⑤ほとんど気にしていない
33.7	5.9	11.9	28.2	20.2

設問24. 一般的にもっと評価して欲しい点は?(単位認定等で最もそう思うものを1つ選択)

①試験・課題等の結果の評価	②授業での取組プロセスの評価	③授業での自身の成長評価	④出欠等の評価	⑤今のままで良い
16.0	18.5	14.4	23.1	28.0

設問25. 留学意欲の有無及び地域について教えてください。(最もそう思うものを1つ選択)

①ある(アジア地域)	②ある(欧米地域)	③ある(オセアニア)	④ある(中南米その他)	⑤ない
4.5	27.8	9.1	2.5	56.0

設問26. 留学するとすれば、期間・内容は?(最もそう思うものを1つ選択)

①1年あるいはそれ以上(語学留学)	②1年あるいはそれ以上(専門留学)	③短期留学(語学研修)	④短期留学(専門スタディツアー)	⑤わからない
11.2	9.5	27.7	16.9	34.8

設問27. ボランティア活動について教えてください。(学内外を問わない)

①団体に所属して活動している	②団体所属だが活動していない	③任意にプログラムを選び参加している	④活動したことはないが情報が欲しい	⑤活動するつもりはない
7.9	5.4	20.9	30.8	35.0

設問28. インターンシップ等地域や企業等での活動について教えてください

①授業・実習で参加経験あり(公的団体)	②授業・実習で参加経験あり(民間企業)	③就活関係等で授業外参加経験あり	④経験はないが参加したい	⑤参加したくない
8.8	9.7	11.3	54.2	16.0

設問29. 入学以来、正課・課外の学習全般を通じての自身の成長評価(成長度)は?

①大きく成長している	②少しは成長している	③変化なし	④入学時より劣っている	⑤わからない
10.8	56.6	12.1	10.5	10.0

設問30. 学習全般で今後成長させていきたい点は?(最もそう思うものを1つ選択)

①専門教育を通じたキャリア形成	②教養等を身に付けての人間力形成	③地域学習等での社会人基礎力の形成	④グローバルコミュニケーション力	⑤わからない
30.9	29.0	14.4	18.2	7.5

*は選択項目なし

[学生生活:大学院]

設問1. あなたの住まいについて教えてください

単位: %

①県内・自宅	②県内・アパートなど	③県外・自宅	④県外・アパートなど	⑤その他
44.1	48.2	2.4	5.3	0.0

設問2. あなたの通学時間について教えてください

①15分未満	②15～30分未満	③30～60分未満	④1時間～2時間未満	⑤2時間以上
31.2	24.1	24.1	20.0	0.6

設問3. 主たる通学手段を教えてください

①徒歩または自転車	②原付又は自動2輪車	③自家用車	④JR吉備線(岡山方面から)	⑤JR吉備線(総社方面から)
26.5	11.2	47.6	11.8	2.9

設問4. あなたは1週間のうち、大体何日大学に通っていますか

①5日以上	②4日	③3日	④2日	⑤1日以下
58.2	16.5	7.1	9.4	8.8

設問5. 生活費を主に何によって支えていますか

①仕送りや家庭の補助	②仕送りや家庭の補助及びアルバイト	③仕送りや家庭の補助及び奨学金	④アルバイト及び奨学金	⑤アルバイト
30.6	31.2	16.5	11.8	10.0

設問6. 授業料減免制度、(独)日本学生支援機構の奨学金について知っていますか

①両方とも知っている	②授業料減免のみ知っている	③奨学金のみ知っている	④両方とも知らない	*
77.1	1.8	11.8	8.2	1.2

設問7. 入学後のアルバイトについて教えてください

①本部棟掲示板で探した	②友人等の紹介で始めた	③情報誌等で探した	④その他	⑤アルバイトの経験が無い
4.7	20.0	22.9	39.4	12.9

設問8. 部・サークルへの加入について教えてください(複数加入の場合、主たる団体を選択)

①部[体育系]	②部[文化系]	③サークル[体育系]	④サークル[文化系]	⑤入っていない
17.6	10.6	4.7	4.7	62.4

設問9. 現在、どのような悩みがありますか(最も思うものを1つ選択)

①現在の学業	②進路や就職	③健康や対人関係(含む家庭)	④家庭における経済的事情	⑤ない
31.8	37.1	7.6	5.9	17.6

設問10. 悩みは、誰に相談しますか(最も思うものを1つ選択)

①家族・親戚	②学内の友人・先輩	③学生相談室(ほっとルーム)・教職員	④学外の人(SNS関係も含む)	⑤誰もいない
27.6	35.9	5.3	14.7	16.5

設問11. 学生相談室(ほっとルーム)・保健室の場所を知っていますか

①両方とも知っている	②学生相談室(ほっとルーム)のみ知っている	③保健室のみ知っている	④両方とも知らない	*
64.1	1.8	15.3	11.8	7.1

設問12. 学生相談室(ほっとルーム)・保健室を利用した満足度

①満足度 80%以上	②満足度 50～80%未満	③満足度 20～50%未満	④満足度 0～20%未満	⑤利用したことがない
7.6	10.0	2.9	0.6	78.8

設問13. オフィスアワー制度やアドバイザー制度を利用した満足度

①満足度 80%以上	②満足度 50～80%未満	③満足度 20～50%未満	④満足度 0～20%未満	⑤利用したことがない、もしくは知らない
4.7	4.1	2.4	1.2	87.6

設問14. 休講等授業や学内情報に関する情報提供に対する満足度

①満足度 80%以上	②満足度 50～80%未満	③満足度 20～50%未満	④満足度 0～20%未満	⑤わからない
11.2	21.2	23.5	17.1	27.1

設問15. 課外に図書館を利用した満足度

①満足度 80%以上	②満足度 50～80%未満	③満足度 20～50%未満	④満足度 0～20%未満	⑤利用したことがない
27.6	41.8	12.4	2.9	15.3

設問16. 課外に語学センター(語学推進室)や国際交流センター(英語村等)を利用した満足度

①満足度 80%以上	②満足度 50～80%未満	③満足度 20～50%未満	④満足度 0～20%未満	⑤利用したことがない
6.5	11.2	6.5	5.3	70.6

設問17. 課外に情報教育センター(PC ルーム)を利用しての満足度

①満足度 80%以上	②満足度 50~80%未 満	③満足度 20~50% 未満	④満足度 0~20%未 満	⑤利用したことがない
8.8	18.2	10.0	5.3	57.6

設問18. 課外に運動施設を利用しての満足度

①満足度 80%以上	②満足度 50~80%未 満	③満足度 20~50% 未満	④満足度 0~20%未 満	⑤利用したことがない
16.5	22.9	8.2	4.7	47.6

設問19. 学内施設で安全面等から配慮の必要を感じる事があれば教えてください(最もそう思うものを1つ選択)

①通路・スロープの状 態や位置・傾斜県内・ 自宅	②トイレの位置や形 態・数県内・アパートな ど	③キャンパス内の障 害物や照明等県外・ 自宅	④建物・教室内の障 害物や物品の状態	⑤特に感じていない
10.6	15.3	18.2	11.8	44.1

設問20. 食堂(1F)及び喫茶(2F)を利用頻度を教えてください

①ほぼ毎日	②週に3~4回位	③週に1~2回位	④月に2~3回位	⑤利用したことがない
12.4	15.9	13.5	37.6	20.6

設問21. 食堂(1F)及び喫茶(2F)を利用しての満足度

①満足度 80%以上	②満足度 50~80%未 満	③満足度 20~50% 未満	④満足度 0~20%未 満	⑤利用したことがない
9.4	21.2	27.1	24.7	17.6

設問22. 売店の利用頻度を教えてください

①ほぼ毎日	②週に3~4回位	③週に1~2回位	④月に2~3回位	⑤利用したことがない
20.0	20.0	27.1	22.9	10.0

設問23. 卒業後の進路の第1希望は何ですか(最もそう思うものを1つ選択)

①進学(大学院・編 入学)	②公務員・教員(幼 稚園 教諭を含む)	③医療・福祉関係(看護・介護 関係)	④民間企業	⑤自営(起業を含 む)
2.9	24.1	10.0	60.0	2.9

設問24. 進路に向けた準備・活動をいつ頃から始めようと考えていますか(あるいはいつ頃から始めましたか)

①大学3年生より前	②大学3年生の前期 ~夏休み	③大学3年生の後期	④大学4年生以降	⑤まだ何も考えていな い
12.4	10.0	42.9	20.6	8.2

設問25. 希望する就職地域はどこですか(最もそう思うものを1つ選択)

①岡山県内	②中国・四国地方	③関東あるいは関西 等の大都市圏	④その他(海外を含 む)	⑤未定
35.3	13.5	26.5	11.2	13.5

設問26. 就職情報をどのように得ていますか(最もそう思うものを1つ選択)

①担当教員	②就職資料室・大学求人 情報検索システム「求人ナ ビ」・学内キャリアカウンセー	③学部内掲示板	④就職情報誌・ 情報 Web サイト	⑤その他(友人の口 コミ等)
13.5	14.7	7.1	51.2	13.5

設問27. 進路について、主に誰に相談していますか(あるいは誰に相談したいですか)

①家族・親戚	②学内の友人・ 在学中の先輩	③OB・OG	④学内キャリアカウンセー、教員県外・ア パートなど	⑤その他(学外の知 人等)
27.1	27.1	8.2	17.1	20.6

設問28. 本学の就職支援体制に対する満足度

①満足度 80%以上	③ 満足度 50~80% ④ 未満	③満足度 20~50% 未満	⑤ 満足度 0~20% ⑥ 未満	⑤わからない
4.1	17.6	21.8	17.1	39.4

設問29. 大学への要望や期待について、最も強く思うものはなんですか

①授業方法、カリキュ ラムの 工夫・改革	②実験室・実習室等施設設備 の充実	③就職支援の充 実	④カウンセリング・相談体制 の充実	⑤その他
22.9	31.8	24.7	1.8	18.8

設問30. 全体として本学での大学生生活に満足していますか

①満足度 80%以上	②満足度 50~80% 未満	③満足度 20~50% 未満	④満足度 0~20% 未満	⑤わからない
19.4	49.4	20.0	6.5	4.7

*は選択項目なし

[学修について:大学院]

設問1. 所属研究科のディプロマポリシー(学位授与の方針)を知っていますか？

単位: %

①知っている(自ら)	②知っている(教員からの指示等で)	③聞いてはいるが内容までは知らない	④聞いたことがない	*
18.8	15.9	27.6	29.4	8.2

設問2. 所属研究科等のカリキュラムポリシー(教育編成の方針)を知っていますか？

①知っている(自ら)	②知っている(教員からの指示等で)	③聞いてはいるが内容までは知らない	④聞いたことがない	*
21.2	11.2	32.4	28.8	6.5

設問3. 入学時の履修案内は4月の履修登録時に見ますか？

①見る(毎学年・ほぼ全ての項目)	②見る(毎学年・開講計画等一部)	③見る(たまに)	④見ない(持っている)	⑤見ない(なくした)
38.8	33.5	18.8	8.2	0.6

設問4. 履修登録のガイダンスは参考になりますか？(4月の履修登録オリエンテーション等)

①満足度 80%以上	②満足度 50~80%未満	③満足度 20~50%未満	④満足度 0~20%未満	⑤わからない
20.6	38.2	12.4	8.8	20.0

設問5. 課程における科目の位置づけの理解度は？(履修モデル等)

①満足度 80%以上	②満足度 50~80%未満	③満足度 20~50%未満	④満足度 0~20%未満	⑤わからない
16.5	44.1	14.1	6.5	18.8

設問6. 選択科目の登録は何を参考にしますか？(最も参考にするもの)

①卒業要件単位	②時間割	③授業内容(シラバスなど)	④教員の指導助言	⑤その他(友人・先輩の助言等)
28.2	18.8	30.6	10.0	12.4

設問7. 登録にあたってのWebシステムの満足度は？(登録手順・方法や使い勝手について)

①満足度 80%以上	②満足度 50~80%未満	③満足度 20~50%未満	④満足度 0~20%未満	⑤わからない
32.4	38.8	14.1	10.0	4.7

設問8. シラバスの活用頻度は？

①ほぼ全ての履修科目をほぼ毎回	②ほぼ全ての履修科目を登録時のみ	③指示された科目のみ指示された回に	④任意に、たまに見る	⑤ほとんど見ない
4.7	35.3	8.8	28.2	22.9

設問9. シラバスでよく見る項目は？(最も参照するものを1つ選択)

①概要	②授業科目の到達目標	③授業スケジュール	④評価	⑤自主学习ガイド
40.6	10.0	32.9	16.5	0.0

設問10. 履修におけるシラバスの満足度は？(役立っているかどうかについて)

①よく役に立っている	②まあまあ役に立っている	③普通	④役に立っていない	⑤わからない
9.4	35.3	32.4	10.6	12.4

設問11. 研究科授業科目履修の満足度は？

①満足度 80%以上	②満足度 50~80%未満	③満足度 20~50%未満	④満足度 0~20%未満	⑤わからない
28.8	45.9	12.9	5.3	7.1

設問12. 研究科授業科目で強化して欲しい点は？(最もそう思うものを1つ選択)

①授業内容・方法の充実・改善	②自習ガイダンスの充実	③履修上の相談等の充実	④施設・設備の利便性	⑤今のままで良い
31.8	10.6	7.6	12.4	37.6

設問13. 一般的に授業内容で充実して欲しい点は？(最もそう思うものを1つ選択)

①基礎的な内容の充実	②基礎・応用の連携的な内容の充実	③実験・実習的な内容の充実	④キャリア形成的な内容の充実	⑤今のままで良い
18.8	21.2	15.3	10.0	34.7

設問14. 一般的に授業方法で改善して欲しい点は？(最もそう思うものを1つ選択)

①講義方法や理解支援上の工夫	②資料提示のメディアや扱い方	③グループ学習・自習などの工夫の支持	④教員とのコミュニケーション方法	⑤今のままで良い
22.9	10.6	7.6	12.4	46.5

設問15. 指導教員による研究指導の満足度は？

①満足度 80%以上	②満足度 50~80%未満	③満足度 20~50%未満	④満足度 0~20%未満	⑤わからない
57.6	30.0	7.1	3.5	1.8

設問16. 研究指導で強化して欲しい点は？(最もそう思うものを1つ選択)

①論文指導・相談体制の充実	②実験制作指導・相談体制の充実	③研究発表等学外活動支援の充実	④専門分野外との横断的研究の充実	⑤今のままで良い
16.5	19.4	10.0	6.5	47.6

設問17. 研究上の悩みは？(最もそう思うものを1つ選択)

①研究テーマ・計画に関すること	②論文・実験・制作等に関すること	③研究時間・資金等の確保に関すること	④教員・友人等とのコミュニケーション	⑤とくにない
27.6	40.0	10.0	6.5	15.9

設問18. 研究科教育全般の満足度は？

①満足度 80%以上	②満足度 50~80%未満	③満足度 20~50%未満	④満足度 0~20%未満	⑤わからない
37.6	44.7	10.6	2.4	4.7

設問19. 1週間あたり、あなたの自習時間の合計は？(全授業期間で平均してのおよその時間数)

①30~40 時間	②20~30 時間未満	③10~20 時間未満	④5~10 時間未満	⑤0~5 時間未満
9.4	25.9	28.8	17.6	18.2

設問20. あなたの主な自習場所は？(最もそう思うものを1つ選択)

①図書館(ラーニングコモンズ含む)	②語学センターやPC室など	③学部棟の講義室や実験・実習室	④その他の学内施設	⑤学外(自宅等)
5.3	1.8	30.0	24.1	38.8

設問21. 自習環境で改善して欲しい点は？(最もそう思うものを1つ選択)

①施設自体の拡充(新たな施設など)	②施設利用可能時間帯の工夫	③設備・機器の充実	④チューターなど人的支援	⑤今のままで良い
14.1	17.6	21.8	5.3	41.2

設問22. 一般的に履修相談で改善して欲しい点は？(最もそう思うものを1つ選択)

①質問への回答内容	②質問への回答方法の工夫	③質問時間の確保	④質問時のコミュニケーション	⑤今のままで良い
5.9	4.7	6.5	6.5	76.5

設問23. 一般的に成績評価で感じることは？(単位認定等で最もそう思うものを1つ選択)

①基準に照らして大体納得している	②結果を教員に質問し納得している	③質問しても納得いかなかったことがある	④単位が取れさえすればよい	⑤ほとんど気にしていない
34.7	4.1	8.2	20.0	32.9

設問24. 一般的にもっと評価して欲しい点は？(単位認定等で最もそう思うものを1つ選択)

①試験・課題等の結果の評価	②授業での取組プロセスの評価	③授業での自身の成長評価	④出欠等の評価	⑤今のままで良い
8.8	21.2	7.6	6.5	55.9

設問25. 留学意欲の有無及び地域について教えてください。(最もそう思うものを1つ選択)

①ある(アジア地域)	②ある(欧米地域)	③ある(オセアニア)	④ある(中南米その他)	⑤ない
2.9	25.3	4.7	1.8	65.3

設問26. 留学するとすれば、期間・内容は？(最もそう思うものを1つ選択)

①1年あるいはそれ以上(語学留学)	②1年あるいはそれ以上(専門留学)	③短期留学(語学研修)	④短期留学(専門スタディツアー)	⑤わからない
7.1	24.7	18.8	11.2	38.2

設問27. ボランティア活動について教えてください。(学内外を問わない)

①団体に所属して活動している	②団体所属だが活動していない	③任意にプログラムを選び参加している	④活動したことはないが情報が欲しい	⑤活動するつもりはない
5.9	3.5	11.8	28.2	50.6

設問28. インターンシップ等地域や企業等での活動について教えてください

①授業・実習で参加経験あり(公的団体)	②授業・実習で参加経験あり(民間企業)	③就活関係等で授業外参加経験あり	④経験はないが参加したい	⑤参加したくない
6.5	12.9	15.9	38.2	26.5

設問29. 入学以来、正課・課外の学習全般を通じての自身の成長評価(成長度)は？

①大きく成長している	②少しは成長している	③変化なし	④入学時より劣っている	⑤わからない
15.9	62.9	7.6	5.3	8.2

設問30. 学習全般で今後成長させていきたい点は？(最もそう思うものを1つ選択)

①専門教育を通じたキャリア形成	②教養等を身に付けての人間力形成	③地域学習等での社会人基礎力の形成	④グローバルコミュニケーション力	⑤わからない
35.3	26.5	10.6	20.0	7.6

*は選択項目なし

C 卒業時アンケートの詳細

調査項目：以下の集計表に示す 21 項目

調査時期：平成 27 年 3 月 24 日

調査対象：平成 26 年度卒業生（393 人）

回収率：96.7%（保健福祉学部 140 人，情報工学部 151 人，デザイン学部 89 人）

集計方法：学部別・項目ごとの有効回答の範囲内での単純集計

問 1. あなたの入学年は、

- ① 平成 25 年，② 平成 24 年，③ 平成 23 年，④ 平成 22 年，⑤ 平成 21 年以前

(単位：人)

学 部	回答①	回答②	回答③	回答④	回答⑤	未回答
保健福祉学部	1	1	129	5	0	4
情報工学部	1	2	126	14	3	5
デザイン学部	2	2	77	5	1	2
全 体	4	5	332	24	4	11

問 2. 本学に合格した入学試験の種別は、

- ① 前・中・後期日程入試，② 推薦入試，③ 編入学，④ 再入学，⑤ 私費外国人留学生・帰国子女特別選抜・社会人特別選抜

(単位：人)

学 部	回答①	回答②	回答③	回答④	回答⑤	未回答
保健福祉学部	96	40	2	0	1	1
情報工学部	115	35	0	1	0	0
デザイン学部	63	19	5	1	1	0
全 体	274	94	7	2	2	1

問 3. 卒業後の進路は、

- ① 就職（専攻と関連する職業），② 就職（専攻と関連しない職業），③ 進学（大学院・編入），④ 進学（再入学・専攻の変更），⑤ 未定・その他

(単位：人)

学 部	回答①	回答②	回答③	回答④	回答⑤	未回答
保健福祉学部	112	8	13	4	3	0
情報工学部	41	33	62	10	4	1
デザイン学部	51	11	8	2	16	1
全 体	204	52	83	16	23	2

問 4～21 については、次ページに一覧を示す（回答は 100 点換算で表示している）。

平成26年度「卒業時アンケート」の集計	看護学科		栄養学科		保健福祉学科		情報通信工学		情報システム		ム工学科		スポーツシステム		デザイン工学科		造形デザイン学		保健福祉学部		情報工学部		デザイン学部		全体		備考(前年度全 体)							
	対象者数		45		42		60		53		56		44		40		53		147		153		93		393		349							
	回答者数		40		42		58		52		56		43		38		51		140		151		89		380		336							
	回収率(%)		88.9		100.0		96.7		98.1		100.0		97.7		95.0		96.2		95.2		98.7		95.7		96.7		96.3							
【教養的成長】 次の全学教育科目群は、あなたの成長にどの程度意義がありましたか																																		
「コミュニケーション(語学教育)」系は		70.9	67.6	63.7	62.1	69.4	60.9	60.9	60.9	60.9	60.9	60.9	60.9	60.9	60.9	60.9	60.9	60.9	60.9	60.9	60.9	60.9	60.9	60.9	60.9	60.9	60.9	60.9	60.9	60.9	60.9			
「人間と文化の理解」系は		67.2	66.4	65.0	55.3	62.9	60.9	60.9	60.9	60.9	60.9	60.9	60.9	60.9	60.9	60.9	60.9	60.9	60.9	60.9	60.9	60.9	60.9	60.9	60.9	60.9	60.9	60.9	60.9	60.9	60.9	60.9		
「現代社会に生きる」系は		66.0	66.4	63.7	52.4	63.1	60.3	62.9	56.8	65.2	58.6	59.4	61.2	64.4	63.6	66.6	65.2	61.1	66.6	65.2	61.1	66.6	65.2	61.1	66.6	65.2	61.1	66.6	65.2	61.1	66.6	65.2		
「科学技術と環境」系は		62.9	68.8	59.5	57.6	65.5	64.3	57.7	53.4	63.2	62.5	55.2	61.1	63.6	66.6	65.2	61.1	66.6	65.2	61.1	66.6	65.2	61.1	66.6	65.2	61.1	66.6	65.2	61.1	66.6	65.2	61.1		
「健康の維持・増進(体育を含む)」系は		73.4	72.3	70.1	59.2	63.1	71.2	63.5	54.9	71.7	64.1	58.6	65.6	66.6	65.2	61.1	66.6	65.2	61.1	66.6	65.2	61.1	66.6	65.2	61.1	66.6	65.2	61.1	66.6	65.2	61.1	66.6		
教育的成長の平均		68.1	68.3	64.4	57.4	64.9	63.6	62.1	56.9	66.6	61.9	59.2	62.9	65.2	61.1	66.6	65.2	61.1	66.6	65.2	61.1	66.6	65.2	61.1	66.6	65.2	61.1	66.6	65.2	61.1	66.6	65.2		
【専門的成長】 次の教育科目群(主に学部教育に関するものは、あなたの成長にどの程度意義がありましたか																																		
全学教育科目群「学部教育への準備」系は		69.7	72.9	65.9	66.2	70.4	68.9	72.0	69.4	69.1	68.5	70.5	69.2	68.9	69.2	68.9	69.1	68.5	69.4	69.1	68.5	69.4	69.1	68.5	70.5	69.2	68.9	69.2	68.9	69.1	68.5	69.4	69.2	
学部教育科目の講義は		79.6	81.1	77.4	69.5	76.1	66.6	81.8	76.2	79.1	71.2	78.6	75.8	77.5	76.2	79.1	71.2	78.6	75.8	76.2	79.1	71.2	78.6	75.8	77.5	76.2	79.1	71.2	78.6	75.8	76.2	79.1	71.2	
実験・実習・演習は		90.1	88.2	88.1	81.9	83.8	79.3	88.9	84.0	88.7	81.9	86.1	85.4	87.2	88.2	88.1	88.9	84.0	88.7	81.9	86.1	85.4	87.2	88.2	88.1	88.9	84.0	88.7	81.9	86.1	85.4	87.2	88.2	
卒業研究は		85.2	84.7	87.2	81.9	82.8	85.6	84.4	86.1	85.9	83.3	85.4	84.7	85.2	84.7	87.2	81.9	82.8	85.6	84.4	86.1	85.9	83.3	85.4	84.7	85.2	84.7	87.2	81.9	82.8	85.6	84.4	86.1	
専門的成長の平均		81.2	81.7	79.7	75.0	78.2	75.0	81.7	79.0	80.7	76.2	80.2	78.7	79.5	81.2	81.7	79.7	75.0	78.2	75.0	81.7	79.0	80.7	76.2	80.2	78.7	79.5	81.2	81.7	79.7	75.0	78.2	75.0	
【総合的成長】 あなたが本学在学中に身につけた能力について尋ねます																																		
社会の一員として生きる力は		77.1	77.0	71.4	60.5	62.2	65.5	72.0	62.6	74.7	62.5	66.6	68.0	69.8	77.1	77.0	71.4	60.5	62.2	65.5	72.0	62.6	74.7	62.5	66.6	68.0	69.8	77.1	77.0	71.4	60.5	62.2	65.5	
基礎学力は		74.6	76.4	68.0	60.0	61.1	59.7	62.9	56.8	72.4	60.3	59.4	64.5	65.9	74.6	76.4	68.0	60.0	61.1	59.7	62.9	56.8	72.4	60.3	59.4	64.5	65.9	74.6	76.4	68.0	60.0	61.1	59.7	62.9
専門的な知識と技術の広がり		79.0	78.8	76.1	68.5	71.3	65.5	81.8	74.3	77.7	68.7	77.5	74.1	76.3	79.0	78.8	76.1	68.5	71.3	65.5	81.8	74.3	77.7	68.7	77.5	74.1	76.3	79.0	78.8	76.1	68.5	71.3	65.5	81.8
創造的に考える力は		73.4	71.1	69.7	63.8	69.1	63.7	79.2	70.4	71.2	65.7	74.1	69.7	71.1	73.4	71.1	69.7	63.8	69.1	63.7	79.2	70.4	71.2	65.7	74.1	69.7	71.1	73.4	71.1	69.7	63.8	69.1	63.7	79.2
自らをみががき発展させる力は		74.0	74.1	68.0	65.3	68.5	68.8	72.6	65.5	71.5	67.4	68.6	69.2	70.1	74.0	74.1	68.0	65.3	68.5	68.8	72.6	65.5	71.5	67.4	68.6	69.2	70.1	74.0	74.1	68.0	65.3	68.5	68.8	72.6
コミュニケーションの力は		78.3	77.6	72.3	66.7	67.7	72.4	75.3	67.0	75.6	68.7	70.5	71.7	79.3	78.3	77.6	72.3	66.7	67.7	72.4	75.3	67.0	75.6	68.7	70.5	71.7	79.3	78.3	77.6	72.3	66.7	67.7	72.4	75.3
ソーシャルスキル・ビジネスマナーは		69.7	72.9	66.3	55.3	59.3	62.6	60.3	54.4	69.2	58.9	56.9	62.1	62.1	69.7	72.9	66.3	55.3	59.3	62.6	60.3	54.4	69.2	58.9	56.9	62.1	62.1	69.7	72.9	66.3	55.3	59.3	62.6	60.3
職業人(プロ)となる意識は		77.7	78.2	75.7	53.8	58.6	61.4	68.7	66.5	77.0	57.8	67.5	67.2	68.1	77.7	78.2	75.7	53.8	58.6	61.4	68.7	66.5	77.0	57.8	67.5	67.2	68.1	77.7	78.2	75.7	53.8	58.6	61.4	68.7
総合的成長の平均		75.5	75.7	71.0	61.6	64.6	64.9	71.5	64.6	73.8	63.9	67.6	68.3	70.3	75.5	75.7	71.0	61.6	64.6	64.9	71.5	64.6	73.8	63.9	67.6	68.3	70.3	75.5	75.7	71.0	61.6	64.6	64.9	71.5
【全般的満足】 全般的に本学の教育は満足でしたか																																		
全般的に本学の教育は満足でしたか		81.6	80.0	76.1	62.4	70.8	70.1	75.3	65.5	78.8	67.7	69.7	72.2	74.4	81.6	80.0	76.1	62.4	70.8	70.1	75.3	65.5	78.8	67.7	69.7	72.2	74.4	81.6	80.0	76.1	62.4	70.8	70.1	75.3
注) アンケートの集計結果は、5段階評価の1(否定)を1、5(肯定)を100と換算した値を示す。																																		

D 卒業生アンケート

調査項目：以下の集計表に示す項目

調査時期：平成 27 年 11 月

調査対象：平成 22 年度、平成 23 年度の卒業生と修了生（学部 795 人、研究科 174 人）

回収率：7.2%

集計方法：項目ごとの有効回答の範囲内での単純集計

D-1 学部卒業生の回答結果

人数 (%)

回 答 設 問	①	②	③	④	⑤
問 1 卒業直後の進路	33 (60.0)	20 (36.4)	1 (1.8)	1 (1.8)	0
問 2 全学教育が充実していた	6 (10.9)	35 (63.6)	13 (23.6)	1 (1.8)	
問 3 専門教育が充実していた	21 (38.2)	30 (54.5)	4 (7.3)	0	
問 4 外国語学習のサポートが充実していた	2 (3.6)	23 (41.8)	29 (52.7)	1 (1.8)	
問 5 演習・実習・実験など実践的な教育が充実していた	26 (47.3)	27 (49.1)	2 (3.6)	0	
問 6 少人数による指導が受けられた	21 (38.2)	19 (34.5)	13 (23.6)	2 (3.6)	
問 7 教員との交流が多かった	15 (27.3)	22 (40.0)	16 (29.1)	2 (3.6)	
問 8 学習意欲が湧く授業が多かった	3 (5.5)	37 (67.3)	14 (25.5)	1 (1.8)	
問 9 学習面での施設・設備が充実していた	13 (23.6)	33 (60.0)	8 (14.5)	1 (1.8)	
問 10 地域社会との交流やクラブ・サークル活動などの課外交流活動が盛んだった	9 (16.4)	21 (38.2)	20 (36.4)	5 (9.1)	
問 11 学生生活や就職活動などの支援体制が充実していた	4 (7.3)	23 (41.8)	25 (45.5)	3 (5.5)	
問 12 岡山県立大学の教育内容に、全体として満足している	18 (32.7)	29 (52.7)	7 (12.7)	1 (1.8)	
問 13 岡山県立大学の教育は卒業後の仕事や生活に役立っている	19 (34.5)	28 (50.9)	7 (12.7)	1 (1.8)	
問 14 豊かな人間性	8 (14.5)	36 (65.5)	9 (16.4)	2 (3.6)	
問 15 主体性	8 (14.5)	37 (67.3)	9 (16.4)	1 (1.8)	
問 16 チームワーク	10 (18.2)	41 (74.5)	3 (5.5)	1 (1.8)	
問 17 リーダーシップ	4 (7.3)	26 (47.3)	23 (41.8)	2 (3.6)	
問 18 専門分野における知識や技術	13 (23.6)	38 (69.1)	3 (5.5)	1 (1.8)	
問 19 専門知識や技術を実務に活かす力	9 (16.4)	32 (58.2)	12 (21.8)	2 (3.6)	
問 20 論理的思考力	7 (12.7)	34 (61.8)	13 (23.6)	1 (1.8)	
問 21 問題解決力	8 (14.5)	36 (65.5)	11 (20.0)	0	
問 22 創造力	5 (9.1)	25 (45.5)	23 (41.8)	2 (3.6)	
問 23 実行力	11 (20.0)	36 (65.5)	7 (12.7)	1 (1.8)	
問 24 計画力	9 (16.4)	33 (60.0)	12 (21.8)	1 (1.8)	
問 25 発信力	4 (7.3)	32 (58.2)	17 (30.9)	2 (3.6)	
問 26 情報リテラシー	4 (7.3)	31 (56.4)	16 (29.1)	4 (7.3)	
問 27 コミュニケーションスキル	2 (3.6)	20 (36.4)	25 (45.5)	8 (14.5)	
問 28 異文化理解	1 (1.8)	13 (23.6)	30 (54.5)	11 (20.0)	
問 29 社会的責任	11 (20.0)	31 (56.4)	11 (20.0)	2 (3.6)	
問 30 規律性	15 (27.3)	38 (69.1)	1 (1.8)	1 (1.8)	

※回答選択肢

問1：①就職（岡山県内） ②就職（岡山県外） ③進学・留学 ④パート・アルバイト ⑤その他

問2～13：①とてもそう思う ②ある程度そう思う ③あまりそう思わない ④全くそう思わない

問14～30：①十分身についた ②ある程度身についた ③あまり身につかなかった ④全く身につかなかった

D-2 大学院修了生の回答結果

人数 (%)

回 答 設 問	①	②	③	④
問 1 授業内容は充実していた	5 (33.3)	6 (40.0)	4 (26.7)	0
問 2 研究指導は充実していた	8 (53.3)	6 (40.0)	1 (6.7)	0
問 3 研究の施設や設備・装置は充実していた	5 (33.3)	7 (46.7)	3 (20.0)	0
問 4 専門分野における知識や技術	4 (26.7)	7 (46.7)	4 (26.7)	0
問 5 専門知識や技術を実務に活かす力	1 (6.7)	9 (60.0)	5 (33.3)	0
問 6 論理的思考力	4 (26.7)	10 (66.7)	1 (6.7)	0
問 7 問題解決力	5 (33.3)	10 (66.7)	0	0
問 8 創造力	2 (13.3)	10 (66.7)	3 (20.0)	0
問 9 実行力	3 (20.0)	10 (66.7)	2 (13.3)	0
問 10 計画力	2 (13.3)	9 (60.0)	4 (26.7)	0
問 11 発信力	2 (13.3)	11 (73.3)	2 (13.3)	0
問 12 情報リテラシー	4 (26.7)	8 (53.3)	3 (20.0)	0
問 13 コミュニケーションスキル	0	6 (40.0)	8 (53.3)	1 (6.7)
問 14 異文化理解	1 (6.7)	4 (26.7)	7 (46.7)	3 (20.0)
問 15 専門分野における知識や技術	4 (26.7)	6 (40.0)	5 (33.3)	0
問 16 専門知識や技術を実務に活かす力	2 (13.3)	8 (53.3)	5 (33.3)	0
問 17 論理的思考力	5 (33.3)	9 (60.0)	1 (6.7)	0
問 18 問題解決力	4 (26.7)	10 (66.7)	1 (6.7)	0
問 19 創造力	1 (6.7)	13 (86.7)	1 (6.7)	0
問 20 実行力	5 (33.3)	6 (40.0)	4 (26.7)	0
問 21 計画力	4 (26.7)	8 (53.3)	2 (13.3)	1 (6.7)
問 22 発信力	3 (20.0)	10 (66.7)	2 (13.3)	0
問 23 情報リテラシー	2 (13.3)	9 (60.0)	2 (13.3)	2 (13.3)
問 24 コミュニケーションスキル	2 (13.3)	4 (26.7)	7 (46.7)	2 (13.3)
問 25 異文化理解	1 (6.7)	6 (40.0)	6 (40.0)	2 (13.3)

※回答選択肢

問1～3: ①とてもそう思う ②ある程度そう思う ③あまりそう思わない ④全くそう思わない

問4～14: ①十分身についた ②ある程度身についた ③あまり身につかなかった ④全く身につかなかった

問15～25: ①とても役立った ②ある程度役立った ③あまり役立たなかった ④全く役立たなかった

E 就職先アンケートの回答結果

件数 (%)

回 答 問	①	②	③	④	⑤
問1 社会人としての総合力の高さを有している	11 (9.7)	69 (61.1)	30 (26.5)	3 (2.7)	0
問2 深い専門学力を有している	12 (10.6)	54 (47.8)	41 (36.3)	6 (5.3)	0
問3 幅広い基礎的学力を有している	7 (6.2)	59 (52.2)	44 (38.9)	3 (2.7)	0
問4 語学力、異文化への適応力などのグローバルな対応力を有している	4 (3.5)	22 (19.5)	66 (58.4)	19 (16.8)	2 (1.8)
問5 幅広い教養を有している	8 (7.1)	39 (34.5)	61 (54.0)	5 (4.4)	0
問6 自立性・自主性・向上心を有している	20 (17.7)	66 (58.4)	24 (21.2)	3 (2.7)	0
問7 計画力を有している	9 (8.0)	51 (45.1)	47 (41.6)	6 (5.3)	0
問8 誠実さ・責任感・忍耐力・堅実性を有している	29 (25.7)	66 (58.4)	15 (13.3)	3 (2.7)	0
問9 積極性・行動力・実践力（前に踏み出す力）を有している	9 (8.0)	59 (52.2)	39 (34.5)	5 (4.4)	1 (0.9)
問10 周囲との協調性（チームで働く力）を有している	21 (18.6)	62 (54.9)	29 (25.7)	1 (0.9)	0
問11 優れたコミュニケーション能力を有している	9 (8.0)	51 (45.1)	48 (42.5)	4 (3.5)	1 (0.9)
問12 県大に期待すること第一位	13 (11.5)	27 (23.9)	33 (29.2)	40 (35.4)	
問13 県大に期待すること第二位	17 (15.0)	17 (15.0)	52 (46.0)	26 (23.0)	
問14 県大に期待すること第三位	40 (35.4)	27 (23.9)	19 (16.8)	26 (23.0)	
問15 県大に期待すること第四位	43 (38.1)	42 (37.2)	9 (8.0)	17 (15.0)	
問16 県大の人材育成に重視する項目第一位	57 (50.4)	29 (25.7)	18 (15.9)	6 (5.3)	3 (2.7)
問17 県大の人材育成に重視する項目第二位	31 (27.4)	26 (23.0)	13 (11.5)	32 (28.3)	11 (9.7)
問18 県大の人材育成に重視する項目第三位	18 (15.9)	29 (25.7)	31 (27.4)	21 (18.6)	14 (12.4)
問19 県大の人材育成に重視する項目第四位	5 (4.4)	22 (19.5)	31 (27.4)	35 (31.0)	20 (17.7)
問20 県大の人材育成に重視する項目第五位	2 (1.8)	7 (6.2)	20 (17.7)	19 (16.8)	65 (57.5)
問21 人材育成に向けた県大との連携で重視すること第一位	67 (59.3)	16 (14.2)	24 (21.2)		
問22 人材育成に向けた県大との連携で重視すること第二位	23 (20.4)	53 (46.9)	30 (26.5)		
問23 人材育成に向けた県大との連携で重視すること第三位	18 (15.9)	36 (31.9)	52 (46.0)		
問24 県大生採用の際、OB・OGの業務実績を重視している	12 (10.6)	23 (20.4)	32 (28.3)	36 (31.9)	7 (6.2)
問25 県大生採用の際、OB・OGの定着率を重視している	8 (7.1)	29 (25.7)	29 (25.7)	36 (31.9)	8 (7.1)
問26 県大生採用の際、地域への理解度の高さを重視している	5 (4.4)	18 (15.9)	30 (26.5)	23 (20.4)	10 (8.8)
問27 県大生は他の都道府県の大学出身者と比べてどうか	12 (10.6)	25 (22.1)	46 (40.7)	2 (1.8)	0
問28 県大生は県内の大学出身者と比べてどうか	21 (18.6)	30 (26.5)	33 (29.2)	2 (1.8)	0
問29 他の都道府県にいる県大OB・OGのUターンに期待する	10 (8.8)	27 (23.9)	23 (20.4)	21 (18.6)	5 (4.4)
問30 今後県大生採用に向けて、大学との情報交換が必要である	31 (27.4)	37 (32.7)	13 (11.5)	5 (4.4)	0

(回答数：113件)

※回答割合

問1～問11：①とてもそう思う ②そう思う ③ふつう程度 ④あまりそう思わない ⑤全くそう思わない

問12～15：県大に期待すること：①基礎学力・教養を有する人材の育成 ②高い専門性・能力を有する人材の育成

③優れたコミュニケーション能力を有する人材の育成 ④豊かな人間性と溢れた人材の育成

問16～20：県大に期待する人材育成：①教養と強い精神力を兼ね備えた人材 ②高度な専門知識を有し即戦力となる人材

③地域社会に貢献できる人材 ④多様な社会活動経験を有する人材 ⑤グローバルな人材

問21～23：人材育成に向けた県大との連携で重視すること ①インターンシップ ②講座・カリキュラム共同開発 ③産学連携・共同研究

問24～26：①大変重視している ②重視している ③差がない ④参考程度 ⑤重視していない

問27～28：①優れている ②少し優れている ③差がない ④少し劣る ⑤劣る

問29～30：①非常に期待している ②期待している ③多少期待している ④あまり期待していない ⑤全く期待していない

F 全学的就職支援の実施状況

F-1 就職ガイダンスの実施状況

実施日	ガイダンスの内容	実施機関等	参加 学生数
6月18日	進路・就職ガイダンス	(株)リクルートキャリア	118
6月25日	公務員試験ガイダンス	東京アカデミー岡山校	45
10月8日	就職ガイダンス	(株)マイナビ	59
10月15日	内定者・就職活動報告会	本学キャリアカウンセラー	30
10月22日	自己分析・志望動機ワークショップ	(株)リアセック	34
10月29日	エントリーシート対策講座	(株)シーズ	44
11月 5日	職種まるわかりセミナー	(株)学情	16
11月12日	就活ゼミ～新聞の読み方、活かし方～	(株)山陽新聞社	12
11月26日	中小・中堅企業の魅力と地元優良企業の探し方	(株)ビザビ	28
12月 3日	面接力UPセミナー	(株)シーズ	41
12月10日	実践！グループディスカッション	(株)アイデム	9
12月17日	業界研究講座	(株)リクルートキャリア	23
1月14日	公務員試験ガイダンス	東京アカデミー岡山校 総社市, 岡山県警人事担当者	44
1月21日	「求人NAVI」操作説明会 就活マナー講座	(株)ジェイネット 本学キャリアカウンセラー	28
1月28日	就活直前！総まとめ講座	(株)マイナビ	77

F-2 職業適性検査等の実施と解説

実施日	検査名	実施機関等	受検学生数
6月20日～ 6月30日	職業適性診断	(株)リアセック	101
7月24日	職業適性診断解説講座		

F-3 各種模擬テストの実施

実施日	試験名	実施機関等	受験学生数
4月18日	公務員模擬試験	東京アカデミー岡山校	11
7月16日・30日	SPI＋一般常識・時事Web模擬テスト	(株)マイナビ	23
11月19日	SPI模擬テスト	(株)ジェイ・ブロード	57

F-4 就職活動バス（合同企業説明会へのバス）の運行（実施前）

運行日	合同企業説明会参加場所	主催者	参加学生数
3月4日	大阪（インテックス大阪）	(株)マイナビ	32

F-5 就職相談員による就職相談（赤字：未確定）

相談日	相談時間	内容等
毎週 月曜日 火曜日 金曜日	10:30～15:30	キャリアカウンセラーによる各種相談を実施 ◇相談内容等 ・就職活動のすすめ方 ・履歴書・エントリーシート等書類に関する相談 ・面接対策 など ◇H27年度相談件数 ・1,131件

G 国際交流

・英国語学文化研修の実績概要

- ①期 間：平成27年8月28日（金）～9月20日（日）
- ②研修内容：英国国立バンガー大学における英語力向上と英国文化体験など
- ③参加学生：11名（最少催行人数7名）
- ④費用実績：約432,000円※
上記の費用には往復航空運賃，空港税・燃油特別付加運賃，授業料，ホームステイ費，フィールド・トリップ（交通費）及び諸経費などが含まれている。

・韓国語学文化研修の実績概要

- ①期 間：平成28年2月22日（月）～2月27日（土）
- ②研修内容：梨花女子大学（韓国ソウル市）にて韓国語力向上と梨花女子大学学生との交流，韓国伝統文化体験など
- ③参加学生：7名（最少催行人数5名）
- ④費用：約105,000円※
上記の費用には往復航空運賃，授業料，宿泊代，食費，見学費及び見学に伴う交通費などが含まれている。

・中国語学文化研修の計画概要

- ①期 間：平成28年9月12日（土）～9月19日（土）
- ②研修内容：上海交通大学（中国上海市）にて中国語力向上と中国文化体験など
- ③募集人数：10名（最少催行人数1名，応募人数0名）
- ④費用：90,000円※
上記の費用には往復航空運賃，授業料，宿泊代，施設見学費，諸経費などが含まれている。

・南オーストラリア州アデレード語学文化研修の実績概要

- ①期 間：平成28年2月27日（土）～3月21日（月）
- ②研修内容：アデレード大学（南オーストラリア州アデレード市）における英語力向上と文化体験など
- ③参加学生：12名（最少催行人数8名）
- ④費用実績：378,000円※
上記の費用には往復航空運賃，空港税・燃油特別付加運賃，授業料，ホームステイ費，ソーシャルアクティビティ（交通費）及び諸経費などが含まれている。

・日本語・文化研修の実績概要

- ①期 間：平成28年7月28日（火）～8月5日（水）（9日間）
- ②研修内容：主として本学と国際交流協定を締結している海外の大学の学生を対象に，日本語講座の開講，本学学生や地域住民との交流，岡山県内の産業・史跡・文化財見学等を行い，研修を通じて学生の日本語能力の向上や相互理解を深めるもの
- ③参加人員：11名

・日本語・文化研修の実施結果

本年度は，昨年度に引き続き中国南昌大学から初めて11名（男性7名，女性4名）の学生が研修に参加しており，医学，ソフトウェア，外国語，マスコミ，経済管理など多様な分野の学生を受け入れた。本年度の研修は，次のプログラムにより実施しており，昨年に引き続きホームステイを企画して地域住民との交流の充実を図った。

月日 (曜日)	10:00～10:50	11:00～11:50	13:00～13:50	14:00～14:50	15:00～15:50	16時以降
7月28日 (火)	開講式 【大会議室】 大学案内	日本語講座	日本語講座	日本語講座		
7月29日 (水)	日本語講座	日本語講座	日本語講座	日本語講座	日本語講座	
7月30日 (木)	岡山の産業視察・観光 (三菱自動車工業(株)水島製作所、瀬戸大橋、倉敷美観地区)					
7月31日 (金)	総社市長表敬・総社市内視察・総社市民たちとの 交流会					ホームステイ
8月1日 (土)	ホームステイ					
8月2日 (日)	ホームステイ					
8月3日 (月)	日本語講座	日本語講座	日本語講座	日本語講座	日本語講座	
8月4日 (火)	日本語講座	日本語講座	日本語講座	日本語講座	日本語講座	県立大学の 歓迎会
8月5日 (水)	日本語講座	日本語講座	修了式 【大会議室】			

・香港スタディツアーの計画概要

- ①期 間：平成27年9月12日(土)～9月17日(木)
- ②研修内容：中華人民共和国香港特別行政区及び上海市における企業視察、文化体験、香港大学学生との交流及び授業参観など
- ③参加学生：5名(最少催行人数3名、応募人数0名)
- ④費用実績：70,000円※
上記の費用には往復航空運賃、空港税・燃油特別付加運賃、宿泊代及び諸経費などが含まれている。

・保健福祉スタディツアーの実施概要

- ①期 間：平成28年3月19日(土)～3月28日(月)
- ②研修内容：TAFE SA(南オーストラリア州アデレード市)における英語による専門分野の研修及び現地小学校・高校を訪問しての文化交流等
- ③参加学生：7名(最少催行人数5名)
- ④費用実績：300,000円※
上記の費用には往復航空運賃、空港税・燃油特別付加運賃、授業料、ホームステイ費、国内交通費・宿泊費及び諸経費などが含まれている。

H 高大連携協定に基づく高等学校への講師派遣及び生徒の受入

H-1 講師派遣

高校名	実施場所	担当学部	教員名		講義内容等	受講人数	学年	実施日
瀬戸南高等学校	瀬戸南高校	保健福祉	教授	井村 圭壮	社会福祉の専門職の魅力～患者の立場としての視点から～	35	2.3	H27.6.3
勝山高等学校	勝山高校	保健福祉	教授	井村 圭壮	総合的な学習の時間	109	1	H27.6.10
倉敷藍羽高等学校	倉敷藍羽高校	保健福祉	教授	井村 圭壮	福祉・看護系に進む高校生に伝えたいこと	10	3	H27.7.14
笠岡工業高等学校	笠岡工業高校	デザイン	教授	金丸 俊彦	3Dプリンタの活用と将来展望※	73	2	H27.7.16
			准教授	津田 勢太		40		
			准教授	三原 鉄平		30		
	准教授		津田 勢太	笠岡港旅客船待合室のデザインについて	79	1.2	H27.11.12	
	岡山県立大学		講師	尾崎 洋	3Dプリンタの活用事例の見学と体験※	5	3	H27.7.25
色久高等学校	色久高校	保健福祉	教授	井村 圭壮	社会福祉系学部で学べること	10	1-3	H27.7.21
玉野光南高等学校	玉野光南高校	情報工	助教	荒井 剛	プログラミングの学習と実践～Androidアプリを作ろう～	40	1	H27.7.31
			助教	滝本 裕則				
		デザイン	教授	嘉敷 彰彦	効果的な情報発信	39	2	H27.9.29
倉敷古城池高等学校	倉敷古城池高校	保健福祉	教授	山下 広美	管理栄養士と栄養士の違い	13	2	H27.9.29
			准教授	名越 恵美	看護師の仕事とがん看護	45		
倉敷南高等学校	倉敷南高校	保健福祉	教授	木本真順美	人の健康を守る栄養	30	1.2	H27.10.6
		デザイン	講師	尾崎 洋	デザインとデジタルファブリケーション～3Dプリンタを用いたデザイン～	30		
笠岡高等学校	笠岡高校	保健福祉	教授	川上 貴代	栄養学はサイエンス～管理栄養士と栄養学科の紹介～	7	2	H27.10.23
			准教授	名越 恵美	看護の広がりとは看護師に求められる資質	5		
芳泉高等学校	芳泉高校	保健福祉	教授	入江 康至	栄養学について	8	2	H27.10.28
玉野高等学校	玉野高校	情報工	教授	有本 和民	ITCを基盤とした、様々な応用分野への展開	20	2	H27.12.18
高梁城南高等学校	高梁城南高校	保健福祉	教授	井村 圭壮	福祉、保育、看護、栄養系、の進路講話	21	2	H27.12.8

H-2 生徒の受入

高校名	実施場所	担当学部	教員名		講義内容等	受講人数	学年	実施日
総社高等学校	岡山県立大学	デザイン	教授	森下 眞行	ユニバーサルデザイン※	18	2	H27.11.24
			教授	山下 明美	カラーコーディネート※			H27.9.15、10.6
			講師	朴 貞淑	住環境※			H27.10.20、10.27
清心女子高等学校	岡山県立大学	保健福祉	教授	伊東 秀之	総合的な学習・物質科学課題研究※	15	2.3	H27.10.13、H28.2.16、3回目未定

※ 講義内容等の※印は連携講座（高校が単位認定を行うことができるもの。）

I 高等学校への講師派遣及び生徒の受入（高大連携協定以外）

I-1 講師派遣（校内ガイダンス）

月 日	高等学校名	受講者		内 容
		学年	人数	
4月28日	岡山県立井原高等学校	2,3	40	保健福祉学部の説明
5月26日	創志学園高等学校	1,2,3	42	情報工学部の説明
6月12日	岡山県立総社高等学校	2,3	37	保健福祉学部の説明
6月19日	岡山県立一宮高等学校	1	9	栄養学科の説明
6月24日	岡山県立総社高等学校	1	42	栄養学科、デザイン学部の説明
10月14日	岡山県立総社南高等学校	2	16	デザイン学部の説明

I-2 生徒の受入

月 日	高等学校名等	訪問者		内 容
		学年	人数	
6月23日	岡山県立勝山高等学校	1,2	23	保健福祉学部、情報工学部及びデザイン学部概要説明、施設見学
7月9日	広島県立高陽高等学校	2	26	保健福祉学部、情報工学部及びデザイン学部概要説明、施設見学
10月22日	岡山県立倉敷工業高等学校	1	42	デザイン学部概要説明、施設見学
3月25日	香川県立高松東高等学校	1,2	33	保健福祉学部及び情報工学部概要説明、施設見学

※ 訪問者数には引率教員等を含む。

J 学修成果1 (学生・クラブの表彰)

J-1 学生の表彰

保健福祉学部	栄養学科	4年	磯野 千晶	日本農芸化学会中国四国支部 学生奨励賞
			鴻池 優佳	全国栄養士養成施設協会 理事長表彰
	保健福祉学科	3年	今城 留奈	2015 年度総社市政策提言賞
保健福祉学研究科	栄養学専攻 (博士前期)	1年	田中 充樹	第 10 回村川技術奨励賞
			戸田 圭祐	14 th International Conference of Bioactive Lipids in Cancer, Inflammation and Related Diseases Ono Pharmaceutical Travel Awards
			加藤 奈々	7 th International Conference on Polyphenols and Health (第 7 回ポリフェノールと健康に関する国際会議) ポスター賞
			目賀 拓斗	第 48 回おおかやまバイオアクティブ研究会シンポジウム 第 14 回学生プレゼンテーション 学生プレゼンテーション賞
	保健福祉学専攻 (博士前期)	1年	三上 舞	第 22 回岡山県保健福祉学会 社会福祉協議会長賞
	栄養学大講座 (博士後期)	1年	津嘉山 泉	第 10 回村川技術奨励賞 14 th International Conference of Bioactive Lipids in Cancer, Inflammation and Related Diseases Ono Pharmaceutical Travel Awards
情報工学部	情報通信 工学科	4年	牧野 知也	第 17 回 IEEE 広島支部学生シンポジウム 優秀研究賞
	情報システム 工学科	4年	高橋 和浩	第 10 回コンピュータ大貧民大会 ライト級 敢闘賞
			赤木 悠也	第 10 回コンピュータ大貧民大会 プレゼンテーション賞
	スポーツシステム 工学科	3年	石塚 寛隆	2015 年度総社市政策提言賞
吉村 勇人				
情報系工学研究科	システム工学 専攻 (博士前期)	2年	小原 瑞希	第 17 回 IEEE 広島支部学生シンポジウム(HISS) 優秀研究賞
			山本 真代	第 17 回 IEEE 広島支部学生シンポジウム(HISS) 優秀プレゼンテーション賞
			小野 真	第 24 回計測自動制御学会中国支部学術講演会 奨励賞
			見船 文香	平成 27 年度情報処理学会 中国支部 奨励賞
情報系工学研究科	システム工学 専攻 (博士前期)	2年	藤野 貴志	平成 27 年度電子情報通信学会 中国支部 奨励賞
			田邊 寛	平成 27 年度電子情報通信学会 中国支部 奨励賞
				平成 27 年度情報処理学会 中国支部 奨励賞
池野 沙弥香	平成 27 年度仁科賞			

		1年	竹原 勇朔	ACM 国際大学対抗プログラミング大会 Java Challenge 2位
			筒井 啓太	
			山本 貴大	
			田頭 幸三	FIT2015(情報科学技術フォーラム 2015) 奨励賞
				第10回コンピュータ大貧民大会 ライト級 優勝
			上林 和正	第10回コンピュータ大貧民大会 ライト級 敢闘賞
			福圓 琢真	FIT2015(情報科学技術フォーラム 2015) 奨励賞
			皿田 貴寛	平成27年度電子情報通信学会 中国支部 奨励賞
			岡本 大地	学生ケータイあわ〜ど2015 ケータイアイデア 部門 入選
三木 敬太	第17回 IEEE 広島支部学生シンポジウム 優秀研究賞			
デザイン学部	デザイン 工学科	4年	野崎 司	国際学生 EV 超小型モビリティデザインコンテ スト2015 優秀賞 (ベネッセ賞)
			堀 彰吾	
		3年	境 紀乃	AXIS 第10回金の卵オールスターデザインショ ーケース 大学選抜部門 入賞
	三島 恭平			
	造形デザイン 学科	4年	今田 有香	第66回岡山県美術展覧会 デザイン部門 岡山県教育長賞
		3年	西田 朋代	第66回岡山県美術展覧会 デザイン部門 岡山県知事賞
			松川 実生	第66回岡山県美術展覧会 デザイン部門 入選
			井上 莉那	全映協グランプリ 2015「映像コンテスト中四国 地区予選」専門学校・短大・大学の部 優秀賞
			中田 由起子	
			野村 慎太郎	
			下野 恵実子	第22回ヤングセラミスト・ミーティング in 中四国 作品部門 大賞
	万波 優子	第22回ヤングセラミスト・ミーティング in 中四国 作品部門 準大賞		
デザイン学部	造形デザイン 学科	2年	浅野 晶太郎	第66回岡山県美術展覧会 デザイン部門 入選
			大橋 由佳	
			和田 紗夜	
			玉井 成実	
			阪倉 萌	
			池田 遥	
			中吉 利慧	
			田中 麻惟	
			濱野 麻里	
			長村 郁美	
			岩本 奈々	
			村山 友里子	
岡崎 栞				

			村上 詩織	
			須藤 茉春	
			鶴峯 江利佳	
			傳 悠悦	
			多田村 明音	
			遠藤 美奈子	
			戸田 朱音	
			土田 ひかり	
			河原 佳子 (科目履修生)	第13回ふるしきデザインコンペ 佳作
デザイン 研究科	デザイン工学 専攻 (修士課程)	2年	佐野 友彦	国際学生 EV 超小型モビリティデザインコンテスト2015 優秀賞 (ベネッセ賞)
	造形デザイン 学専攻 (修士課程)	1年	安井 太郎	全映協グランプリ 2015「映像コンテスト中四国予選」専門学校・短大・大学の部 最優秀賞
			周 村一蘭	岡山ロータリークラブ国際交流奨励賞 最優秀賞
部 全学	全学科	1年		平成27年度第1回日本語検定 文部科学大臣賞(団体表彰)

J-2 クラブの表彰

サークル名		大会名	成績等
空手道サークル	難波 寧々 (2年)	中四国学生空手道選手権 (女子個人形)	優勝
		第59回全日本学生空手道選手権大会並びに東西対抗戦	出場
軟式野球部		第10回中国地区大学軟式野球連盟新人戦	優勝
軟式野球部	西江 卓也 (1年)	第10回中国地区大学軟式野球連盟新人戦	最優秀選手賞
軟式野球部	岡本 拓也 (3年)	第1回大学軟式野球国際親善大会 (グアム)	出場
軟式野球部	柳 龍彦 (4年)	平成27年度中国地区大学野球春季3部リーグ	ベストナイン
サッカー部		第38回中国大学サッカー2部リーグ	3位
サッカー部	中奥 雅也 (2年)	第38回中国大学サッカー2部リーグ	アシスト王
ハンドボール部		中四国学生ハンドボール選手権春季・秋季3部リーグ	出場
陸上部		中四国学生対抗陸上競技選手権	個人5位ほか
OPUウインドオーケストラ部		岡山県大学吹奏楽フェスティバル	出場
ロボット研究サークル メヒヤニカ		第15回レスキューロボットコンテスト競技会本選	出場

K 学修成果 2 (博士後期課程の学位授与者)

K-1 課程修了等によるもの

報告番号	授与年月日	博士の専攻分野の名称	氏名	博士論文名
甲第 92号	平成25年9月23日	博士 (工学)	立野 貴之	同期型および非同期型のビジネスゲームに関する研究
甲第 93号	平成26年3月24日	博士 (栄養学)	弓岡 仁美	Study on the precursor of Gly m Bd 28K, a soybean allergen (大豆アレルゲンGly m Bd 28Kの前駆体に関する研究)
甲第 94号	平成26年3月24日	博士 (保健福祉学)	李 志嬉	日韓の在宅高齢者の健康関連ライフスタイルを規定する要因に関する基礎研究
甲第 95号	平成26年3月24日	博士 (保健福祉学)	岡部 一光	介護労働者の職務及び職場継続に関する基礎研究
甲第 96号	平成26年3月24日	博士 (保健福祉学)	鄭 英祚	韓国における結婚移住女性の家族関係継続意思に関する研究
甲第 97号	平成26年3月24日	博士 (工学)	田中 征治	回転型振子の振り上げ・安定化制御に関する研究
甲第 98号	平成27年3月24日	博士 (看護学)	佐々木 純子	訪問看護ステーション管理者の職務継続に関する研究
甲第 99号	平成27年3月24日	博士 (看護学)	森永 裕美子	母の育児負担感緩和のための父の親性に関する研究
甲第 100号	平成27年3月24日	博士 (看護学)	市村 美香	末梢静脈穿刺におけるタッピングとマッサージの静脈怒張効果の検証～効果的な静脈怒張法の確立を目指して～
甲第 101号	平成27年3月24日	博士 (看護学)	佐々木 新介	末梢静脈の怒張を目的とした上肢温罨法の検証
甲第 102号	平成27年3月24日	博士 (看護学)	SHRESTHA JOSHI ARCHANA	A Novel Approach to Providing Nursing Care in Hospital of Nepal (ネパールの病院における看護ケアに関する基礎研究)
甲第 103号	平成27年3月24日	博士 (工学)	前田 貴弘	第一原理計算によるSiおよびGe結晶中の点欠陥と複合体欠陥に関する研究
甲第 104号	平成27年3月24日	博士 (工学)	太田 俊介	身体の接近を伴う握手動作を生成する握手ロボットシステム
甲第 105号	平成28年3月24日	博士 (保健福祉学)	藤本 憲正	語用論的コミュニケーション障害の評価法の開発
甲第 106号	平成28年3月24日	博士 (栄養学)	山本 真衣	Study on the virulence factors of <i>Vibrio vulnificus</i> by transposon insertion mutagenesis (トランスポゾン挿入変異による <i>Vibrio vulnificus</i> 病原因子の研究)
甲第 107号	平成28年3月24日	博士 (看護学)	狩野 京子	看護師の職業キャリア発達に関する基礎研究
甲第 108号	平成28年3月24日	博士 (保健福祉学)	李 多暉	言語流暢性課題の遂行における品詞、加齢、脳損傷および使用言語の関係
甲第 109号	平成28年3月24日	博士 (工学)	高林 範子	身体性アバタを介した看護コミュニケーション教育支援システム

K-2 学位規程第3条第4項該当

報告番号	授与年月日	博士の専攻分野の名称	氏名	博士論文名
乙第 5号	平成25年9月23日	博士 (保健福祉学)	増田 雅暢	介護保険制度の政策過程の分析と実施後の検証
乙第 6号	平成26年9月23日	博士 (栄養学)	雀部 沙絵	空腹時および負荷後血糖値上昇要因の解析～糖尿病と糖尿病合併症の包括的予防に向けて～
乙第 7号	平成26年9月23日	博士 (栄養学)	池口 主弥	大麦若葉の消化管における機能性に関する研究

L 委員会等の審議事項

L-1 教育研究活動委員会

第1回（平成27年4月9日）

- (1) 平成28年度 授業開講計画について（保健福祉学研究科）
- (2) 岡山県立大学大学院履修規程の改正について
- (3) 平成27年度 国際交流推進助成費について
- (4) トリブバン大学との学術交流協定書について

第2回（平成27年5月14日）

- (1) 平成27年度 後期交換留学生の募集について
- (2) 平成27年度の語学文化研修等の実施方針について

第3回（平成27年6月11日）

- (1) 岡山県立大学国際交流推進助成費取扱要綱の一部改正について
- (2) 国際交流推進事業学生参加旅費助成取扱要領の一部改正について
- (3) 平成27年度 第2回国際交流推進助成費の募集について
- (4) 平成27年度 前期（前後期）からの「授業評価アンケート」項目追加について

第4回（平成27年7月9日）

- (1) 平成28年度 前期交換留学生の募集について
- (2) 平成28年度 転学生の募集について
- (3) 平成28年度 授業科目の新設について（保健福祉学研究科）
- (4) 平成28年度 機関別認証評価受審に向けたセンター関係対応案について
- (5) 教育改革におけるシラバスの重要性和と本学における改訂の必要性について
- (6) 平成27年度 第2回国際交流推進助成費について

第5回（平成27年8月6日）

- (1) クォーター制の導入について

第6回（平成27年9月10日）

- (1) クォーター制ワーキンググループ(Q-WG)第2回会議までの取りまとめ項目（要点）について
- (2) 2015年 岡山県立大学シラバス改正について
- (3) 平成28年度 大学院授業開講計画について（保健福祉学研究科）
- (4) 岡山県立大学大学院履修規程の一部改正について
- (5) 平成27年度 FD活動における相互授業参観の実施について
- (6) 台湾の雲林科技大学との大学間学術交流協定(MOU)の締結について
- (7) 海外協定大学との学生交流の推進について

第7回（平成27年10月8日）

- (1) 平成28年度 大学院授業開講計画等の作成日程について
- (2) 平成28年度 教務・学生生活関係スケジュール（大学院）について
- (3) 平成27年度 学生アンケートの実施について
- (4) 2015年度 教育年報の作成について
- (5) 平成28年度 シラバスの作成について
- (6) 平成28年度 教育力向上支援事業の募集について
- (7) 平成28年度 全学講義について
- (8) 平成27年度 第3回国際交流推進助成費の募集について
- (9) 雲林科技大学との学術交流協定の締結について
- (10) 学外利用者の年齢制限への対応について

第8回（平成27年10月26日）

- （1）雲林科技大学との学生交流に関する覚書の締結について
- （2）岡山県立大学教育研究開発機構規程の一部改正について

第9回（平成27年11月9日）

- （1）平成28年度 大学院授業開講計画等の作成について
- （2）岡山県立大学教育力向上支援事業取扱要綱の改正について
- （3）平成27年度 学生アンケートの実施について
- （4）研究科授業評価アンケートの実施について
- （5）2015年度 教育年報の作成について
- （6）教育研究開発機構における客員教授の選考について
- （7）平成27年度 第3回国際交流推進助成費について

第10回（平成27年11月30日）

- （1）モンテレイ工科大学プエブラ校及びモンテレイ大学（メキシコ）との学術交流協定の締結について

第11回（平成27年12月14日）

- （1）平成28年度 全学講義の講師について
- （2）平成28年度 教育力向上支援事業について
- （3）平成29年度 クォーター制対応学事暦について
- （4）非常勤講師への平成29年度 クォーター制対応意向調査について
- （5）教育研究活動委員会における教育評価体制について

第12回（平成28年1月14日）

- （1）平成28年度 授業科目の新設について（保健福祉学研究科）
- （2）平成28年度 大学院授業開講計画について
- （3）情報系工学研究科のカリキュラム・ポリシーの修正について
- （4）平成28年度 大学院新入生オリエンテーション日程について
- （5）平成28年度 大学院履修案内について
- （6）平成27年度 大学院修了時アンケート素案について
- （7）平成28年度 履修案内（第3章 副専攻制度）の作成について
- （8）授業改善意見交換会の実施について
- （9）平成27年度 第4回国際交流推進助成費の募集について
- （10）語学文化研究（韓国語）の実施計画について
- （11）国際交流アクションプラン（仮称）について
- （12）COC+推進本部等について

第13回（平成28年2月4日）

- （1）平成28年度 授業科目の新設について（保健福祉学研究科）
- （2）平成28年度 大学院授業開講計画について
- （3）情報系工学研究科のカリキュラム・ポリシーの修正について
- （4）平成28年度 臨時に設ける授業科目について
- （5）平成28年度 大学院履修案内について
- （6）岡山県立大学大学院学則の一部改正について
- （7）岡山県立大学履修規程の一部改正について
- （8）岡山県立大学学則の一部改正について
- （9）平成27年度 大学院修了時アンケート（案）について
- （10）岡山県立大学附属図書館利用規程の改正（案）について

- (11) 平成 27 年度 第 4 回国際交流推進助成費について
- (12) 平成 28 年度 第 1 回国際交流推進助成費の募集について
- (13) 国際交流アクションプラン（仮称）について

第 14 回（平成 28 年 3 月 10 日）

- (1) 岡山県立大学学位規程の一部改正について
- (2) 岡山県立大学履修規程の一部改正について
- (3) 岡山県立大学大学院履修規程の一部改正について
- (4) 岡山県立大学大学院長期履修学生規程の一部改正について
- (5) 学長が決定を行うに当たり教授会等の意見を聴くことが必要であると認める事項を定める要綱の一部改正について
- (6) 平成 29 年度 授業科目の新設について（デザイン学研究科）
- (7) 平成 29 年度 大学院授業開講計画について
- (8) 平成 28 年度 岡山県立大学・3 研究科学生を対象としたプロジェクトマネジメント特別講義の実施計画について
- (9) 平成 28 年度 大学院履修案内について
- (10) 平成 28 年度 大学教育開発センター全学研修会について
- (11) 平成 28 年度 教育研究開発機構客員教授について
- (12) 平成 28 年度（後期）岡山県立大学科目等履修生募集要項について（国立雲林科技大学）
- (13) 公立大学法人岡山県立大学外国人留学生奨学金交付要綱の制定について
- (14) 平成 28 年度 第 1 回国際交流推進助成費について
- (15) 国際交流アクションプラン（仮称）について
- (16) 特別研究に係る平成 27 年度実績報告及び平成 28 年度研究募集について
- (17) 岡山県立大学倫理審査規程の改正について
- (18) 学生の学外教育研究活動に係る移動経費等への対応について
- (19) COC+平成 28 年度 予算調書策定方針について

L-2 教務専門委員会

第 1 回（平成 27 年 5 月 14 日）

- (1) 平成 27 年度 TOEIC IP テストの実施について
- (2) 共通教育部による教育質保証の取り組み
- (3) 臨時に開講する授業科目について（スポーツシステム工学科）
- (4) 4 年次生に係る年度末日程について
- (5) 成績通知の保証人（保護者）への送付について
- (6) 平成 27 年度 教務専門委員会開催日程について

第 2 回（平成 27 年 6 月 11 日）

- (1) 平成 28 年度 授業開講計画の協議スケジュール及び平成 28 年度 共通教育科目の開講計画への要望等について
- (2) 平成 27 年度 前期（前後期）からの「授業評価アンケート」項目追加について

第 3 回（平成 27 年 7 月 9 日）

- (1) 授業科目の新設について（共通教育科目）
- (2) 平成 28 年度 共通教育科目の開講計画について
- (3) 教育職員免許法施行規則第 66 条の 6 に定める科目について
- (4) 平成 28 年度 学部教育科目の開講計画等について
- (5) 平成 28 年度 機関別認証評価受審に向けた点検事項について
- (6) 計算機演習室の学生開放のルールについて

第4回（平成27年8月19日）

- （1）科目の新設について
- （2）平成28年度入学生 共通教育科目開講計画について
- （3）教育職員免許法施行規則第66条の6に定める科目について

第5回（平成27年9月10日）

- （1）平成28年度 共通教育科目の時間割について
- （2）成績通知の学生への配付方法について
- （3）成績通知の保証人（保護者）への送付について
- （4）平成27年度 共通教育開講計画の変更について
- （5）クォーター制ワーキンググループ(Q-WG)第2回会議までの取りまとめ項目（要点）について

第6回（平成27年10月8日）

- （1）平成28年度 学部教育科目の入学生の卒業要件及び開講計画について
- （2）平成28年度 学部教育科目の時間割編成について
- （3）平成28年度 教務・学生生活関係スケジュールについて
- （4）平成27年度 学生アンケートの実施について
- （5）平成28年度 シラバスの作成について

第7回（平成27年11月9日）

- （1）平成28年度 学部教育科目の時間割について
- （2）平成28年度 履修案内の作成について
- （3）平成27年度 学生アンケートの実施について
- （4）平成28年度「大学コンソーシアム岡山」への提供科目について

第8回（平成27年12月14日）

- （1）平成28年度 共通教育科目の開講計画の変更について
- （2）平成28年度 学部教育科目の開講計画の変更について（栄養学科、情報工学部）
- （3）平成29年度 クォーター制対応学事暦について
- （4）非常勤講師への平成29年度クォーター制対応意向調査について
- （5）平成28年度 臨時に設ける授業科目について
- （6）平成28年度 履修案内の作成について
- （7）平成28年度「大学コンソーシアム岡山」への提供科目について

第9回（平成28年1月14日）

- （1）平成28年度 共通教育科目の開講計画の変更について
- （2）平成28年度 学部教育科目の開講計画の変更について（造形デザイン学科）
- （3）平成28年度 履修案内（第3章 副専攻制度）の作成について
- （4）平成28年度 臨時に設ける授業科目について
- （5）平成28年度 新入生オリエンテーションについて

第10回（平成28年2月4日）

- （1）平成28年度 学部教育科目の開講計画の変更について（保健福祉学科）
- （2）平成28年度 履修案内について
- （3）平成28年度「大学で学ぶ」について

第11回（平成28年3月10日）

- (1) 「岡山創生学」について
- (2) 平成 28 年度 T O E I C I P テストの実施について

L-3 学生生活委員会

第 1 回 (平成 27 年 6 月 9 日)

- (1) 大学教育開発センターの平成 27 年度学生支援業務等について
- (2) 平成 27 年度日本学生支援機構奨学生 (定期採用) の推薦について

第 2 回 (平成 27 年 8 月 5 日)

- (1) 岡山県立大学学則の一部改正について
- (2) 学生支援室規程案について
- (3) 認証評価に向けたアンケート調査の実施について

第 3 回 (平成 27 年 9 月 14 日)

- (1) 卒業生アンケート及び修了生アンケートの実施について

第 4 回 (平成 27 年 10 月 22 日)

- (1) 学生アンケート (学部生、大学院生) の実施について
- (2) 就職先アンケートの実施について

第 5 回 (平成 27 年 11 月 19 日)

- (1) 平成 27 年度 日本学生支援機構奨学生 (臨時採用) の推薦について
- (2) 平成 28 年度 日本学生支援機構奨学生 (大学院予約採用) の推薦について

第 6 回 (平成 27 年 12 月 21 日)

- (1) キャリアポートフォリオ案について

第 7 回 (平成 28 年 1 月 29 日)

- (1) 審議事項なし

第 8 回 (平成 28 年 3 月 15 日)

- (1) 障害を理由とする差別の解消の推進に関する公立大学法人岡山県立大学教職員対応要領に基づく手続きマニュアル (案) について
- (2) 平成 2 8 年度就職ガイダンス等の日程について (案)

付録 2

A 学部ディプロマ・ポリシー、カリキュラム・ポリシー、アドミッション・ポリシー

※ 表における表記は次のとおり。

ディプロマ・ポリシー（学位授与の方針）：D P

カリキュラム・ポリシー（教育課程の編成・実施の方針）：C P

アドミッション・ポリシー（入学者受入の方針）：A P

1 大学

教育目的	<p>本学は、建学の理念である「人間尊重と福祉の増進」の具現化に向けて、地域社会や他の教育研究機関との自由かつ緊密な交流連携のもとに、人間・社会・自然の関係性を重視した実学を創造し、それを研究教授することによって知性と感性を育み、豊かな教養と深い専門性を備えて新しい時代を切り拓く人材の育成を図り、もって地域の学術文化の進展及び産業の振興に寄与することを目的としています。</p>
D P	<p>教育目的に基づき、本学では次の能力を身に付け、かつ卒業の要件を満たした者に学位を授与します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 豊かな教養と高い人間性を身に付けている。 ● 専門性を修得し、課題を発見し解決できる能力を身に付けている。 ● グローバルに活躍し得る企画提案力とコミュニケーション力を身に付けている。
C P	<p>本学は、D Pに掲げる人材を育成するため、次のような教育課程を編成しています。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1 カリキュラムは、共通教育科目、学部教育科目及び教職教育科目に区分しています。 2 共通教育科目では、基礎的知識の体系的理解、生涯にわたる知的活動や社会生活に必要な論理的思考力・問題発見力・批判力・情報処理など汎用的技能の修得、地域連携を通じた社会人基礎力や課題解決力の修得、グローバル化の時代に役立つ語学・異文化理解によるコミュニケーション力の修得を柱として、知的自律性を培うための教養と技能を涵養する教育を全学生に実施します。 3 学部教育科目では、共通教育科目の修得で獲得した知識と技術を基盤に、所属学科・専攻等ごとに専門の学術を学び、さまざまな社会的要請に的確に対応できる専門性と実践的能力を育成します。 4 学部教育のカリキュラムは、所属する学科等のカリキュラム・ポリシーに基づいて専門性・問題解決能力の修得に向け編成しています。 5 共通教育科目及び各学部教育科目を通じて、地域課題を知り、それを解決に導くための理論と基礎及び実践的方法を修得します。 6 教職教育科目では、栄養学科に栄養教諭一種免許課程、保健福祉学科子ども学専攻に幼稚園教諭一種免許課程を設けています。
A P	<p>教育目的から本学が求める学生像は次のとおりです。</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 人間・社会・自然について幅広く学び、それらの関係性を探究したい学生 ● 実学を身に付け、国内・国外の幅広い分野で社会に貢献したい学生 ● 新技術・知識の創出に意欲を持ち、地域と世界へ向けて情報発信したい学生

2 保健福祉学部

教育目標	<p>保健福祉学部は、地域の人々の健康維持と増進に積極的に貢献できる保健、医療、福祉に関する基本的知識と技術を修得し、健康課題に対して科学的な思考や分析に基づいた課題解決能力を備え、高い倫理観と豊かな人間性にあふれ、さらに社会の変化やグローバル化に柔軟に対応できる力とコミュニケーション能力を有する人材を養成することを目指しています。</p>
D P	<p>教育目標に基づき、本学部では次の能力を身に付け、かつ卒業の要件を満たした者に学位を授与します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 看護、栄養、福祉のそれぞれの分野における十分な専門的知識と技術を身に付けている。 ● 科学的、論理的思考に基づいた課題探究と解決に必要な多様な基礎知識とそれらを活用する能力を身に付けている。 ● 豊かな感性、倫理観を有し、人を支援する心を身に付けている。 ● 外国語を含めたコミュニケーション能力を身に付けている。 ● 将来にわたって応用知識・技術を積み上げていける力を身に付けている。
C P	<p>本学部は、D Pに掲げる人材を育成するため、次のような教育課程を編成しています。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1 幅広い教養、豊かな感性、論理的な思考能力、コミュニケーション能力、グローバルな視点並びに専門教育を学ぶために必要な基礎知識を身に付けるための共通教育科目を、すべての学科で初年次から履修します。 2 専門教育においては、現場で活用できる実践力を養成するために、基礎から専門にかけて講義科目を体系的に配置するとともに、豊富な演習・実験・実習科目を設置しています。 3 同時に、幅広い専門性を身に付けることができるように、選択履修できる他学科の科目を用意しています。また、看護・栄養・福祉の3分野からなるチーム医療における各専門職の重要性を学ぶ選択科目を設置しています。 4 課題発見・解決能力を育成するための卒業研究を、いずれの学科においても1年以上履修します。
A P	<p>教育目標から本学部が求める学生像は次のとおりです。</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 看護・栄養・福祉のそれぞれの分野に明確な目的意識と意欲、情熱を持っている学生 ● 十分な基礎学力を備え、論理的思考能力を貴ぶ学生 ● 人間理解に基づく保健・医療・福祉を学び、その成果を広く地域や世界に発信する意欲と創意にあふれる学生 ● 豊かな感性を育み、様々な人とコミュニケーションできる能力、人を支援する心を身に付けたい学生

2-(1) 看護学科

教育目標	看護学科は、人々が健康で豊かなその人らしい人生が実現できるように、看護の専門知識と技術を活かして、地域におけるあらゆる健康レベルの人々（家族・集団・地域）の生涯を通じた健康を支援し地域社会に貢献できる看護専門職の育成を目指しています。
D P	<p>教育目標に基づき、本学科では次の能力を身に付け、かつ卒業の要件を満たした者に学位を授与します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 看護の専門知識・技術を用いて、人々の生涯にわたる多様な健康レベルの人々の健康課題を科学的・論理的に判断し、解決方策を提案できる能力を身に付けている。 ● 豊かな教養と人間理解を基盤にしたヒューマン・ケアリングが実践できる能力を身に付けている。 ● 保健医療福祉チームにおける看護の役割を理解し、連携・協働できる能力を身に付けている。 ● 看護専門職としてのアイデンティティを形成し、専門職業人の持つべき知識・価値観・倫理観を自ら継続・発展させていく能力を身に付けている。 ● グローバルな視点を持ち、将来は看護の実践・教育・研究領域におけるリーダーやスペシャリストとして社会に貢献できる能力を身に付けている。
C P	<p>本学科は、D Pに掲げる人材を育成するため、次のような教育課程を編成しています。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1 1・2年次の共通教育科目の履修を通して、人間や社会を理解するための素地となる豊かな教養と倫理観を身に付け、専門基礎へ導入を図るための基盤を育成します。それに加えて、科学的思考の基盤となるクリティカルシンキングやグローバル化に対応した看護活動ができる基礎的な知識と技術を育成します。 2 3年次はライフステージ（母性・小児・成人・老年）別の特性を踏まえた看護や精神保健看護、在宅看護、看護政策、マネジメントについて履修し、主要な健康課題と健康増進のための理論を修得します。その上で、健康問題を持つ個人・集団・地域を対象に看護診断をし、解決に必要な知識と技術を育成します。 3 3年次後期から4年次前期に、各領域別の臨地実習を行います。この実習を通して人間の尊厳や多様性を学び、科学的根拠に基づくアセスメント及びヒューマンケアリングが実践できる基盤を育成します。 4 4年次には統合実習並びに卒業研究を行います。これまでに学んだ専門的知識や実践力を広い視点で統合し、研究的な方法を用いて健康課題を特定し解決策を論理的に説明できる能力を育成し、保健医療分野でのリーダーとして必要な基盤を育成します。 5 本学科は、看護師国家試験受験資格を満たす科目を卒業要件とし、一部の者には助産師国家試験受験資格に必要な科目が選択できるように配置しています。
A P	<p>教育目標から本学科が求める学生像は次のとおりです。</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 人間や健康、人々の暮らしに強い関心を持っている学生 ● 他者を思いやる気持ちがあり、人と関わることが好きで共に成長したいと考える学生 ● 看護の多様な側面を学ぶ上で必要な基礎学力があり、探究心を持つ学生 ● 何事にも前向きに取り組み、チャレンジ精神がおう盛な学生 ● 看護のプロフェッショナルとして地域や国際社会に貢献したい学生

2-(2) 栄養学科

教育目標	<p>栄養学科は、超高齢社会の到来や生活習慣病予防が重要視されている現代社会において、食と健康の相互関係を科学理論によって理解し、未知なる事象の解明に向けて研究する姿勢を身に付け、栄養学を人の健康の維持・増進、病気の予防・治療へと応用し、広く地域社会に貢献できる人材の育成を目指しています。</p>
D P	<p>教育目標に基づき、本学科では次の能力を身に付け、かつ卒業の要件を満たした者に学位を授与します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 食と健康の専門家として必要な基本的知識と技術を身に付けている。 ● 多様な対象者に対して、科学的思考に基づいて適切かつ高度な食・栄養支援を実践する技術を身に付けている。 ● 専門分野における問題発見・解決能力を身に付けている。 ● グローバルな視野を持って地域に情報発信できる能力を身に付けている。 ● チーム医療の重要性を理解し、他職種や患者とのコミュニケーションを円滑に進める能力を身に付けている。
C P	<p>本学科は、D Pに掲げる人材を育成するため、次のような教育課程を編成しています。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1 1年次から2年次までに共通教育科目を履修します。その履修を通して広範な知識の修得と異文化理解によるグローバルな視点や自然科学での科学的視点を含めた豊かな教養と高い倫理観の涵養、食と健康の専門家として活躍できるための学修基盤を育成します。 2 1年次から2年次までに学部教育（専門基礎分野）科目を履修します。この履修を通じて、食と健康の専門家としての健康・健康管理、医学領域、食品・加工・衛生・調理における知識や技術の基本的能力を育成します。 3 3年次には学部教育（専門分野）科目を履修します。この履修を通じて、専門職業人として必要な高度な専門的知識を修得し、総合的能力、コミュニケーション能力、サービスマネジメント能力、栄養指導能力、教育能力を備え、他の医療専門職と協働して、リーダーシップを発揮できる力を育成します。 4 4年次には卒業研究を履修します。この履修を通じて、研究課題に対して主体的に取り組み、科学的に探求する態度、論理的に思考する態度、計画的に実行する態度を身に付け、問題解決能力、実践能力を育成します。 5 教職教育科目を履修することで、教育の意義や食教育実践に必要な知識と技術を育成します。 6 共通教育科目及び学部教育科目の中から履修し、卒業時には栄養士免許並びに管理栄養士国家試験受験資格が取得可能となるほか、食品衛生管理者並びに食品衛生監視員の任用資格の取得が可能となります。また、教職教育科目を修得することで栄養教諭一種免許状が取得可能となります。
A P	<p>教育目標から本学科が求める学生像は次のとおりです。</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 自然科学に関心を持ち、食物と人の健康との関係について科学的に理解・探究しようとする学生 ● 栄養学分野の研究に取り組み、これを発展させて社会に還元しようとする意欲のある学生 ● 様々な人とコミュニケーションができ、真しな態度と思いやりの気持ちを持って人と向き合える学生 <p>本学科の専門教育を受けるためには、高等学校で「化学」や「生物」などの自然科学の基礎をしっかりと学習することが望まれます。また、専門職としての管理栄養士には、豊かな人間性、コミュニケーション能力、倫理観などが必要になりますので、高校生活の中でこれらの素養を磨くことが大切です。</p>

2-(3) 保健福祉学科

<p>教育目標</p>	<p>保健福祉学科は、深い教養と豊かな人間性を兼ね備え、福祉的視点と方法に基づいて、子ども、障害者、高齢者等すべての人々の自立と自己実現を支援し、健康と幸福の増進に寄与することのできる人材を育成することを目指しています。社会福祉学専攻では、特に社会における多様な福祉課題に対処する問題解決能力と共感力をもった人材を、また子ども学専攻では、教育的視点と方法を併せ持った、子どもの育ちと学びに関わる人材を育成することを目指しています。</p>
<p>D P</p>	<p>教育目標に基づき、本学科では次の能力を身に付け、かつ卒業の要件を満たした者に学位を授与します。</p> <p><両専攻に共通した能力></p> <ul style="list-style-type: none"> ● 多様な文化や価値観を受け容れ、福祉的・国際的視野を持って問題解決できる力を身に付けている。 ● 自ら学び続ける姿勢と習慣を持ち、保健福祉学の創造に貢献できる力を身に付けている。 <p><社会福祉学専攻></p> <ul style="list-style-type: none"> ● 社会福祉学の基盤となる、人間、健康、社会に関する幅広い知識と論理的な思考力を身に付けている。 ● 社会福祉学と健康科学の知識・理論を身に付けている。 ● ソーシャルワークの方法及び実践的な支援技術を身に付けている。 <p><子ども学専攻></p> <ul style="list-style-type: none"> ● 子ども学の基盤となる、人間、健康、社会、教育における幅広い知識と論理的な思考力を身に付けている。 ● 子どもに対して具体的・実践的な指導・支援ができる力を身に付けている。 ● 子どもの育ちと学びを家庭や地域との関係の中で捉える力を身に付けている。
<p>C P</p>	<p>本学科は、D Pに掲げる人材を育成するため、次のような教育課程を編成しています。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1 社会福祉学専攻、子ども学専攻の2専攻を設置しています。 2 両専攻の学生が履修する科目として、「保健福祉学Ⅰ・Ⅱ」「社会福祉原論」「人体の構造と機能Ⅰ」など保健福祉学や関連諸科学の基礎知識を修得するための科目を設置しています。 3 1年次から2年次までに共通教育科目を履修します。その履修を通して広範な知識の修得と異文化理解によるグローバルな視点、深い教養と豊かな人間性や高い倫理観の涵養、専門職業人としての基本的な能力を育成します。 4 1年次は「入門ゼミナール」、2年次は「基礎ゼミナール」、3年次は「専門ゼミナール」、4年次は「研究ゼミナール（卒業研究）」を履修します。この履修を通じて、問題の解決力や実践力を身に付け、保健福祉学の創造に貢献できる能力を育成します。 5 1年次から4年次まで、専門職として必要な専門科目を履修します。この履修を通じて、専門職業人として必要な高度な専門知識と論理的思考力を修得します。 <p>社会福祉学専攻では、ソーシャルワークの方法や実践的な支援技術、介護支援の方法や技術、諸外国の保健福祉制度・政策を学び、多様な福祉課題に対処できる能力を育成します。</p> <p>子ども学専攻では、子どもや家庭・地域を理解し指導・支援するための福祉と教育の方法や実践的な支援技術を学び、子どもの育ちと学びを支えるための能力を育成します。</p>

	<p>6 社会福祉学専攻においては、共通教育科目及び学部教育科目の中から履修し、卒業時には社会福祉士及び介護福祉士国家試験受験資格取得が可能となります。</p> <p>7 子ども学専攻においては、共通教育科目及び学部教育科目の中から履修し、卒業時には幼稚園教諭一種免許状及び保育士資格取得が可能となります。</p>
A P	<p>教育目標から本学科が求める学生像は次のとおりです。</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 豊かな人間性を育み、支援を求める人々に対して、共感、共生しようとする学生 ● 豊かな感性と科学的な思考力や分析力を養い、問題解決能力を高めようとする学生 ● 援助対象者の成長や自立支援を促す専門的援助技術の修得に努める学生 ● 21世紀の福祉社会や地域社会に貢献する意欲のある学生

3 情報工学部

教育目標	<p>情報工学とは、情報の伝送・認識・処理・利用にかかわるハードウェアとソフトウェアの技術を研究開発するための学問です。情報工学部は、情報技術を活用して、人間及び自然との調和を図りながら高度情報化社会の持続的発展に貢献できる技術者の育成を目指しています。</p>
D P	<p>教育目標に基づき、本学部では次の能力を身に付け、かつ卒業の要件を満たした者に学位を授与します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 情報工学とそれに密接に関連する工学と技術，すなわち一つは通信工学，電子工学と結びつく情報通信工学，一つは機械工学，インタフェース工学と結びつく情報システム工学，いま一つは人間工学，機器設計工学と結びつく人間情報工学のいずれかを身に付けている。 ● 論理的思考に基づいた，日本語による記述力，口頭発表力，討議能力，技術英文の読解能力，外国語によるコミュニケーション能力及びグローバルな視点を身に付けている。 ● 情報工学の技術者に求められる高い倫理観，多面的な思考力，それらに培われた実行力や行動力を身に付けている。 ● 得られた知識を融合的に活用して社会の発展に貢献できる能力を身に付けている。 ● 工学・技術の発展と裾野の広がりに関心をもち，新しい知識や価値観を継続的に学修，吸収する態度を身に付けている。
C P	<p>本学部は、D Pに掲げる人材を育成するため、次のような教育課程を編成しています。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1 共通教育では、グローバル化や個々の学生の価値観の多様性に対応できるよう、選択科目を多く設けています。 2 専門基礎科目である情報系科目については、3学科横断型の科目配置を行い、教育の均等化と統一化を図っています。 3 専門科目については、各学科のカリキュラム・ポリシーに準拠した独自の教育課程を用意しています。 4 実験・演習を重視し、与えられた課題に対する工学的解決の能力を涵養します。 5 1年を通じて卒業研究を行い、研究対象に関する深い知識の獲得や、自らが発見した問題を解決に導くための計画立案・遂行能力を養います。
A P	<p>教育目標から本学部が求める学生像は次のとおりです。</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 情報工学の新しい分野の発展に興味を抱いている学生 ● 人間を取り巻く環境によく適合する情報社会を形づくりに貢献する意欲を持つ学生 ● 新技術・知識の創出に関心をもち、地域と世界に向けて情報発信したいと考える学生 <p>急速に発展している高度情報化社会を支えるインターネット・コミュニケーション技術を用いて、現状の社会を改革し発展させていく夢を持った学生の挑戦を期待しています。</p> <p>本学部の専門教育を受けるためには、高等学校で標準的な科目を履修し、特に以下の学力を身に付けていることが望まれます。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1 情報工学部入学者選抜試験《一般入試》個別学力検査「数学」で指定された範囲の基礎知識を有していること。 2 「物理」に関する基礎知識を有していること。

3-(1) 情報通信工学科

教育目標	<p>情報通信工学科は、日々進歩し続ける情報通信技術（ICT）を支えている情報工学、通信工学、電子工学の3つの学問領域を共通の基盤として、各種情報システムの知能化等に必要となるソフトウェア技術及びシステムの超高速化等に欠かせないハードウェア技術を有し、情報通信技術（ICT）の利用者視点を理解するとともに、グローバルな視野に立って社会に貢献できる人材の育成を目指しています。</p>
D P	<p>教育目標に基づき、本学科では次の能力を身に付け、かつ卒業の要件を満たした者に学位を授与します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 情報工学・通信工学・電子工学の幅広い知識と応用力を身に付けている。 ● 技術者倫理や社会環境を理解したうえで、情報通信技術（ICT）に関する知識を活用して現実の問題に柔軟に対処する能力を身に付けている。 ● 論理的な記述力や発表能力及び社会に寄与するためのコミュニケーション能力を身に付けている。
C P	<p>本学科は、D Pに掲げる人材を育成するため、次のような教育課程を編成しています。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1 1年次及び2年次を中心に、4年間で共通教育科目を履修します。その履修を通してグローバルな視点を持った豊かな教養と高い倫理観を涵養するとともに、専門教育の準備を行います。 2 1年次から段階的に学部教育科目を履修します。 <ul style="list-style-type: none"> ・ 数学系の科目をはじめとして情報工学、通信工学、電子工学の3分野に共通する基礎知識を修得する、 ・ 情報系技術者に求められる基礎知識を修得する、 ・ 情報工学、通信工学、電子工学の各分野の専門知識を修得するとともに、3分野にわたる幅広い知識をバランスよく修得し、問題解決に応用できる能力を修得する、 <p>ことを目的とした講義、実験・演習のカテゴリーを配置しています。</p> 3 全ての年次において実験・演習科目を履修します。この履修を通して、情報通信技術（ICT）に関する与えられた課題や自らが発見した問題を解決に導くための計画立案・遂行能力を育成するとともに、技術文書作成能力及び発表能力を育成します。 4 4年次には卒業研究を履修します。この履修を通じて、情報通信技術（ICT）に関する最先端の研究テーマを設定し、1年にわたる系統的な研究指導を受けることにより技術英文読解能力、技術文書作成能力、口頭発表能力等のコミュニケーション能力を育成し、継続的な学修態度を涵養します。
A P	<p>教育目的から本学科が求める学生像は次のとおりです。</p> <ul style="list-style-type: none"> ● インターネットを中心とする情報通信技術を学びたい学生 ● コンピュータやネットワークを構成する電子機器やその特性を学びたい学生 ● 情報技術を利用した新しいソフトウェアの創造に興味のある学生 ● 未来の情報通信技術に対する夢や希望を持っている学生

3-(2) 情報システム工学科

教育目標	<p>情報システム工学科は、コンピュータの発展に貢献できる情報工学，力学に基礎を置くものづくりのための機械工学，人間と機械やコンピュータを結びつけるインタフェース工学などの学問を身に付け，領域横断型のエンジニアとしてのセンスを持って，新たな工学的価値の創出に積極的に参加できる人材の育成を目指しています。</p>
D P	<p>教育目標に基づき，本学科では次の能力を身に付け，かつ卒業の要件を満たした者に学位を授与します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 多くの機器設計の基盤領域である情報工学，機械工学，インタフェース工学に関する幅広い知識と応用力を身に付けている。 ● コンピュータや機械をインテリジェント化した機器や実用的なソフトウェアシステム，組込みシステム，機械システムを設計する基礎能力を身に付けている。 ● 社会の変化を多面的な視点から受け止めつつ物事に柔軟に対応できる能力を身に付けている。 ● 技術が人間・社会・自然に与える影響を正しく認識し，技術者として社会への貢献と責任の自覚をもって行動できる能力を身に付けている。 ● 論理的思考に基づいた，日本語及び外国語によるコミュニケーション能力を身に付けている。 ● 問題の探求，解決等を自主性と協調性とグローバルな視点を持って，創造性を発揮して計画的に遂行できる能力を身に付けている。
C P	<p>本学科は，D Pに掲げる人材を育成するため，次のような教育課程を編成しています。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1 共通教育では，幅広い分野の学問を通じて豊かな教養を涵養するとともに，多面的思考力及び外国語によるコミュニケーション能力を育成し，技術者としてグローバルに活躍できるための学修基盤を形成します。 2 学部教育は，工学基礎，情報工学基礎，情報工学，機械工学，インタフェース工学及び総合・創造のカテゴリーで構成しています。 <ul style="list-style-type: none"> ・ 工学基礎及び情報工学基礎では，工学及び情報工学のコアとなる基礎知識を養成します。 ・ 情報工学，機械工学及びインタフェース工学では情報工学，機械工学，インタフェース工学に関する幅広い知識と応用力，そして機器設計の基礎能力を養成します。 ・ 総合・創造では，実験・演習により，講義で学んだ知識を応用する能力，課題を自主性と協調性を持って計画的に遂行する能力，レポート作成やプレゼンテーションなどの技術的コミュニケーション能力を養成します。特に，卒業研究では，最先端の研究を通じて，知識を融合的に活用し，かつ独創性を発揮して問題の解決に取り組み，社会の発展に貢献できる能力を養成します。
A P	<p>教育目標から本学科が求める学生像は次のとおりです。</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 情報技術を積極的に活用したものづくりに興味のある学生 ● 情報工学・機械工学・インタフェース工学を幅広く学びたい学生 ● 人間の生活や社会活動を支援するため，インテリジェント型機器やシステムの設計能力を獲得したい学生 ● 情報工学と他の様々な専門領域を結ぶ領域横断型の新技術を創出したい学生

3-(3) 人間情報工学科

教育目標	<p>人間情報工学科の教育研究のキーワードは「人間中心の設計思想」です。身体とその「うごき」を扱う人間系のサイエンス並びに情報・コミュニケーションと密接に関連する情報系のエンジニアリングを融合的に学び、使う人の様々な特性やニーズの視点に立った「もの」や「サービス」の設計能力を身に付けた人材の育成を目指しています。</p>
D P	<p>教育目標に基づき、本学科では次の能力を身に付け、かつ卒業の要件を満たした者に学位を授与します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 人体機能と人間の動作・行動を解析する能力を身に付けている。 ● 地域や社会、自然などの人間環境の変化を認識する能力を身に付けている。 ● 人間の感性や生活に適合したソフトウェアを設計する能力を身に付けている。 ● 人体機能と環境変動の特性をシステム設計に活かす能力を身に付けている。 ● 他者と協調して多様な課題を柔軟にかつグローバルな視点で解決できる能力を身に付けている。
C P	<p>本学科は、D Pに掲げる人材を育成するため、次のような教育課程を編成しています。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1 1年次から2年次までは共通教育科目を中心に履修します。価値観の多様性、学問の体系性と総合性、基礎知識の活用、コミュニケーションスキルなどの教育を通じて、多様かつグローバルな視点で問題解決できる能力の基盤を育成します。 2 学部教育科目（専門基礎科目及び専門科目）は1年次から配置し、学年進行に伴い深化と分化、さらに体系化が図れるように編成しています。 3 人体機能と人間の動作・行動を解析する能力、人間環境の変化を科学的に認識できる力等を育てるために、応用数学、人間系の科学・工学の分野の科目を履修します。 4 人体機能と環境変動の特性をシステム設計（機器・ソフトウェアの設計）に活かす能力を育てるために、情報系の工学、機器の設計の分野の科目を充実させています。 5 修得した知識をもとに、他者と協調して多様な課題の解決能力を養うために、実学的な実験・演習（インターンシップを含む。）系の科目を関連科目の進行にあわせて重点的に履修します。 6 卒業研究では、研究対象に関する深い知識の獲得や自らが発見した問題を合理的に解決に導くための研究デザイン力・研究遂行能力を養います。
A P	<p>教育目標から本学科が求める学生像は次のとおりです。</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 人体機能の巧みさを工学の視点から解明したい学生 ● 人体機能と人間環境の調和を考慮した「もの」や「サービス」を開発したい学生 ● 情報工学の視点で地域社会の発展や国際社会との連携協力に参加し、貢献したい学生

4 デザイン学部

教育目標	<p>デザイン学部は、情報化、グローバル化など刻々と変化する社会にあつて、社会動向を的確に把握することにより課題を自ら発見し、それをデザインによって表現・解決することを通じて、豊かで新しい生活と文化の形成に必要なデザイン専門力とマネジメント能力を有する、地域と世界に貢献できる人材の育成を目指しています。</p>
D P	<p>教育目標に基づき、本学部では次の能力を身に付け、かつ卒業の要件を満たした者に学位を授与します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 人間・社会・自然に関する十分な情報分析ができ、それを応用できる構成力及びデザイン力を身に付けている。 ● 豊かな教養と高い人間性を基礎として、新たな生活と文化の価値を創造する能力を身に付けている。 ● 発想・想像力、課題発見・解決力及び企画提案力を身に付けている。 ● 国際化に対応できる外国語によるコミュニケーション能力及びグローバルな視点を身に付けている。 ● 常に知的好奇心を持ち、学習継続意欲を身に付けている。
C P	<p>本学部は、D Pに掲げる人材を育成するため、次のような教育課程を編成しています。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1 カリキュラムは、共通教育科目と連携を図るべく編成されており、幅広い教養とコミュニケーション能力及びグローバルな視点を身に付けるための共通教育科目と、両学科に必要とされるデザイン基礎を中心とした科目編成をしています。 2 2年次からは両学科とも領域に分かれて、新たな文化価値を創造するために必要な学科専門教育科目及び講義と演習が体系化された領域専門教育科目を履修します。 3 学科専門教育科目では、各自の志向に基づき、自主的に選択できる演習科目を中心として編成しています。企画提案力に必要な発想から情報分析、課題解決までのプロセスを身に付けるために、領域専門教育科目は複数の専門領域が用意されており、横断的に学ぶこともできるよう編成しています。 4 自ら発見した課題解決のために1年間を通じて卒業研究を履修します。
A P	<p>教育目標から本学部が求める学生像は次のとおりです。</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 様々な科学を学ぶことによって、人間・自然・社会の関係性を主体的に分析・考察し、課題に取り組む力を身に付け、デザインによる解決にいかしたい学生 ● 自ら発見した課題をデザインによって表現し、解決するために、感性と知性の融合によるデザイン発想力・技術力・表現力を身に付けたい学生 ● 社会における課題を洞察し、新たな生活・文化の価値を創造するため、デザインによる解決策を考察し企画提案する力を身に付けたい学生

4-(1) デザイン工学科

教育目標	<p>デザイン工学科は、人間・社会・自然の関係性に十分配慮し、持続発展が可能な社会実現のため、デザインの専門力とマネジメント能力により、地域社会や産業界に貢献できるデザイナーや建築家の育成を目指しています。</p>
D P	<p>教育目標に基づき、本学科では次の能力を身に付け、かつ卒業の要件を満たした者に学位を授与します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ● それぞれ専門領域における必要な論理的思考力及びデザイン基礎力を身に付けている。 ● 持続発展が可能な社会実現のため、豊かな生活を創造できる能力を身に付けている。 ● 発想・想像力、課題発見、解決力を総合的に活かし、グローバルかつローカルに活躍し得る企画・提案能力とコミュニケーション能力を身に付けている。
C P	<p>本学科は、D Pに掲げる人材を育成するため、次のような教育課程を編成しています。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1 十分な情報分析・構築力及びデザイン基礎力をベースとして、発想・構想力、課題発見・解決力及び企画提案力を涵養し、グローバルな視点を持って地域社会や産業界に貢献できるデザイナーや建築家の育成を目的に、「製品・情報デザイン領域」と「建築・都市デザイン領域」の2つの領域を置いています。 2 1年次は、共通教育科目及び造形デザイン学科と共通となる「学部基礎教育科目」を学び、広範な知識や理論を養います。また、「学科専門教育科目」では、両領域に共通するデザイン技法などの科目を提供します。 3 2年次からそれぞれの領域に進み、「学科専門教育科目」と並行して各領域の独自性を織り込んだ「領域専門教育科目」を学びながら、専門の知識・技能修得と実践的かつ論理的な思考力を身に付けると同時に、地域社会における課題を発見し解決できる能力を養います。各デザイン領域においては、段階的かつ横断的な科目選択ができるようにキャリア・ポートフォリオ（進路分野別）を準備し、専門領域への科目選択のガイドラインを提供します。 <ul style="list-style-type: none"> ・ 製品・情報デザイン領域では、プロダクトデザイン及び情報デザインの講義・演習を横断的に選択できるよう編成し、将来のキャリアプランへの判断が早期かつ柔軟にできるよう編成しています。 ・ 建築・都市デザイン領域では、建築計画・デザイン・技術・法規から都市計画に至るまで、多岐にわたる分野を総合的に学ぶための体系的なカリキュラムを準備しています。また、一級建築士・二級建築士・木造建築士の受験資格を得るために必要な選択科目を提供します。 4 将来の進路に関して、1年次より卒業生やプロデザイナーによる「フレッシュマン就業力セミナー」や「キャリアゼミナール」などを設けています。3年次以降では、市役所、企業やデザイン事務所でのインターンシップやデザイン実習、産官学連携授業など社会との接点の機会を提供します。 5 4年次には、1年間を通じて卒業研究に取り組みます。卒業研究は3年次までのカリキュラムの集大成として位置付けられており、中間発表会や最終発表会では他領域の教員も参加して活発な意見交換を行います。
A P	<p>教育目標から本学科が求める学生像は次のとおりです。</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 学習による豊かな創造力と柔軟な思考力・構想力の鍛錬を通じて、主体的に価値観を構築し、これに基づいたシステムや空間、モノのデザイン提案により、社会と産業に貢献したい学生 ● 日本と諸外国の文化や芸術の理解を通じて育んだ感性と、人間・社会・自然の関係性の調和を図る科学技術とを融合したデザインの創造に取り組みたい学生

	<ul style="list-style-type: none"> ● 社会ニーズを洞察し、課題を発見しその解決過程をマネジメントして、構想・制作・企画提案に取り組み、より豊かで新しい生活と文化の価値を創造したい学生 <p>本学科の専門教育を受けるためには、高等学校で「美術・工芸」に関心を持ち、「外国語」、「国語」、「理科」、「数学」等の基礎学力を有していることが望まれます。</p>
--	---

4-(2) 造形デザイン学科

教育目標	<p>造形デザイン学科は、デザインによって地域特性を考慮した問題及びグローバルな視点で課題解決に取り組み、人間・社会・自然の関係性に十分配慮し地域社会や国際社会に貢献できるデザイナー及び造形のスペシャリストの育成を目指しています。</p>
DP	<p>教育目標に基づき、本学科では次の能力を身に付け、かつ卒業の要件を満たした者に学位を授与します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ● それぞれの専門領域に関する十分な知識と情報分析・構築力及びデザイン基礎力を身に付けている。 ● 個々の自由な発想に基づき、新たな視点と文化の価値を創造する能力を身に付けている。 ● ビジュアル・造形力を活かしたコミュニケーションデザインによる企画提案力を身に付けている。
CP	<p>本学科は、DPに掲げる人材を育成するため、次のような教育課程を編成しています。</p> <ol style="list-style-type: none"> あらゆる分野に求められる快適で美しいデザイン環境を創り出すため、十分な情報分析・構築力及びデザイン基礎力をベースとして、発想・構想力、課題発見・解決力及び企画提案力を涵養し、グローバルな視点を持って社会に貢献できる人材育成のために、「ビジュアルデザイン領域」と「造形デザイン領域」の2つの領域を置いています。 1年次は、多様なデザイン理論や、デザイン基礎科目群を学びます。 また、プレゼンテーションの基礎となる理論や演習、デザイン発想・表現の基礎となる演習、実習科目に取り組み総合的に基礎力を養います。 2年次からそれぞれの領域に進み、多様な専門講義科目を学ぶとともに、さらに充実した演習、実習科目への取り組み、豊かな知識を基にデザイン力とプレゼンテーション力を養います。 また、演習などではチーム編成による課題においてコミュニケーション力も育みます。 <ul style="list-style-type: none"> ・ ビジュアルデザイン領域では、グラフィック、写真、映像、CG、Webなど、さまざまな分野を組み合わせたビジュアルデザインを学修するとともに、社会に通じるデザインビジネス展開に向けた企画提案を行います。 ・ 造形デザイン領域では、木工、陶磁、染織、印刷など伝統技術に芸術的視点を意識した新しい発想を組み入れ、さらに立体、空間、メディアを活かし、生活文化に貢献できる企画提案を行います。 高年次では、著名デザイナーの特別講義や演習、インターンシップやデザイン事務所、企業での学外実習、チームを組んで学内・学外イベントへの出展など、実社会を体感する機会を多く設け、実社会に通用する力を養います。 4年次では、自ら発見した課題解決のために1年間を通じて卒業研究を履修します。また、学外で研究成果を発表する場を設定しています。

<p style="text-align: center;">A P</p>	<p>教育目標から本学科が求める学生像は次のとおりです。</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 豊かな人間性と美を見極める感性，柔軟で論理的な思考力及び社会に企画提案できるデザインマネジメント力を身に付けたいと考える学生 ● 新たな時代の社会的ニーズを創造・開拓し，トータルなビジュアルコミュニケーションデザインや，アートとクラフトを融合した生活と文化の価値を創造したいと考える学生 ● 企画提案力に裏打ちされたコミュニケーション力とデザインスキル，デザイン力がいかせる分野で地域社会に貢献したいと考える学生 <p>本学科の専門教育を受けるためには，高等学校で「美術・工芸」に関心を持ち，「国語」，「外国語」等における基礎学力を身に付け，自然科学や社会科学，歴史などの幅広い学問に取り組める準備をしておくことが望まれます。</p>
--	--

B 大学院ディプロマ・ポリシー、カリキュラム・ポリシー、アドミッション・ポリシー

- ※ 表における表記は次のとおり。
 ディプロマ・ポリシー（学位授与の方針）：D P
 カリキュラム・ポリシー（教育課程の編成・実施の方針）：C P
 アドミッション・ポリシー（入学者受入の方針）：A P

1 保健福祉学研究科

教育目標	保健福祉学研究科は、保健・医療・福祉分野における問題点を提起してそれを解決し得る研究能力を持つとともに、専門職としての高度な知識・技術を身に付けることにより、健康で夢の持てる地域社会の実現に貢献し得る人材の育成を目指しています。
D P	<p>教育目標に基づき、本研究科では次の能力を身に付け、かつ修了の要件を満たした者に学位を授与します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 保健・医療・福祉分野における問題点を発見し、それを理論的に解決できる研究能力を身に付けている。 ● 高度な知識と技術を備え、豊かな地域社会の実現に向けて指導者、実践者として活躍できる能力を身に付けている。 ● グローバルな視野を持った専門職として国際貢献できる能力を身に付けている。
C P	<p>本研究科は、D Pに掲げる人材を育成するため、次のような教育課程を編成しています。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1 広い視野に立って精深な学識を授け、専攻分野における研究能力とグローバルな視野並びに高度の専門性を要する職業等に必要能力を養うための博士前期課程と、専攻分野について研究者として自立して研究活動を行い、又はその他高度に専門的な業務に従事するに必要な研究能力及びその基礎となる豊かな学識並びにグローバルな視野を養うことを目的とした博士後期課程（保健福祉科学専攻）を置いています。 2 博士前期課程は、看護学の理論と技術を修得する組織的な教育研究を行い、看護技術やケアシステムに関連した諸問題を解決できる人材を育成する看護学専攻、栄養学の理論と技術を修得する組織的な教育研究を行い、食品の機能や臨床栄養などの人の健康に関連した栄養学的な諸問題を解決できる人材を育成する栄養学専攻及び保健福祉学の理論と技術を修得する組織的な教育研究を行い、保健福祉に関連した臨床や政策の諸問題を解決できる人材を養成する保健福祉学専攻の3専攻を置いています。 3 博士後期課程は保健福祉科学専攻からなり、看護・栄養・福祉のそれぞれの分野において高度の見識と、より専門的な視点から科学的にアプローチする研究を行うための3大講座を置いています。 4 カリキュラムは、それぞれの専攻のC Pに従って、講義・演習科目と特別研究から編成しています。
A P	<p>教育目標から本研究科が求める学生像は次のとおりです。</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 保健・医療・福祉分野における基本的な問題から応用的な問題を解決し得る国際的な研究者を目指す学生 ● 豊かな地域社会の実現に向け、官・民・産を問わず教育、研究機関で活躍する教育者、研究者を目指す学生 ● 高度の知識・技術を身に付けた専門職として、社会において指導的な実践者を目指す学生

1-(1) 看護学専攻（博士前期課程）

教育目標	看護学専攻は、学際的で高い看護の専門的知識と基礎的な研究能力を活かして、保健医療福祉分野における課題を解決し、国内外の看護における実践・教育・研究の場で社会のニーズに応え、貢献できる人材の育成を目指しています。
D P	<p>教育目標に基づき、本専攻では次の能力を身に付け、かつ修了の要件を満たした者に学位を授与します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ● ヒューマン・ケアリングと科学的根拠に基づく看護実践力を身に付けている。 ● 看護における現象を科学的根拠に基づいて説明し、課題を提起する能力を身に付けている。 ● 国際的・研究的視点を持ち看護の質向上に向けて貢献できる能力を身に付けている。 ● 看護のリーダーやスペシャリストとして、国内外で活躍できる能力を身に付けている。
C P	<p>本専攻は、D Pに掲げる人材を育成するため、次のような教育課程を編成しています。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1 看護学の教育・研究に必要な基礎的理論や研究技法及び外国文献の読解力を学修する「看護学専攻共通科目」と「基礎看護学」「発達看護学」「広域看護学」の各専門分野から構成しています。 2 幅広く保健医療福祉に共通する3専攻共通科目では、保健福祉学特論、災害援助特論・演習や国際コミュニケーション特論等を履修できます。 3 「基礎看護学」では、生命科学特論や基礎看護学特論等の講義・演習を通して、看護のエビデンス検証や確立を志向します。 4 「発達看護学」では、小児・母性・成人・老年期のライフステージ特有の看護に関する課題を探究し、人々の健康と豊かな人生を支援できる看護の方法論やシステム構築に貢献することを目指しています。 5 「広域看護学」では、公衆衛生看護学・在宅看護学・国際保健看護特論・精神保健看護学特論を履修し、生涯を通じた人々の心とからだの健康を学際的に探究し、グローバルな視点から根拠に基づく課題解決を図り、看護の質向上にむけて先導できることを目指しています。 6 「広域看護学」では、修士論文に加えて保健師国家試験受験資格を満たす科目を開講し、高度な実践力とリーダーシップを発揮して社会に貢献できる保健師を養成します。
A P	<p>教育目標から本専攻が求める学生像は次のとおりです。</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 看護を科学的、論理的に考究し、ヒューマン・ケアリングと科学的根拠に基づく看護の実践力を身に付けたい学生 ● 専門分野における知識や技術を高めるとともに研究開発能力を身に付けたい学生 ● 新しいケアの方法やシステム開発を目指す学生 ● グローバルな視点で看護実践と研究を志向するとともに国際貢献をしたい学生 ● 保健師として明確な目的意識を持ち、将来地域においてリーダーとして活躍したい学生

1-(2) 栄養学専攻（博士前期課程）

教育目標	<p>栄養学専攻は、食品の機能や臨床栄養などの人の健康に関連した栄養学的な諸問題を解決できる優れた専門性を備えるとともに、豊かな創造力と問題解決能力を身に付け、それぞれの領域で活躍できる人材の育成を目指しています。</p>
D P	<p>教育目標に基づき、本専攻では次の能力を身に付け、かつ修了の要件を満たした者に学位を授与します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 栄養学領域における理論と技術を身に付けている。 ● 人の健康に関連した栄養学的な諸問題を解決するための専門性や研究能力を身に付けている。 ● 栄養学領域における専門的な技術や知識を地域・世界に向けて発信できる能力を身に付けている。 ● 栄養士のリーダーとして、国内外で活躍できる能力を身に付けている。
C P	<p>栄養学専攻は、D Pに掲げる人材を育成するため、次のような教育課程を編成しています。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1 栄養情報学講座、食デザイン学講座、基礎栄養学講座及び食品栄養学講座を置き、教育研究を実施します。 2 栄養情報学講座では、情報解析技術を活用したデータ解析法と新しい理論構築を基に、近年急速に問題となってきた肥満、糖尿病、脂質異常症をはじめとする生活習慣病の予防と治療を目指した教育・研究並びにスポーツ栄養学の教育・研究を行い、栄養学の最先端の分野で活躍できる能力を育成します。 3 食デザイン学講座では、幼児、児童・生徒、高齢者の栄養指導や調理指導、あるいは一般消費者の食生活全般を対象にした食育において、デザインや色彩の手法を取り入れて効果を得るための教育・研究を行い、食デザイン学の分野のリーダーとして活躍できる能力を育成します。 4 基礎栄養学講座では、一連の生命現象を遺伝子、生体分子、個体、集団などのレベルごとに理解し、さらに未知なる理論を展開して発展させる力を養うための教育・研究を行い、栄養学の基礎と臨床を結ぶことができる能力、並びに栄養学分野の教育・研究機関にて活躍できる能力を育成します。 5 食品栄養学講座では、栄養学を基盤とした天然物化学、酵素化学、分子遺伝学的アプローチにより、新規機能性食品成分の発見や新たな機能性食品素材の開拓、さらに食中毒の原因解明や予防に基づく食品の安全性の評価方法を開発し、健康増進と疾病予防を目標とした安全かつ高機能を有する食品素材の探求を志向した教育・研究を行い、管理栄養士のエキスパートとして食品関連企業、教育研究機関や行政機関において先導的に活躍できる能力を育成します。 6 外国人による科目を設定しグローバルな視野を育成します。
A P	<p>教育目標から本専攻が求める学生像は次のとおりです。</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 栄養学関連の教育施設で教育・研究に携わることを目指す学生 ● 医療機関や保健福祉施設で治療栄養に携わる専門的管理栄養士を目指す学生 ● 栄養研究機関や医療栄養関連企業の栄養研究部門で試験・研究に携わることを目指す学生 ● 自治体などの保健施設で地域栄養活動に携わり、栄養指導などのコーディネータを目指す学生

1-(3) 保健福祉学専攻（博士前期課程）

教育目標	保健福祉学専攻は、保健福祉学の理論と技術を修得する組織的な教育研究を行い、保健福祉に関連した臨床や政策の諸問題を解決できる優れた専門性を備えた人材の育成を目指しています。
D P	<p>教育目標に基づき、本専攻では次の能力を身に付け、かつ修了の要件を満たした者に学位を授与します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 保健福祉領域における高度な知識、理論と技術及び論理性を身に付けている。 ● 保健福祉領域における諸問題を解決するための研究を計画・遂行・発表する基礎能力を身に付けている。 ● 生涯にわたって自己研鑽する姿勢と習慣を持ち、国内外の新しい問題に創造的に対応できる力を身に付けている。
C P	<p>本専攻は、D Pに掲げる人材を育成するため、次のような教育課程を編成しています。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1 政策科学講座，社会福祉支援学講座及び保健福祉支援学講座を置き，教育研究を実施します。 2 政策科学講座では，社会保障や児童・高齢者・障害者福祉分野等における制度，政策行政などに関する理論やデータの分析・評価方法を追求する科目を設置しています。 3 社会福祉支援科学講座では，児童，高齢者，障害者，病者のウェルビーイングを達成するための臨床的方法・技術の開発・評価及びそれらの理論化を追求する科目を設置しています。 4 保健福祉支援科学講座では，児童，高齢者，障害者など多様な人々の適応行動に関わる心理的・身体的特性の科学的な分析を基礎にした保健福祉実践につながる理論と方法を追求する科目を設置しています。 5 当該講座分野の理論と実践の前進に寄与しうる高度な研究成果を生み出すことができるよう，主指導教員を中心としながら段階的・系統的に研究指導を行います。
A P	<p>教育目標から本専攻が求める学生像は次のとおりです。</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 「やさしさ」，「思いやり」，「人間性」といった豊かな社会性と科学性を備え，保健福祉領域でのリーダーとして活躍したい学生 ● 保健福祉領域における専門職として明確な目的意識を持ち，高度な知識や技術及び論理性を基礎にして，科学的方法によって問題の解決に当たりたい学生 ● 高い挑戦意欲を持って，保健福祉領域の未開拓の領域の研究に情熱を燃やすことができる学生 ● グローバルな視点での保健福祉実践・研究に興味を持ち，国際貢献を果たしたい学生

1-(4) 保健福祉科学専攻（博士後期課程）

教育目標	保健福祉科学専攻は、人間の健康問題に関して、生命や栄養、看護・福祉など各方面からアプローチし、保健福祉科学に係る学問をさらに深化させることにより、保健福祉問題の解決策を提案できる高度な見識を備えた各専門職領域の実践者、指導者、研究者及び教育者の育成を目指しています。
D P	<p>教育目標に基づき、本専攻では次の能力を身に付け、かつ修了の要件を満たした者に学位を授与します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 保健福祉科学の学問体系の確立と発展に寄与し、学際的研究を自立して展開する能力を身に付けている。 ● 自らの得た成果を地域・世界に向けて発表するグローバルな情報収集及び発信能力並びに地域・国際社会で活躍できる能力を身に付けている。 ● 保健福祉科学の研究に対する理解に基づいた高度な倫理性を持ち、科学的基盤に基づいて研究若しくは教育を実践できる能力を身に付けている。
C P	<p>本専攻は、D Pに掲げる人材を育成するため、次のような教育課程を編成しています。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1 保健福祉に関わる学問をさらに深化させ、看護・栄養・福祉のそれぞれの分野において高度の見識と、より専門的な視点から科学的にアプローチする研究を行うために、本専攻に看護学大講座、栄養学大講座、保健福祉学大講座の3大講座を置いています。また、外国人を担当教員とし、英語で講義する科目の設定並びに海外協定校との共同研究の実施により、グローバル教育を行います。 2 看護学大講座では、看護実践を通して生じる諸現象やケアそのものを科学的に解明していくため、慢性疾患患者やがん患者及びその家族が抱える諸問題や、高齢者等のケアニーズに対応する看護システムやケア開発、看護の質向上に資する教育・研究を行います。教育課程は基礎看護学、成人看護学、小児看護学、母性看護学、地域看護学、精神看護学の各分野の講義並びに博士論文指導を中心とした看護学特別研究からなります。 3 栄養学大講座では、食事に伴う栄養現象を分子生物学的アプローチにより解明し、病気の予防に活かすため、食品中の新規有効成分の解明、食品の安全性の追求、慢性疾患における代謝調節系の役割の解明を目指した研究を行います。教育課程は分子生物学、栄養科学、食品科学、病原微生物学の各分野の講義並びに博士論文指導を中心とした栄養学特別研究からなります。また、外国人による科目を設定しグローバルな視野を育成します。 4 保健福祉学大講座では、児童、障害者、高齢者を主な対象として、その自立支援に関する研究を行います。教育課程は、家族保健福祉学、児童保健福祉学、高齢者保健福祉学、障害者保健福祉学、地域保健福祉学、国際保健福祉学の各分野の講義並びに博士論文指導を中心とした保健福祉学特別研究からなります。
A P	<p>教育目標から本専攻が求める学生像は次のとおりです。</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 人間の健康に関する諸問題を解決するために、専門の知識や技術、高度な学問的見識を修得し、自立して研究できる研究者を目指す学生 ● 地域における保健福祉問題を掘り起こして、その対策を立案して、地域における制度や計画作りに参加できるリーダーシップを持った研究者を目指す学生 ● 教育機関や企業、各種研究機関において自立して高度な教育研究に取り組める教育者及び研究者を目指す学生

2 情報系工学研究科

教育目標	<p>情報系工学研究科は、情報工学部における学士課程の教育目標の延長線上にその教育目標を置き、情報技術を活用して、人間及び自然との調和を図りながら高度情報化社会の持続的発展に大いに貢献できるグローバル人材の育成を目指し、博士前期課程と博士後期課程にそれぞれシステム工学専攻を置いています。</p>
D P	<p>教育目標に基づき、本研究科では次の能力を身に付け、かつ修了の要件を満たした者に学位を授与します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 情報工学とそれに密接に関連する工学について、高度な専門性と技術を身に付けている。 ● 得られた知識を融合的に活用して、新たな技術開発・理論展開を持って社会の発展に貢献できる能力を身に付けている。 ● 技術者に求められる高い倫理観、多面的な思考力、それらに培われた実行力や行動力を備え、自身の専門分野でリーダーシップを発揮できる能力を身に付けている。
C P	<p>本研究科は、D Pに掲げる人材を育成するため、次のような教育課程を編成しています。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1 システム工学という専攻名のもと、連携性のある教育・研究体制を敷き、個々の学生が望む価値の多様性に対応できるように、選択科目を多く設けています。 2 博士前期課程では、修士の学位を取得することを目的として、情報工学及びその関連分野である電子情報通信工学、機械情報システム工学、人間情報システム工学の3つの領域を専攻内に設け、研究分野に応じた教育・研究ができるようにしています。 3 博士後期課程では、博士の学位を取得することを目的として、情報工学及びその関連分野である電子情報通信工学、機械情報システム工学、人間情報システム工学の3つの領域を専攻内に設け、研究分野に応じたより深い教育・研究ができるようにしています。 4 カリキュラムは、それぞれの課程のカリキュラム・ポリシーに従って、講義演習科目と特別研究から編成されています。いずれの課程においても教員による活発な議論と研究指導に加え、研究科として、また他研究科とも協力してグローバルな幅広い視野と高い応用や研究スキルを涵養します。
A P	<p>教育目標から本研究科が求める学生像は次のとおりです。</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 情報処理、情報通信、機械システム、人間工学などの分野において、これらに関する理論や技術を深く修得し、急速に発展する高度技術社会に貢献することに情熱を傾けたい学生 ● 現在、情報工学についての知識は十分ではなくとも、今まで培ってきた専門分野に、情報工学関連技術を取り込み活用・発展させようとの希望を抱いている学生 ● 急速に進歩し、変化する産業社会からの多様な要請に応えるべく、既存の枠組みにとらわれない総合的かつ先端的な技術を修得し、産業社会に貢献しようとする学生

2-(1) システム工学専攻（博士前期課程）

教育目標	<p>システム工学専攻は、研究者あるいは技術者の立場から、高度情報化社会の中核となって産業社会の発展を支えていく人材、幅広い技術的基盤を基に「実システム」の創造的な設計ができる人材、豊かな人間性と倫理観を兼ね備えた人材、環境変化や産業構造の変化に柔軟に適応できる判断力とコミュニケーション能力を持つグローバル人材の育成を目指しています。</p>
D P	<p>教育目標に基づき、本専攻では次の能力を身に付け、かつ修了の要件を満たした者に学位を授与します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 工学に対する専門的な知識と応用力を身に付けている。 ● 現実の複雑かつ困難な問題に柔軟に対処し、解決できる能力を身に付けている。 ● 急速に発展する高度な技術社会をリードできる研究能力を身に付けている。
C P	<p>本専攻は、D Pに掲げる人材を育成するため、次のような教育課程を編成しています。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1 情報工学とそれに関連する工学分野の急速な発展に対応できるように、電子情報通信工学、機械情報システム工学及び人間情報システム工学の3つの領域を専攻内に設け、学士課程との連続性も踏まえ、教育研究を実施します。 2 電子情報通信工学領域では、次世代ICT技術の開発・展開に必要な情報処理工学、情報通信工学及び情報電子工学の3分野の専門知識を融合的に修得し、応用力を身に付けるための科目を設置しています。 3 機械情報システム工学領域では、情報工学と機械工学を融合した次世代技術の開発・展開に必要なソフトウェアシステム工学、知的インタフェースシステム工学及び機械・エネルギーシステム工学の3分野の専門知識を融合的に修得し、応用力を身に付けるための科目を設置しています。 4 人間情報システム工学領域では、人間の生活支援に関する次世代技術の開発・展開に必要なインテリジェントシステム、スポーツ・ヒューマンダイナミクス及び人間支援工学の3分野の専門知識を融合的に修得し、応用力を身に付けるための科目を設置しています。 5 領域にのみ留まらず複数教員による活発な議論と研究指導により、グローバルな幅広い視野と高い応用力を涵養します。
A P	<p>教育目標から本専攻が求める学生像は次のとおりです。</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 情報工学，電子通信工学，ヒューマン・ロボティクス，機械プロセス・エネルギー工学，人間情報工学等の分野で高度な専門技術者あるいは研究者を目指す学生 ● 高度情報化社会の発展に、斬新な構想力と実践力を身に付けた技術者として貢献したい学生 ● 専門学術領域を通じて地域産業の振興をリードする意欲のある学生 <p>加速度的に進展する高度情報化社会の中で、産業社会構造の変化に柔軟に対処し、新しい工学分野を共に創造し、新世紀を切り拓く、若さと夢を持った研究指向の技術者を目指す学生の挑戦を期待しています。</p>

2-(2) システム工学専攻（博士後期課程）

教育目標	<p>システム工学専攻は、今後ますます多様化、複雑化する社会からの要請に応えるべく、公的研究機関のみならず民間企業において、情報系の学術分野を現実課題の解決に適応できる研究者及び高度専門技術者を養成することを目標に、専門領域の深化と統合を通じて、新たな問題を発掘し解決する能力を持つグローバル人材の育成を目指しています。</p>
D P	<p>教育目標に基づき、本専攻では次の能力を身に付け、かつ修了の要件を満たした者に学位を授与します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 工学に対する深い専門的知識と幅広い応用力を身に付けている。 ● 自らの得た成果を地域・世界に向けて発表するグローバルな情報発信能力並びに地域・国際社会で活躍できる能力を身に付けている。 ● システム工学の研究に対する理解に基づいた高度な倫理性を持ち、科学的基盤に基づいて研究若しくは教育を実践できる能力を身に付けている。
C P	<p>本専攻は、D Pに掲げる人材を育成するため、次のような教育課程を編成しています。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1 情報工学及びその関連分野である電子情報通信工学、機械情報システム工学、人間情報システム工学の3つの領域を専攻内に設け、学生は希望する研究分野に応じていずれかの領域に所属します。 2 電子情報通信工学領域では、情報処理工学、情報通信工学、情報電子工学の3分野を設け、専門領域における先端的研究を実施します。 3 機械情報システム工学領域では、ソフトウェアシステム工学、知的インタフェースシステム工学、機械・エネルギーシステム工学の3分野を設け、専門領域における先端的研究を実施します。 4 人間情報システム工学領域では、インテリジェントシステム、スポーツ・ヒューマンダイナミクス、人間支援工学の3分野を設け、専門領域における先端的研究を実施します。 5 所属領域の講義から高度な専門知識を修得するとともに、所属外領域の講義の履修により知識の展開力を錬成します。 6 領域にのみ留まらず複数教員による活発な議論と研究指導により、グローバルな幅広い視野と高い研究能力を涵養します。
A P	<p>教育目標から本専攻が求める学生像は次のとおりです。</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 情報処理、情報通信、システム工学などの分野において、理論や技術を深く修得し、新たな問題を発見し解決することによって、産業社会に貢献することに情熱を傾ける学生 ● 産業社会の多様な要請に応えるべく、既存の枠組みにとらわれない総合的・先端的知識や技術を切り開くとともに、企業活動を社会貢献に導くことを希求する学生 <p>特色ある3学科を基礎にする岡山県立大学大学院情報系工学研究科において、自らの専門分野の深化と他分野との複合化・融合化を通じて、自ら問題を発見し解決できる総合的能力を身に付けることを期待しています。</p>

3 デザイン学研究科

教育目標	<p>デザイン学研究科は、グローバルな視野と感性を持ち、社会を的確にとらえ時代の変化を洞察することで、将来予想される問題を優れたデザインの創出により解決し、豊かで新しい便利な生活と文化に寄与できる人材の育成を目指しています。</p>
D P	<p>教育目標に基づき、本研究科では次の能力を身に付け、かつ修了の要件を満たした者に学位を授与します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ● デザインに係る十分な情報分析能力及び理論構築力を身に付けている。 ● 独創的で造形性豊かなデザインを発信できる能力を身に付けている。 ● グローバルな視野と感覚を持ち、独自の優れた個性を発揮できるデザイン制作能力を身に付けている。 ● 高度な専門性とマネジメント力を身に付けている。
C P	<p>本研究科は、D Pに掲げる人材を育成するため、次のような教育課程を編成しています。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1 グローバルな視野と感性と独創的で造形性豊かなデザインを発信できる能力を身に付けるために、カリキュラムは、専攻及び領域の連携を図るべく編成されており、専攻共通科目、領域科目に区分しています。 2 専攻共通科目は、両専攻に必要とされる美学・美術史系の科目を中心として編成しており、現代における造形文化を考察し、解明するための視座の獲得を図ります。 3 豊かで新しい便利な生活と文化に寄与できる人材育成のため、領域科目では、所属する領域での高度な専門知識、能力、技術を養う科目により編成しています。 4 各自のテーマに基づき、修士研究を行う上で必要な調査・研究及び作品制作について深く掘り下げて学び、2年間を通じて、修士論文・修士作品に取り組みます。
A P	<p>教育目標から本研究科が求める学生像は次のとおりです。</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 国際的な視野と感覚を持ち、独自の優れた個性を発揮したデザイン制作に意欲を持つ学生 ● 新しいデザイン領域の開拓やデザイン理論の創出、もの作りに意欲を持つ学生 ● デザインを通して、人間性を豊かにし、幸せな社会作りに貢献しようとする意識を持つ学生

3-(1) デザイン工学専攻（修士課程）

教育目標	<p>デザイン工学専攻は、地域社会と産業界の要請に応えられる、高度な専門的知識・技能・技術をベースにした総合的な思考力を有する高度専門職業人として多様な価値創造が可能なデザイナー及び研究者の育成を目指しています。</p>
D P	<p>教育目標に基づき、本専攻では次の能力を身に付け、かつ修了の要件を満たした者に学位を授与します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ● それぞれの専門領域に関する十分な情報分析力及びデザイン理論による構築力を身に付けている。 ● 社会動向などを見据えたうえで、創造的かつ造形的なデザインを発信できる能力を身に付けている。 ● 高度な専門性を活かし、グローバル化に対応できるマネジメント力を身に付けている。
C P	<p>本専攻は、D Pに掲げる人材を育成するため、次のような教育課程を編成しています。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1 高度専門職業人としてのデザイナー及び研究者に求められるグローバルな幅広い見識と視点、高度な専門性を涵養するために、「製品・情報デザイン学領域」、「建築・都市デザイン学領域」の2つの領域を置いています。 2 製品・情報デザイン学領域では、工業製品、日常生活品など製品を対象として、技術と感性の調和を図り、同時にヒトと製品のスムーズな協働（インタラクション）のためにユーザインタフェースなど情報を整理し、豊かな生活を創造する製品の実践的、総合的な教育研究に取り組みます。 3 建築・都市デザイン学領域では、人間生活の根幹となる建築空間を基軸にして、街づくり、都市や地域環境など広範囲な空間領域を対象として、人と環境の調和を目指した体系的・総合的な建築教育とともに、各分野を深く探究する先進的な研究活動に取り組みます。 4 特別研究は、2年間の研究活動を通じて、高度な研究遂行能力を涵養することを目的としています。研究テーマは学生の希望と指導教員の助言により設定され、修士論文及び修士作品あるいは研究科委員会で承認を受けた特定の課題における成果物の作成をします。
A P	<p>教育目標から本専攻が求める学生像は次のとおりです。</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 既成概念にとらわれず、個性的で、物事の本質を観ようとする自主性のある学生 ● 豊かな創造力と柔軟な思考力を鍛え、自ら問題を提起し、それぞれの創作を通して、解決策を示し、社会や人々の生活・文化の向上に貢献したい学生 ● 最新技術と伝統との融合による総合的なデザイン力によって、ヒトと空間、ヒトとモノ、ヒトとコトの関係性の中から新たな価値を創造し、人々の生活を豊かで潤いのあるものにした学生

3-(2) 造形デザイン学専攻（修士課程）

教育目標	<p>造形デザイン学専攻は、造形デザイン学の理論と技術を修得する教育研究を行い新たな造形デザイン構築において諸問題を総合的な視点から解決し、社会に貢献することのできる高度専門職業人としてのデザイナー及び研究者を育成することを目指しています。</p>
D P	<p>教育目標に基づき、本専攻では次の能力を身に付け、かつ修了の要件を満たした者に学位を授与します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ● それぞれの専門領域に関する十分な情報分析・構築力及びデザイン理論構築力を身に付けている。 ● 社会動向などを見据えたうえで、創造的かつ造形的なデザインを発信できる能力を身に付けている。 ● 高度な専門性を活かし、グローバル化に対応できるマネジメント力を身に付けている。
C P	<p>本専攻は、D Pに掲げる人材を育成するため、次のような教育課程を編成しています。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1 高度専門職業人としてのデザイナー及び研究者に求められるグローバルな幅広い見識と視点、高度な専門性を涵養するために、「ビジュアルデザイン学領域」、「造形デザイン学領域」の2つの領域を置いています。 2 ビジュアルデザイン学領域では、印刷メディアを主体とした造形構成・編集、デジタルメディアを主体としたコンテンツ形成におけるデザイン性、機能性の向上を目指すための高度な専門知識、能力、技術を養うための科目を提供します。 3 造形デザイン学領域では、生活空間や展示空間などを構成・演出するセラミックやテキスタイルのデザイン性、機能性の向上を目指すための高度な専門知識、能力、技術を養うための科目を提供します。さらにテーマに基づき必要な調査・分析・研究及び作品制作について探究していきます。 4 現代における造形文化を考察し、解明するための視座により造形デザイン理論の構築にも重きを置いています。また、プロジェクト、ゼミナールなど領域横断的な授業の取り組みでは、公共機関、企業などに社会提案を行うことによってデザインマネジメント力を養っていきます。 5 特別研究では、2年間にかけて課題に向けて調査・分析・研究を行い、修士論文及び修士制作について探求していきます。
A P	<p>教育目標から本専攻が求める学生像は次のとおりです。</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 造形や構成などの特性を、柔軟な発想と集積した知識によって分析し、さらに独創的な思考力、表現力などを発揮して、新たな造形デザインの価値創造を目指したい学生 ● 情報化社会のなかで、情報を読み解き、またそれらを組み合わせるなどによって新たな課題発見の可能性を探究し、造形デザインによる社会的価値の創造に結び付けたい学生 ● 社会の動向を注意深く観察する力を養いながら、常に問題意識を持って造形デザインが担うべき役割を追究し、培った力を社会貢献にいかしたい学生

編集後記

この度、平成 27 年度の教育年報が完成しました。教育年報は、毎年前年度版よりもさらに充実するように改善を進めております。その様な通常の改善に加えて、今年は年報全体の見やすさを考慮した大幅な配置の変更もなされました。配置の変更は見やすさのこともありますが、大学の既存組織の再編や組織新設を反映するものでもあります。

昨年度の教育年報は従来通り 2 章構成でしたが、本年度は 3 部構成とし、各部において章を設けました。第 1 部「学部及び大学院における教育活動」は 4 章構成とし、第 1 章を「学部と大学院の入学者受入状況」、第 2 章を「共通教育部の教育活動と成果」第 3 章を「専門教育における教育活動と成果」、第 4 章を「大学院における教育・研究活動と成果」として、本学の学士課程教育及び大学院の教育活動を見やすくしました。第 2 部「教育研究開発機構」は 3 章構成とし、第 1 章は「大学教育開発センターの活動と成果」、第 2 章は「国際交流センターの活動と成果」、第 3 章は「学術研究推進センターの活動と成果」と 3 センターが教育研究開発機構の下に置かれたことを受けて組み換えを行いました。第 3 部は 1 章構成で「附属図書館の活動と成果」としています。このように系統的に細分化したことによって、各組織の活動や成果が従来よりも見やすくなったと考えられます。

第 2 部は本学の教育・研究に係る組織の充実を受けて拡大しました。第 1 章の「大学教育開発センターの活動と成果」では、同センターが従来 6 部会構成であったところ、本学が今年度文部科学省の「地(知)の拠点大学による地方創生推進事業(COC+)」に選定されたことを受けて、「教育改革ワーキンググループ」を新たに設置しました。また、昨年度は第 1 章に置いた「学生の生活支援」や「学生のキャリア形成支援」を大学教育開発センターの部会活動のところに移しました。COC+事業は、本学の学生が社会に出て生涯活躍していくために必要な基礎的能力を地域と連携した教育の中で養おうとするものであり、副専攻「岡山創生学」を立てカリキュラムを組みました。大学教育開発センターの章で「地域連携教育(COC+)」として記述しています。

国際交流センターも、その活動が学士課程教育及び大学院における教育・研究との関連で活発になってきていることを受け、従来第 1 章の一部であったものを第 2 部に移して独立の章にしました。学術研究推進センターは、主に研究費使用におけるコンプライアンスの面から業務を開始しておりますが、今後機能を拡大することが見込まれます。

附属図書館は 1 章構成ながら第 3 部として独立させました。これは図書館機能が従来の教育・研究資料の収集や閲覧が Web 情報化されていることに対応するため、専門性が従来に増して高まっていること、また学生の学修促進に関わる新しい大学の場のあり方が図書館を起点とするラーニングコモンズとして広がりつつあることも要因となっています。

この様に本年度の教育年報は昨年とはかなり様相を変えておりますが、今後の年報の内容充実の基礎を構築しているということでご理解いただければ幸いです。

大学教育開発センター長 田内雅規

(編集責任者)